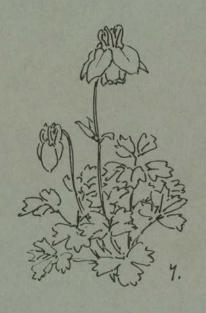
### 山岳



LXV

### Caravan

#### CLIMBING SHOES



#### 〈キャラバン・クライミング シューズ〉

無雪季の岩登り靴は、厳冬季の登山靴とは異 なった機能が要求されます。

この機能を充分に満たした岩登り靴として、 新製品キャラバン・クライミングシューズが 生まれました。 胛 布/純綿厚識

色 調/バハマベージュ

サイズ/24.0~27.0cm

価 格/¥3,600

#### 発売元 株式会社 山 晴 社

東京都千代田区神田駿河台 2-11 TEL 291/4121(代表) 大阪市西区京町場 1-68 TEL 441/4431·5204

#### Щ

**岳** 第六十五年

# 山岳第六十五年 目次(1九七〇年度)

			Ť			4						
海外	英	会發	図	追	ネパ	ルケ	最近	パン	ヒム	ヒン	アイ	
登山	文	報出	書	悼	1	=	のブ	ジャ	ム・ゾ	ズー	ガー	
年	梗		紹	河梶冠合本松	の与	西	1	ブ	ノム登頂		北	
海外登山年表=一九六九年=…	概	会務報告 (一九六九年七月—一九七〇年六月)	介	河合良成氏(望月達夫)、中田清兵衛氏(中田栄太郎) 梶本徳次郎氏(浅野清彦)、加藤数功氏(梅木秀徳)、工藤元平氏(梅木秀徳)、冠松次郎氏(岩永信雄)、加藤誠平氏(渡辺兵力)、久世秀治氏(久世壬生野)、	ネパールの気候に関する覚え書き山	ルケニア西稜登攀とスティール峰への縦走	最近のブータン事情をみる	パンジャブ・ヒマラヤ(一九六九年)	豆頂	ヒンズー・ラジ山脈コーヨー・ゾム登頂(一九六九年)	アイガー北壁新直登ルートの開拓(一九六九年)	
九		ハ九年	タ山と	(全)	関す	きっと	事情な	マラヤ	$\frac{1}{2}$	脈	登	
九九年		十七日	素に描れ	(岩永信雄)、(岩永信雄)、	りる学	ヘティ	とみて	^	九六七	1	1	
ii		7	西イ。		見えま	1	ે ∷	九	年)	1	D D	
	概	九七	(タン素描・西穂高落雷事故調査報告・"That Untravelled World"・日本山岳研究(山に忘れたパイプ・朝の山残照の山・日本の山旅・山岳浄土・幻想のヒマラヤ・ブー	中田清兵衛	音き・	峰		ハ九年	(一九六九年)	ゾ	拓	
		305	事の故山	兵衛氏 半氏		0				登	$\frac{1}{2}$	
		平六日	調照報の	() () () () () () () () () () () () () (		走				贝	九六	
			告山	开 大 大 大 大 大 大						九	年	
			That	郎、久世						ハ九年	÷	
			Unit	氏(中田栄太郎) 氏(梅木秀徳)、工藤元平氏(梅木秀徳)、(渡辺兵力)、久世秀治氏(久世壬生野)、						<b>±</b>		
			当组	代(人								
			&海 ₩土	梅士								
			orld",	秀徳)、					藤			
			・の日と	行 岡方 部								
			山田ヤ	行方沼東氏								
中玉			研・究ブ									
島井						東東北北	小	梶	藤井	小笠	加	
康				ぎ さ、 :	田	大大 学学	方	7.	<b>計</b> 信	立原	藤	
寛雄					知	山山の岳	全	正	$\overline{}$	重	滝	
編				幸)、	充	東北大学山岳部 ス1	弘 :	彦	郎	篤	男	
卷末二	巻末	霊	=		充… 一六	云	土	当当	郎…	篤… 1☆	蓋	

成田安輝氏に関するもの六枚(他に本文刷込み二六枚) グルジャ・ヒマールに関するもの四枚

ワハン六三九二メートル峰に関するもの三枚(うち折込み二枚) モンゴル・ハルヒラー連峰に関するもの四枚

ウシバ南峰西壁に関するもの二枚 冬季アイガー北壁直登に関するもの四枚

P29に関するもの二枚 レーニン峰に関するもの二枚

大平晟氏に関するもの三枚

ヒム・ゾムに関するもの二枚 コーヨー・ゾムに関するもの二枚

加藤数功氏、工藤元平氏、中田清兵衛氏 名誉会員冠松次郎氏、加藤誠平氏、久世秀治氏、梶本徳次郎氏、 ルケニアおよびスティール峰に関するもの四枚 ハヌマンティバに関するもの二枚

図・図

チベット全図、成田安輝氏チベット入りルート図

グルジャ・ヒマール概念図 モンゴル人民共和国概念図、ハルヒラー連峰概念図

ワハン・イスムルグ谷付近概念図 アイガー北壁ルート図、アイガー北壁直登ルートテクニカル・ノート

ウシバ周辺図、ウシバ南峰西壁登攀ルート図

レーニン峰付近概念図

P29キャラパンルート概念図、P29付近概念図 エベレスト周辺概念図、エベレスト南西壁概念図

ヒム・ゾムへのキャラバン・ルート概念図、ノロギガム氷河付近概念図 コーヨー・ゾム付近概念図

マカルー調査隊キャラパンルート概念図、マカルー周辺概念図

セント・エライアス山群概念図、ルケニア、スティール峰付近概念図 ハヌマンティバ山群概念図

ネパールの気候に関するもの(表二、図八)

表紙カット Ш 下

夫

手記原本は『進蔵日誌』と題し、

褐色の紙表紙がついた一二・四センチ×一九・八センチのザラ紙の手帖三冊

## 進 蔵 日 誌 🗘

成田安輝

あわせて、松方三郎氏を煩わせて 解説を書いていただいた。 成田安清氏、 ることができた。ここに、貴重な手記をそれこそ七〇年ぶりに発表できる運びになったことは編者として喜びにたえない。 編者が何度か成田安清氏に面会し、手記も見せていただいた上で是非『山岳』に掲載したいと申し出たところ、快諾を得 ることが判明し、手記、写真等も保存されていることがわかった(『山』第二九七号、一九七○年三月号参照)。そこで、 までまったく知られていなかった。 れている河口慧海師に較べて、成田安輝氏については、種々の理由があったとはいえ、その業績はおろか、消息さえこれ ージリン・シッキム経由でチベットのラッサに入った成田安輝氏が旅行中に記した未発表の手記である。 〔まえがき〕 本稿は、明治三十四年(一九○一年)秋に海路カルカッタ上陸、以後三十五年(一九○二年) のは二年後の一九〇三年だから、それだけでもきわめて貴重な記録といえる。しかし、著書もあり、広く国際的にも知ら に入った約半年後のことである。ヤングハズバンドがイギリスの特使として成田安輝氏と同じルートをたどって入蔵した この度、偶々、松方三郎氏が「週刊新潮」掲示板欄に投書をしたことから、ご子息の成田安清氏が東京に住んでおられ ラッサ入りを果たしたのは、河口慧海師がネパールのトルボからマナサロワール湖を経て日本人としてはじめてラッサ 心からお礼を申し上げたい。 松方三郎氏はじめご協力いただいた各位に対 春にかけてダ

もできない。 ○~九四ページ)に毛筆でぎっしりと書きこまれ、更に推敲のあとを示す添削が随所に施されている。内容をみると、シ 安清氏によると、もう一冊あったはずだがどこで紛失したかわからないとのことである。残念だが今日ではどうすること ッキム領のナタンを出発するところから始まり、ラッサに到着してポタラ宮殿を見学している部分で終わっており、成田

榛原製上質美濃紙罫紙に、手記原本同様毛筆で浄書されたものだが、原本「巻之二」の五○ページまで、罫紙にして六十 この手記原本とともに、 手記に基づいて自から浄書した原稿が残されている。これは、二七・八センチ×四〇センチの

六枚だけで終わっており、それ以降の部分は未整理のまま残されている。 そこで、本号では、浄書済原稿分のみを収載し、残りの分については、今後編者の手で整理を進め、ひきつづき次号に

掲載することとした。

を用いて示してある も、印刷の都合で新字体に変えた。ただし、ルビは原文のままとし、編者が読みをつけた場合も、編者注とともに< > して、副詞、連体詞、接続詞、助詞、形容名詞等はできるだけ平仮名書きにした。字体が新しくなっている漢字について しかし片仮名書きは平仮名書きに改め、送り仮名も現代口語文の方式に従って改めた。また、読みやすさという点を考慮 という方法も考慮したが、それによって本稿の価値と魅力を損なうことをおそれ、文体は原則として原文のままとした。 なお、原文は漢字片仮名まじり文であり、何分にも七○年前のものであるから、今日では極めて読みずらい。現代語訳

ポンから曲水までの四十枚の写真しか残っていないとのことである。その分を自筆の挿画が十分に補っている とい えよ \*\*\*\*\*\*\*\* おれるである。写真については、途中カメラをなくしてしまったため、カリンなお、挿入の写真および挿画は筆者自筆のものである。写真については、途中カメラをなくしてしまったため、カリン

# 一、亜東税関通過ならびに亜東関門進入

るの地より草木繁茂せる低地に下る。想えば本日の出発は特に愉快を覚えたり。十一時咱利峠へ普通ジェレップ・ラと いう。高度四三七四メートル>に達す。この山頂は実に西蔵・西金の境界にして、英<イギリス>の管下に属する。西金いう。高度四三七四メートル>に達す。この山頂は実に西蔵・西金の境界にして、英<イギリス>の管下に属する。西金 >治三十四年十一月十二日。 天気清朗。黎明、那塘を発し、靖西に向かう。空気稀薄の山上、頭痛、苦痛に勝へた>えざ る

もの十余疋あり。

行を瞰視す。

知らざるものはその危害を加うべきやを懼るれども、

この鷲は多く 人の屍肉を

西蔵にて天葬または鳥葬と唱え、

死肉を食し、 禿鷲に類す

生肉を食せず。

もっとも高く秀ずる雪峰をチョモラ嶺<チョモラリ。一九三七年イギリスのチャップマンが登頂>と称し、土人呼びて に困難を感ずるところ多し。 も、前亜東関監督は、数年前 は道路の広さ約一間半<二・七メートル>ないし二間<三・六メートル>なれども、西蔵方面は狭かつ嶮悪なり。しか 回この地方道路の修復をなし、以前に比すればやや改良せりと称うれども、二人並進する 頂上より遥かに前方を瞥見すれば、西蔵高原の連峰高く雲表に聳えて犬齖錯雑し、就中、



ラからのチョモラリ遠望

薩交通の大道にあたる。

数日の後わが

一行そ

に怕克里

(西蔵人怕里と称す)

城塞あり。拉

九七フィート・七三一四メートルン、薄足烈

(西蔵従僕) その嶺を指して曰く「彼の山下

と実に二三九三三フィートへ現在では二三九

女神となすものなり。

その高さ海面を抜くこ

環状をなして生ず。英語 vulture と称え、我 を展げれば七、八尺にして頚にやや長き羽毛 松林中に入るや渓流のあたり騾<ラバ>屍の 急峻なる幾多の坂路を降りおわり、 の下を通過すべし」と。くの字形に屈曲せる ある所、付近の巌角、老樹上に大鷲あり。 森々たる

3) (

投与するはこの鷲なりとす。この辺の森林、松、桧の類多く、良木材に乏しからず。路傍茅屋あり。入りて休憩し、

したがって、生者に迫害を加うる稀なり。

(1)

îΪ て、 携え来たるところの商品目録を製し、錫侯の名刺とともにこれを騾夫に托し、荷駄を率いて先登せしめ、安輝等は続 ともに正装先行せしめ、安輝は普通小商人の着用する青金巾の長衣を穿ち、長さおよそ三尺なる大烟管<キセル>を携 て至るべきを予告せしめたり。 将に亜東に達せんとする所、 渓流の橋畔、一大松樹の下に馬を停め、 蓋し、商品を携え、商売のために拉薩に進行するものたるを示さんが故なり。 錫侯をして衣を改め馬掛を着して僕得安と

方より進行せり。

え、茫然として馬に跨がり、西蔵僕薄足烈を従えて一町ばかり後



ン関門および城壁

約三、四町にしていわゆる亜東関に達す。 いて曰く「余は一歩さきに前進し、枯瑪橋において宿所を求むべ するものの如し。よって殊更に錫侯を顧りみ、支那語を用 学校出身者にして本関に仕える既に八年)あり。特に不肖を熟視 り派遣された駐蔵大臣直属の官吏>羅氏が税務司を訪問せしなる 礼せずして過ぐ。 楼上の欄干に凭がり不肖を熟視せるも、未だ面識なきの人なれば、 し。足下は税務司と会談の後来たれ」と。すぐに馬に鞭うち進行、 よび美装したる鞍馬二、三あり。 門辺に西蔵人の助役 税関門前に至れば正服を付けたる支那兵数名お すでに税関下に達すれば、税務司韓氏は殊更に (名はメンシ、独吉嶺にある英国設立 後知る、 その地山を左右にし、 これ靖西糧台へ靖国よ

往時の雄図を回顧し、 定時間閉ざし、支那兵数名これを守備す。 うたた感慨にたえざるものあり。門上題するに「靖西亜東関」五字をもってす。 支那帝国の勢力東支那海より西印度国境に拡張するを 靖

小渓流を中央にせる峡隘の、

しかも狭くかつ小高き要地を撰み、

これを横断するに石をもって城塞を築き、

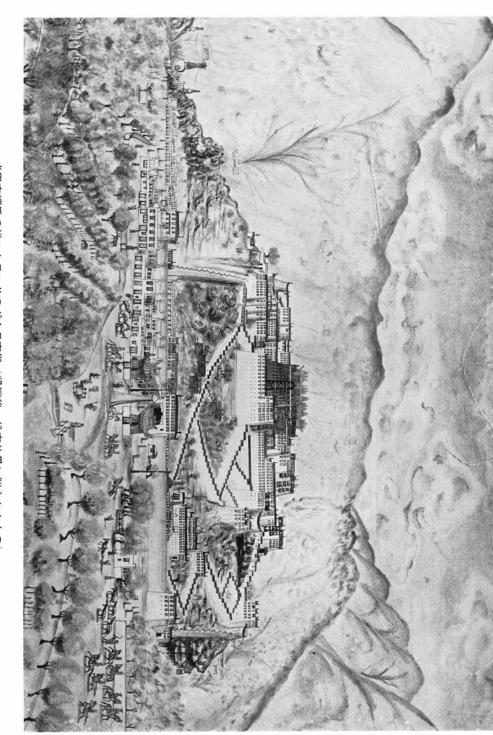
左方の丘

関門を開き、

而



成 田 安 輝 氏 Yasuteru Narita (1864-1915)



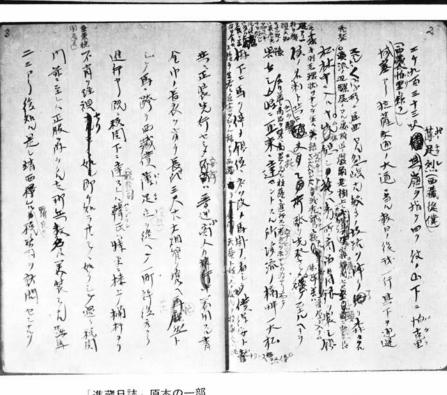
成田安輝氏の描いたラッサのポタラ宮殿(帰国後、松方伯爵に贈られたもの) The sight of The Potara in Lhasa, drawn by Y. Narita in 1901

当 京一郎子本日名七ントスル处)對京十八人因于摩僕子後一時近十段之外自死了一下一當月此子線上二分上入白熟了四月通過七七了 マリレヤ二配載又に書籍アルモ当時以現今人之り知らずし十八後しは住晋年中四テン、タアナア、此の文章、別大、他国、書本成明、伯天皇所ノ水原、如入記載七九、誤談十八年一日一八留水シル二過ずて大清一該東西七八、誤談十八年一一小留水シル二過ずて、大清一該樂園及心東、他一地就下了東野一下の野中道路を被賣し了一小留水了以至阿丁、文伯美宣門一水原二天東三十十一個一下の野中道路を被賣し了一小留水了、然上、強利を取り続いほ文し歌水本、京野一秋三秋、後上、衛門、秋三秋三秋十一衛

成田安輝

進減日說

F. # 19 田 まず 大がら後数からいからかありちょす 好了了上五十餘年前英藏,我争,信星逐一期倒,上岁 三日の一日十日大都のいする、大都学了男子は意製色 今·禮意の表元为、照·為、吃車、我品的方或当得西藏人看用、得成的情子、親、等特別、取都大了製造西藏人看用、得成的情子、親、高雪·00 偏成れる人 高没大智繁繁星する前回俊は年、不振一次次 图之那西藏 置見、妨害了人之子或即人之之以同名为 文解罪籍追及,您亦特,正荒勒治所以教也之八五東用 問了西於、粉魚 江東以八九年,印藏智易成陵少要无事礼 からてているでうときら 学解髪をたらゆ 文印今说:各人用国以前,枝薩一般 1,100,000 10000 20000 Tiopop 11/40,000 m



「進蔵日誌」原本の一部 "Tibettan Journals" Narita's

風景に似たり。

西とは江孜へ普通ギャンツェと称する>以南この地方総括の名称にして、 P る。 よび蕃兵これを守備す。 関内には約二十余戸あり。 西蔵図考および欧米人の地理紀行未だこの名称を記入せず。関外税関のあるところは民家十余戸に過 ぎ ざ その数平時はともに二十余名に過ぎず。峡隘を瞰下ろし、もっとも重要の地となす。 道左に亜東汎衛門ならびに文武廟あり。 左方の山上喇嘛寺および砲台あり。支那兵 晩近支那官吏の新たに任命するものに係 安輝

れ

b

な



した西蔵兵士 正装

業となす。人家は大木材を用い、堅牢に建築せられ、 すべきものあり。仁進関は人家五、六十戸にして農および商をも 松林の間を経過すれば、 渓流に沿うて進む。 と同郷の商人なり」と。 足烈の知人問うに、 に跨り、徐歩して関門を通過するに一人の誰何する者なく、 る渓流に沿うて上行すれば、およそ我半里ばかりにして玷瑪に達せ る、あたかも風雨驟に到るが如く鏘々松涛と相和し、風光すこぶる愛 彩色を施こし、 将に仁進関に達せんとするところの山腹にある 誰人なるやをもってす。 何となく異様の感を惹けり。 遂に一人の怪しむ者なくこの地を通過 路右にある渓流の淙然として疾声の碌訇 彼答えて日く「沈師爺 これより右に 所々に彫刻を ただ薄 って あ た 馬

用ゆるところの木材は大にして、 は枯草を蓄積して畜類の飼料に俱え、 **玮瑪に入り、** 西蔵人の家に投宿す。 構造堅牢、 概ね、 本邦農家の及ぶところにあらず。須由にして錫侯また来たりて謂う「ま 紅、 白 緑等の諸色をもって彩色せるの状、 家屋の構造は、下方に牛馬を飼養し、 一見奇異の思いあらし 楼上は人起居し、 天井に

巌に激し、水煙昇り、

清流ために阻滞して碧潭となり婉然本邦の

緑松その上に茂生して壮観を呈し、

白波嶄

んとする所一小島あり。

せら ず関門通 れたる所なりとす。 過の演劇無事その局を結べり」と。 南方における西蔵国境各通路はことごとく閉鎖せられ、 洋人(西洋人のみならず本邦人また東洋人として峻拒せらる)は一切拒絶して入 亜東関門守備の厳なる、 欧米人はもとより寧波人すらなおかつ前年拒絶 単にこの一路を開放して

もって印蔵の貿易路となすも、

玮 瑪

入 П 彫 刻 14 安

地を清

いえども現在清国皇帝の臣にして四品頂戴、

税務を司れり。

支那人の管する

関門に

向

かいしに、

守備の支那兵に抑止せられければ、

彼謂う「余は英人と

東関門内の地を一覧せんと欲し、

闊達なる

税務司あり。

身は常に一小区域内にあり、

寂寞に堪えず、

日

特に新調せし支那礼服を着用し、

馬に跨

ŋ 亜 認むるときは、 関を許さず、

関門付近の山野において洋靴の足跡を見、

その疑わしき形蹟を

聞く、

かつて

直ちに地方官に訴え出ずべき諭告ありという。

△亜 彼遂にその主張をまげ哭いて引戻せりという。 亜 |東税関および税務司> 東税関は 西金 ·西蔵国境咱利山 (一四七八〇フィート)

し」とて急に馬を馳せて糧台羅氏の出馬を乞い、

来たり、

糧台懇請の結果、

え

6

れた

守兵あえてこれを止め「かねて糧台より教示の件もあれば暫時控

廷の臣踏むあたわずとは奇怪の至りなり」とて更に前進せんとせしを

し伝聞するところによれば、 名、その他労役に従事する支那、 西蔵もしなお徴税せずんば、印度政府において徴税すべき旨を拉薩に促がせしため、 西蔵、 印度人等七、八名を使役す。 安輝去三十五年三月、 亜東を去らんとするに際

長ロバート・ 三五〇フィー

ト氏の管下に属し、

税務司の下に支那および西

蔵の助役各 支那海関総

駐

西蔵管内にあり。

^現在

は

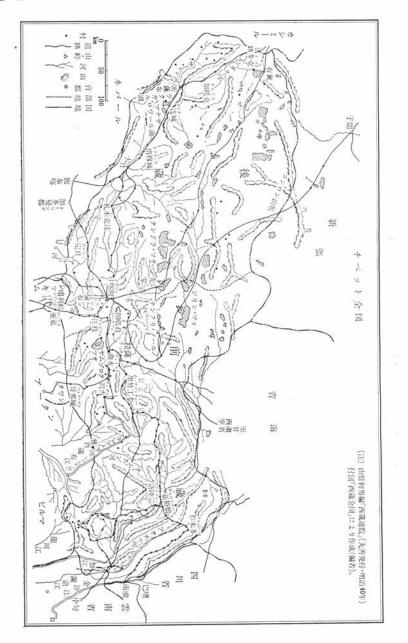
74

ト=四三七四メートル>の北麓、

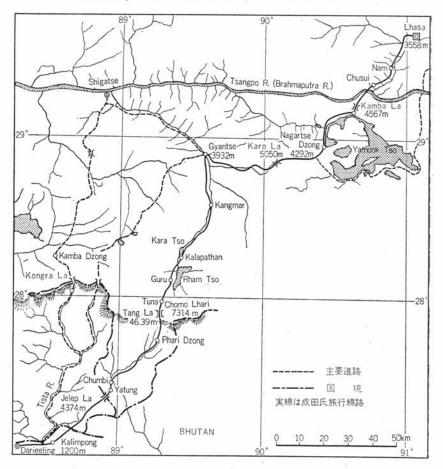
商

路

とな



成田安輝氏ラッサ入りルート概念図 Travelling Route to Lhasa taken by Y. Narita in 1901



吏官 人面 人物品的 西

入りを許し、 蔵大臣は本年晩春

商

議のため

亜東に来るべしと伝説せり。

後商景を察して徴税の予定なりしも、

今日に至るまで依然未だ無税にして、

本税関は八年前開関

Ļ

当初まず五年間無税にて商品

出入商品の数目、

価格等を の出

俗 0

なりと。

四川茶は多くは極めて粗葉なりといえども、その製法

0

西蔵人等は、

その土地に産する茶に比し、

国境外に輸出せらる。

独吉嶺、 JU 川の

鳴倫網、

その他西金の各地にある

四川茶を嗜好するが故

P.

四川茶および雲南、

は銃器、

、弾薬、長身の刀剣ならびに茶、食塩、鴉片へ阿片>等の輸入

西蔵内よりもまた同品を輸出することを厳禁すといえど

鴉片は往々にして他物中に陰蔽し、

記録するに過ぎず。

この税関には通関禁制品

あり、

則ち外方より

を禁じ、

P 剣類の輸入禁止は西蔵人に爪齖を与えざらしむるためにし 茶の価格は年々百二十~三十万両 その目的を達しあたわざるべし。 少なからざるが故に販路を西蔵内に求めんこと英人の希望なれど なる紅色磚茶となせしものなり。 み後苅込みして葉去るものの如き枝葉混入せる粗葉をもって偏平 西蔵人嗜好に適するをもって歓迎せらる。 支那政府は従来の利権を保持するに

にあ、現今のところ容易に の巨額に達せり。銃器、 四川方面より西蔵に輸出する磚 西金、 アッサム地方今や産茶額 その製法は、 弾薬、 本邦茶摘

刀 緬

般土人にもまたこれ 探知し来たれば

V

鰲

を行なう。本税関に特に英人を選任する故あるものの如し。現に現税務司韓独遜の出所をうかが

甸

<ビルマ>その他比馬拉亜地方における

遣せられ、 を喫するに足るものあり。 支那政府に対する表面は英国より呼びよせたる税務に適任なる者なりとせりという。 氏は元来印度にありし英国一青年武官なるも、 西蔵事情研究注意のため特にこの地方に派

あり、

くかつ事務少なし。

ヘチベット>語を講究せし結果、

その執務室兼読書室内周囲の壁上掲ぐるに印度政

近日将に英蔵字典を世に公に

氏は数年来ここにありて西蔵<チベット>人を聘し、

しかも蔵事を研究するには唯一の好地位

絶壁たり。故にその寂寥あたかも配所にあるが如きも、

俸給多 左右は

白人の進入を許さず、後方は無人の深林にして、

法

狙 擊 0 ありて書籍を繙き、古人を友とし、研究調査に従事するを楽しみ 正しく二、三十分宛付近無人の山道を運動するの他読書室内に 府調査、非売品なる印度・西蔵国境の精図をもってし、朝昼規則 せんとせり。

るに比せば雲壌の差あり。 いて死亡せり。 れを本国に携帯せんことを試みし人あれども、 両側に飼養して楽しめり。西蔵番犬は欧米人間に著名にしてこ となす。近頃また大金を擲ちて西蔵産の大番犬二匹を購い、門の この地方にある支那官吏がみだりに妻妄を蓄う その行為や惰夫をして起たしめ、 けだし英国君子風の武士を代 多くは途中にお

中なりしが、

拉薩に至らば願わくはオカパカを買い求め来られんことをとの依托を受けたり。

表するものか。

不肖会見の当時はナポレ

オンの戦闘詳記を展読 よって記憶のため漢字

等人の模範たるに足るものあり。

亜東関は遠僻の地 (10) もっとも有力なる蔵官なりとす。



### <亜東西蔵官吏>

・烏拉と称えり。

高く、顔長し。 なお支那内地に同じという。 とを掌る。 入および地方の行政、 官世襲にしてその子また五品官たり。 品頂戴なり。その名をサタと称う。 亜東税関に隣接して西蔵官吏あり。 裁判の是非曲直は納金の多少によって定むるの弊風は 頭髪、 衣服、 裁判、 警察ならびに西蔵兵の事に関するこ 支那風に擬せり。 氏は本年五十余才、髪半白にして丈 開関以来この地にあり、 専ら蔵人に関する本関の出 西蔵の戴琫にして支那 この近傍における その 0 四

をもって紙片に記載せしに、彼は西蔵文字をもって巧みにこれを書せり。 小獺皮にして、欧米の婦人等好んで襟巻に使用す。 しかし該品は拉薩にて購求するを得れども、 現品多からず。

オカパカとは矮獺へかわうそ>と称うる一

〈印度経由の支那郵便物>

那人の郵便物は、 発送する郵便物ならびに印度、 西蔵内における支那人が四川路によらず印度を経由して支那に 亜東税務司に依頼し、これを印度郵 西金等に送るべき西蔵人および支 便 局 0 手

握す。亜東より約三日西金内にあるラノック郵便電信分局は定時

に交付す。換言せば税務司は支那人および西蔵人の郵便権をも掌

脚夫を送り亜東と連絡を通ず。

西蔵人は俗にこの脚夫をジンチン

### <アンニー・テーラー女史>

亜東に蘇格蘭の女史あり。

七 旅行の西蔵内になしたる事の詳細は、 導者を有する英国は、 開地に事をなすやその忍耐、 易の市場として開かるるや商人の名儀をもって 該地に来住し、 独居結婚せず、 を惹かんことを怕れ、 て拉薩に達すべき地において進入を拒絶せられ、 成功を永遠に期し、 幾多の辛酸をなめしも、 而してその意に曰く「今吾れ借地料を払うも、 西蔵語に通じ、 八年なるに、 年々五十留比<一ルピーは当時の金で約六十六銭>を擲ち亜東において広大なる荒地を土人より借り受けおれ 家には一ネパール僕、 頑固たる喇嘛教国の事とて未だ一人の信者なきも、 往々通信に多忙なるを見る。 接近の地にあるも税務司と女史とは相来往せず、 その殖民地を世界到る所に拡張する、 西蔵開放の日を待ちつつ、西蔵先導伝教師をもって自任せり。 持久、 米<アメリカ>のロックヒル氏、仏<フランス>のオルレアン親王等の如く、 つとに西蔵布教に熱心にして、十年前大旅行を企て甘粛より拉薩を経て印度に出でんと 往々これに類するものあり。 ウィリアム・カレ 一西蔵婢を使用し、 彼女は紅顔の頃より蔵事に志し、今はその頭既に白霜を頂くもなお その目的を達するあたわず、空しく四川に帰還せしが、 他日吾れ他人より貸地料を取り立つるに至るべし」と。 イ氏の最近著述に係わる「トラベル・アンド・アドベンチュ 西蔵番犬を愛飼せり。 けっして偶然にあらざるを知るべし。女史が著名なる大 商品陳列の傍、 かくの如き進取の気象に富める殖民の母、 小児数輩を集めて英語、 唯書信をもって事を弁ずるのみ。 医薬を事とし、 女史が西蔵に対する観念は益堅固 伝教師と往来せば土人の嫌疑 布教に従事する既に 讃美歌等の教授をな 女史は支那 亜東の地質 外人が未 殖民の先 数日に L

### 亜東地方の気候

ア・イン・チベット」

(西蔵冒険旅行)

を繙見すべし。

L 参考のため明治三十三年度および三十四年度における該地方の気候を亜東税関報告中より摘載せば左の如し。ただ 温度は華氏度を用ゆ。

K

左の如し。

三十四年度においては、

また空気の乾湿を見さんがため印度平地シリグリより比馬拉亜山脈上次第に高所における各地雨量の多寡を示さん

咱利峠は降雪のために三回まで通行を杜絶せられ、

二女

男凍死せり。

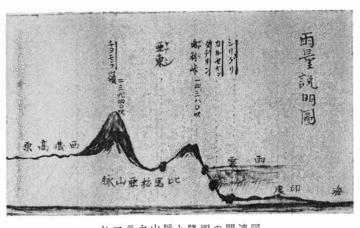
恐るべき強烈なる暴

風 のため、 三十三年度においては、 最 最 降 降 低 高 路上にある二十頭の騾馬は斃死するに至 温 温 度 度 雪 雨 | 摂氏二〇・六度> 摂氏零下十一・七度>十一度 一二八・三センチ> 一四〇十 咱利峠通路はただ一 五・八センチ>-一吋七十三 + 年 度 〈摂氏二-<一六四・六センチ> <一〇六・七センチ> 面降雪のために 摂氏零下十二・二度> Ξ れ + ŋ 四 度> 年 度

およそ二週間通行を遮断せられ、

ダ 力 + ガ 3 地 1) 1 ジ セ およびチ グ F IJ オ IJ ュ 名 E 六五 Ŧī. 七 九八时 三六吋 六九时 七五时 二七时 年 时 平 ^ /三七 /二六 /四二 三二 四 均 四 七 雨 八セ 六セ 八センチソ ン チ セ セ ンチソ ンチソ ンチソ ンチソ 量

て亜東より温暖なること五、 故に、 ワッデル博士は春碑平原は印度付近にありてもっとも空気乾燥し、 六度の差異あり。 十余年前印度交戦の結果英の範囲に入れざりしをすこぶる 遺憾と 独吉嶺より三、四哩下方にあり、



の関連図

高度より上方に位するをもって雨量少なきに至るなり。もしこの高山

に遮断せらるると、土地高きに過ぎ、重き水蒸気雲が普通浮動する

のため

度海および南方の海上より昇騰する水蒸気はあたかも屏風を立て連ねた

面は降雨あるにもかかわらず他の一面然らざるをみると同じく、

もし高山あればため

に障られ、その山

る如く印度および緬甸平野の後方に高く聳え急峻峥嵘たる比馬拉

| 亜山

脈

0

は風に乗じて襲い来たれども、

<西蔵高原雨量少なき理由>

なお今後有事の際この地方の忽緒になすべからざるを警告せり。

按ずるに夏天驟雨の至るを遠望すれば、

水蒸気より成るところの雨

風がなく、

かつ土地甚だ高からずんば、

海面を隔つに西蔵より遥

カン に遠 屏

また海に面する山の斜

面

き支那四川省の雨量潤沢なるが如くなるべし。

拉 が如し。即ち、前表によれば平素シリグリの雨量一二三・二七吋より比馬 なお高く進めば次第に減却し、 山 は水蒸気凝集すること多く、したがって平原より雨量多し。なお本邦箱根 一重山 の海に面する一面はしからざる一面より雨量多く、 脈の傾斜面にあるカルセオンは多量にして一六五・七五吋となり ダージリンにおいては一二六・六九吋 かつ樹木繁茂せる

なり、更に高所に進み亜東に至れば更に過半を減じて五七・○一吋となる。この雨量はなお優に樹木を生長せしむるに

(14)

したが

にあらず。本邦梅雨時期にはまた降雨ありて、 足れども、これよりまた更に登上する二日にして西蔵高原の原頭怕里に至れば、降雨の量少なきに過ぎ、 ただ牧草および磯馴へソナレ。 はい松と同意>の類のみ生ずるを見る。然れども、 西蔵人多くはこの時季に旅行するを好まずという。 この高原とても全然降雨 されどその雨量は 樹木生長せ

# <西蔵高原において強烈なる暴風吹き来る理由>

下界に比すれば少なきこと知るべきのみ。

頭の騾馬斃死せることあるを知る。 西蔵高原は時に非常の烈風吹き来ることあり。 前掲亜東税関の報告によるも強烈なる暴風のため路上において二十

や樹木、 至るやも知るべからずとて出発を留めたることありしが如き、皆時に強烈なる暴風の吹き来たるを推知すべし。 めに天目朦朧として満目皆塵埃ならざるはなきこと二日、遂にこの日は旅行を止めたり。 を旅行せば、 あたかも湖畔に一大水晶堤を築きしが如き奇状を見て、もし不幸にしてかくの如き奇観生じつつあるとき偶々この辺 なお、 安輝旅行中、 印度その他南方の温暖なる空気と西蔵高原の寒冷なる空気とが急激なる新陳交代をなすに起因するなり。 降雪、 家屋等の防風物なく、 また咱利峠を越えんとするとき、今日の強風あるいは暴風と変じ、砂礫を吹き飛ばし、危害を加うるに その感覚や如何なりしと思考せり。また帰途、曲水<チュイスイ>付近において強風砂塵を降らし、た チョモ湖畔の一方に猛風のために吹き上げられたる厚き氷塊は里余の間四、五尺の高きに堆積して、 封雪等につき、 土人の奇異なる迷信あれども、 四方展開せる高原においては風伯叱咜、一層の猛勢を逞しくする、想うべきなり。 それその項において説明し、ここに贅せず。 聞く、北方砂漠の砂塵吹き いわ N

### 

一月十三日より十八日に至る琣瑪滞在。 この間毎日天気晴朗、午後寒風強く吹き、夜に入りて止むを例とす。時

瑪の宿舎は西蔵風家屋 に茶碗を供え、 主婦時に来て茶を注ぐ。 一階の板間に長さ三、 室の長き一辺に戸棚あり、 四尺厚さ三、 四寸の坐布団をしき、この上に安坐し、

敗せる肉塊の掛かるあり。

主人気をきかしこれを取り除き、

臭気

習慣 西蔵 におけ 3 喫 茶の

ŋ 那より伝来せるこの地方の弊風なりと聞けり。 等は酒を嗜まざるをもって僕等に給せり。 り白くして未熟の麦酒とや言うべきものの如し。 る。 兵来たりて、 るものの如し。 クと言う。チョモア人常用の酒とす。 なきを得たり。 来たれり。 ・ル>に類する酒あり。 地酒は大麦より製する一種の焼酎類にして、 然れどもその真意はつとに不肖の何人なるやを探知せんとす 来路の安否を問い、 彼らの意これに倍する報酬を得んとするにあるは支 即ち、 到着の翌朝、 まさにこの輩に報酬を与えて帰還せしめた 西蔵人もっとも嗜好す。 糧台衛門の通事その他二、三の支那 かつ地酒、 別にチャンと称え麦酒ヘビ 羊肉は毎人一 羊肉等を贈り来た これ 不肖および錫侯 その色我麦酒よ 主人呼んでアラ な な 腿以上送 恕

もっとも下部は土間にしてここに馬、牛、 るものとしては賞すべき所あり。 いえども、 この地方土人の家屋構造は未だ発達せず粗製なるを免がれずと 羊の畜類を飼養し、 堅牢なる木材を用い、 その上部は板敷にして人の住 これを概言せば、 殆んど蕃刀のみをもって建築せ 前陳の如く大 所と

抵三層に区別し、

この室の天井に腐

前に

小 机を置

その戸に唐草で彩色せり。

る人の通過するあれば號々大声を発して吠ゆ。その声深く咽喉の下部より出づるが如く、その形状と共にすこぶる勇 龙 ie, 犬 西 蔵

更にその上部は牧草を貯蓄すべき所とす。大麦稿、晩秋の枯草等は皆牧草としてここに貯え冬天の用に 供 内に茎と葉とは南瓜に似てホオヅキの先方開きたる如き袋状のものを生じ、その内部に数十の種子を含有する一 せら

る。

格林下等はその主なる地方とす。 その門辺に大番犬を繋げり。 に奇異の感を生ずべし。一行が宿舎の前面にあたり一大家屋あり。 のみを見つつここに来たれば、その家屋のやや大にしてかつ美なる 彩色をなし、 強風吹き来たる事あるを推知せり。 もってこれを蔽い、その上に数十の石を載せり。 なりと言うべし。牧草貯蔵所の上は屋根にして、 得ざるを遺憾とす。 に悉くこれを取り去り何処へか放棄し、読者にその名を紹介するを 函 草と共に西蔵名称を付記して持ち帰りしも、 乳獣にこれを与うれば増乳の効ありと言う。 人居住地は少しく富裕なる家屋の前面および窓の周囲に彫刻を施し 種の牧草は海抜八、九千呎<約二四○○メートル>のこの地方より 万五千余呎へ約四五〇〇メートル>の高原に至るまで繁茂し、 空気を流通せしめたる際、 一美観を呈せり。仁進関、 只 票品の火中に投ぜられざりしこそ未だ幸 その大きさ牛児に等し。 補助せし者誤りて反古となし、 旅者加倫網を発し沿途西金の茅屋 亜東関内怕里高原以下チョモ 我が林、 上海において一 この他彼の地普通の牧 店馬、碑々塘、春碑 ・ キョンド 屋頂は大屋根板を よってこの地方は もし見慣れざ 時 丁寧 開 有

遣せる特別委員ロックヒル氏の西蔵旅行中飼養せる番犬あり。これを故国に伴い還らんとせしも気候変化のため中途 猛にして凶、人の心胆を戦慄せしむるに足る。西蔵番犬は既に欧米人間に著名となるに至れり。 斃死せりと。 不肖つとにこれを知り、 別に一策を案じ、わずかに乳離れせし小犬を携帯せしに、 現に米国より支那 無事本邦に着せり。 に派

然れども既に成長して三、

四才に至りしものは、

途上赤道付近におい

て死せり

<編者注・成田氏は全部で三匹の西蔵犬を連



ときは、 れ帰ったが、一匹は帰りの船中で死に、残りの 二匹のうち 一匹も日本に着いて間もなく死亡し ころによれば、 んに行なわれ、 主婦は兄弟二人の夫を有するなり。 物園に寄贈された>。 聞くこの大家屋の主人は兄弟二人にて一婦を娶ると。 しかしチュンペイ生まれの最後の一匹が生き残り、 盗賊に対する番犬として特にその必要を感ぜり。 かくの如くせば財産を分散せず一所に集合し得て一家の基 兄弟四、 隊商がこの地方を旅行しその貨物と共に野外に露宿する 五名にて一妻を貯うるありと。 この風習は西蔵中特に後蔵に 帝室博物館付属動物園、 換言せばこの家の 西蔵人の信ずると 現在の上野動 おいて盛

て一般に婦人を優待するの風あり。夫、往々嬰児の汚穢衣を洗濯し、 ありて、 婚姻してこれを夫とし、家内に風波を生ぜしめざるものをもって賞すべき婦人なりとなせり。 もし所定の夫以外のものと通ぜば素より姦通罪をもって厳罰に処せらるるものとす。 第二子は次兄の子、第三子は三兄の子と順を追ってこれに准ずるものとす。 あるいは破綻を縫うを目撃せり。 風習すでにこの如きをも 子を生めば嫡子を長兄 この裡にも自から規律 また時として

西蔵の如き男子多くは旅行勝ちなる国に在っては、一家の取り締り上、

また婦人、寡婦となりて寂然孀居するの憂いなく、

加うるに

な

らびに経済上より特に適当なりとなすものの如し。

婦にして多数兄弟と

礎を堅うし、

H れ

を転ぜば、

経葉を翻

し経を唱うると同

理と認むるも

0

0

如

れ敬意を表する

通行の際に寺廟を右にして通過する風習あり。

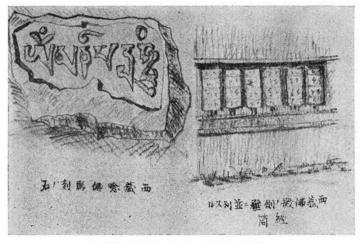
宿舎の前

面

に広場あり。

は己れが妻の衣を縫うものあり。 |婦を貯うるものもまたなしとせず。 然れども また、 夫 主婦の好みにより兄弟以外のものといえども夫の承諾を得て兄弟の如く 一婦 の結婚は普通に行なわれ、 地方により富豪にして稀に

一夫に二、



経筒と「オンマニパメハム」の西蔵文字

る仏画に比すれば大いに優るものたるを見る。 る陀羅仏 支那儒の説 通婚すること無しとせず。 彩色したる仏画を画き、 もこれと同理 × 尺五寸、 むるなるべし。 7 宿舎の右隣に 径二尺五 ニパメハム」とは略言せば ハム」と言う西蔵念仏を唱えつつこの経筒を回転して過ぐ。「オ なお我が 画の如きは支那各地に 径五、 K 寸の大経筒あり。 西蔵は西方陰国にあり、故に女権強し」と。然らば西洋 南無阿弥陀仏」 して、 この寺廟の左右両側に本邦の竹独楽に類する長さ 六寸の中形経筒二十余筒宛並列せ 小寺廟あり。 東洋陽国にある本邦は男権盛 あるいは仏字を書し、 もし夫これをきかずんば離縁すと言う。 これ と同じ。 おける現今の鄙俗にして その楼上白壁に画くところの彩色せ 「鳴呼蓮華上の瑞宝」と言う義に らの経筒内には経文を蔵す。 廟内の金仏前 通行の者「オンマ これ仏教の ŋ んなる理 カン その外面 は · 隆盛然ら 高 カン さ な 六 12

ここに十二人の婦女相集まり、 から ためなり。 本邦、 支那と同様なる廻り棒をもって大麦を打撃

如く日々繁忙の中に日を送りつつあれども、 またあるいは毛糸をもって衣服地および帯等を織るを目撃せり。 の打ちたるものを高く捧げ風を呼びつつ高く落下し、麦粒と麦稿とを区分するの状況は、本邦往時の方法と毫も異な 来客あれば茶を製してこれを出し、 また時としてはこれらの婦女子中、 また牛馬を飼養し、 祝事あれば男女相会し酒を飲んで歓楽し、 付近の渓辺より清水を汲み来たり、 あるいは売買に心を留むる等、 夜は羊毛をもって毛糸を紡ぎ、 あるいは山中より薪を負 その酣なるに及んでは高声放 その他家中の食事 開明国 の田舎婦女の

に使用すれども未だこれを他に輸出して更に利益を得る事を知らず。その角および爪はこれを地に放棄して顧みる人 またこの広場には時として拉薩より羊毛その他の貨物を運搬し来たりたる数十頭の毛牛および騾馬休息するを目撃 その尾は高価なる商品となり、 毛牛の他黄牛と称うる普通牛あり。専ら乳牛、耕牛、食牛として飼養せらるれど、 毛牛は西蔵高原唯 貨物運搬には一定の区域ありて、みだりに他の区域を横断するを得ず。例えばこの地方の 一の産にして普通運搬に使用す。 その肉は食用に供し、その糞は燃料に充て、その皮は塩水に漬け貨物の荷造り 而して一日の行程約我五、 六里とす。 時にあるいは運搬用に供せ その毛は 駄馬は加 縄 3

ろ本邦および欧米婦人の気質習慣に類するところ多し。

起って手を振り足を踏みて舞いかつ踊る。彼らはよく勉めよく遊ぶ愉快活発なる人民にして、支那婦人よりも寧

ばほとんどこれに倍する経費を要し、 とにより大不同あり。 り己れ幾十頭の牛馬を所有し、 網と怕里間を来往するを得れども、 故に拉薩にありて大貿易に従事する者は皆この手段を取れり。 々あり。 滞在中前者を求むれども得ず、 もし便宜を得て加綸綢と拉薩間を直行の隊商に荷物を托すを得ば比較的安価なるも、 拉薩と加綸網の間を往来して貿易せんと欲せば、もとよりその人の勝手たるべしと言 怕里以上の地はその地方の者にあらざれば運搬するを得ざるが如し。 かつ途中時日を空費する少なからず。 後者にては不便少なからず。 また運搬賃のごときは一定の価額なく、 特に不肖今回初度の進蔵については猜疑 然れども前者の便を得る事 は稀にして後 ただし人あ 然らざれ

カン

い降雪を侵して非常の難路を進行するを好まず。また万一外国人を禁地に誘いし事発覚せば如何なる苦境に沈倫す

蔵

人扶植の微志に賛成して拉薩に同行を約せしもの

0

その実冬天に向

て前進するの得策たる事を知り、 守備厳なるこの地方を満足に通過するは難事なるを予察し、 これを得ん事を錫侯に計れり。 師爺、 即ち秘書二名ならびに通訳一名、 支那の風習と錫侯の注意とに随い、 駅馬券、 則ち西蔵語鳥拉、 外委およびその次官、 支那語馬牌を得 糧台およびその 税務司お

心深まり、



商品が到着 拉 薩 か 6

外委の二衛門を訪問せり。 るをもってこれを責むべからず。 錫侯は上海都会の地、 捜索中なりしかば、 安輝亜東税関経過当日、 生ぜし結果税務司は曲支那書記にあるを認め、 K に陳述せり、 して亜東税関に至り、 るをもって、慰労として新調の衣、 与せしが悉く収容せらるるに至れり。 よびその秘書二名、 めなりしと言う。 の支那帽 来たる二、 靴、 三日前に当り税務所内の支那書記と西蔵書 この午後帰還の後、 鞋へわらじ>海産物その他の雑品を各六品乃至四 この如くして、その人不足なるに苦しみ、 韓氏は錫侯に謀りその空虚を充たさん事を促せり。 亜東関門守備長等の十名に商品として斎せるところ 錫侯と共に税務司を訪問せり。 安逸浮華の裡に生長せし者、 税関監督羅氏が韓氏訪問を為せしはこの事のた 錫侯往年現税務司と相知る、 錫侯碑々塘に至り、 一度不肖が東亜のため特に憫然なる 帽、 また得安、 鞋等を給せり。 遂に支那書記を免せり。 薄足烈二僕の衣不潔な 固より義勇に富まざ 羅糧台ならびに その略況は既 十五日、 かつ 記 0 間 錫侯の当 適当の人物 に不 馬を賃 品宛贈 iz 和 西 地 劉 前

P 関赴任の途に上れり。 却を委託せらるるに如かず」と。即ちその言に従えり。十六日午後、 流行以来拉薩は未だ大不景気にして破産せし者少なからざるは既に屡々伝聞せらるるが如し。 に予定せり。 たるの名義をもって糧台より発給せらるる運びに至り、十七日夜これを受理し、十九日早暁駅馬来たりて発し得る事 錫侯と共に残留する事となれり。また駅馬券は在拉薩糧台何氏のために香港に赴き公事を弁じて拉薩に帰還するもの 彼輩より不肖を見れば一大狂者の如くならんと自笑せり、ここに於いてかな、不肖は薄僕を随え前進に決し、 将来遂に初志を達するの日ある事を知る、乞う放心せよと。彼曰く「途中降雪の為に所々通行遮断も少なからざるべ より単身もって所志を貫かんのみ。もし万一不幸にして道途に斃死せんか、天下同志の士志を継ぎて来たる者あり、 勇気を示して、これより以内は気候厳寒、 って、なお今後注意して少なくとも三、 行するを辞退し、 その義に及ばざるのみならずなお本年中は依然給すべきに付き今後とも万事配意を乞うべきをもってせり。 宜しく注意すべし」。かつ事ここに至りしをもって、出発以来彼が家族に給し来たりたる俸給を返還せんと言いし 莞爾として彼に答えて、その安楽にして俸給多き好位置を得し事を賀し、 錫侯言う「既に公用を負いて進蔵する者たる以上は、 あり。 亜東に止まらん事を申し出たり。 彼等皆関門内に進入するを得ず。 商品入りの支那鞄五個を彼に委託し、 四年間は動かず、閑暇を利用して学識の増進を計るべきを告げ、 道路険悪、 彼が弱心はつとにこれを看破し、止むるもかえって無益なるを知 門を望み堂に入らず空しく帰るの旅客たり。 査察のいよいよ厳密なるを知るも心ひそかに確心あり、天祐に なお彼よりは在拉薩何糧台、 安楽にして俸給また多し。この三点より遂に拉 商品を携帯するを得ず、これに加えて去る歳痘疫 耶蘇<ヤソ>教伝教師二人独吉嶺より亜東に来 かくの如き位置は上海等に少なきをも および北京人何錕、 寧ろこれを残留して売 十七日錫侯亜東税 また不肖が 湖南人 得安は

左記の紹介状を得置き、

かつその名宛人へ各々相応の贈り物を準備せり。

るに至る未だ知るべからざるも、

亜東に止まれば事務少なく、

(22)

裕憲処

代請馬牌

帋倘或不能懇另行設法亦可專此佈懇容

当泥首粛此謹請 台安諸維

封筒表記 (裏面 は 封緘 の二字あるのみ。)

前蔵軍糧府

何大人

錫棫

十月初七日 升啓

升棋迪吉旅柾迎祥為頌晚於前年冬随李観察回 雅逸観察大人閣下恭維

与

翁商之再三只得給以馬牌藉公来蔵並無随带貨物諸事敬

而己但敵友陳君必須来蔵一遊然人地生疎行於草野之間険哉

物邀晚同来是月初二抵靖本擬従速赴蔵因亜東韓税司留之再三在関就事此亦情取難却晚才疎学陋不克勝任只得将就敷衍

昂貴異常難以購弁于是進退維谷有友人陳良玉者前在四川経商聞得蔵中生意獲利頗豊有志来蔵

挙匪起事窘迫南回刻有二三知巳合股採弁真珠鑽石于印度擬逐什一之利於八月初由滬赴印九月初抵孟不料印度珠価近

「滬後即行分手嗣就

洋員処同往北省山海関等処查勘磺苗于去年午月間

一探商情即在印度略備

貨 来 因

羅桐

祈

照払感同身受呈菲物数件誠心孝敬懇哂納為幸同在蔵地不得趨前領

教憾甚啟友陳君来蔵約住十天即 П 一敬求於

飭送

李大老爺 常臣

錫榑 十月初七日 台啓

指数為荷専此佈懇容当面謝即請台安 懇照払感同身受良翁来蔵小住十天即回一切望 傑臣仁兄大人閣下揖別滬江巳逾年半載近稔起起居明意為頌刻有友人陳良玉兄来蔵在滬時執事曽径同序諒可相識諸事敬

飭送

何総爺 印鋧 台啓

錫棫 初七日

柳生仁兄大人閣下滬江一別歳月頻更近維

起居納福為頌玆有懇者敞友陳良玉兄来蔵察探商情約小佳十天即行陳君初次来蔵地路生疎諸事祈望

指教為感带上微物数件祈

沈晋熙 頓首

弟

初六灯下

晚

沈晋熙

頓首

(24)

毎に

キムショ、

ミーキム」と大呼して来たるあり。

附呈張棉信

封

沈晋熙

頓首



西蔵の青年像

ブレットを試用せしも更に効能なし。然るに土人の忠告に従い、 ども二粒にて三、四分間に快癒する白色塩の米国製丸薬の類なる鎮痛 宝丹、清心丹は勿論、下界において服用せば如何に困難なる頭痛といえ 漬大根、人の恵送せし拉薩産乾牛舌一本等を食用品として所持せり。 ってこれにて可なりと為せり。これを一小袋に収容せしものおよび寝具 ろ質素に過ぎ、不足を感ぜしも単独にて食物の良否を訴うる人なきをも て、その他に炒りたる大麦粉即ち西蔵語の格粑および二、三の缶詰、 包等にて旅装を完成せり。咱利山上にて患受したる非常なる頭 不肖が携帯物はこの贈物および着替えその他雑品を支那鞄 二 個 この地 「痛は我 K 充 3 塩

支那人は西蔵人を呼んで普通蛮子または蛮家と唱え、支那官衛を撫夷府と称す。にわかにこれを聞くときは台湾野 これ我が火の用心と同じく警火の呼声なり。 しの故ならんか、ここにおいてかな、拉薩に向かい前進の準備整えり。十八日の夜、西蔵童二人相伴い、

に来たり小蕪根を生にて食せしに遂に全快せり。これこの地はやや低地

なると最高地にて一旦体中に失いたる野菜性分をこれにて速かに補

. (25)

一、二時間

V

得

化せしめん」(Life up the poor of the mankind!) 比にあらざる事を推知すべし。もし吾人と台湾人との文明二千年を懸隔するものとせば、 の光輝を発揚する光線の一部として数えらるべきなり。いわんや西蔵の如きは我と同洲同人種にして、これをして平 我に近寄りし所にありと言うも可ならんか。 蛮人の如く想像するものなしとせず。しかも閲読者はその文字、宗教、技芸、 その軌道を進行する本邦の如く迅速ならざるの状況あるべきを惜しむ。然れども「劣等人種を導きて文明に 彼等は深く仏教に迷信する結果、 ため辛苦経過する本邦人あらばその志は天意に適合し、 これを導くも急に現世期文明の光輝を 風俗、 習慣において、もとより同国の 西蔵人はその中間よりやや 日の本 進

## 三、珪瑪より怕里に至る

和に讴歌せしめ、これを文明に誘導するは友邦の天職なるおや。

り、今またかくの如し。 束をもってす。主婦評して言う。該老爺の無邪気なること小児の如し、 には騾に乗じて随行せしめ、 乗騾<ラバ>二頭、駄騾二頭、ならびに乗馬の教導者(喇嘛僧一名)および騾夫一名来たりて周旋をなせり。 瑪発十一月十九日。 出発に臨み宿所の主婦に托するに、前日山上において植物参考のために採取するところの枯凋せる西蔵草花 快晴。 然れどもその容貌衣服は厳たる一官吏なりと。白石とは水晶の意なり。 四個の支那鞄は二個の駄騾に負わしめ、安輝は馬掛を着用し、正装して騾馬に跨り先行 午前五時半離床、 拉薩行きの準備を為す。七時半に至り馬牌 前日は白石と換うるに西洋小刀をも 駅馬券の類) 記載の如 薄を引 てせ

路右に納灰所あり。 瑪は清冽 石片 (多く石板岩を用ゆ) これに美麗なる彩色を施せり。 なる渓流に臨み、架するに一木橋をもってす。 これ死者の灰を納むる所にして長方形をなし、 に彫刻するに仏像あるいは西蔵文字を用い、 また地方により彩色せざるあり。 故に清人普通玮瑪を呼んで玮瑪橋と為す。 石壁を四方に廻らし、多くは白栗をもってこれを 而してその前後には旗柱を建て、 オンマニパメハム、 即ち南無阿弥陀仏 橋を過ぐれば

績を表わせり。

ずかってこれが主力を竭せしなり。その去るに臨み、人々義捐して牌坊

庁に栄転せり。氏は当地方にある久しく、すこぶる人望あり。

新道路の開鑿、

亜東関城塞の新設、

(本邦の鳥居の如きもの)

を建立してその功 税関の創設等皆あ また年々一定の時日において善女相集まり、 これを建設せり。 は黒色毛牛の尾をもってこれを装い、旗に印するに経文をもってし、 人の来往するや必ず納灰所を右方にして通行するの習慣あるは、これに敬意を表するがためなり。 念仏を称えつつこの周囲を廻る事あり。 毎村落の前後、 人の多く通行する路上を撰んで 西蔵家々の仏檀に位牌を見ざる

は蓋しこれあるがためか。 れを船中に投じ、水温まるに及んでこれに浴するなり。 して入浴するを目撃せり。 、二回に過ぎずと言う。 付近土人浴場あり。 その構造の奇なる、 ここを過ぎ未だ数十歩ならず、道右渓流あり。 通行者公然これを眺むれども 配然 / てんぜん / 恥じる事なし。 先ず独木船に凉水を満たし、 安輝一日散策中、 別に大石を焼き、その十分熱するを待ってこ 木橋を架し門を設け、番兵これを守る 通路の右方に当り、石を中央にし男女相対 土人身体を洗清する事一 年

なり。 関はその監督の下にあり。 を販売す。 元官塞ありしも今既に破壊し只基石を残すに過ぎず。靖西軍糧府ここにあり。 瑪橋を距てるおよそ我二町の地を碑々塘となす。川に臨み山を負い、 年齢四十歳に近し。 蕃語通事一名、 四十戸、多くは支那人の家屋なれどもその建築琣瑪に及ばず。 西蔵文書記一名、その他の書記三、四名あり。広東および雲南の商人各一名店舗を開 もと福建人なるも久しく四川に官仕し、 官衛は軍糧府および外委の二衛門あり。 三十四年春印度を経由して当地に来任せり。 兵丁五名、 山上緑松繁茂す景勝の地となす。 巡丁四十名、 現任を羅君桐郷となす知府相 前糧台を王氏と為す。 北京同文館出身の英語 今四川江 Щ き雑貨 の突

塗るに緑色をもってせり。 傍ら碑あり 「思去」 の二字を刻す。 その声望想うべし。

の辺の渓流に沿い青松巌石の上に生じ、 激潭その下にあって白珠を飛散し、水清冽にして底石一々数らべし。

牌坊の全体は朱をもってこれを塗り題するに「忠恕為心」の四大字をもってし、屋頂は鉄葉をもって

そ

(27)

頭より腹部を通じて、毛長く垂下し、 重量およそ百二、三十斤とす。毛牛とは支那語にして西蔵人はこれをヤアクと称う。普通の牛より形やや大にして、 て遡行する未だ幾ならず、毛牛約四十頭、 の渓流をチョモ河または怕克里河と称す。 特に尾毛は太く繁生す。真誠の払子は馬尾毛にあらずして、 騾馬約三十頭の前方より来たるあり。悉く羊毛を負う。 けだしその本流源を怕克里に発するをもってなり。 牌坊を過ぎ右岸に沿っ 西蔵高原に生活す 毎駄負うところの

るこの毛牛尾の白色なるものをもって製したるものならざるべから



騾馬、 搬に供し、 の牛をして牛車を曳かしめ運送に充て、 馬 貼ヘロバンおよび毛牛をもって貨物を転送す。

ずと言う。その価羊毛より遥かに尊し。近年本邦において赤熊の髷 来す。亜東関以外加林網に至るの地は主に騾馬および馬をもって運 順にして、よく牛夫の号令に従い、 に似てやや異なる所あり。 る事等にも使用せらる。 のなりとす。また礼帽の装飾ならびに西洋婦人服腰部に嵩みを付け と通称し、好んで用いらるるも実は即ちこの毛牛尾毛の黒色なるも 加林網より以南、 毛牛は北米大陸に産する野牛バッファロウ 一般に普通牛より肥大なるも、 炎熱の印度平原にあっては、 山野崎嶇の間を重荷を担って往 他の その性従

にては最も廉価に運搬さるるも、 進行速やかならざるの嫌いあり。

用に綿羊を使用する事あり。また普通の牛をも用ゆる事あり。

亜東関以内の西蔵

時々補助 の地 は 種

れより進行二、三十分にして番兵の家三、 更に進んで山角を過ぐれば、渓の右岸、 四十戸あり。就中一大家屋の屋上、塗金星を戴くものを西金王避暑の所に 一小渓水会合せんとする所、 小屋を構え、水車を装置して麦粉を製す。



守る。

故に然り。

十時半油沙に至る。

橋基に門あり。

人家八、九戸右岸にあり。

なお直進すれば、

地形やや開展する

橋を過ぎ左岸に沿い進行すれば、

八、

九十羽の鳩群をなし、

園

圃の間に飛翔す。

鳩は仏使として土人これを殺

門を構う。番人これ

靖西の番官駐繋の地とす。この地を春碑(英人謂所 Chumbi)と称す。ここに橋あり、

ヤークに荷を積むときの図

進行約 塞して、 に卵形の白紋 河は源を丹加爾峠より発す。 を設け、 中の石上鶺鴒<せきれい>の一 野生薔薇高く聳えて馬背を没し、 家数戸あり。 に従って東北に向かい狭隘の間を進行せば、 所、 亜東関に比すれば更に厳乎たり。安輝悠々として馬を静歩せ 色を施し、 ってし、 弯曲せば道あり、 リド河とチョモ 狭隘と渓水を横断して高さ三丈余の城壁を築き、 実大にして形状梨に似、 右方懸崖断面の高き所に西蔵仏を彫刻し、 定時開閉 而して通ぜざるものの 時間にして、 巴若邪武と称う。 あり。 美観を呈せり。 巌山の背後に出ずるを得る。 河 西蔵特産のものたるに似たり。 門上題するに「靖西内関」 面前に一大巌山の横たわるあり。 即ち怕里本流との会合点とす。 枯木花を付くるに彷仏たり。 ここより右折し怕克里本流左岸 蓋し武仏ならん。 種あり。 如し。 ここを経過せば、 葉既に落ちて啻 紅 然れども少しく右方に 全体黒色にして胸 対岸の高き所人 その前面に当 塞門の外見 の四字をも 道路の両側 これに彩 油沙より 実 を存 リド 鉄門 道閉 渓

しめつつ関門内に進むに、 左右五、 六戸の人家、 多くは戸を鎖し寂として人影を見ず。靖西下と頭する一官房また

その奥に木製粗造の家屋数棟あり。 人なし。支那人到る所不規則またこれに伴うを知る。進む未だ幾ならず、右方の小高き所に支那風の旗竿一対あり。 態なる一地なりとす。 の内二条の小流貫流す。 ざるものというべし。 の辺風光すこぶる佳なり。 流過し、 を用い堅固なる建築少なからず。 際、五、六十頭の毛牛一隊となり羊毛を運送し来たるに遇う。格林卞は土人の人家略四、五十戸あり。多くは大木材 にして、管下各地に散在するの兵四百余名 なりと 称えり。 せるも規模甚だ小なり。武聖廟一坐ここにあり。毎日三回発砲し、かつ支那式の軍楽を奏す。営内の兵およそ五十名 要害形勝の地たれども利刀も使用する。 用に供せらるるものならん。 力の伸張せざること。 外委衛署一ケ所、 富裕土人私宅の建築に及ばざるのみならず、その行為は未開人を導くに足るや甚だ疑問に属す。 投宿せしむ。 水晶砕け白雪飛び、水声怒号山谷に響く。渓辺三、四の水車小屋を設けり。対岸の山上には喇嘛寺あり。 また兵舎に五十室あり。営門半ば破損するもこれを修理せず。名は衛門たりといえども、 時に午後四時なりき。主人は農業、牧畜を業とす。この家の前面にある屋上、 格林下の上方およそ二十町の地に、 小渓流を隔てて、先きに認めたる巌頭の背面を望むを得る。ここに家屋二、三あり。 瓢底左方の小高き所に土人村落あり。 夏時、 他日、この水力を活用して電気を起こし、 内関の地は左右絶壁の狭隘にある高地にして、一夫嶮によれば万夫進むあたわずと言う 雪融ければ一時一面の湖水となるも、 格林下の後方においては怕克里河、六、七百呎の高所より、 いわゆる靖西大営とはこれにして、 その人を得ざれば何かせんの慨あり。左道低き所、 四方山を繞らせる瓢形の平地あり。 また進行するおよそ十五町にして格林下に到らんとする 如比噶と称う。 製造等の原動力に使用せんか、 秋に至れば水量減却し、 内に統領衛署一ケ所、 人家二、三十戸あり。 近年地を拓き射的場とな 岩石に激しつつ斜面を 管領千総衛署 周囲およそ二里半、 一好牧場と化する。 風車を設け、 宣なる哉、 教導者一大家屋 天賜を空しうせ その実は 清人権 経文

を転回せしむ。

これ生来かつて見ざりしところ、すこぶる奇異の想いあり。

主人与うるに一客室をもってす。

室の正

人の戯言にして、客に対し礼辞を知らず、

しかも彼女が語を信ぜば、

ひそかに嘲笑を招くに過ぎず、

という。

誌 (上) 慮り、 特に松樹多く、 面 薄僕を通じて告げて日く ればなり。 なりと称え、 風習は往昔達頼喇嘛より励行せしめて出家を迷わせしめざるためにせしものなるも、 を塗り、 喜び満面に溢れたり。 ち謝礼を給してその意に従えり。これ必要を認めざればなり。家主に送るに斎らすところの小品二、三をもってす。 英人にして、この地方の事情に通ぜる者少なかりしため、 るの優るを政府に忠告せしも、 ョモア人は五色の幅広き横縞を用ゆるが如き差あり。 同小異にして、 する人種をチョ 談笑の間手の休むことなし。七、八才の少女その傍にありてまたこれにならえり。これ西蔵一般の風習なり。 して注意を怠らざるインド軍隊付軍医ワッデル氏 (ワッデル氏著「ヒマラヤ山中記事」参照)。誘引し来たりたる教導喇嘛はこれより直ちに帰らんことを請求せり。 彫刻するに五色の瑞雲をもってし、これに彩色を施せり。仁進岡よりここに到るの間、 炉辺に至り宿す。 紅黒色となし、 彼女は巧みに西蔵文字を書するのみならず、 道徳矯正にはいささかも効力を見ざるものの如し。蓋し、主として改むるところ心にあらずして形にあ 大体において西蔵人たることを失わざるなり。例えば、西蔵婦人は赤小豆色の服地を用ゆれども、 建築の材料に乏しからず。土地豊饒、 モア人種と称え、 客室の外方に面する所戸の閉ざすべきなく、 ただ眼光のみは胸々として黒奴に似たり。双手またかって洗浄せしことなきが如し。 この室広さおよそ三十畳、 「願わくは君を導きてともに拉薩に至らん。 蔵人および支那人は容易にこれを諾すべき状況もなく、 衣服、 風俗習慣、 (J.A.Waddell) の如きは、 この家の主婦元来美人ならざるにあらざれども、 曆数、 十余年前、 風景また佳にして、 驢辺にありては羊毛の糸引きにせわしく、 あえて請求をなさざりしは蔵人にとりては大幸なりしなり 言語に至るまで、 英の西蔵と開戦するや、 ただ鉄網を張るをもって夜来寒気の甚だしきを 妾は漢人を愛す」 西蔵中屈指の一良地となす。 少しく拉薩人と異なるところあるも、 前陳の如くこの地方を英領内に加入す 今はこれをもってかえって美観 また当時、 ٤ 西蔵のことにつきよく研究 気候温暖、 聞 分時も空費せず。 印度英政府および 児茶をもって顔 これこの 樹木繁茂し、 この間に住居 塗顔 地方婦 主

チ 大

対しかくの如く嫌疑するに至りし所以のものは、 実際にあたり価値あるの言たるを感謝せり。該夫人は甘粛より拉薩に達せんと欲し、途中その夫および一子と二年間 ざるや。安輝は去る三十一年の秋、 遂に その目的を 達せざるものあり。 の小に使用すべき学術上の機械、薬品を携え、数十頭の駄馬および数名の人夫を従え進入し、未開人を驚愕せしも、 ととせり。文明国人には人跡まれなる西蔵内は晩近の科学者にとりてその山川、草木、鳥、 くの如きことを急速にし、 とをはばかるに至れり。この行は、はじめよりかくの如き調査を主眼とせざるをもって諸事慎重を主とせり。 半身画を写出して小児に与えしに、彼またおそれていう「請う、これをやめよ。人必らず君を目するに地図写真をよ 0 の糧食とを失うも、 たるに「地図および機械類を携えざることと言語に通ずることの二件はもっとも注意を要す」と勧告せられたるに、 の人の新発見に属せし材料多きをもって、学術上に於ける己れが新境地となさんと欲し、天文測地の大より昆虫草木 嘱託を受け、 英政府よりの国事探偵とせん」。以後かくの如きこと少なからず、遂に地名、 この日行程およそ五十清里 ひそかに蔵内の事情を精査せしもの数輩あるがため、 なおその目的を達するあたわず、わずかに身をもって帰り来たれる婦人なり。西蔵人が外国人に 前途の大事を水泡に属せしめば脐を噬む何ぞ及ばんやと。以後また日記等を詳記せざるこ (わが六町をもって一清里とせば、 四川打箭炉において米人ラインハアト夫人と解逅し、西蔵旅行につき忠告を求め 西蔵未開といえども、 亜非利加の如くならず、宜なりその目的を達するあたわ 英国が印度占領および耶蘇<ヤソ>教の布教ならびに印度人が英人 およそわが八里十二町<三十二・七キロメート 支那人および西蔵人、 距離すら問 獣、 畏懼嫉妬するに起因すと 耳目に触るるものそ また記載するこ もしか

陀仏オンマニパメハムを唱えつつ薪を持ち来たり、

午前四時起き、

騾夫を呼び、

出発の準備をなさしむ。

隣室の主婦同時に起き来たり、

西蔵南

火を点じ、茶を沸かす。

朝来離床し、

晩主就辱するまで口念仏を

() とす。以下これに同じ)。

地図写真をよ (32)

日記を誌さんとすれば、

薄僕いう「土人の嫌疑を蒙むるを恐る、

記すべからず」と。

また紙片にたわむれ

に人の上体

宜に混和してこれを製せば、

一好食品たり。茶既に好し、

ラツンポ 私措 風景

紅色を添ゆるため石炭粉少量を投入し、 絶たざるは西蔵の風習なりとす。茶は一

般に四川製の粗葉紅茶を用ゆ。これを水中に投じて暫時沸騰せしめ、

後茶こしを通じて高さ二尺余の竹または木製の筒中に注入し、

ハバター>および少量の食塩を加え、

下方に偏円形の板片を付着せ

ح

n K

牛 酪 さらに

る棒をもってよくこれを撹乱し、さらにこれを土焼の茶瓶に入れ、

もって飲料に供す。

冬日寒凉の際は身体を温め得る

乱と 喫

玩す。

普通、

茶碗には黄銅製の蓋および台あり、

好飲料たり。 茶碗に注ぎ、

茶碗は支那より輸入し、双竜玉を争うが如き模様を愛

に関わる。

蔵人は一般に茶碗を愛す。

富家にては玉製または金銀製

多くは後蔵の製作

西蔵茶搅

もの す。 入れて適当の大きさに捏ねるものをもって、もっとも清潔とす。 のにして、茶にてこれを捏ね、食用に供す。その捏ね方のうち、革袋に りと唱う。 蔽 の価四、五十銭より十余円に至る。高価なるものは銀をもって内部 したる木椀あり。 の茶碗を用ゆ。 い、外部また銀の装飾を施すあり。而してこの椀はよく解毒の効あ 旅行者は各人皆これを懐にす。 0 如し。 **格粑とは麦粉<大麦の粉>を炒り、これを粉末にせしも** 茶碗のほか別に西蔵高地に産する梅の一 土人茶を飲むの量多くして、 これにて糌粑を食すれども、 木理<モクメ>の良否によりそ 生活の大部分を占むる また時に飲茶用に供 種をもって製

(33)

砂糖、

茶を適

時に天末だま

人は箸を用いず、手をもってこれに代用す。もし牛酪

答案を取り出してこれを食し、五時出発す。

ったく白まず、宿所の老幼皆出でて門外に送る。 瓢形乾湖の北辺より湖底に降りて進み、 小流を過ぐること二回にし

老朽斃仆するもの多し。 て山中に入り怕克里河の右岸に沿うて進み未だ幾何ならず、 松樹のみにても一見三、 渓の左右を縫い、 四種あり。 四里半にして奪打塘に至れば、塘兵二名、番兵六名あり。 棟梁の良材あるも、 橋を渡り左岸に沿うて進行す。 深くこの幽谷に潜匿して人の顧みるものなく、 この辺の峡隘、 さらに進めば

燃料界限を過ぎて無木帯の地に至る。

この辺は北緯二十七度三、

四十分にして、高さ一万三千呎<三九六〇メートル

その樹皮、 眩惑し、この通路寂寥たる所においてこの残忍なる暴挙に及びしも、未だ幾月ならず、 商人その雇用するところの西蔵人より殺されしものにして、該西蔵人は主人所持するところの商品を一見し、 鎖するに大玻璃板をもってするが如し、また奇観なり。 の上部中にも繁茂す。 >以上に至れば、 我山桜に類するところあり。 樹木生長せず、針葉樹帯既に過ぎて、一種の山梅樹帯あり。これ本邦富嶽等に未だ見ざるところ 一小乾湖の西辺に沿うて進めば、 土人木椀を製する材料に供するものが即ちこの樹なり。 路右大石の下、支那人を埋葬せる所あり。 東辺にある小瀑布悉く氷板と化し、 天網にかかり、 あたかも岩窟の前面を閉 この樹は針葉樹帯内 聞く、 請 西軍 三年前支那 利慾に 糧 府 0

第に我一行に接近し来たり、 直ぐに前進す。 此所を噶々埧と称う。ここにて曹達クラッカーの一缶を開き、三人各三、四枚を食して午飯に代え、 これその近傍人家なければなり。 およそ百歩の所に停立して頭を挙げ、 路右、 牝牡一対の羚羊 日本人の来るはあな珍奇やと云わぬば (我カモシカ、 英のアンテロープ) 水を飲み、 かりにて眺 あり。 次

手において斬殺せらりたりと。最後に怕里河の路道前面を横流する所に架せる木橋を過ぎれば、

展開せる

原

に

出

づき来たり見るの性質あり。 土人多くは仏罰を恐れてこれを殺さず、 行の前面において百余頭の毛牛一群となり、 つつありしも、 騾夫の石を投ぜしため逃走せり。 その色は灰色にして双角は枝なく直立し、上方少しく後方に傾き、肉は甚だ美味なるも 北方および西方の高原には殊に多しと云う。 残り少なき乾枯せる野草に生を繋ぐあり。 西蔵羚羊は野生なるにかかわらず、 行くこと未だ幾于もならずして 人珍しきが如く通 その付近右方の山腹牛房あ

がため湿気を帯びず、

堅きこと木炭の如きものあり。土人云う、その火力樹木に比して優る所ありと。これより拉薩

あるものなるを。

け、り、

ここに人ありてこれを管す。これを過ぐれば前面より六、七十頭の毛牛二群相前後し、各耳辺に紅毛の装飾を付 羊毛を負うて来るに遇う。遥かその背面には四時白雪の頂き高さ約二万三千九百三十三尺なるチョモラ嶺ハチョ

西蔵高原の彼方に小さく見えるパリ城

前面、

方に転ずれば、

茫々たる大広原の一端、雲と相接し、

チョモラ大雪嶺の

須由にして左

を怕里城となす。遠くこれを望めば、欧州古代の城塞の如くなるも、

而

異状なる城壁の巍然として原中に高く秀ずる あるを認む。これ

今や身はすでに西蔵高原の原頭に進登せしを自覚せり。

モラリ峰>高く雲表に聳え、婉然一幅の西蔵高原図画裡にこの身を置き、

山羊、 もっとも緊要の所たるを失わず。 も異様の所あり。然れども、 するものあるを見る。 安輝は騾夫と共に荷駄を督しつつ緩行せり。 毛牛とす。ここに至り薄僕をして馬を馳せて先達し、 に同じきも、色少しく白く、耳形円状にして尾長からず、西蔵特有産な り。ここそこ土中に穴を穿ちて出没するを見る。その大きさは普通 個所は銃眼を穿てり。この広原の各所に黒点の蚕動するは毛牛、 綿羊、 原野中、牛、羊、牧草を嗜食するの辺、 馬、騾馬等の遊牧するなり。 これ問わずして知る、燃料用たる牛糞を採集しつ 四方を窺視展望して来往人を警戒するには 全体の構造、 就中もっとも多きを羊および 時に原野 皆切石より成り、 婦人小児の東西に彷徨 宿所を求めしめ、 中一 種の野 黄牛、 必要の の単 鼡あ

西蔵高原の牛糞は気候寒冷なると空気乾燥甚だしき

の土塊をもってし、 結せし土の、 かくの如きものあり。 に至るの間および西蔵高原の樹木少なき地は、 特色なりとす。 長さ一尺余、 更に粘土をもってその上を塗り、一方に小傾斜を付け雨水を流下せしむ。かくの如き建築は蓋 城塞の下人家二百余戸あり。その家屋構造材料はこの高原に繁生せる一種野草の草根互いに固 幅五、 家屋の色の薄黒くかつ構造の低矮なる、 六寸大に切り起こせし土塊を積み立てて四壁となし、 一般にこれをもって燃料に供す。 唖然奇異の感に襲わるるのみ。 天の人を恵むや樹木なき高地もまた 屋上細木を横たえ、 道路は狭少、不 被うにこ

## 四、怕里より江孜に至る

時に午後四時半なりき。如比加より怕克里に至る行程約我十一里半へ四十五キロメートル>とす。

潔

名状すべからず。

薄僕に迎えられて宿舎に到れば、

即ち天井低き暗黒の土屋にして、土穴中にあるの

思いあり。

け、 るに、 らん、仏を拝するために用ゆる一 を去り、味なし。 水(ハード・ウォター)にして飲料および洗濯にはもっとも不適当に属せり。 するが如く、吐気を催し、空腹なれども食慾なし。蓋し空気稀薄と牛糞烟中に燻せらるるの致すところ 野草生ずる所には野生す) 米粥を命じ、 一月二十一日、 毎朝この香杉を焼いて線香に代え仏を礼拝するを例とす。 一種の臭気のためかえって感覚悪きを認むるも、 従って、 また空気稀薄のため冷水の沸騰速やかなれども、 一椀を試みしも半椀だに食するあたわずして止む。 同二十二日、 物を煮るに長時間を要するものあり。 あり、 共に快晴、 その葉香気ありて薪に使用す。試みにこれを用ゆる如何と。 種の倭杉 (本邦磯馴の小なるものの類にして、一万三、四千呎以上の所といえども 風強し。 この地寒冷我猛冬の如くなるのみならず、 別に効力を見ず。西蔵の風習、各家屋上に一定の焼香所を設 この辺の炉は方二、三尺にして裡に灰を充てたる木箱 薄僕云う、頭痛の起因蓋し牛糞を焼くの致すところな 試みにこの沸騰水中に指頭を浸せば、 この地の飲用水アルカリ分多く、 これをもって白米を煮れば、 則ち命じてこれを試 頭痛岑々破裂せんと 英語の所謂 か。 海浜地方よ 悉く油気 昨 夕着

旅

流通をよくせるものを用い、 0 にて牛糞その他の燃料を燃やすを例とす。 中央または単に土間に安置するに高さ一尺五寸、 その上に高さ一尺七、 西蔵一般に用ゆる竃はこれを本邦のものに比すれば優る所あり。 八寸の鉄製三 直径尺余の土焼甕の底を除き、 脚を附せる円環、 則ち我五徳の類をもってし、 その腹部三方に穴を穿ち、 即ち全体

個宛あるの

他

正面

の穴の後方にまた一個の穴あり。

燃料に欠乏の

地

個あるいは二

而して火力を盛んにするには獣皮製の鞴

自然経済的に工夫せられたり。

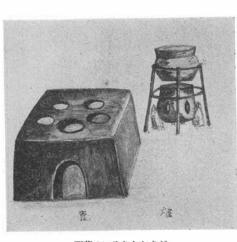
鞴はほぼ三角形をなし、

その先端に付するに先方や

その上下に木片を付着

の構造畧同じきも、

鍋釜類を載する穴、正面の他左右に一



西蔵のいろりとかまど

竈には常にこれを備え、

旅行者また必

古雅愛すべきもの

あり。 酒瓶、

茶瓶、

前蔵焼は赤色を帯び、

打箭炉 前蔵お 水差等

らずこれを携帯し野外燃火用に供す。土焼器の内、 や細き鉄管をもってし、後方広き部分を開き、 <ふいご>を用ゆ。 よび打箭炉付近その他各所に製造所あり。 はその形状本邦古代のものと異なるも、 ここを上下して風を送入す。

す。 焼は黒色を帯べ 従って高価なるにもかか ŋ 陶器製造は未だこれ わらず寧ろ優等品を好めり。 を 知らず、 悉く支那 特に茶碗 より

いて然りとす。 故に西蔵向きは特別に支那江西においてこれを製造す。

行者はじめてこの地に来たらばその婦人異様の風俗に奇異の思いをなすべ

し。

衣服は支那長衣に似たるも

0

0

れ 層長きもの を掛く。 して衣服 これ異とするに足らざれども、 地 を幅狭き帯にて帯の見えざる位に端折り褰げ、 は 般に赤小豆色の毛織物を用 見するにその顔面および手腕すら生来かつて洗清せず、 V 下襦袢は白木棉または白金巾 これに日本風に同じき襟を付け、 を使用 緑、 袖は径七、八寸の大筒 赤、 横縞入り毛 白粉ならで黒粉 袖

これを張りて倒れざらしめ、各環の表面には赤珊瑚と松緑石と称うる緑宝石とを一つおきに付着せるものを頭飾とな を塗りたるが如く、頭髪は幾年も櫛梳りたることなく乱麻の如きその頭の周囲に羅紗製、表赤色裏青色なる母指大の 別に簪を用いず。家の内外および起臥ともにこれを脱することなく、その形状の奇怪なる東都の婦人をしてこれ この環の両耳上に置ける所に長さおよそ二尺の同品にて高く半楕円形環を直立せしめ、糸をもって前



蔵風 物 西 都びたるところあり。これ該地の条下に説明すべし。 得ず。別に耳根より糸を掛け、 急を凌ぐに使用することあり。 照)。甚だしき貧民に至っては珊瑚宝石の偽物を付くるも、 ども此の種の耳飾りを用うるものもあり。 緑宝石等を用ゆ。 のものを手足に付着す。耳環、 したる奇観なし。この異様なる頭飾りは後蔵風にして前蔵拉薩は幾分か を用い、 を一見せば、恐らくは抱腹絶倒するもの 貧窮せばその宝石の一、二個を売り、または質入れして一時 耳環の重大なるもの普通の如くこれを耳朶に掛けるを 腕環、 重量を支う、また一奇なり。男子といえ 普通の婦女は少なくとも価値三、 首飾等、 男子の風俗は女子に比してさ あらん 皆金、 (九頁後蔵婦 怕克利、 珊 大抵は真物 瑚 江孜の地 四百 真珠、

脚、紅色のものあり。その鳴き声少しく鴉と異なれり。鳶は甚だ稀にして殆んど見ることなし。鵲へかささぎ〉あり、支 に似たる一種の小鳥あり、数千相集まりて群をなし、空を蔽うて飛び、園圃の間に食を求む。 五相携えて東方およそ十町の所にある渓流より飲用水を運搬す。この水不良なれども別に井戸の設けなし。 その数は雀に及ばず。 鴉は本邦鳶より大にして、普通鴉の二倍以上あり。 また、 普通鴉大のものと同形にして、嘴 飼い鳩また少なからざる この辺雀

方ともに後蔵の管下にあり。故にこの風あり。婦女水桶を背にし三三五

量なれば、

通過容易ならずして支那官吏往々これに苦しむことあり。特に商人中に不便を感ずる者少なからざるも

物を貪ることにつき著名なりと伝うる者あり。

品頂戴とす。

城塞の四層楼上に住す。この地の西蔵官吏は来往者よ

カン

那鵲に比すれば少しく大なれども、その数多からず。この高原においても支那人が青稞と称うる一種の大麦生長す。 この麦やや青色を帯びるをもって蓋しこの名あり。 ともに栽培し得ること、近年に至りて支那官吏より 米は寒冷に過ぎて生育せず。 蘿蔔<大根のこと>、 確かめられ 支那青菜の類

は江孜より前後西蔵に通じ、

道路は怕里より四通し、

南すれば西金を経て独吉嶺に達し、

北

西は于場に至り、東は布丹

(支那人は

住 民 蔵 原 0 西

布魯克巴、 るの Ľ ŋ. わる。 貿易す。 更に劣等なりとす。 するものあり。土人は喇嘛教を尊信するも、 分苅りとす。 ここに来たりて通商す。 靖西怕克里汎衛門となす。 見慣れざるものは一見男女を分別するがたし。 その地米および果物を産し、 悪弊ありと。故に付近他人種との間に小 怕克里支那官吏は把総一員、 靖西支那官衛の用ゆる白米また布丹より供するものにか 蔵人はヂュパウアワと称う) 言語は西蔵と異にして稀に西金および南部西蔵に来往 聞く、 布丹人は男女を論ぜず衣服および頭髪皆同 兵房十戸あり。 彼らは人の間隙を伺い、 怕克里および南部西蔵に来たりて 兵丁十名、 の邑羅に出ず。 西蔵地方官二人ともに五 文明の度西蔵に比して 紛議を起こすことあ 衛署一ケ所、 小物品を持ち去 頭髪はすべて五 布丹人また 題して

(39)

もし物品を送る少

その官世襲にして支那官吏またこれを如何ともするあたわざるものありと云う。この地の支那官吏は西蔵官吏に 権力なし。 これ官等の差異然らしむるところなりといえども、 支那官吏の裁縫者、 理髪者また兵丁の内に算入し、この地にあり、 特に近年蔵内いたる所然る所以のものはまた他に原因 各地また然りと聞く。 通弁あ 支

那人および西蔵婦人の間に生じたるものにして支那籍にあり。西蔵に駐在する支那兵は支那の四川、

四川語 のもの多く、

般に用いらる。

就中四川をもっとも多しとす。故に西蔵内所用

の支那

雲南、

貴州

地方

四川語に通ぜずんば人の嫌疑を受く。

0

亜東関に於いて入関を辞せられたることありしも、

これがためなり。



馬にまたがる西蔵の武官

支那兵は支那婦人を携帯し来たるを得ず。大抵西蔵婦人を娶りて妻妾と

素より少額の給料

なれ

ば衣、

これに加え

生訓練せず、 食、 なし、子女を生むもの少なからざるも、 て、 鴉片を嗜飲するもの十の八、九に居り、半ばは病者の如し。また平 教育その半ばをまっとうしあたわざるもの滔々皆然り。 毎秋一回駐前大臣の許より検閲使の如きもの巡回し来たる

銃を把り乱射をなすことあるに過ぎず。

憫れむべき哉敵国

飲料水および空気は未だ安輝が身体に適せず、 唯その影を残 に前進せんと欲し、 屋外に出れば寒風凛烈骨髄に徹し、 すに 止まれりと為す。 馬牌を斎し、 薄僕を西蔵官吏の許に差し遣わし、 東亜の藩鎮あにかくの如く放棄して可ならんや。 みを頼りて倫安する乎、宜なり外国人評して支那の西蔵に於ける勢力は 遂に麻酔者を醒ますに足らざる乎。 更に頭岑々たり。 何となく苦痛に耐えずして食物咽喉を下らず。 畢竟滞留すべき土地にあらざるをもって一 速やかに駅馬 いささかも頼むべからざるの 富嶽頂上よりなお高 (蔵人は烏拉と呼ぶ) 家に在りては糞烟に苦 日 天険

を出され

カン L

めら

また云う「往年洋人支那衣を着け、 糧台の馬牌を給せらるるあるをや何ぞ疑惑を要せん。 前進すべきことに周旋を依頼し、 るなし常理に通ぜざるの辞柄と云うべし」と。即ちこの地にある支那語通訳を呼び来たらしめ、速やかに駅馬を得 の人なりき。該洋人より聞くに、 んことを請求せしも、 洋人(本邦人を東洋人と云い、 り。宜しく審査し、後駅馬を給すべきや否やを定むべし」との文句ありとて蔵官容易に承諾すべき様子なしと報ず。 言語、 その眼色、 彼来往数時、 「これ支那官吏出すところの馬牌なり。 香港より来たるもの噶児噶達を経由し来たらずして他に公道のあ 衣服を見るに純然たる支那人にして、洋人または洋人の嘱託を受け来たれる如き者にあらず。 安輝怕克里着の日より第四日に至り、始めて進行するを得たり。彼曰う、蔵官問うに 黎明起き来たれば霧の如き細雪否粉雪霏々たり。 彼帰り来たりて云うところに依れば、 中国人と異なりしをもって当地官吏これをしてその来路より帰還せしめたり。 このチョモラ嶺は宝玉石を含有せり」と。 遅速に依り謝礼を斟酌すべきをもってせり。 欧米人を西洋人と云う) 布丹よりチョモラ大雪嶺の後方に出で来たり、拉薩に赴かんとせしこと あ 速やかに烏拉を給するの可なることをもってせり」と。 にあらずや」。 駅馬券中西蔵文中に「この人は噶児噶達を経由して来た 日の出に及び始めて晴る。 即ちこれに答うるに 通訳には厚く謝礼を遣わして還せり。 蓋し、 当地支那人を動かす 他 「その頭髪、 この光景は本邦に於 彼は紅 「新来者 況んや既 眼目、 彼通訳 策 ŋ は 肌

万 な

誌 (上) 進 蔵 日 を男神山と称う。 は女神と唱うるチョモラ雪嶺高く雲表に聳ゆ。 いて未だ経験せず。 驢の担うところ騾馬に比して比較的重し。その毎日進行距離は大約騾の半日行程に相当す。 時に初雪な 須由にして道左に二百余頭の毛牛あるを認む。 女山と対峙し左方遥遠の地に群峯錯雑、 な 地を蔽 これを雪霧と称うる可ならんか。 漠々たる西蔵高原の冬景特に荒凉を覚ゆ。 山下喇嘛寺あり。 九時に至り、 北より南に連亘する。 高さ約三層、 また三十余頭 乗馬二頭、 前方を望めば茫々たる原野天に接し、 駄馬二 赤色をもってこれを塗る。 の驢は重荷を負うて前方よ 頂頭皆千古の白雪を戴けるものこれ 頭来たる。 既にして自然石およ 即時北方に ŋ 喇嘛四 来 カン 進

び草根をもって築成せる五、六戸の牛房を過ぐ。 原に出ず。 ここをタン峠と称え、四時寒風猛烈をもって著名にして、新来者一度この強風に吹かるる時は頭痛を免れず 牛房とは牧牛者の住所なり。これより未だ幾何ならずして一段高き高



西蔵高原に棲息する野生の騾

なるものまた少なからず。よく四、五百メートルのところに近づけ得背は赤色にして腹部は白色、大きさ概して普通騾と同じきも、やや大嶺麓の広原中、五、六十頭の野騾群をなし遊牧するを見る。 その毛色

し。土人云う、この動物は春秋二期交尾期のほか牝牡群を同じうせ

の枯乾せるものここかしこに散生するを認むるのみ。

路右チョモラ

き。この辺は海抜殆んど一万四千尺<約四二七〇メートル>に近かと云う。日来既に頭痛を感ぜしためか通過の際別に増苦を覚えざり

地質は一体に砂礫にして、見渡す限り樹木なく、僅かに小草

らんか。

いて獲たるも、この地方に於いては仏罰を恐れ殺生を禁ぜり。原野中年に入蔵している>なりとす。該将軍はこれを西蔵北部の原野に於との方が多い。著名なる中央アジア探検家で一八八○年と一八八五なる魯国プレヴァルスキー将軍へ普通プルジェワルスキーと呼ぶこずと。この動物を初めて欧州に紹介せし人は西蔵探検をもって有名ずと。

道路を横貫して一小溜水あり。然れどもこれ章木湖へ現在のラーム

雪の一小溜水たるに過ぎず。大清一統輿図およびその他の地図に章湖>より流出するにあらず、また怕克里河の水源にもあらず、単に融

木湖は怕克里河の水源の如く記載せるは誤謬なりとす。欧米の地図は章木および噶拉二湖の位置すらこれを謬まれり。

(42)

誌 (上) 進 蔵 日 物は一 り入り来たり、 牛八頭を所有す。 ころの者五、 生来未だかつて洗わざるものの如く、只眼 光 の み 輝きて印度の黒奴も三舎を避くるが如き形状なり。 室には如 糞畑に燻せらるる身は不幸なる狐狸に似たるの思いあり。隣室は牛羊の臥所にして次室の入口より頭を顕わし、この はこの地方は黒色を尊ぶやの疑念を生ずべし。 よりやや高く、これより北進すれば漸次低し。故にこの辺は分水高原にしてこれより前後の水流ここを流過することな 背後にある一 褐色砂土の禿山下より流出し、 年一回青稞<大麦>を生ずるに過ぎず。宿舎の主人は広大なる土地と馬二十頭、 何なる動物あるやと伺うものの如し。 六名あり。 全西蔵に蔓延し、 去る年、牛疫流行の際四十余頭の毛牛を失えりと云う。この伝染病は天然痘と並進して印度方面 帯の丘陵は赤色にして樹木なく、焼岩焼土に似たり。土人は牧畜、 これこの辺資産ある農家の一例にして、主人は村長(西蔵語カンパル)たり。聞く、前年一 人畜の斃死するもの無数にして、西蔵貿易に大打撃を加えり。 厳冬といえども凍結することなし。宿舎は婉然土穴に似たり。 対奈の家屋は多く石をもって建築し、 一老婦来たりて燃料、茶等を周旋す。丈殆んど六尺、 怕克里に優れり。 農業をもって生業となす。耕作 騾馬三十六頭、 この家に使役すると この内に在りて牛 手足は例により 新来者あるい 羊七百頭、 土地は怕克里

時間を要せり。

する大断面中三角形の大凹所を顕わす。この嶺を女神と称うるは蓋しこれに起因するならんか。対奈には清兵二名、

五、井戸二口あり。深さ各二十余呎、水清冽にして飲料水に供するに足る。

邑の北方清泉あ

本日の行程およそ我十里<三十九キロメートル>とす。対奈よりチョモラ雪嶺を観望すれば西南に面

宿舎に達す。この日の宿舎地遠くこれを望めば、近きが如きも途中瞬時も休憩せずして馬行およそ六

蔵兵四名、

戸数十四、

む。

認む。これ即ち本日宿せんとするところの対奈なりとす。よって薄僕に命じて馬を疾駆し、

探検旅行家の如く地学上に別に注意せざりしものの如し。

イギリスの特使としてチベットに滞在した>はこの辺を通過せしことありしやに記載する書籍あるも、

午後一時すぎ路左砂丘の下に当り地平線上に少しく白点を

当時は現今の

かけて

先駆けして宿所を求

否未だこれを知らざるなり。然れども、往昔キャピテン・ターナー<Samuel Turner 一七八三年から八四年に

旅客あり、ここに来たらんとして大雪のため道を迷い遥かに反対の方角にある牛房中に達するを得たりしかど、 と相分れてその所在を認むるあたわず。 ん」と。 箱あり、 一男あり、その請求に応じ雪野を東探西索し、 充たすに銀貨をもってせり。 翌日雲晴るるの後旅客ここに来たり、請うて日く「昨失なうところの荷駄中 もしこれを求め来たりたる者あらば、賞するにその全額の半ばをもってせ 薄暮遂に捜し得て帰り来たりしも、 凍傷のためにその 一脚を

失うに至れりと。これこの地方雪風のために旅客時にある

は遭遇するの一状況なりとす。



后を出して敬意を表する西蔵の風習

求む。蓋しこれ新来の一官吏と認むればなり。

推量し、若干を投与し去れり。

いささかも人に対し舌頭を出

即ちその意を

とも鄭重らしく舌頭を長く出して敬意を表しつつなお茶代を

かかわらず、宿舎の主人門外に送り来たり、

帽を脱し、も

なさしめ、八時征途に登る。燃料代その他茶代等を供せしに

十一月二十四日。五時半薄僕を呼び起こし、

出発の準備を

笑話あり。 世界の広き、奇風もあるものかな。 「かつて英兵が西蔵国境に駐屯するや不潔 これにつき面 なる西 白き

打ち据えられたる蔵人は再び起き上がり、

以前

すは他邦に在りては不敬の極にして彼に在 りて は 最敬礼た

に長く舌を出しければまたきびしく打ち据えたり」と。

蔵人は一兵士に対し舌を出しければ、この者を打ち据えたり。

んか将た雪とならんかいささかも飛散せんか不慣れの地方俄かに断言に苦しめり。 この朝 寒風凛々黒雲を吹き送り、 須由にして黒雲先ずチョモラ嶺頭にかかり、 遂に満天に漲らんとせり。 広原の左側、 山麓に近く沿うて進 雨となら

誌 (上) 進 蔵 日 せり。 本邦が Hedin 氏を派遣し、 行する。およそ二時間にして道左人家三、四戸あり。白壁禿山と相映じ、人目を慰めり。この地を古頼と称う。なお進行 欧米婦女子までも実地に西蔵に踏み入り、苦心惨怛を世に紹介し、かつ文明の光を暗黒なる西蔵彊域内に 漠中に埋没せる古代の一都市を発見し、これを世に公にせしも、 その動植物等については東洋の先進国たる近き本邦よりはかえって遠き欧米各国に於いて研究調査せられつつあり、 を見るにつけてもあたかも児童が玩具店頭に立ちて空しく物品を眺むるに均しき感ありき。亜細亜にある西蔵の事情 およそ一珍草を蒐集して斯学上本邦よりこれを世界に紹介するの光栄を得ざるを遺憾とするの念あれば、 原なる一種別世界に本邦人に卒先して先登するの期を得しも、 禽遊泳せり。これ多くは小鴨、鴛鴦<おしどり>の類なれども、その羽毛黄褐色にして下界のものと異なれり。この高 出し、遅々として蘚痕に漲り、細流会合して一小清流となり、北流して章木湖に注入す。この小流中蘆花、 よそ一時間余、道右廃屋 まざるべきなり。 国民またこの高尚なる御意を体す。本邦民たるものは彼の地方の事に於いて今後人後に出でざらんことを切望して止 まで果たして何事をなせしや。 られざる知識と各種の珍奇なる物品とは卒先して採取せられたり。 | 亜細 湖 然るに彼と同じ亜細亜人なる本邦人、同じ人種なる本邦人、同じ宗教なる本邦人は彼の地方に向かって今日 の西辺に沿うて進み、 、米の博物館には幾分づつその採集物あり。 亜の先進国 この百泉噴出の地を章木と称う。 亜細亜大陸特に西蔵の世に 不分明 なる地方を調査せしめられければ、 「の空夢を見つつある間に、 あり。断壁凸凹なお往年の記念を存せり。その付近岩石多き所清冽なる冷泉幾十渾々として湧 正午十二時過ぎ土仁に着す。土仁は人家三、 劣等人種を導いて真の進歩を補助するを楽しむは本邦至尊の御仁徳高き所以に 亜細亜人ならざる ミス・テーラ、 ミセス・ラインハート その 大湖あり、 また瑞典、 思慮するところありてその目撃する奇禽、 周囲我五、 また賢明なる国王によって遣わされたるス氏 那威<ノルウェー> 拉薩の北方崐崙<コンロン>山の南に於ける大砂 六里、 四戸あり。 湖上所々鴨浮遊するも水半ば 国王は御手許金をもって この付近は各所に人家の散在 従って、 未だ世 浅水の辺は水 今この 輝やかさん は結氷 Swen 他

を。 二、三寸、大きさ二、三尺、 するを見る。喫茶、休憩暫時にして再発す。日、子午線を過ぎ、 方を迂回して北辺に沿い進行すれば湖岸氷片あり。大風のために漂積して三、四尺の小堤防をなす。 この勢をもって察するに、 即ち知る、この地はこの時節に当り時にあるいは猛烈なる東南風吹き来たることある 西蔵の烈風は砂礫のやや大なるものを吹き飛ばし来ることありとは戯言にあらず。旅 前途なお遼遠なるをもって馬に鞭ち奔走し、 毎片厚さおよそ 湖の左



ろ少しく小なる傾きあり。 らざりしも、ここに至り、初めて千五、 六百の 一大群を見 を投げれども容易に逃飛せず、よって知る、この地方人のこ 云うべし。 ばざると極寒烈風および冬期飼養草の欠乏すると、 らんと想察せらるるも比較的然らざる所以のものは羊種を撰 ほか山羊またその群中にあり、その大きさは両者ともにむし る。その毛色は黒、 れを殺害するもの少なきを。この日、途上羊群を見る少なか 行中幸運にして未だかくの如き暴風に遭遇せざりしは僥倖と 湖の北底狭縮する所、 白その他雑色ありて一様ならず、 西蔵は寒地なる故その羊毛良好な 鴨、 雁、 群遊し、騾夫等石 毛の洗浄 綿羊の

ラーム湖>の水は小渓流となりて北方に流れ、遂に噶拉湖に注入す。大清一統興図に噶拉湖の水章木湖に流入すと記 べし。しかも羊毛は西蔵輸出品中最多額を占むるをもってその不振は惹て西蔵一般の商況に波及せり。章木湖へ今日の 両三年来市価低廉のため依然として増加を見ざるに至れり。改良を施さば産出額と価格とに於いて昻進を見るに至る り。然れどもこの種羊毛はまたその種類に従い適当の用途ありて輸出額少なからず、年を遂うて多少増加しつつあるも

方、

撰別法のその宜を得ざるとは濠州産羊 毛に 劣る 所以な

は噶拉湖 の如く記載せる地図あるは想像の正鵠を得ざるものと云うべきか。 雪 行 進

初雪となす。 異の感に堪えず。

人骨をもって製したる笛を吹奏し、

安眠するあたわず。

二十四日なり。本日の行程およそ我十三里半へ五 三 キロ

例年に比すれば降雪早しと云う。

この日は陰暦十月

メー

気 1 薄暮より終夜降雪せり。これを本年この地方の

かつ唸経す。

その声音凄然奇

深更に至り、

を越え、

左折し、この小流の右岸に沿うて下行せば、

載するは大誤謬なり。

章木湖の東北山腹に当り人家四、五戸密接す。これを西亜無と称う。章木湖流出の所より小橋

幾ならずして人家四、

五戸あり。

なお下行せば一大湖あるもの

湖の東北岸人家十四 時に午後四時なり。

即ち噶拉湖にして、周囲およそ我三里とす。

五戸あり、

噶拉と称う。ここに至りて投宿す。

これより西方およそ我八町を距てて湖畔に当り人 家約三十戸あ

この辺一帯怕里に比すれば耕作に適す。この夜頭痛甚だしく

宿舎に接近して一喇嘛寺あり。

ルソ、 見れば、この地方はやや底下せると幾分か温暖なるを 推知すべ 候寒冷、水また不良なり。噶拉湖はここより西南に向かって延長 別に流出する所ある未だこれを見聞せず。 々これを記入するも、 章木湖より少しく狭小なりとす。 欧米有名の輿地図にして、 八時間を要せり。 実際より小形に過ぎたり。 噶拉には支那兵二名、 未だこの湖を記入せざるあり。 湖面浮氷未だ多からざるを しか B 蔵兵四名あり。 また噶拉湖の水 噶拉川 0 水源

適

何れにせよこの二大湖は怕克里河の水源

12 あらず、 むしろ雅魯蔵布河<ツァンポー河のこと>に注入する傾斜面即ち流域にあることならびに噶拉河の水源に

行せしかば、 う。 労を除けり。安輝所持するところはこの大鳥拉券なりしなり。 地方の西 行の快を想像するのみ。土人の駆烟法不完全にして屋頂唯方尺余の一小孔を穿つのみなれば、 り牛糞烟のために頭痛甚だしく、 に入るもの即ちこれを温め、かつ食を与えしに元気回復せしかば、午後雪やや雾れし後これを放たしめたり。 に彷徨し、馬二頭を紛失し、 噶拉に向かう。 責任を免れしめ、厚くこれを賞せり。 駅毎に馬を交換して前進するを云う。大烏拉とは、大宿駅に到り始めて交換するものにして、進行迅速ならざるも繁 定し、去歳八月、 ル>とす。新調の支那服は降雪のために潤うて見苦しき形状を呈せり。ここに至って駅馬交換の約定なりしに、 十一月二十六日。烈風大雪を吹き送り、光景惨然、宿主行路の危険を説き逗留すべきをもってす。即ちこ れ あらざることの二事を地学界に紹介すべし。 十一月二十五 小雀あり、 **電**駅夫の誘導に従って原野狭隘の間を進行す。途中、 蔵 村 長 即ち宿舎の主人云う「この地は小鳥拉交換の地にして、小鳥拉を出すも大鳥拉は出さざることと決 午後一時、佐馬達に達せり。この日進行およそ五時間にして、行程およそ我八里<三一・四キロメート 大雪烈寒のために食を求むるを得ず。かつ羽翼に凍傷を受けしためか我が室に迷い入る。これ窮鳥懐 この夜人あり、噶拉より来たり曰う「彼騾夫噶拉埧塘原野に於いて雪中に迷い、方向を失ない、 官銀送り届けの官吏にもまた辞して給せざりしなり」と。小鳥拉とは、 午前六時起来、八時発程す。 わずかに身を全うして噶拉に達せり」と。憐れむべきの至りなり。 眼眩し、 降雪紛々なお止まざるをもって、明日帰宅すべきをもってせしも、彼聴かずして 吐気を催し、苦悶に堪えず。身は燻製蠟乾となるやを疑い、 この朝、 前後して十二、三の人馬進来するに遭遇せり。 昨夕来の降雪紛々として未だ止まず。 とにかく怕克里より来たりし騾夫はここに於いてその 小駅馬という意にして、 烟雲常に室 終夜大雪なお止まず。 山野道路弁明 徒らに広原騎 馬を馳せ急 K 例によ しが に従

則ち主人に請求して炉を他室に転じ、衣を多く着して火を用いざることとせり。後やや快気を覚えたり。

もしこ

た

灯を点じ、二、三日来の日誌を畧記す。

都会の春にのみ恋々するもの幾人かこの苦心を推察する者ぞや。

有す。

人呼んでガンボートと云う。

蓋し村長の謂いなり。

するものにあらず」と。宿主、人を使用する十六名、 拉川の水源をもってす。 は粗造なるも、 てせり。彼の旅客に対する心事を知るも、笑ってその請に従い、一刻も速やかに前進することに決せり。 ころと同じく、 馬を出すことに決せり。 而して雇騾費は普通の四、 て交渉再三に及びたるも聴かず、やむを得ず騾<ラバ>を雇い、明朝降雪の如何にかかわらず進行することに決せり。 と云う。 畑の法をして米国丸木小屋火炉の如くせば、 この夕八時頃前蔵より公文を斎して靖西に急行する一使兵が一蔵人を従え来たるあり。 聞く、 券中審査の二字あるとこの地は大鳥拉を出さざる規定あるとをもって駅馬を出すを辞せり」と。 大にして石造なり。 昼夜兼行せば両地の間五、 彼曰く「これ融解せる雪水輻湊へふくそう>しこの渓流となるものにして、噶拉湖より発源 薄僕来たり告げて日く「宿主我が一行の馬券を一見して日うところ、 五倍を請求し来たりて、この価にあらざれば応ずるものなく、 一見するに小城郭の如し。蓋しこの地方に於ける最大家屋なり。 六日にして達し得べしと。彼等は小鳥拉券を携行せしかば、 屋内燻らず土人等の顔面黒奴の如くならずして可ならんにの感を生 羊二千余頭、 山羊五百頭、 牛馬三十余頭および広大なる土地を所 寒村また他に騾なきをも 怕克里に於 彼等相互言語. 宿主に問うに、噶 宿主は 宿所の家屋 て問 通ぜず 明 朝 駅

誌 (上) 路困難なりと云う。 を見る。 十一月二十七日。 午後三時半 前日来の降雪地に積み、 ここより熱隆に至るの分路あり。 深更胡歌絶え、 康瑪に着す。この日行程我六里<二三・六キロメートル>。この付近の 康瑪は人家二十余戸にして支那兵二名、 午前六時洗面 朔馬嘶かず、 すこぶる馳行に苦しむ。 この 朝一 人熟睡し、 少しく捷径なるも、 晴 一陰定まらず。 四境寂として声なく寒気沈黙して人を襲うの際 遅々として牛歩の如し。 蔵兵四名あり。 途中時にあるいは盗賊出没し、 待って九時半に至り雇うところの騾<ラバ> 付近五、 両禿山の間にある小渓流 六百頭の山羊二群あり。 山 間黒色の粘板岩を かつ降雪の ひそかに起坐し に沿 際は特に道 頭 始 その わ 8 せる

戸を押し

出 れ ば、 明月皎々として皚々たる雪山 0 頂上に懸かり、 風光凛々乎たり。

左右崗に達せんとする所一喇嘛寺あり。 踏んで進めば鏘々として響きあり。 すこぶる多忙即ち知る、 演習すら今は廃止 譲り地上に存すれども、 口辺を開きて空気の呼吸に供し、 は灰色の布片をもって全面を包み、 る努むるものの如し。 人ならんか」と。 奇状なり。 月二十八日。 進行困難なるをもってなり。 その他これに準じ倚羅を纏える一行およそ二十余騎一列行進の中央に在りて進行せり。 0 蔵兵五名ここに在り、途中人家の在る所柳樹生ずるを見る。 四相密接するあり。 行およそ三十余名と邂逅す。 一行および騾馬悉く食を終わり、 この検閲を秋操と称え、 晴、 また行李の相前後して拝過する少なからず。 ただ形式のみとなるに至れり。 今夕秋操巡覧の検閲使ここに来泊するの準備なるを。付近一名僧の墳墓塔あり。 路好しと、 前三時離床、 青稞園圃、 頭には紅色の風帽を蒙れる者二、 依然噶拉川に沿うて行進し、 これに異状の眼、 時に月なお中天に懸かり、 官吏あり、 その以前西蔵官吏五、 三時半発程す。 牧畜の状況等前地方に比して少しく富裕なるを伺うに足る。 白堊をもってこれを塗り一美観なり。 昔時は駐蔵大臣みずから厳格にこれを行ないしものなりしも、 十一時再び発し、 他官吏を顧み、 鼻、 嘉慶の初年蔵地に駐紮せし有名の大臣松筠の詩を見てこれを知 これ本日の行程長遠なると白昼陽光のために雪融ければ通 口を画き、 六騎乃至七、 寂乎たる銀世界を照らせり。 = 渓の左岸に沿うて行進す。 安輝を評して曰く「彼の旅客は髯あり。 三名ありき。 該検閲使は総紅色の羅紗衣を着け、 よって知る、 三の小部落を過ぎ、 眼目の所は穿てどもこれに眼鏡を掛け、 八騎宛前方より馳せ来たり、 内喇嘛三十名あり。 安輝一 地形やや低下し来たるを。 行馬を下り路傍に 九時半左右崗に達す。 狭隘次第に展開 就中奇異 行四人、 左右崗客舎の主人 途中検閱使安欽 同色の風 0 在りて 大にしてか 想うに広東 周旋すこぶ JU 年一 まさに

帽

かに

П

その江孜秋閲

の詩に日

氷

結び付け、

もって仏に供するは各家皆同じ。既に江孜に達せんとする所渓流あり。その対岸松樹および老柳林立す。

その大小は家屋の大小によりて同じからざれども、

方形の突所を作れり。

部の周囲を塗るに幅およそ一尺なる黒白二線をもってし、

鼓気躍 敬声発 賞頒嘉壮健 屏藩足鎮隅 百年雖不用 雄師在令呼 鋭技惟蝥進 日未応無 練能循制 争馳 震且

蛮戒演戦図

感激欽醍醐

なり。 綿羊約三千余頭を目撃す。宜なり、この地羊毛織物をもって著名なるや。地味の豊肥なるに従い、 台の如きも接近せば頽廃せる一古城塞に過ぎざるもの、 の中を貫流し、 浮図門を過ぐる二にして北方に展開せる原野に出ず。 農家といえども石あるいは方形の乾土をもって屋頂平らかなる二階屋を建設し、 潅漑の便宜しく耕作地また広く良格粑を産するをもって著名なり。 これを江孜城とす。市街はその麓にあり、 これを江孜平野とす。 屋根の四隅に高さおよそ二、三尺、径一尺五、六寸なる長 その正面禿山の山角に当り遥望厳然砲 この日積雪の地上に枯草を求むる 白悪をもって全体を塗り、 家屋の構造やや美 この平野は二水そ Ŀ

(51)

その上に樹皮を立ててこれに五色の布片を

饒 汁をもって粥を煮始めて口に適するを覚えたり。 富家好みてこれを使用す。 種 似たるものあり。 家の副産物として販売する所あり。 絾 他に咽喉を下りしものなし。 歩したるものなりとす。 毎に右に半円形の突出場を設け、 うるランプツと称うる<br />
毛織物は<br />
粗造なれども<br />
品質純に<br />
して久しきに<br />
堪え、 石灰粉をもってしその悪味云うべからず。食せずして止む。 高価なれども、 みを使用し、 端を腰囲に懸け、 氈 この日行程十七里<六六・八キロメートル>余、 形状および支那字等を織り出すを得。 その他帽 人烟従って多し。 嘛の 靴等の毛織物皆悉くこ地に於いて製造せらる。 麻および木棉類は秋毫もこれを使用せず。模様一般に未だ幼雅たるを免れざれども、 前者に比すれば毛質更に緻密にしてなお久しく着用するを得べしと云う。 またこの地の絨氈へじゅうたん>はもっとも著名にして華麗なるものあり。その原料は純粋 両足を延長し緯線を配合しつつこれを織れり。江孜に在ってはやや進歩し、 耕作物は大麦、 これを過ぎて江孜に達し先達せし薄僕の案内にて市街入口の民家に投宿せり。 絨氈の長さ五尺、 この地饂飩へうどん>ありと聞き、 牛馬の来往を避くるに便せり。 店 瑪辺に於いては経線を長く 土間上に引き伸ばし、 豆類、 尊ぶ所は、不変色にして使用久しきに堪ゆるにあり。 大根等にして製造物は蔵人着用するところの衣服地、 幅二尺五寸位のもの、 江孜高原は怕克里高原に比すれば地低く気候やや温和にして地味 亜東関を経由する西蔵織物の輸出額は未だ発達せず、 食物は黎明生卵二個、 普通の毛織物は各地多く自家に於いてこれを織 饑者にもまた不味きものあるを知れり。 薄僕に命じこれを求めしめしに、 この橋の構造は西蔵中目撃するところのもっとも 当地に於ける価格五、 普魯と称うる毛織物は一疋およそ十円以 九時半休憩の際糌粑半碗、 その前端は丸木に貫き、 六円なりとす。 普魯は遠く<br />
蒙古地 支那内地 支那官吏および 毛布、 混 注文によれ 晩来たり、 和するに多量 茶 時に午後 唯国 衣服 の織物機 椀の れ この羊毛 地 ば各 他 羊肉 に用 西蔵 ほ 刀

出

蒙古喇

需用に応ずることありと聞けり。

る少数なる西蔵人の需用に供するに過ぎず。

去る三十一年度に在りては毛布、

毛織物、

西蔵衣服の輸出

せらるるも

渓を横断し、

橋を架す。

該橋は木および礫をもってこれを造り、

全長およそ三十間、

幅およそ一間半にして約

五間

く心を打たれるのは、

彼の記載の詳細で正確なことだが、ただ一応の観測だけでこれだけの記録ができるものかどうか。彼は相当

僅かに六千六百八十六留比<一ルピーは当時で六十六銭>に過ぎず。 佐馬達雇い来たるところの騾夫は約に従い、

### 〔解説〕 成田安輝のこと

ここに於いて解雇し、

酒資を給して慰労せり。

方三郎

松

成田安輝についてわれわれの知るところは極めて少い。

投じた。 当時は鉄道建設に東洋人の労働者多く、成田は一時は四百人からの邦人労務者をかかえて手広く 建設や保線の仕事に従事 も回復し、そのまま足を延ばして北米に渡った。 最初はアラスカで鉱山に入り、後には創業時代のユニオン・パシフィ ここで彼は目を海外に転じ、まず小笠原に渡った。半ばは健康を取り戻すためであった。暫く製塩事業などに携っている間に健康 の間海外生活は十年に及び、年も三十を越えていた。 していたということだ。一日の収支四万弗、というのだから相当の頭目であったのであろう。 つの転機が来た。最初は献金などで祖国のために大いに健闘していたのだが、 元治元年(一八六四)の生れであるから、 根津一、花田仲之助(花大人)などがあるが、 河口慧海よりも二年の年長である。 成田は病気のため中途退学し、 間もなく全てを捨て、 鹿児島の産、 軍人コースを捨てざるを得なかった。 しかし日清戦争の勃発を契機として 陸軍幼年学校の第 日本に帰ってしまった。こ 一期生であ る。

戦後成田は迎えられて台湾総督府の技師となり、 紅頭嶼、火島嶼間の探検を行なっている。 拓殖の事務に当る傍ら、 当時蕃地と呼ばれていた中央山岳地帯や、

して彼は入国している。 地に足を印した外国人は当時はまだ数人しかいなかった頃のことだ。 日本人として入国することは到底できない。 中国人陳良玉と は上海に出て、シンガポール経由でカルカッタに渡り、シッキムから西蔵に入るルートを選ぶことになった。といっても、 の皮をはがれない程度に、 西康―西蔵ルートは到底不可能であることが判った。 打箭炉から西へは一歩も入ることが許されなかったからである。 そこで彼 そのために四川に入り重慶に居を構え、 かし台湾は成田にとっては大陸への飛石の役割をしたに過ぎない。 台湾の生活、さらに重慶の生活、 西蔵人の日常生活について研究もしていたものと考えられる。 東文学校を創立して日本語の教師をやりながら、 その間に成田は中国人として通用する程度の語学を身につけ、 彼は間もなく大陸に渡った。 ここに掲げる『進蔵日誌』を読んで強 奥地旅行の機を待った。 目的は西蔵に入ることにあ

いろいろ研究して入ったのではないだろうかと感ぜざるを得ないのである。 文献についても一通りの知識を持っていたかとも思われるのである。 十年に及ぶアメリカ生活から察して、 欧米の西蔵関係

た形になっているのだから、 下手に身元が暴露されると、 それ等の友人に迷惑を及ぼすことになる。日本語で書けば大丈夫だなど は彼が中国人陳良玉として西蔵に入っていたという点であろう。陳良玉として入蔵し、 これだけの観察をしていながら、生前遂にその西蔵紀行を発表しなかったことには、 それについては友人某々が身元の保証をし 何か理由がなければならならが、

と考えたら大間違い、日本人はとかくそうした甘いことを考えて失敗をするのである。

けであったろうが、とにかく西蔵を取巻く情勢は極めて微妙で複雑なものであった。 英国は南から、ロシアは北から、それぞれ西蔵に対して圧力をかけていた時代だ。日清戦争後の清国の勢力の退潮を見ての働きか たとはいよいよ考えられない。 然りとすれば成田の西蔵入りはやはり特殊の使命をもつものであったと推察してよいように思う。 ンザに入った大谷光瑞一行のように学術的探検が目的であったとも思えない。 もちろん、 ただの個人的関心から西蔵入りを計画し 彼の背景は同じ四十四年にラッサに入った 仏教徒たる河口師とは全く違っている。 かといって翌三十五年にミンタカ峠を越えてフ 行がただの親善旅行でないことは察しがつくのである。 どんな特別使命であったかは今日となっては 確かめる術もないことだが' 政庁の宰相総堪布に会見していることや、時期的に日清戦争の後、<br />
日露戦争直前の明治卅四年のことであることから考え、この旅 第二の理由は、さらに重要なものであった。 すなわち成田が特別の使命をもって西蔵に入ったことに関係がある。 ダライ・ラマ

した。数え年で五十三であった。 また、明治の人の気骨、 れない。しかし何はともあれ「一旦急あれば義勇公に奉ずる」という言葉通りに行動しているところに成田の人となりがうかがえ. もそれぞれに正規軍の外にあって活躍していたことを思えば、 成田としてはこの時代が最も 本領を発揮し得た時代であったかも知 は騎兵隊で、満州軍の最左翼にあって奉天戦などに参加したのだから勇ましい話である。往年の盟友、荒尾、根津、花田等が何れ に行ったり、開戦後は東亜義勇軍馬隊に投じて満州の野を馳けめぐった。 今日いうところのゲリラの頭目だ。彼の率いたゲリラ隊 戦後成田は結婚し、 成田が西蔵から帰国して間もなく、 一子安清を得、 迫力を感ずるのである。明治三十七年といえば成田は不惑の年に達している。正に男の働き盛りである。 日露の風雲は急を告げることになった。 成田は再び大陸の人となってゴビを越えて外蒙庫倫 居を満州に定めて実業人として新しい生涯に入ったが、大正四年(一九一五年)奉天で長逝

夫人芳子も鹿児島出身で家庭教師として粛親王家に迎えられ、 賢夫人といわれた人だそうだが、夫に先立って亡くなっている。

### 歴

明治九年 (一八七六年) (一八六四年) 一月二日東京に生まれる。 父祖の国鹿児島に帰る。

明治十八年春 明治十年 愛知県中学校から東京陸軍幼年学校入学 東京麻布の養生塾に於いて、陸海軍士官学校志願生徒養育にあたる。 (第一期生)。その後陸軍士官学校に進むが在学二年にして病気のため退校。

明治十九年春 明治二十年春 天日製塩法研究のため東洋のロビンソン・クルーソーと称せられた故田中鶴吉氏の傘下に加わり小笠原聟島に渡航。 同じ目的のためアメリカ合衆国に渡航(天日製塩法はわが国の気候では難しいことを確認する)。

明治 治二十一年 一十一年 五. 四 月 月 アラスカのダグラス島にてトレイドウェル・ゴールド・マイニング会社機械部に動 コンブを調査するためアラスカに渡る。

明治一 明治 一十四年 一十三年十月 四 月 日清貿易研究所 再度渡米。 (東亜同文書院の前身)の請求により帰朝

明治 ク鉄道会社においてわが国労働者を監督、 一十五年春 四 月 わが国の植物を広くアメリカに売ることを目的として、サンフランシスコに帝国植物商会を設立する。 アイダホ事件(在留邦人間の紛争)発生。 日本政府よりアイダホ移民地の調査依嘱を受け、七月まで従事(外務省通商局にて出版された本 調査 財政の整理を行なう。月給七十五ドル、手当金二十五ドル。 珍田領事等の依頼によりアイダホに出張し、 ユニオン・パシフィ の報告

明治一 書は現在内閣文庫に保存されている)。 二十八年 Ξ 月 友人橋口勇馬、花田仲之助両氏の懇請により帰国。

明治三十一年 台湾総督府を退職し、 チベット探検を目的として四川省重慶に渡る。 明治三 十 年 明治二十九年 三 月

三月

台湾総督府民政局殖産部に技師として勤務。

拓殖の業務の傍、

中央山岳地帯、東部沿岸地帯を探検する。 東文学校を設立して同地の青年に日本語を教

えつつ、チベット入りの準備を進め、 語学を学ぶ。

明治三十四年 明治三十三年 月 月 右願い出で許可される。 四川ルートからの入蔵は到底不可能に付き印度方面より進蔵方、 重慶より成都に向け出発。

五. 月 諸般の準備整い出発せんとしたるも随行者中病人発生し一時延期

11

日本政府に禀申。

明治三十四年 九 月 上海より支那汽船富順号に乗船し、カルカッタに向かう。

十一月 チベット入りを敢行。

明治三十五年 pц 月 上海に帰還

明治三 十七 年 再び北京に渡る。

日露戦争勃発。 特別任務を命ぜられてゴビ砂漠をこえ外蒙庫倫に行き、 ひき続き東亜義勇軍馬隊に属して前線で

活躍。

明治三 十 八 明治三十九年一月 年 北京において木村よし子と結婚 日露戦争終結後安東県に移り鴨緑江採木公司の委嘱をうけ東辺道の木材事情を調査

明治 年 安東県に引続き居住し朝鮮平安北道朔所に於て金鉱を経営。

明治四十二年一月 一子安清誕生。

大正四年(一九一五年)七月 奉天において病死。享年五十一歳。

### 考 文 献

大島与吉『爆破行秘史』(昭和八年、満鉄社員会) 対支功労者伝記編集会編『対支回顧録・下巻(列伝)』(昭和十一年)

三 四 小川琢治「成田安輝氏拉薩旅行」(『地学雑誌』明治三十七年三月号) 陶々散士「成田安輝先生略伝」(『大道』昭和二年十一月号)

金東生「陶々散士に鳴謝す」(『大道』昭和三年三月号)

玉

(編者)

は許可できないから、

他に目標を変更せよというものだった。

けたのが

いけなか

### ル ヤ L マ 1 ル 登頂 (一九六九年)

師

義

美

薬

か発表されなかった。ようやく翌年三月にそれが発表され、すぐ登山申請をしたけれど、四月下旬の返事は、 登山のスポーツ外貨を申請した。それが十一月に全額六三八九ドルが承認され、加えて、その二週間後に地元紙 本腰を入れることになったが、新登山規則は (ティリツォ・ピーク、新高度七一三 二メ ニルギ なか

の後援が決定して、驚嘆した。そこで、ツバ付けのつもりから、

ないと思いつつ、泊山岳会は日本山岳協会に対し、北ニルギリ東峰

ネパール当局が登山の解禁を声明し、許可する三十八峰のリストを発表するや、当たるはずが

九六八年八月に、

は

تا

め

に

ルを避けたいということらしかった。それなら、 ティリツォ・ピークは解禁リストにないので、ニルギリ北峰の東に位置することから「北ニルギリ東峰」とこじつ 0 たのか、 とも考えたが、 理由はチベ なぜこの春にトゥクチェ・ピークをスイスに許可したのか。 ット人難民がムスタン経由で南下しており、

(57)

それとのトラブ

わたる電報や手紙に対するネパール当局の回答は、やはり、はじめと同じものだった。

そこで、第二目標をグルジャ・ヒマール(七一九三メートル)とした再申請書を外交ルートで送る一方、 私は六月

十七日にカトマンズへ飛んだ。外務次官にも会って、政府決定の変更を懇請したが、それは無為に終わり、 すぐに日

本大使館からグルジャ・ヒマールの申請書をネパール外務省に入れてもらった。

六月三十日にグルジャの許可がおり、七月三日に公電が入った。この時には、装備や食糧の集荷がほとんど終わっ

ていた。

## 一九六九年富山ヒマラヤ登山隊

隊 薬 師 義 美 (33歳)・泊山岳会・渉外と装備担当

副隊長 伊 東 信 隆 (33歳)・泊山岳会・県内渉外と食糧担当

員 温 井 E 明 (30歳)・呉羽自動車工業山岳部・食糧と梱包担当

隊

金 Щ 清 (27歲)·神通山岳会·輸送担当

酒 井 宏 友 征 邦 (26歳)・上市峰窓会・医薬担当

(26歳)·上市峰窓会・装備担当

特派員 井 上 田 健 晃 (38歲)·北日本放送·記錄映画担当 (36歳)・北日本新聞社(富山山想会)・記録と報道担当

# グルジャ・ヒマールについて

未踏峰であり、 我々が目標を変更したとき、グルジャ・ヒマールを選んだのは、解禁三十八峰のリスト中、七〇〇〇メートル級の かつ先約のないのはこれだけだったからだ。このグルジャはダウラギリ山群中、 一番低い。そのため

○○~三○○○メートルの屏風のような断崖をめぐらしている。すでに一九四九年のA・ハイムや五二~三年のT・(註1) にか、これまでこれを試みたものはなかったが、南から見ると実に堂々とした、立派な山姿を有し、その南面は二〇

ハーゲンの航空偵察の写真がそれを紹介していた。

年秋に英国空軍隊がダウラギリIV峰 とグルジャの間の尾根に登るか、グストゥンとのコルへ出るかは、現地で判断することにしていた。 ルートと、途中まで同じである。 このグルジャを我々は西側から回り込むことにした。これは一九六二年秋にジェームズ・ロバーツが偵察し、(註3) グストゥン・ヒマールの北尾根を乗り越したところでルートを別れ、 (実は無名峰であり、第VI峰とも呼ばれる七二六八メートル峰) (誰5) をめざした時の それからVI峰 六五

氷河の下部をさぐった日本隊には、六五年以降に北大、九大 (二度)、福岡大山の会があった。(註6) いずれにしろ、 西回りではベースから頂上まで約十二~三キロの長いルートになる。また、 カペ・ コ ーラからカペ

### 口 チ

呼び寄せられたポーターは一日十二ルピー、荷物は一人約三十七キロである。 カラへ飛んだ。 ス流域の洪水のために、ようやく九月十五日にカトマンズヘトラックで着いた。一方、十五、十六日に先発隊員がポ 本隊は八月二十八日にカトマンズに入ったが、神戸から送った荷物約二・八トンは、船のカルカッタ延着とガンジ そこでは現地食糧やポーターがタカリーのセルチャン一族の手でととのえられていた。 ダルバンから

一部の装備、食糧を残すことになった。ポカラで米、 やっと荷物と本隊がポカラにチャーター機で向ったが、空港でDC3機の積載を二・四トンに減らさ 小麦粉を補充できたものの、五日間もポ

九月二十一日、六十八人のポーターを伴い、キャラバンに入った。しかし、 日当の半分の待ち賃、一人当り三〇ルピーも失費することになる。 カトマンズに残した装備と高所用食糧

ーターを待

かパンチャヤット・ハウスを借り、クスマ、ベニからミャグディ・コーラに入った。 らである。キャラバンの道中は、ほとんど毎日のように午後から夕方にかけて夕立。 の若干を受けとるため、金山と佐伯がポカラにとどまり、 かれらが十八人のポーターと本隊を追ったのは二十四日か 順調にダルバンからムナをす そのために、 宿営は村の小学校

しかし、ベースまで行く約束のポーターは、 最奥の村グルジャカーニに着いたのは九月三十日である。 山地の雪に恐れをなし、ここから全員もどってしまった。仕方なくグ

を設ける。ポーターは付近一帯をドゥプテルと呼び、 ーラへ入り、左岸沿いの踏み跡をたどって、昼すぎにカペ氷河のモレーンの末端、 ゲバラの峠を吹雪の中で越えた。ポカリの脇を通り、その日はタール・コーラの川岸でキャンプ。翌四日に ルジャカーニの村人を雇ったが、一日二〇ルピーの高賃金。 へ向う。ダルシンゲ・コーラを渡り、翌日にヌンタラ・カガールの急な屋根を登りつめ、 十月二日、グルジャカーニの、 ほとんどがマガール族のツァンティアルのカーストの五十三人をつれ、 頭上にはいつもチューレン・ヒマールがそびえていた。 しかも必要な人数は集まらず、また隊を二分することに 四一〇〇メートルの草原にベ 四五〇〇メートルのブズン ふたたび山 カペ・コ ース

### 登 Щ 活 動 の 開 始

東はニワトリと羊をつれて八日にベースへ合流した。全隊員が日本を出てからはじめてここで顔をそろえる。 六日と七日の両日で、 山活動は翌日から開始されたが、ポカラに残っていた後発隊は残りの荷物を七日に、グルジャカーニで別れた伊 カペ氷河左岸のアブレイション・バレィから長大なサイド・モレーンを偵察し、モレーンの

スフォールの末端であり、すぐ近くに英国空軍隊の「グレーシァ・キャンプ」の跡があった。ベースとC1の間

は四

四七五〇メートルのC1地点までルートをつけた。C1は九日にセット。そこは最初のアイ

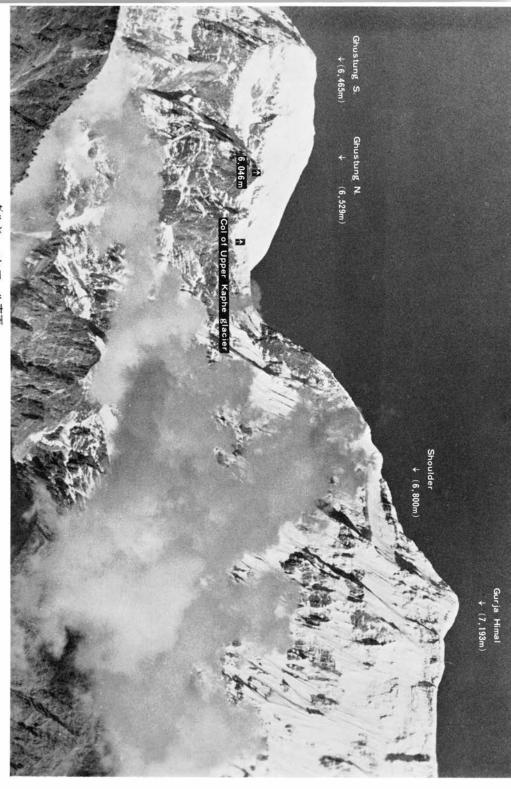
途中から氷河へおりて、

(60)



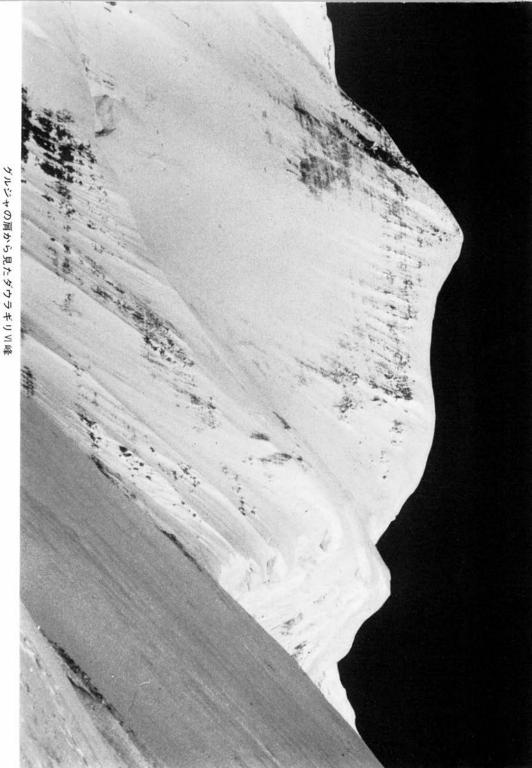
C2-C3 $\sigma\nu$ -F Route between C2 and C3 (tele-photo) (By. Y. Yakushi)



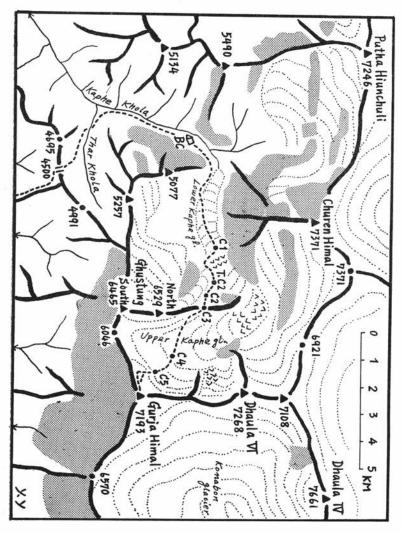


グルジャ・ヒマール南面

South face of Gurja Himal (tele-photo) (By. Y. Yakushi)



Dhaula VI Seen from the Shoulder of Gurja Himal.



時 間かかっていたが、 そのうちに三時間が普通になる。氷河は途中に小さなクレバス地帯が横たわっていたけれ

ープの必要もなく、 岩クズにおおわれた、 坦々としたものである。

突き当たりに岩盤が露出している。 直登したようだったが、 我々は氷瀑の裾にそって右側、 その上部の浮石地帯も危険なので、 左岸へトラバースした。 スラブとその浮石地帯に一五〇メート 氷河地帯を抜けるとガラ場に ル 0

一〇〇メートル、クレバスが口をあけ、

セラックスが林立している。

英国隊はこれを

C 1

の前方の氷瀑は高度差約

ープを固定。この岩場で、六二年にロバーツが使ったらしい捨縄とピトンを回収する。

一帯はまた、 グストゥン・ヒマールの側面から急傾斜で落ちてくる「サイド・グレーシァ」 から発生する

氷ナダレの危険にさらされていた。 スラブを乗り越したところが氷瀑の上端にあたり、そこからルートは あるときには、 新雪の雪崩でロープが引きちぎられていたこともあった。 「サイド・グレーシァ」 の扇状のデブリの裾

ーシァ」の落口より少し上手の平坦地に物資をデポ。ここまでC1より三日間でルートをつけ、上部への足がかりと をまく。このデブリの末端にはガラス状の氷塊が無数に転がっている。 約二〇分でデブリを終わり、 「サイド・グレ

して、十四日に仮C2を置いた。 高度は五〇〇〇メートルである。

み込め へ抜けるのは、 英国隊はこれからサイド・グレーシァの中にルートをとったが、 なかっ た。 今度の登攀のカギでもあった。 そこで側氷河の左側の、 岩と雪をまじえた急峻な山腹にルートを求める。 フィックスト・ロープは次第にのびていく。十八日にはC2が五 氷河の状態は悪く、クレバスだらけで、 ここからグストゥン北尾

とても踏

にチューレン・ヒマールのイタリア隊が到着し、近くにベースを設けた。 トル 地点の岩棚に置かれ、 仮C2は同時に撤去されたが、 物資のデポは続いて行なわれた。 その間 十五

ど、 C 2からは岩をまじえた、 プは着実にのびた。「片眼岩」と呼んだ岩場をからみ、 さらに急な雪の斜面がグストゥン の北尾根へあがっ 約一〇〇メートルの雪の斜面を終わると、岩場のか ていく。 雪崩 の心 な たけ

れ

りつく。 でやっと休める。 高度差約一〇〇メートルのこの岩尾根の岩質はやわらかいけれども、 ルートはこの五六〇〇メートル地点から左へトラバースし、 ピトンはよくきいていた。 斜度三五~四○度の小さい脇尾

で約一二〇〇メートルのロープがフィックスされた。 かれたが、 金山、 酒井、 ルートが固定されると、C1~C2間は約三時間、 温井、テンジン・ギルミが二日かかってルートを開き、二十日に尾根へ抜け出た。 十月二十二日、 C2~C3間も三時間しか要しなか 尾根に抜け出た五七五〇メ 1 仮C2からそこま った。 ル 地点にC3

### 総攻撃の体制

が 原を横断し、 ついた C 3 からはじめてグル グルジャの西の肩へはい上る支氷河をたどれば、 ジャ ٠ Ł マー ル西面の全貌が得られる。 容易に頂上へ達することを発見。ここで頂上への 当初に想像もしなかっ たルート、 上部 カペ 河

雪崩をたえずカペ氷河へ落としていた。プタ・ヒウンチュリは下のサイド・モレーンからよく観察できる。 指摘のように、二つの またC3から無名峰 ルートが考えられ、 (ダウラVI峰) が北に、 またカペ氷河をはさんで対峙するチューレ チューレン・ヒマールの東側もすっかり見えた。 ンは、 中 腹 VI 峰 に二段の棚をもち には ロバ ーツの

レー < カペ氷河へ下り、その内院の雪原をふたたび上りなおす。 容易なルートとはいえ、膝ぐらいまでもぐり、状態の悪い部分は腰までのラッセルを強いられた。 スはすぐ消される 幅約三キロのこの雪原の横断は、 ヒドン・ク 風が吹けばト V ,s ス 6 な

二十三日、C3から約五八〇〇メートル地点までラッセル。ルートはグストゥン北峰の裾をからみ、

わず

かに上部

ル 地点をC4と決定。 翌日にはトレースが支氷河の取付き点までのばされ、 さらにもう一つのキャンプを出せば、 テント一つと若干の物資がデポされた。 頂上が射程距離に入ると判断できた。そこで二十六日か その五九〇〇メート

ら総攻撃に移ることを決定し、この二十四日の前後に隊員、 シェルパはBCやC1で交代で休養をとった。

は、ほとんど毎日のように午後から雪が降ったが、 C1から一気にC3へ入る。翌日、 金山と酒井の第一攻撃隊はテンジン・ギルミ、ラクパ・ゲルブ、フルバ・キタールをサポートにつれ かれらは予定地にC4をセット。荷上げは急ピッチでC3へ行なわ おおむね安定していた。とはいえ、十月ももう末だったから、 れ た。 天候

#### 頂 上 攻

ット気流の吹き出しを恐れていた。

C3は文字通り前進ベースとなる。 けC5へもどった。一方、この日に残りの隊員、シェルパは全員C3に集結。BCには連絡官とキッチン・ボーイの 二人だけ、C1は無人、C2のテントはC3へあげられたから、C3とBCの連絡はしばらくとだえることになり、 し、デポを作り、翌日、そこにC5を建設した。支援のシェルパはさらに二〇〇メートル余り上部までトレースをつ 第一次隊はサーダーのテンジン・ギルミをメンバーに加え、支氷河を六五○○メートルまでト

酒井とサーダーは足の指先に軽い凍傷をおった。 だけで、引き返えした。天気はよかったが、深雪のラッセルと寒気、加えてC4、C5の建設で疲労していたのだ。 第一隊はC5から頂上へ向う。しかし、 かれらはグルジャの西の 「肩」約六八〇〇メートルに達した

十月三十日、

る一方、後方のルートを固めるため、薬師、井上、下田と二人のシェルパはC1へ下った。 なかった。しかし、これはロバーツの初登以来、第四登にあたる。次の日、 ック隊を支援するため、C3からグストゥン北峰に登ったが、 伊東、 佐伯、ラクパ・テンジンの第二隊はこの日にC3からC4へ入る。また温井とアン・タルケィは二つのアタ 午後からガスがかかり、 第 隊がC3へ下り、 温井隊は頂上の 第二隊がC5へ入

(64)

に達した。ここにデポしてあったザイルを使い、二人は九時から頂上へのびるリッジを登りはじめる。 十一月一日、 佐伯とラクパ・テンジンはC5を五時五十分に出発。第一隊のトレースをたどり、二時間半で アイゼンのよ

ツルベ式に確保しながら高度をかせいだ。

に立った。高度計は七〇五〇メートル、そこが頂上だった。 昼すぎから快晴だった空に雲が飛び、次第に濃くなっていき、 ピッケルとアイスバイルを使った登高も、「肩」から約六時間でようやく終わり、 雪もまじってきた。一時半ごろに小さい岩の上で休 二時四十五分に小さな平坦

ったが、二台のカメラと十六ミリのシネで撮影し、二〇分後に下山にかかる。 のグルジャカーニ付近からブズンゲ一帯も見下せたが、雲のために大展望は得られなかった。 雲の合間にダウラⅥ峰や、Ⅳ峰の頂上付近、コーナボン氷河内院もチラチラ見えた。C3のテントも見えるし、 のちに露出過度とわ

からリッジをはなれ、 二人より遅れてC5を出た伊東は、 山頂にはメンバーのサインした標識布をうめ、頂上から少し下った露岩に記念のピトンを一本打った。 急な雪のスロープをまっすぐC5へ。「肩」を通らずに、 「肩」まで行き、アタックを見とどけ、テントで待機していた。 五時四〇分にテントに入った。 下降は途中

### 撤収、下山

雲が山頂 ・タックの午後は天気が悪くなり、C3から二人が二時半ごろに頂上直下に達していることを認めたが、 部を包み、 五時すぎにC5近くを二人が下っているのを見ていたから、 登頂の確認はできなかった。トランシーバーもあいにく故障し、 無事なことは確かだった。 朝の交信から連絡はとだえてい

の成功が下へ伝えられ、三日にはC3を撤収、 翌二日 C3から迎えが出て、C4を撤収すると同時に、 次の日にC1から全員がベースにもどった。 第二次隊と合流してC3へもどってきた。ようやく登頂

ちょうどベースにみなが着いたとき、コンシリオ隊長はじめ、イタリア隊が祝いに訪れた。我々もイタリアの成功

(66)

を祈り、 いく度も乾杯を重ねる。我々は幸運だったようで、アタック成功の翌日から西風が強くなり、稜線にはすご

い雪煙が立ちのぼっていた。一日遅かったら、どうなったかわからない。

十一月六日、

後にBCを引き払う。イタリア隊はさらに一○日あまりがんばってみると、山へ向かっていく。その日はタール・コ

ポーターの手配に先発隊がグルジャカーニへ下った。三〇人の人夫は八日の昼ごろに到着し、その午

ーラの出合の台地にキャンプし、翌日、グルジャカーニにたどりついた。 村ではティワールの祭りが行なわれており、村の人夫が動かないため、祭り明けを二日まつ。ポカラまで一人一二

五ルピーの請負制で、 十二日にグルジャカーニをあとにする。入山時とはちがい、 連日の快晴のもとに、三十二人の

ポーターと全隊員、 シェルパがいっしょになって快適なキャラバンを楽しむ。

れてポカラから飛んだ。十一月二十日、 そしてグルジャカーニから八日目、十九日の昼すぎにポカラに着いた。この日にすぐ便があり、 カトマンズに全員もどって、エクスペディションは終了。 隊員の一部はその 翌日と二回に

あと、クーンブ地方の踏査をした。

政府連絡官=D・B・タパ (国家警察・32歳)

サーダー=テンジン・ギルミ (ナムチェ・49歳)

高所シェルパ=ラクパ・ゲルブ (ナムチェ・33歳)、アン・タルケィ (ナムチェ・35歳)、ラクパ・テンジン (ナムチェ・32歳)、

ツァーヌレブ(ケノデ・3歳)

フ

(スルケ・38歳)

コック=ヌルブ (ケンデ・33歳

キッチン・ボーイ=アン・ツェリン (ナムチェ23歳)

- メール・ランナー=ペンバ・ドルジェ (ナムチェ19歳)、ドルジェ (ヤンザのチベット人キャンプ・30歳)
- (註1) A. Heim: In den zentralen Nepal-Himalaya 1949. Berge der Welt, Bd. 5, S. 107-114, 1950.
- 註2) T. Hagen: Das Gebirge Nepals. Die Alpen, SAC, Bd. 32, S. 124-130, 1956
- J.O.M. Roberts: Dhaula Himal. Alpine Journal, Vol. 68, p. 188-197, 1963.
- J.O.M. Roberts: Dhaula Himal. Alpine Journal, Vol. 73, p. 113-114, 1968. J.O.M. Roberts: With the Royal Force on Dhaulagiri IV. Alpine Journal, Vol. 71, p. 75-88, 1966

(計5) 註4) (註3)

北大中央ネパールヒマラヤ地質氷河調査隊=中央ネパール(非売品・一九六八年) 高山哲信=ダウラギリ南面踏査と今後の展望(山と渓谷・三七五号・一九六九年十二月) 九州大学山岳会=ダウラ・ヒマール南面(岳人・二五二~二五三号・一九六八年八~九月)

福岡山の会は私信による。

# モンゴル・ハルヒラー連峰

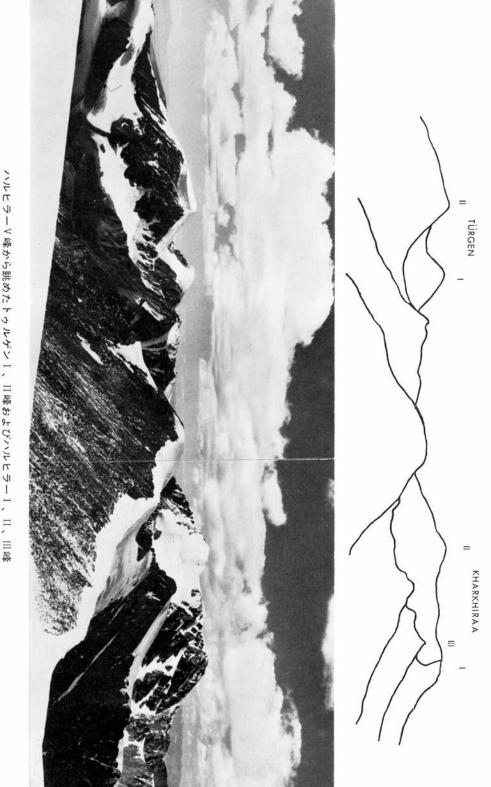
=日本・モンゴル合同学術登山(一九六八年夏)=

# 東京外国語大学山岳会

る川は、まさに緑のじゅうたんを這いまわる蛇の姿である。 南下。タイガは消え、 河が銀色に光り、その両岸は、やがてうっそうとしたシベリアのタイガになった。航空機はバイカル湖を越えて一路 九六八年七月二十七日十四時五十分、 小高い草丘が現われた。「シベリアの海」に打寄せる波のようだ。 広漠としたステップを流れ モンゴル航空の双発ターボプロップ機がイルクーツクを離れた。アンガラ

らゆる手を尽して、 らから押しかけて行っても、モンゴルと国交を結んでいない日本のアルピニストが自由に行動できるわけはない。 と一緒に登りたいという山岳会の意向を伝えてもらった。それから足かけ十年、ようやくこの希望がかなった。こち 東京外語大山岳部の監督であった小沢重男教授が一九五九年秋にモンゴルを訪れた際、モンゴルの山をモンゴル人 ひたすら「招待状」の着くのを待っていた。 あ

七月二十日横浜を離れ、いま初めて踏みしめるモンゴルの大地は、乾燥して埃っぽい。目くるめく強い日射しの中



View of Türgen I & II, and Kharkhiraa I, II & III from the top of kharkhiraa ハルヒラー V 峰から眺めたトゥルゲン I、II 峰およびハルヒラー I、II、III 峰 V (Peak Olympia). (by Tsuneo Atsuzawa)

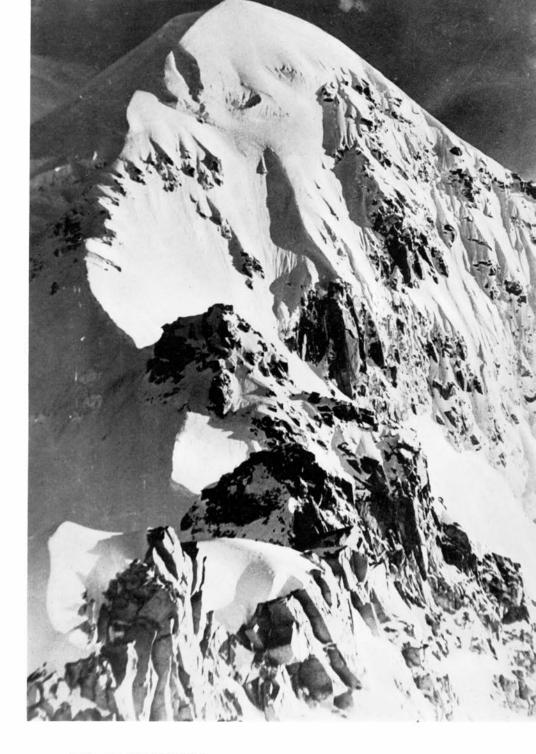


オリンピア峰 ( ハルヒラー V 峰) 北面 North-face of Peak Olympia (Kharkhiraa V). It took many hours to ascend and descend this icy wall.

(By. O. Miyake)



ツァガン・ハルヒラー山頂 Kharkhiraa II (White Peak).



日本・モンゴル友好峰東面 Eastern face of Kharkhiraa III.

形のゲル に、 パ ゴダ風の空港建物が透き通る蒼空を背に金色に輝いてい (モンゴ ル式幕舎)が点在している。 首都ウラン・ バートル る。 鮮やかな緑 は、 깯 方を草丘に囲 の草 丘が眼前に迫 まれた盆地 り、 中 0 街だっ 腹 K は白い た。 円

今回の合同登山の条件はおよそ次のようなものだった。

- モンゴ ル西部のハルヒラー山 (Kharkhiraa, 4,116 m) を登る。
- $\equiv$ 東京―ウラン・バ 1 トル間往復旅費は日本側で負担する。

#### 小 沢 重 男 (42歳) 隊 長 東京外国語大学モンゴル語科教授

日本側隊員

 $\equiv$ 

モンゴ

ル滞在中の費用

切はモンゴル側で負担する。

但し、

登山装備類は日本側が持参する。

村 田 光 郎 清 (31歳) (35歳) 副隊長 マネジャー 光文社勤務 穂高書店勤務

沢 恒 夫 32歳 装備担当 日商岩井勤務

藤

正

樹

(33歳)

装備担当

吉田工業勤務

宅 修 36歳 写真·医療担当 写真家

Ξ 田 厚 佐 JII 窪

中

勝

(26歳)

食糧担当

私立武蔵高校教諭

辻 通 男 (33歳) 通信·記録担当 中日新聞記者

モンゴル側 隊員

R 3 IJ ツ 7 37 歳 隊 長 スポーツ勲功マスター

M K ル 3 (30歳) 34歳 副隊長 スポーツマスター、体育教師 スポーツマスター、体育教師

Y·ジ

ヤンツァン

S・バートル(30歳)スポーツマスター、ウラン・ゴム市体育委員

R・ザナーバザル (2歳) スポーツマスター、映画技

R・ツェベーン (22歳) ウラン・バートル大学学生

この他、 モンゴル側から、 料理人、 馬方、 らくだ係、 スポーツ体育中央委員会のダシデンデブ氏(3歳) カメラマンも参加した。 が総隊長格として参加、 また医師、

連峰の規模を大きくしたようなものだった。 日本人はわれわれが初めてであるし、山に関する資料もない。 言葉は、 幸い、 モンゴル語かロシア語が通じるのみで、 一週間前に撮ったものだというハルヒラー連峰のフィルムを見せてもらって、この不安も薄らいだ。 隊長、 副隊長はもっぱら通訳業に追われている。 ぶっつけ本番でいささか不安がなかった訳でも アルタイに入る ない

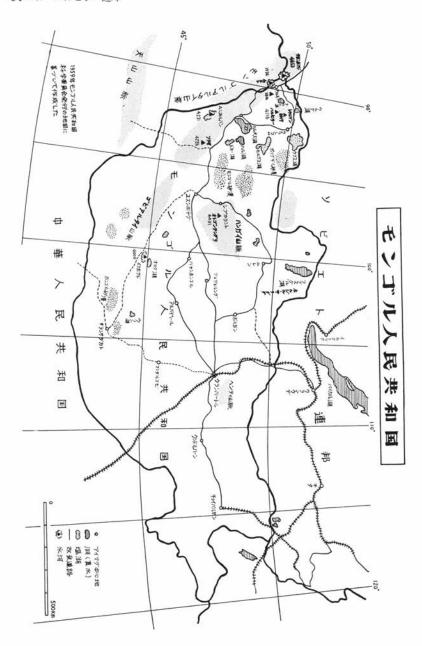
キャラバン終了。 スとトラックで四十キロ奥のタリヤラン部落まで走った。部落の人たちが徹夜で道をつくってくれたという。 七月三十一日、ウラン・バートルから一七〇〇キロ西のウラン・ゴムまで飛行機で飛ぶ。 荷物を八頭のらくだに積み、 日較差は約三十度である。 ハルヒラー河畔の台地にベース設営。 われわれは二十五頭の馬の背に乗った。 夕刻、 小雪。二十二時、 半砂漠地帯のキャラバン開始。 気温は氷点下になる。 八月一日、 特別仕 気温の変化 八月三日 この部 立のバ

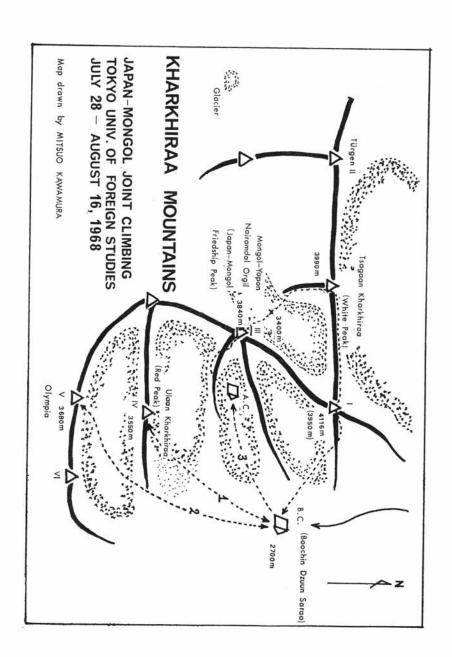
わざなのだが、 ースから眺めると、 八月四日、 快晴。 なんと往復に十一時間も掛ってしまった。 この第四峰は、 全員で第四峰に登頂。 涸沢・横尾谷出合から奥穂を望むような近さに見えて、実は透明な大気のなせる 偵察を兼ねての初登頂。 第五峰、 第六峰北面の氷壁が面白そうだ。 岩肌が赤く、 ウラン (赤) ハルヒラーと命名。べ

ザル、 八月五日、 窪田、 快晴。 ゾリック、 明日のアタックに備えて装備の点検と作戦会議。 厚沢、 ツェベーン、三宅。 主峰を狙うハルヒラー・グループは、ジャンツァン、 第五峰を狙うオリンピア・グループは、 佐藤、 ザナ F.

13

案





八月七日

ヘハルヒラー・グループ>五時十五分出発。

今日は東稜を登ることにする。

氷河は足首までの

ラ

ッセ

で行って引き返えす。

ルジ、 川村、 直下に前進キャンプをつくり、 ートル、 田中。 オリンピア・グループは北面を直登し一気にベースへ戻る。 第三峰、 第二峰、 第一峰の縦走をすることになった。 ハルヒラー グル ープは

プからザナーバザル、ジャンツァンが一歩前へ進み出て宣誓。 八月六日。 快晴 (牛乳)で乾杯し、 朝食後、ダシデンデブ総隊長の前に整列。 無事を祈る。 大らかなモーゴル人たちのこの格式ばった様子が 料理人、 馬方などの見守るなかで、 それぞれ 0 ガ ほ ル

スー

を埋めた。十六時三十分出発、登りに手こずった氷壁を下るのはさらに緊張した。 標高三六八〇メートル。感激の涙。 逃げた」と言われないように、 思った。いよいよ氷壁にアタックだ。 もしなかったほど快調なピッチで第五峰直下に着く。 高 山植物が美しい。モレーンを越え、 ヘハルヒラー・グループ>第三峰直下の氷河上に前進キャンプ設営。 三本のクレバスを越えるのに一時間以上も費してしまう。 オリンピア・グループ>七時十五分出発。 というモンゴル側の主張に負けて必死の思いだった。十五時三分、 頂上は広々とした雪原だった。 アイゼンを履き、二組に分れてザイルを結ぶ。六十度ほどの傾斜はか 氷河に入る。 ハルヒラー川沿いの道は、 氷河の照り返しが強く、手や顔がヒリヒリと痛む。 ドーム型の雪の頂は目前だ。頂上まであと二時間 左手の岩稜へ逃げたいのだがあとで「日本隊は氷壁を ケルンを積み、 北東稜に登り、 ところどころに池塘をちりばめた湿地 ~ マッチ、 ース帰着、 頂上直下約一〇〇メートル たばこ、 =+ 遂に頂上 あめ、 時四十五分 + みんなそう 時 ハーケン に出る。 なりきつ 予想

はエメラルド ンゴ 遠く雪稜に野生山羊の姿が見える。 ル友好峰と命名) グリー ンの氷河湖がいくつかみえる。 (Kharkhiraa Ⅲ, 3,840 m) 人が訪れたことのないこの山では、 到着九時十五分。 第一 峰とのあいだは深く切れ落ち、 南西遠くアルタイ山脈 浮石が多く、 雪稜は鋭 ナイフ・リッジで辛うじて の雪嶺が見え、 日本 真近かに

つながっている。 第二峰とはつながっておらず、 氷河が流れている。 ベースに帰ることを考え、 第二峰 へ登ることに

する。 か 十時三十分、 垂直にそそり立っている。われわれは南稜を登る。岩と雪のコンタクト・ラインである。雪庇を突き破って第二 二峰 へ向って氷化した傾斜のきつい雪渓を下り始める。 第二峰南面の氷壁は五〇〇メートル はあろう

十五時四十分、 第二峰を下り、第一峰へ向う。 比較的気楽な稜線散歩である。 稜線の南側は雪 庇が張り 出 北側

りなトゥルゲン第二峰は尾根続きだ。 美しいトゥルゲン主峰も近い。 峰ツァガーン・ハルヒラー(Tsagaan Kharkhiraa, 3,990 m)

の頂に出たのは、

十五時二十分。

ショートケーキのよ

て

き

は初トレースである。 は無数のクレバスが口を開けた氷の斜面である。 七時下降開始。 公称四一一六メー 北斜面をトラバース、東尾根を下り、 トルだが、 われわれの高度計は三九五〇メートルを示した。 第一峰着、 氷河に降りた。二十一時。 十七時二十五分。天候は下り気味。 主峰は第二登であるが、 小雪がちらつく。 雲が多くなっ 辺りは暗くな 西稜から

n 雪に蔽われた無数のクレバスに気は疲れたが、気が張っているせいか疲労は感じない。 ベース到着、 八日午前

時。 二十時間の行動だった。

も登りたかったが、 八月八日、 ム到着。 休養。 日程の都合で下山を余儀なくされた。九日、ベースキャンプ撤収。 ハルヒラー連峰全六峰のうち、 ウラン・バートル帰着。どこでも登頂成功で大歓迎を受け、 われわれは五峰に登り、 うち四峰は初登頂だった。 再び馬の背に乗る。 面映ゆくなるほどだった。 残る第六峰に 十一日

十三日、

最後に、モンゴルの山について触れてみたい。まず入国するためには、 招待状がないとか モンゴルの登山活動はまだ活発とはいえず、 なり難しい。 また滞在費も一日約三十ドル 未踏の山が多い。 かかり、 海抜高度は低くとも、 日本はモンゴルと国交を結んでい 山に登る場合にはさらに経費がかさむだろ 緯度が高く、 内陸に位置す

るために雪線が低く、氷河も発達している。山麓に到るキャラバンも面白く、民俗、考古、 の調査も併せて行なえば、 さらに実り多いものとなろう。 歴史、 言語、 人類学など

Bogdo, 4,000 m) の七座で、いずれも西部地方にある。 ンフ・ハイルハン山 (Mönkh Khairkhan, 4,231 m)、ソタイ山 ハルヒラー山 (Kharkhiraa, 4,116 m)、 オトゴン・テンゲル山 四〇〇〇メートルを越える山は、アルタイ山脈北端のタボン・ボクド山(Tabun Bogdo, 4,653 m) (Otgon Tenger, 4,031 m)、イフ・ボクド山 (Sutai, 4,226 m)、ツァスト山 (Tsast, 4,213 m)、 を最高に、ム

ピニズムも揺籃期を過ぎて、ようやく自分たちの力と技で登る時代に入ってきたようだ。 こはドロミテのような岩山で岩壁には不足しない。またモンゴル・アルピニズム育ての親ハルタル (4歳) からの私信 トと一緒にモンゴル人が登頂した。また一九六七年五月には、モンゴル人七名、チェコ人五名が、 によれば、 ホ ルジル・サリダグ山塊 タボン・ボクド山は一九五九年ソ連人と、秀峰トゥルゲン山 九六九年夏、 (Khordil Sardag, 3,189 m) で一○○○メートルに及ぶ岩壁の登攀に成功したという。こ 彼はモンゴル女性登山家を引き連れ、 (Türgen I, 3,917 m) オトゴン・テンゲル山に登頂した。 は一九六一年東独アルピニス バイカル湖に近 モンゴルのアル

(川村光郎・記)

# ワハン・イスムルグ谷左俣

二六三九二メートル峰登頂

広島大学医学部山岳会

#### は L が き

から登頂した。 あったワハンに入り、イスムルグ谷左俣を遡ってその源頭にある六三九二メートル峰 (J. Wala の山座番号三五四)に北面 九六九年夏、広島大学医学部山岳会 (Medical Alpine Club of Hiroshima 略称 MACH) の四人の隊員で念願で

この山はその前年に、ハンドード谷をつめたオーストリア隊が南面から初登していたが、私たちはこの事を帰国後(#1)

吉沢一郎氏から伺って知った。

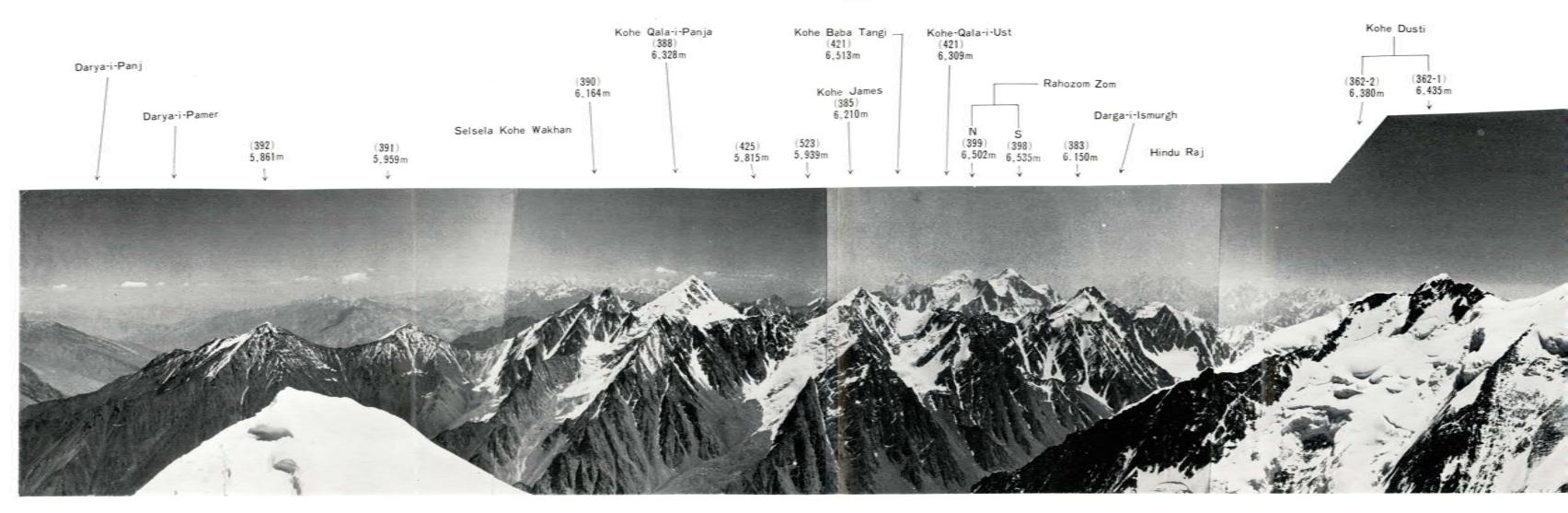
内地を出発する時、私たち四名は広島大学からアフガニスタンへ派遣された学術調査隊の医学班であった。 ワハンでの調査は許可がとれず、登山活動のみ認められたので、全員が MACH 会員である医学班は、現地で登

しか

6,392m峰と登頂ルート Peak 6,392m and its climbing route



#### E

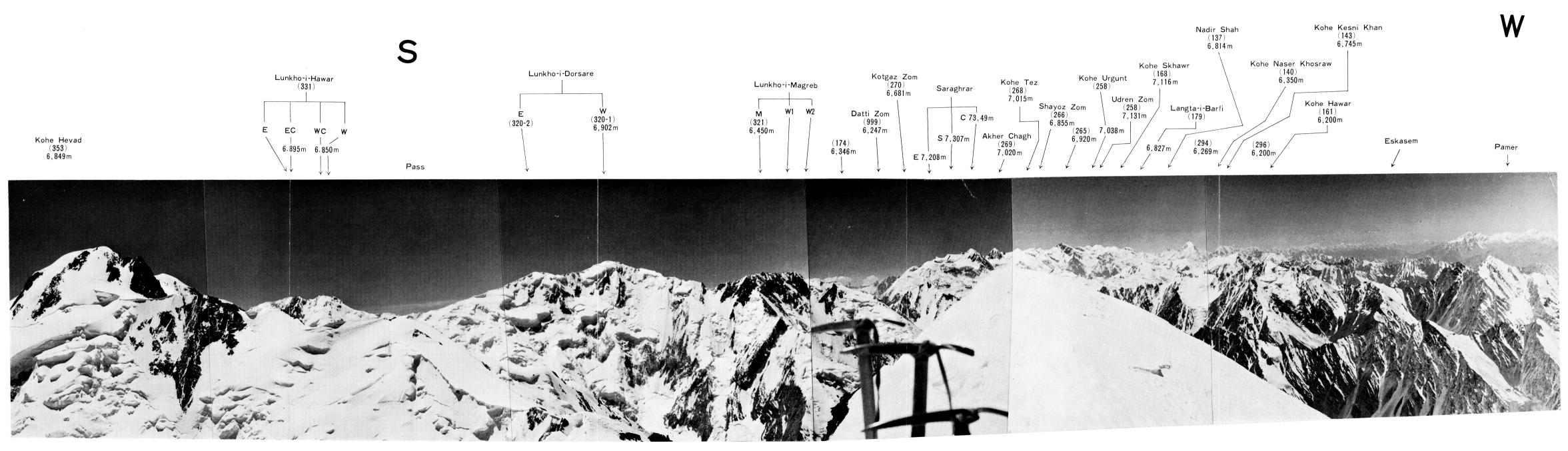


A Panorama taken from the summit of Peak 6392m (1)

6392m峰頂上よりの展望写真(その1)

(By G. Hirai).

(Ref.) Source of name, num



A Panorama taken from the summit of Peak 6392m (2)

6392m峰頂上よりの展望写真(その2)

(By G. Hirai)

[Ref.] Source of name, number and height (m) of peaks: J. Wala and I. Yoshizawa

		*	

をとる事になった。 山隊に改編し、 中部高原地帯へ学術調査行する他の二班の隊 (広島大学中部アフガニスタン学術調査隊、 略称 HUSE) と別行動

ド君 館各位、在留邦人の方々に大変お世話になっている。ここに明記して心からの謝意を表させて頂きたい。(平位剛 に関しては渡辺兵力氏と島澄夫氏 私たちがワハンで登山が出来たのは、 (当時の内務大臣の甥) 氏(クンズーツ在住) の活躍によるものであり、 の御尽力の賜物である。 (東大OB) 知遇を得たアフガニスタン国の高官の御高慮と準隊員として参加したサマ にいろいろと御指導と御助力を頂き、 ビザ取得に際しては牧内恭人氏と佐藤勝孝氏 これが得られたのは高田善雄氏 アフガニスタン滞在中は日本大使 (兼松江商カーブル駐在所長、 (外務省)に、 当時) 遠征準備 と橋 記

## カーブルからイスムルグまで

備のため二泊 可 と一緒にアパートで自炊生活をしたが、環境、 に随行してパーグマン連峰調査に出かけたりして多忙であった。七月十四日にこの町を発つまで、 と接触を重ねた。 の申 六月 七月十四日、 請を始めた。平位はこの間パキスタンに引返えし、 H カラチ着。 トラックで装備と共にクンズーツに向かう。 私はワルダック家(サマード君一家)の健康診断や、 七日に カー ブル に到着。 特に食生活の馴化に非常に役立ち、 十九日に後発の 次回遠征に備えて西部カラコルム入域に関 ここで、 HUSE 衛生局の依頼で東根正美氏 食糧購入やファイザバードまでのトラッ 隊長伊東教授らと合流し、各々国内旅行許 罹病者は皆無であった。 (現地指導のため滞在中) 私達は して同国の要人 HUSE クの 隊 進

七月十六日、タルカンで一泊。

V 光が、 七月十七日、 静寂の暗闇に二つ三つ揺らいでいた。 ファイザバード到着は夜。 もうバザー ルは閉まっていて人影もまばらで、 軒先に吊されたランプの淡

日前からの氷河融けの増水で道が河中に没しているのだそうだ。そこからハンドードまでの乗継ぎトラックをバダク 行間、 車でゼバック付近から先には行けないという。その近辺では道が河床についている所が多いので、 の命令で副司令官が手配してくれる事になり、 (78.)

十一日の朝この古い町を後にした。 シャン州のワリイ (長官) に頼んだところ、 その夜は国境の町イシュカシムの台地で幕営。アム・ダリアをはさんで、 コマンダン (警察司令官)

七月二十二日、 ル対岸 のソ連領にある家屋には電灯がついていた。 幕営した台地から少し下ると西下する黄濁のアム・ダリアの左岸に出る。 そこから右に折れ河に沿

物石のような石が埋まっていたりして、 ジといわれている。東進するにつれて、 ない狭いところもあり、 って東に向かう。 三十分ほどで樹々に囲まれたカジ・デーを過ぎる。 そこでは濁流が渦をまいて奔流している。この辺りから河の呼び名が変わってダリア・パン トラックは遅々として進まない。通れる所が道といった場所が多いのだから 流れは広くゆったりしてくる。 国境をなすこの河の幅は数十メー 河原も展けてくるが、一 面砂地だったり、 にも足ら

トル

アプリコットやポプラが立っている しぶきを浴びせてダリア・パンジに注いでいく。 谷の入口には泥と石の家が二つ三つ並び、それを囲むように数本の

こんだ谷があり、 仕方がない。右手

奥には氷雪を纒った急峻な岩の稜線が望まれ、

谷からは灰濁の激流が道を通り越し、トラックに水

そのところどころに切れ

(南側)にはすぐ近くまで泥ともろい岩の禿山が張り出して続いている。

右手の山は少し後退し、 ギシを過ぎる頃から、 道はでこぼこながらしっかりして来た。 緑の部分が広くなり、羊の放牧も見られ、 トラックのスピードは毎時二十キロ 路傍に植樹されているところもある。 位 K Ŀ 豆が 加 0 混

幅の急な流れの谷があり、 夕方の七時すぎ、 カジ・デーを過ぎてから初めて大きな部落についた。 その石橋を渡るとトラックは停まった。 荷台から土石川と八幡が「ハンドードだ」と声を 十軒たらずの軒並 みのはずれ に数メートル

じっている麦畠が多く目につきだした。

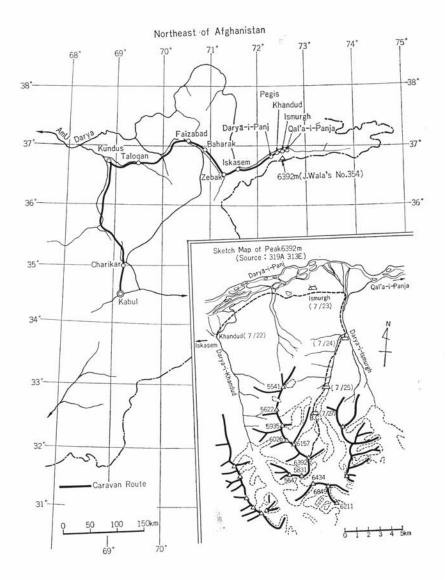
ターを選んで我々を援けてくれ、 地に来るとこうなのだから気を許せない。 我々は山を伝ってカレイ・パンジャまで行かねばならない。冗談じゃない。許可をちゃんと取っていても、 キル というのが我々の考え方である。だがポリスの方は、許可になった順番通りに行動しろ、 から南側のエリアで東端はカレイ・パンジャ、となっているから、 の検問である。 あげて飛び降りた。 (国会議員) れで大変だっただろう。それでも元気に「これよりパミール」と記してある道標の傍にテントを張り出 ――どうぞ行かれて構いません――という結果で片が付いた。 彼は、 宅を訪問。 全身灰を被ったように砂塵だらけで、 イスムルグ谷に入ってはいけない、と云い出した。 夜遅くポリス隊長がやって来て許可区域についてもめだした。イシュカシムを出て初めて わざわざ途中まで見送りに来てくれた。 しかしポリスにサマード君の素姓が解った途端、「シュモ、 マスクをあてていた口元と眼だけが異様に光っている。 その区域ならどこから入っても良いじゃない あくる朝、 われわれに許可された範囲は、 (杉村功 このポリスは村人たちからポ 記 と主張している。 U それ 1 した。 なら ワ 埃

## イスムルグ谷左俣

頂きが垣間 定めをしているのだ。 七月二十四日、朝早くからイスムルグの村人が二十人ほど集まってガヤガヤとやり出した。今日から担ぐ荷物の品 スムルグ谷の入口は広い。 見えた。 目標の山か? と心がはずむ。左俣と本谷との出合いで左俣を渡渉してその右岸沿いに登ってい 彼等は私たちが昨日雇ったハンドードのポーター達を追いかえしたのだ。 一キロはあるだろう。少し遡っていくと、左俣の奥深く、 高いモレーン越しに氷雪の

で飲めない < 左俣は幅数メートルの小さい谷だが灰濁の激流である。今日は八幡の誕生日。 ビールで乾杯。 但し彼だけが

七月二十五日、 朝早く渡渉して左岸に出る。 やがて圏谷は大きく展け幅は一キロ以上にもなる。 しばらく進むと古



C ませる。ここをプレBCとし、 VI 地点を偵察 明によるとチェ 放牧地に出 た。 ポ コ隊のBC跡だとの事。 ーターたちは、 四人の特選ポーターと一人の炊事番を残して他をかえした。 チェコ隊のときはここまでであったからもう帰る、とごねだした。(誰と) 彼の説得が効いて、 圏谷の奥にある古いモレーンの末端の下の草地 あくる日は隊員四名でB サ マード君

Cらしくなって来た。 雪がサラサラと当る音を聞く。二十八日の朝全員がBCに揃う。 六三九二メートル 七月二十七日、八幡と私が先行し、モレーンの台地にベース・キャンプ(BC) を作る。標高は四五 峰の白い北面に面 杉村が心電図検査などをしてくれる。 Ļ ヘワラの北面もその左手に望まれるところである。夕方、 全員快調との診断 特選ポーターをかえす。三張りのテントが並ぶとB ツェ 五〇メートル。 ルトザックに

幡 る。 にして各キャンプにプロパンガスレンジを一本宛配備、 4上部でビバークが追加されただけで計画通りに進んだ。三十日はC2下部まで荷揚げ。 方針がとられた。 決まった。雪崩カールとよんだ中央の斜面は、 ないとの事。 七月二十九日、 土石川) 登頂ルートは、 に決まる。 我々に許されたワハン滞在期間は僅か二週間しかない。ここから見える北面から登ろう、 杉村の連日の双眼鏡観察に基づき、C2、C3、C4の位置と日程が決められ 両ドクターと八幡が南面からのルートを偵察。 これをさけて北東稜に沿って東北稜との出合いまで進み、そこから雪の稜線伝いに登る、 C2から上のキャンプはツェ 朝夕の区別なく大きな雪煙をたててはズシン、ドンと音を轟かせてい ル ということになる。 トザ ック、 時間的にも無理のようだし、 高所服 ウレタンマットレ (土石川勝司 登頂要員は三人 記 スの 余り面白いところでは た 軽装。 後日、 ということに 燃料は充分 (平位、八 とい

## 六三九二メートル峰登頂

七月三十一日、 昨夜からちらついていた雪も止み、 北面中腹を包んでいたガスも散り出した。 貝殻氷河の手前のモ

レーンの凹みにC1を設営。三人とも大食多飲し早くから眠る。

らは三人だけで行動しなければならない。標高五〇〇〇メートルのクレバスにC2を作る。背負子利用の安楽椅子は BCからやって来た炊事番の男を連れ貝殻氷河の上部まで荷揚げ。 男はそのままBCにかえし、

快適だ。

3とする。 立たない。 八月二日、 四十メートルの固定ザイルを張り通過する。午後三時過ぎ、五二八〇メートル地点の小さな雪の台地をC C2上部百メートル位の所で蒼氷の斜面をトラバースする。氷は非常に硬く平型ハーケンは曲って役に

雪崩の見物が出来る。各人ザイルで確保し、流動食の夕飯を摂る。 急な氷壁もあっ 八月三日、朝日が当たるまでは扯先が痛くて仕方がなかった。その後は快調で小さなクレバスや四十メー たが、 五百メートルの高度差を登ってC4に着いた。 ここは雪崩カールの近くの岩場なので頻発する トル位の

出る。 位と二人で食糧係りの土石川を責めあげた。ビバーク地点は北東稜と東北稜との出合に当り、 頂上とは反対方向の東側にある肩の岩場でビバークすることにする。眠い。とに角眠い。それに猛烈に腹が空く。平 ル。東方の山が良く見える。 八月四日、 誰とはなしに胸あたりまで落ち込む。ここで思わぬ時間をとられ、頂上は見えなくなったし、ということで、 氷雪の急斜面を過ぎて一安心していると、小さいけれどもヒドン・クレバスがあちこちにあるところに BCは小さくて見えない。夜になって杉村が毎晩つけてくれるガスランプでその位置が 標高は六二四〇メート

ゆるくなったところに出た。その十メートルほど前方(西)は落ち込んでいる。それを追ってみると右方に向かって 八月五日、 五時、 歩登る。 東にある山の稜線から太陽が顔を出した、それっとばかり出発する。 アイゼンは気持良く効いている。 あの高まりこそ頂上、 と思って通り過ぎること数回 狭い雪の稜線をアンザイレ 勾配が

解る。ザイルでしっかり確保して眠る。

が、その右にはルンコーが、遠く南西にはコー・イ・テズやウルゲントが望まれる。パミールの空は抜けるように蒼 てピッケルを雪面に刺し込む。四囲の眺望は素晴らしい。 さがっている。頂上だ。 しかしどこが最高点か解らない。この十メートル位の長さの雪の稜線を往復する。三人揃っ 東方には ババタンギ が望見され、 南方すぐ前にはヘワラ

かった。(八幡 浩 記

広島大学医学部山岳会小パミール遠征隊のメンバーは次のとおり。

平 位 剛 (38歳)

隊

長

村

功 (33歳)

杉

土石川 勝 司 (22歳)

浩 (22歳)

幡

準隊員 サマード・サーダート (21歳)

(註2) 一九六八年八月十八日、ハンドード谷から南面ルートより初登 (Grimmlinger 他二名)。 一九六五年夏、イスムルグ谷左俣を偵察後、本谷に転進しヘワラなどに初登(隊長 Vladimir Sedivy)。

### 冬季アイガー北壁直登 同下降 (一九七〇年)

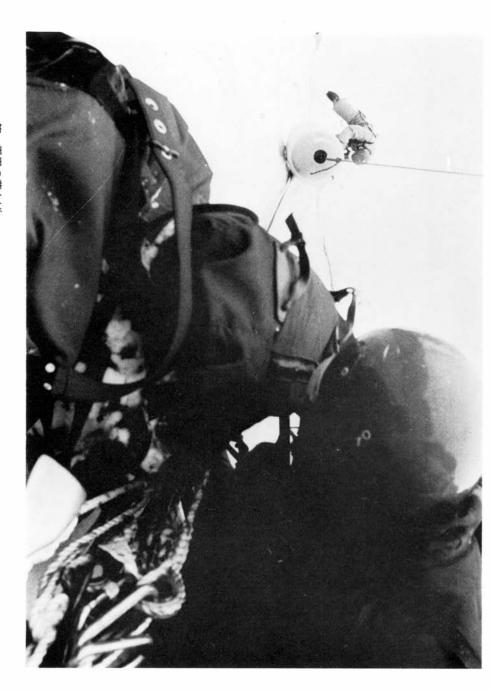
羽

勝

の激闘の末、アタック・メンバー全員が無事登攀に成功し、同ルートを下降することができた。 九七〇年二月七日~三月二十日までの四十三日間、陽光をあびることのない寒気と風雪の苛酷なアイガー北壁と

差一八○○メートルのこの巨大な岩壁は、マッターホルン北壁、グランドジョラス北壁と並びアルプス三大北壁の一 は、これまでに多くのアルピニストの人命を奪い、アイガー北壁の登攀史は文字どおり、山と人との血みどろの歴史 りつめた氷でおおわれ、水の浸蝕作用で風化した岩肌、常に厚い霧のベールをまとうか雲に包まれている陰険な岩壁 つに数えられ、アルプス最大にして最悪の岩壁として知られている。石灰岩のドス黒い岩あるいはガラスのように張 "アイガー北壁"、スイス・ベルナーオーバーランド山群の雄峰アイガー(三九七五メートル)の北面に落ちこむ高度

の四名のアルピニストによって四日間の激闘の末初登攀され、その後アイガー北壁は次々と優秀なアルピニストによ って完登されるようになり、次に、より危険でより困難な冬季登攀の時代となった。一九六一年三月十二日、ドイツ 一九三八年夏、ドイツ人のA・ヘックマイヤー、L・フォルク、オーストリア人のF・カスパレク、H・ハーラー でもある。

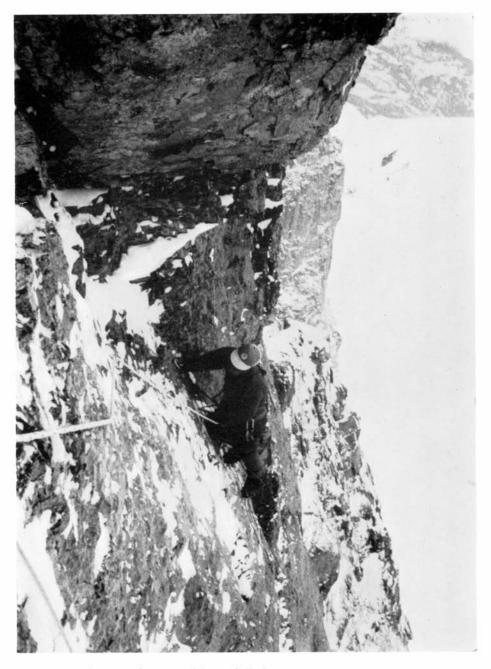


第一雪田の荷上げ Carrying the Lui

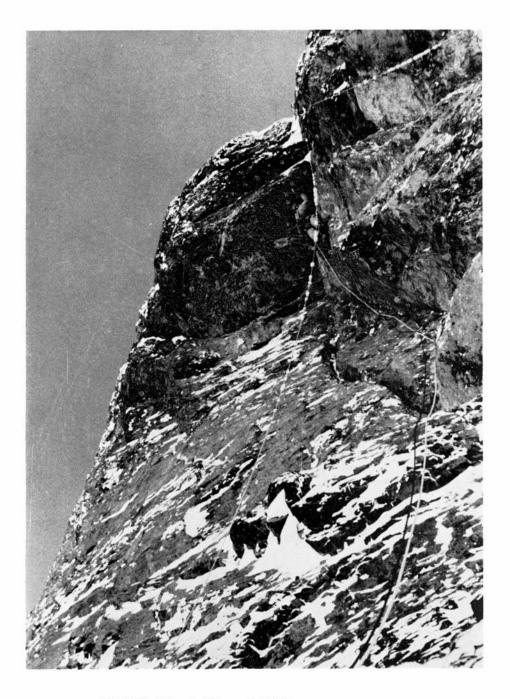
Carrying the Luggages on "the 1st Snow Field", Eiger north Face



第二雪田から死のビバークへ Climbing the snowy face between "the 2nd Snow Field" and "Bivouac to death"



セントラル・ピラー レイトン・トラバース "Layton Traverse" of the Central Pillar



セントラルピラー上部フェースの登攀 Climbing the upper rock face of the "Central Pillar"

小川

羽 0

八

名である

基本となるものは、

①岩壁部

氷壁部のアイゼンによる登攀技術、

②体力增強、

3

)耐寒、

④下降技術、

⑤重荷を

背負

登ル

1

諸

K

0

困難度を分析した上で一

九六八年、

六九年のト

v 1

=

ング計

画が作成された。

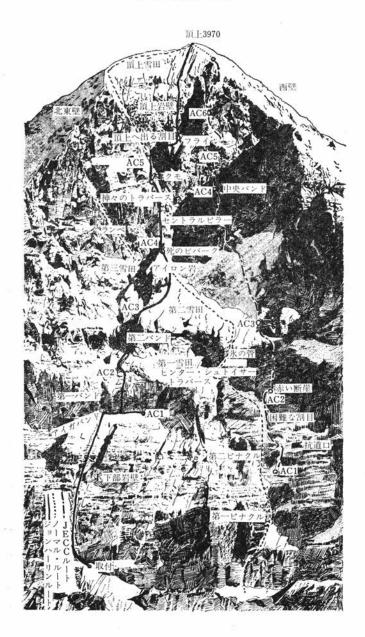
1

グ

0

英・ 過 ぶ風雪と寒気と岩と氷の世界での登攀、 4 0 げられた。 たたないこの直登ル 0 人のT・ 1 言では アルピニズム を投入してかちとっ 拓 米・独合同 ホ は、 ル ン北壁 あるま ヒーベラー、 これ その後相次いでマッターホルン北壁、 までの 隊による冬季アイガー北壁直登ルート初登攀がなされた。 直 0 追 登 1 ル 求は冬季の三大北壁完登で終了したかに思われた。 T アルプスにおけるどの大登攀よりも苛酷かつ激烈きわまりない 1 は、 た偉大なる登攀である。 1 单 丰 現在開拓されているバリエ 独登攀によってアルピニズムが最終的な線まで押し進められると、 ンスホファー、 六〇〇本のハーケン、 A・マンハル グランドジョ どんな卓越したアルピニストであっても個人の力ではとうて ーショ 1 W ン ・ ラス北壁 五〇〇メートルの固定ザイル、 . アル ル 1 ところがその後、 ムベ 0 このアイガー北壁における冬季直登 冬季登攀 の中でも世界最悪ル ル ガー が行 0 闘 四名によって冬季登攀 V なわ W であっ • れ ボナッテ 1 十三名も た。 1 ア 0 九六六年三月に ル プ 一つとい カ イの冬季 スの大岩 月 0 ア が成 に っても ル ル ピニ 歯 壁で しと 1 な よ 1 は " から

ドジ と将来のヒ 進 隊員は山 T 信之、 めた。 イガ " 3 ラ 4 ス北壁を攻撃する計 ·北壁直 学同志会会員で編成され、 7 水 ラヤ鉄の時代への突入を考え、 ル 勝の ン北壁 登 ル 第 1 四 1 登 の登攀を計 画であったが、 (日本人として初の完登) メンバ 画したのは今から三年 ーは小西政継、 この二つのパ 登攀目標をアイガー北壁直登ルートに変え、 に成功して以来、 ーティー 遠藤二 前の一 郎 を一つにし、 九六七年だっ 星 一九六九年を目標にアイガー北 野隆男、 更につっこんだアル た。 深田良 小西、 七〇年冬を目標に , 遠 嶋村幸雄 藤 星 E 野 = 0 ズ 壁、 高 一先輩 計 4 画を グラン 0 追 が 求 久



登 П

同

ル

1

1

を下降出来ない場合に西壁を下降することも考慮し、

西壁から

頂上に向

かっ

たが、

想像以上

0

また

何回かの基部への荷揚げの後、

にのろいながら荷揚げに専念した。

十二月二十四日、

待ちに待っ

た一トンの荷物がわたし達の手元に到着し、

翌日から少しでも遅れを取り戻そうと精

つであり、 T のユ 7 これらの各要素をトレー 1 ル 登攀技術、 ⑥人工登攀技術、 ニング山行にもりこみ、 の高所における体力順 厳冬の穂高、 心心、 8チームワーク、 谷川岳、 後立山で二年間にわたってきび 9日常 1 1 ニング、 0 九

0 計 画 が最終段階に入った一九六九年七月、 プランナーであった小西が日本山岳会のエベ V スト 南壁隊 0 員に

V

トレーニングがくりかえされた。

選ばれ隊列 から離れたが、 アイガー北壁直登計画はそのままおし進めら れた。

九六九年十一月十九日、 北壁攻撃の基地クライネシャイデッ クに立ち、 夕暮の中 に黒く圧倒的な迫力で聳立 して

VI

るアイガー

北壁をわたしは凝視していた。

デッ やる気持をおさえていた。 1 1 当 クに到着以 の港湾ストの 初わたし 達の 来荷物待ち 計 ため途中でストップしてしまい、 画では この期間を利用して北壁攻撃のミーティングが繰りかえされ、 0 十二月より北壁を登攀する予定であっ 日が続き、 毎日何をすることもなく、 計画は予定のつかないまま遅れてしまった。 たが、 ただ青空を背に聳立するアイガ 日本から九月下旬に送っ 登攀方法が分析された。 十一月十九日シ た登攀資材 を仰ぎ見ては + ル は 七 1

五キ 事は苦し 力的に行動を開始した。 H の重さに梱包された荷物をアイガーグレッチャー駅から雪洞まで北壁基部をトラバースして一日二往復する仕 かっつ たが、 これ 二日後には北壁基部に雪洞を掘り、 から北壁 アタック が開始されると思うと楽しかっ 八〇〇キロの登攀資材の荷揚げが始まった。 た。 今度はトレーニングと偵察を兼 しかし日がたつにつれきびしさが増 一つづつ十 ね

0 ため二度とも頂上へ達することが出来ず、 ートファインディングのむずかしさをいやというほど味わされ、 アイガーのきびしさ、 非情さを北壁に取り付く前に身をもって体験する また天候が悪化し、 唸りを生じた風雪

に取付いたら登攀終了までシャイデックに帰らない予定なので、親しくなったホテルの人々が口々にわたし達 二月に入ると天候は本格的に悪化し、連日激しい風雪の日が続き、 チュ 1 リッヒ空港に予報を問い合わせても長期の晴天は望めず、 登山電車も運転を中止することがたびたびであ やむなく二月七日にアタックを開始する。 一行の

健康と無事を祈ってくれた。

中にいるわたし達に始終暖い声を送り、 登攀中のわたし達の行動を町の人々や報道関係者に誤解されないよう、クライネシャイデックのBCに同じ会の会員 の一人を日本から同行し、 れる長さ十二メートル、横二メートルの大きな雪洞と、 ら信じられない現象が起った。 れ の人間そのものだった。 とができるかとうんざりしてしまう。 苦労した。 バンドの登攀はより一層きびしいものになった。 た。以前に張った固定ザイルは荒天が続いたために北壁上部からの泡雪崩で完全に埋まってしまい、掘り出すのに 登って基部に達した。そこから固定ザイルを使用し、第一バンド基部の雪壁を利用して設営したAC1の雪洞に入っ 雪崩の危険を避けるため、北壁基部のトラバースをやめアルピグレンとザルツエックの中間から裾をダイレクトに 烈風は 入山以来天候は荒れ狂い、 いよいよ激しさを加え、 下で確保しながらトップのいも虫のような登攀を見ていると、いつになったらこの北壁を登りきるこ 地獄のように荒れくるう北壁で、 自分達の遭遇するすべての問題をトランシーバーで彼に伝えた。彼の方では苛酷な北壁 連日の悪天候のため、 急峻な岩壁を落下する泡雪崩が吹き上げる風で逆に上へ上へと消えてしまうとい 激しく容赦なく吹きつける烈風と岩壁を伝い落ちる泡雪崩のため、 岩壁基部では烈しい風が猛烈に雪煙を吹き上げ息もできない。 何の手がかりもない垂直の岩壁で一日二〇~三〇メート BCとの交信でトランシーバーから流れる音楽だった。 日の行動を終えてAC1の雪洞へ帰るわたし達の姿は氷 わたし達の楽しみは、激しい風雪からわたし達を守ってく 日がたつにつ 垂直の第 ルの高度し

元気づけてくれた。

一内に

V

るの

を忘れてしまうほどだった。

かつて何人かの北壁登攀者が雪崩と落石の恐怖から

「クモ」

を地獄

の底に

冬季アイガー北壁直登, 同下降 (1970年) リカ バー だ舌をまくばかりで、 信じられ ラル K なのだろう。 っている。 は こを五日 AC4へと移動し、 月二日にそれぞれ 荒天の連続で停滞の日が多くなる。 ボ て眠れぬ日もたびたびあった。 に帰り休養することにする。そこで深田、 カン 頭からは P "岩登りの職人" 隊 だ ・ピラー」から頂上までのアタックが開始される。 スをしているわたし達に容赦なく吹きつける。第二バンドの登攀に五日、 0 ガリーを登り、 の隊長ジョ ぬほどの早さとうまさで登ったピッチであるが、 カン ピラー頭に達すると、 5 二〇〇メートルの垂壁が続く第一バンドを突破し、 六六年の米 八〇キロを越す大男が三〇キロの荷物を背負い、 六日間 垂 直の 連続だったそれまでの登攀からい 旦下山し、二、三日休養した上で北壁に戻ってくる。そして三月五日から本格的に上部 とよばれるアメリカのレイトン・コーアがドイツのカール・ゴリコフと初のパーティーを組 寒さも一段と厳しさを増し、 かけて登りきり、 ハーリンがザイルの切断で墜死した現場なのだろう。それにしても彼らは何と度胸 自分達の技術が恥かしかった」と後で言っている。レイトン・コーアはバケモノだ! 第二バンドに出る険しい氷壁のトラバースとなる。 ・英・独合同隊の固定ザイルが氷漬けになり垂れ下がっている。 この直登ルートのキーポイントは何といっても「セントラル・ピラー」であるが、 上部のハングから氷漬けの八ミリザイルが右、左に垂れ下がっている。 悪天候続きと湿気の多い雪洞の生活で全員風邪気味となり、 「クモ」の右足末端から「クモの雪田」に達した。この「セントラル・ピラー」 小川が二十日に、 雪洞内でいくらコンロをたいても周囲 っきに傾斜六○度の氷田に出たときには 雪洞も今では第二バンド頭のAC3から「死のビバ ここをトップで登った深田は 続いて遠藤、 七し八ミリのザイルにぶら下がるのだから。 氷田と変した第一 第三雪田から吹き下ろす烈風 三羽が二十五日に、最後に星野、 第二雪田から死のビバークまで八日 雪田に飛び出した。 の氷 そこからル 「彼らの優秀な登攀技術にた の壁は全然とけず、 あ 交代でシャイデッ まり 1 上部 0 は右 は困難なト たぶんアメ 0 の第 「クモ」 寂 嶋村が 側 とも言 0

0

ボ

ラ D

男達

は

走るアレートの末端にAC5を設営、雪が少なく、雪洞を掘ることが出来ないため氷田を砕いてツェルトを張る。 いるようだと表現しているが、 冬季のせいだろうか、わたしにはとても信じられない。 十一日、「クモ」の中央部 さ (90)

らに「クモ」の氷田を上部まで登り、モロいボロボロの壁を右斜め上にトラバースしてフライの雪田に達する。

にAC6を設営、頂上への最後のビバーク地とする。

志気は大いに盛り上がった。しかしこの頃より予定外に登攀が長びいたために食料制限がしかれ、 「セントラル・ピラー」アタックの頃より天侯は次第に回復し、 の他は登攀資材、食糧の荷揚げに努め、激しい肉体の酷使に全員は疲労ぎみであるが、頂上岩壁に達したことで 夜はジフィーズ一個という毎日となり、激しい肉体の酷使とくらべると何ともおそまつな食事だった。 連日好天の日が続く。 そこで、アタック・パ 朝はラーメン二個

やみが周囲をつつみ始めていたが、先行パーティーはなおも登攀を続け、雪田を三ピッチ登って大きな岩にボルトを ら右にトラバースし、小さなクラックにそって直上、上部の大ハングを乗っ越した上で左に三〇メートルトラバ このチムニーを登ってトラバース・バンドに出たが、 して英・米・独合同隊ルートと合流した。頂上岩壁をアタック以来五日目にわたし達は頂上雪田に達した。すでに夕 頂上岩壁はわたし達を圧倒するようにそそり立ち、左手に大きなチムニーが切れこんでいる。英・米・独合同隊 ザイルを固定した。 頂上まではあと一ピッチ、目の前には頂上への雪稜がよく見える。 わたし達はこのチムニーを登攀不可能と判断し、三ピッチ目か 明日全員で頂上に立つ ース

スタント・ラーメン二個を分けて食べ、ツェ 楽しいものだった。 ことを心の中に描き、AC6とAC5のビバーク・サイトに引きかえす。その夜のBCとの交信はいつになく明るい 寒気と烈風のために眠ることが出来ず、食料は完全に底をついていまや食いのばすことも出来ない。 この荒天は二、三日続くという予報がでているとのことで、 しかし夜中からアイガーは拒絶反応を示しだした。 ルトの外に飛び出す。 物凄い風雪が顔面にたたきつけ、 朝になると風雪は一段と激しく荒れ狂ってい 頂上へのアタックを決行する。 飛ばされないよ

V

to

5

ないので固定ザイル

0

回収は思うようにはかどらない。

夕刻ようやく AC6とAC5のビバークサイト

に到着。

ジフィーズー

個を三人で食べ明

日

0

活 力とし 腹とあまりに激し

V

肉

体の酷使、

その上烈風ときびしい寒気の中での下降は非常に危険なものである。

せっかくはずしても岩の突起に引っか

かってしまうことも

風

雪で声

通

風雪の中を一人、また一人と順々にザイルを伝い視界から消えていく。

アイガー

が最後の抵抗をこころみているようだ

目だけが喜びを表現している。

三十分間頂上にいて下降を開始する。

員が無事立つことが出来た。

顔は氷漬けで、

お互いに握手をかわすが顔は動かない。

十二時

五〇分、

烈風が咆哮し、

荒

九

狂う頂上に全

かす。

最

後 頂

側

から

吹きつける

烈風は唸りを生じ 雪煙をまいて襲いかかる。

氷壁を乗っ越すと、

上雪田に出ると地吹雪がひどく前を向いて進むことが出来ない。

眼前に先行した三人の姿が飛び込んできた。

り付き、

この

ため

12

2

7 1

ル

の歯に氷が付着するので五メートル登るごとにナイフで歯の氷を落さねばなら

ザイルにしがみつき必死にユマールを動

AC6の三名も三十分前に頂上へ向け出発したようだ。

固定ザイルにはベルグラが

張

うに固定ザイルにしがみつく。

具はふくれ上がり、 た。 度々ある。 あ おり立っ っていた。 74 下降四日目、 十三日 翌日になっても風雪はおさまらず、 た は 実に長かった。 昨 日 北壁アタックを開始して以来四十三日目に全ての資材を回収し、 までの 下降をより一層困難にした。風雪で声が通らないので上と下とで罵声を浴びせ、 荒天が嘘のように空は晴れ しかし、 終ったのだ。 相変らずきびしい下降が続いた。 全員が無事登攀に成功し、 わ たり、 青空の中に北壁が聳立している 下降が進むにつれ回収したザ 下降することも出来た。 太陽の光を全身にあびて北壁 相手をのの 1 ル と登攀用 0

裾

たの だ。 4 N なの 顔 は解放感に満ちあふれ、 長かった北壁生活を象徴するかのように黒々としたひげが長くのび 全員が無事 だ

### 行 動 日 誌

九六九年十一月十九日 クライネシャイデック、バンホフホテルに到着。

十二月二十四日 マルセイユの港湾ストで陸揚げ出来なかった荷物がクライネシャイデックに到着。

二十六日 偵察を兼ね、岩壁基部に中間デポの雪洞を掘る。

九七〇年一月一日

登攀資材の荷揚げ。

二十七日~二十九日 アイガーグレッチャー駅より北壁基部をトラバースし、 中間デポの雪洞に登攀資材を荷揚げ。

三日~五日 星野、嶋村、三羽、赤松、西壁より偵察、 荷揚げを兼ね頂上へ向かうが天侯悪化のため三五〇〇メート

ル付近までで下山。深田、小川は下部岩壁登攀、三ピッチ、一八〇メートル登る。

十三日~十五日 七日~九日 八名で西壁より再度頂上へ向かうが、天侯悪化のため三七二〇メートル付近に荷物をデポして下山 下部岩壁より第一バンド基部まで登り、固定ザイルをフィックスして下山

十八日~二十四日 中間デポの荷物をAC1の雪洞に荷揚げ、第一バンド基部(アイガーバンド窓)より右へ一三〇

二月一日 アルピグレン、ザルツエックの中間より北壁基部へダイレクトに登り、下部岩壁内の雪洞に入る。

二日 AC1に荷揚げ。

メートル付近にAC1を設営。

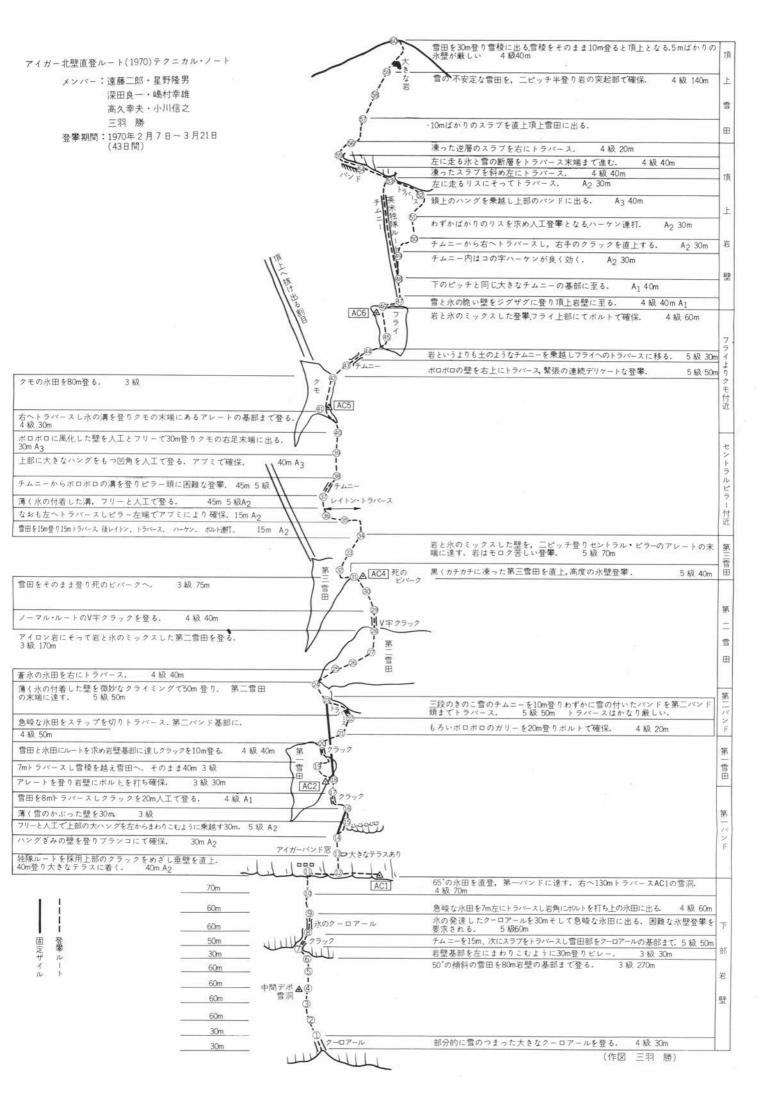
風雪激しく停滞

四日 深田、小川第一バンドを一〇メートル登る。

七日 五日 天侯悪化のため下山、シャイデックに戻る。

再度アタック、深田、小川第一バンドを十五メートル登る。

他の隊員は荷揚げとAC1の雪洞整備



¥

十九日 十八日

三羽、

八日 風雪激しく停滞

十月 九日 前日と同じ。 風雪激しくアタック不可能、 AC1へ荷揚げ。

十一日 終日荒天、

午前中登攀を開始するが、午後より天侯悪化し行動中止する。 八メートル登り、 テラスに着く。

十三日 久しぶりに晴れ、 小川ハングぎみの壁を三〇メートル登る。

十四日

深田、

小川、

第一バンド上部の大ハングをまわりこむように乗っ越し、

ハングの上に出る。

本日三〇メート

ル 登る。

十五日 第一バンド上部より第一雪田に出る (七十五メートル)。

十七日 十六日 三羽 嶋村、 三羽、 嶋村、 第一雪田より第二バンド基部に到着(一一〇メートル)。

第二バンド頭へ三〇メートルトラバース。

風雪激しく停滞。 嶋村、第二バンド頭ヘトラバースし、 第二雪田への薄く氷の付着した氷壁を二〇メートル登る。

二十月 休養のためシャイデックに帰る。 嶋村、 三羽、AC2のビバーク地点から登攀開始し、 第二雪田末端に達す(三〇メートル)。深田、小川、

二十一日 風雪激しく停滞。

二十二日

同じく停滞

二十四日 一十三日 AC3へ荷揚げを兼ね向からが風雪のためAC1に戻る。 荒天のため登攀できず、 荷揚げ。 第二バンド頭にドイツ隊の水晶 0 サロンを見付け、 AC3として整備

二十五日 小川、 シャイデックから北壁に戻り、遠藤、三羽、シャイデックに帰る。

二十六日 星野、 嶋村、小川、AC1から荷揚げをしAC3に進む。

二十七日 第二雪田よりノーマル・ルートのⅤ字クラックの岩壁一○○メートル登る(この日二二○メートル)。

二十八日 「死のビバーク」着。AC4とする。森田隊のイグルーを拡張、 雪洞を整備する(一〇五メートル)。

第三雪田を登り「セントラル・ピラー」のアレートまで達する(一二〇メートル)。遠藤、

深田、三羽、

北壁へ戻る。

三月一日

二日 星野、嶋村、シャイデックに帰る。

三日 風雪激しくAC1で停滞

四日 AC1より荷揚げし、AC3に入る。

五日 三羽、深田「セントラル・ピラー」をアタック、「レイトン・トラバース」を一〇メートルトラバースする

(回

〇メートル)。

六日

七日

深田が一五メートルトラバースし「レイトン・トラバース」を終る(十五メートル)。

深田、 三羽、薄く氷の付着した溝を四十五メートル登る。

壁を結ぶ凹状部を十五メートル登る(六〇メートル)。 三羽、 チムニーより氷の溝を登り「セントラル・ピラー」の頭に出る。小川「セントラル・ピラー」から正面

九日 小川、 凹状部を登り、 上部の大ハングを乗っ越し、アブミに乗り確保。深田「クモ」へのピッチ十メート ル登

(二十五メートル)。

十一日 深田「クモ」右足末端に出、三羽、氷の浅い溝を三十メートル登って「クモ」の氷田に出る(五〇メートル)。 小川、三羽、 「クモ」の氷田を七○メートル登り「フライ」へ抜けるもろい岩壁を九○メートル登る(一六

○メートル)。「クモ」の氷田の中央部を走るアレート末端にAC5を設営。

十三日 遠藤、 星野、 嶋村、 嶋村、 頂上岩壁を三○メートル登り、 「フライ」の雪田に達し頂上岩壁に達する壁を四○メートル登る(三○メートル)。 上部のチムニーを三〇メートル(六〇メートル)。

十四日 遠藤、 嶋村、 右手のクラックにルートを求め登る (四十五メートル)。

十五日 嶋村、 遠藤、 右手のクラックを直上し、上部のハングを乗っ越して断層に出る(三〇メートル)。

十六日 小川、 星野、 嶋村、 垂直の岩壁を人工登攀でトラバース (三〇メートル)。

十七日 きな岩まで達す(二四〇メートル)。 凍ったスラブを斜め左へ登り、 断層の末端までトラバースし、スラブを直上、 頂上雪田を三ピッチ登り、 大

十八日 日 は風雪の中をAC6とAC5まで下る。 雪田を三〇メートル登り頂上への雪稜へ出る。 さらに十メートル登り頂上に達する (四十メートル)。 その

十九日 ザイル、登攀資材を撤収、AC3へ下る。

二十日 第一バンド頭まで装備を下ろすが日没。

全装備をアイガーバンド窓より収用。

下部岩壁の固定ザイルを撤収し、

六時登山電車の線路に着く。

二十一日

▽登攀距離 (下部岩壁から頂上まで) 二三七五メート ル

### ▽所要日数

▽登攀ピッチ

六十ピッチ

アタック開始から終了まで 四十三日下部岩壁ルート工作日数 四日

## ▽ハーケン、ボルトの使用量

アタック用ロック・ハーケン

アイス・ハーケン

クサビ、ボンボン

確保用ロック・ハーケン

六四本

一四四本

ピッケル ボルト

行動日誌中( )のメートル数はその日に登った高さをあらわす。

足跡をしるした。ユニオンジャックこそ南極点に立つ 最 初の

ルトンは一九〇九年、南極点まで僅か一五二キロを残す地点に

# 南極点に立って

いて輝いていた。海抜二、八○○メートルの氷原、真夏とはいライトブルーの空に、太陽が軍艦旗のような光芒をつよくひ

史、南極の先蹤者の偉業を私は想いつゞけていた。歩いて行った。踏みしめる一歩一歩に南極大陸にまつわる探検耳にしながら、私は一人南極点を示す一本のポールへ向かってえ零下三○度の気温に顔を凍らせ、かたい雪面にきしむ靴音を

三十九分の氷原に達した。南極点制覇の野心にもえたシャックト、ウィルソン、シャックルトンは犬橇を駆って南緯七十九度達への企ては二十世紀と共に始まった。 一九〇二年、スコッ 病に開始された。その南極大陸にあって東西南北がなくなり、末に開始された。その南極大陸にあって東西南北がなくなり、末に開始された。その南極大陸とのものへの挑戦は前世紀

村山雅美

ットは、先人の跡を発見して悲嘆と絶望にくれ、帰途全滅といったは、先人の跡を発見して悲嘆と絶望にくれ、帰途全滅といり、人力の限りをつくして人曳橇をもって南極点に立ったスコース海に現かれ、南極点あらそいが行なわれた。豊富な極地生活の経験と卓越した氷雪技術をもったアムンゼンに遅れること一南極点に到達する時が来た。そしてアムンゼンに遅れること一南極点に到達する時が来た。そしてアムンゼンに遅れること一方、人力の限りをつくして人曳橇をもって南極点に立ったスコット、そして南極点に到達する時が来た。そしてアムンゼンに遅れること一方、人力の限りをつくして人曳橇をもって南極点に立ったスコットは、先人の跡を発見して悲嘆と絶望にくれ、帰途全滅といった。

(97)

キロメートルの波うち、アンデュレーションとよぶ起伏は南極かは全く変りない。波高二十乃至三十メートル、波長八乃至十ひろげられた氷原は、今私の 目 の 前 の極点に立つポールのほ

う悲劇の終末をとげた。<br />
今を去る六○年前、

南極点争覇がくり

内陸の特徴である。われわれが氷原に残した三台の雪上車のシ ュプールは、波うつ起伏に蛇行して氷の地平線に消えていた。

5

あった。バードの極点飛行は南極に航空時代をもたらした。 た。一九二九年、南極点は「フロイドベネット号」の翼の下に 年北極点への飛行に成功したバードは南極の空へ矛 先を 転じ 一次大戦は極地探検に航空機の利用を導入した。一九二六 未

た。 地における設営能力は強化され、南極大陸はおろか南極点その ものも探検の目標から科学調査の場として利用される 時が来

高峰センチネル山塊が発見されている。

航空機の利用により極

る時が来た。一九三五年にはエルスワースにより南極大陸の最 知の大陸は海岸線から内陸へと、その様相は飛躍的に解明され

揮をとったデュフェック海軍少将が塔乗したDC機「ケ・セラ 点に人が住む時が来た。 強行着陸を敢行した。ここに南極点に新しい時代が訪れた。 ・セラ号」が、零下四十度の氷原に、一九五六年十月三十一日 極

南極点を訪れたのは米海軍機であった。極点基地建設の指 ムンゼンがはじめて足跡を南極点にしるしてから十八年

設された基地建物は夏は太陽の輻射熱により冬には地吹雪によ 本のポールには日本極点旅行隊の到達を祝福して米国隊が揚げ 艦旗が微風にはためいていた。 極点に立つポールには星条旗、そのかたわらに立つもう一 一九五七年一月、氷原に建

> グにかすむ基地をへだてて、極点から約一キロ半の所に点々と り今は氷面下数メートルに沈下している。 開始された極点輸送は今や四発の大型輸送機C一三〇機によっ 標識柱を連ねる滑走路がある。「ケ・セラ・セラ号」の着陸に なり、それが僅かに人の住みかを示している。キャンプスモ のぼる排気は酷寒の大気にふれ凝結してキャンプスモッグと

し、機体を雪煙と噴煙につつんで飛び上って行った。 服すべくJATOと呼ぶ ジェット 噴射補助装置を 翼下に装着 大なスキーをつけた巨人機は、二、八〇〇メートルの高度を克 て一夏に千トンを超える物資を輸送するまでに至っている。

ート降下した勇敢な人がいた。その名はバットン兵曹。 原深く消えさってしまった。その原因究明のため自らパラシ ート投下された。空中投下の事故頻発、貴重な資材は徒らに氷 極点基地建設の時のことだ。基地建設資材の多くはパラシュ 南極点

中から降下した唯一の人であろう。極点は犬橇を駆ったアムン

を訪れた人は今日までに五千人に達しているといわれるが、

械力の導入の時代はバードの極点飛行にはじまり、 ゼンにより初到達され、スコットが人曳橇でこれに続いた。 デュフェッ

クの着陸、そして空中降下と極点への道は空に移ったのも面白 「世界最悪の旅」のチェリー・ガラードが、 科学上、 地理学上

V

の組織についてはスコットに、何ものをも捨てて極地に突進す

氷上に基地の煙突か

めに残されていた。南極大陸に迫り来る冬を前に、雪上車は氷

氷原に刻みこまれたシュプールを探し求めて

原を走っていた。

闇夜をおかして昭和基地への帰途をいそぐ極点旅行デポ設置隊

P

は青い空にとけこんでいた。

にとってかわった。吹きすさんだ地吹雪は衰え、氷原の地平線

太陽の再来と共に上層から暖められて高圧部

ていた低圧部は、

もっとも華々しい業績であった。 踏の大西洋側から南極点までの氷原を、雪上車をもって走破し とは科学と冒険のカクテルである」というフックスが、人類未 したのは、 したフックスにさきがけて、スコットについで陸路南極点に達 て太平洋に出た南極大陸横断は、 ルトンが めるならばいつとはいわず頼るだろうといった、そのシャック ることならばアムンゼンに、また地獄の穴におちて助けをもと 計画した南極大陸横断が実現される時が来た。 エベレストのヒラリーが率いるフックスの支援隊で シャックルトンの悲願を達成 国際地球観測年に行なわれた

輌による内陸調査のかなめとなった。 あった。時に一九五八年一月三日、 この時から南極点は陸路車

地球上の最低気温零下八八・四度を記録したボストーク基地

には米国隊がマクマード基地およびバード基地から二隊を極点 が南極点を訪れたのは一九六○年のことだ。続いて一九六一年 を発進した世界最大の雪上車ハリコフチャンカを連ねたソ連隊 へ送り、一九六六年にアルゼンチン隊が大西洋側から南極点を

を狙う時が来た。印度洋から極点への未踏の氷原が日本隊のた 昭和基地を根拠地に雌伏十年の時をおくった日本隊に南極点

> 極の神秘である。 頭上に迫り来た。 であった。 オーロラの光のもとでは月夜の提灯であるヘッドライトで、オ った。天空をおおう光の緞帳は燎原の火のいきおいで雪上車 ロラをはらいのけんばかりの気持で極光に輝く氷原をひた走 強烈な光が氷の地平線の彼方に突如としてさしの 雪上車のドライバーはルートを失うまいと、 闇夜の氷原に煌々と輝くオーロラの乱舞は 南

を海岸へ向かって下降していた風は、 零下六○度を示す南極大陸の最高地域である。 望む地域は、 東経四十度線上をひたすらに南下して昭和基地を北千キロ 海抜高度富士山頂にほぼひとしい。 南極大陸の最高地域すな 南極大陸の斜 気温は夏な に りに走ったものである。

1

わち印度洋、太平洋、大西洋への分水域を印度洋から越えるや追

車を進めるや局面は一変した。南極大陸にも夏が来たのである 追風にのって雪上車の前面をおおってしまった。重荷と高度に の排気は、極低温の気温にあって飛行機雲のごとく雲と化し、 太陽の恩恵をうけない半年の間、 加えて視界ゼロ。 手にかわった。酷寒と軟雪に遅々たる歩みを続けていた雪上車 しかし苦しい南進も南極大陸のど真中に雪上 南極大陸の中央部に居すわ

沈むことのない太陽熱の吸収によって雪温が上昇した。 冷えに冷えきっていた内陸の氷原 (99)

印度洋から南極点に達した。 はよみがえり順調な走行を続けて、氷原に刻んだシュプールは し、空に舞う細氷に太陽はあやしく輝いていた。雪上車の機能 華した雪面は ダイヤモンド をちりばめたような 輝やきを 示め

た。 日、地球の底をてらす真夏の陽をあびて一人南極点に立ってい むね二十三度の高度を保って終日極点をめぐる南半球の夏至の 上下左右に鮮やかな五色の弧を描いていた。その日太陽はおお 南極点にひるがえる星条旗は太陽をさえぎり、幻日が太陽の

### Щ 岳 第六十三年(一九六九年三月刊

の氷河不存在論その他 ヒリシャンカ・グランデ 一九六七年 ロシュ・ゴル 一九六七年

岡

Ш

俊

雄

マウント・コーベ 一九六七年 ペルー・アンデス 一九六七年

私の登山 山岳会初期の人々 マッキンリー山南壁中央稜

ゴーレン・ゴル源流を探る(一九六七年) ヒンズー・ラジ 一九六七年 ヤジュン峰登頂 (一九六七年)

エルブールズ山脈での合宿をふりかえって ボリビア・アンデス(一九六七年) サンタ・マルタ山群紀行(コロンピア) ティリチ・ミール 一九六七年

へス峰登頂(一九六七年)

A5判三三〇頁・写真四三葉・地図二一面 海外登山年表=一九六七年= 追悼・図書紹介・会務報告・英文梗概 小川登喜男君を憶う

定価二二〇〇円 Ш

山岳総索引

定価一〇〇〇円

索引が出来ました。

東京都千代田区神田駿河台2の1

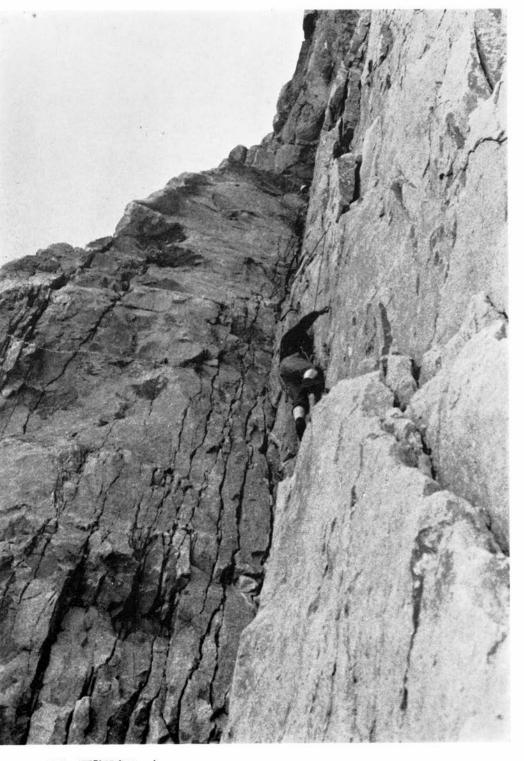
堂

第二十六年第一号(一九三一)―第六十年(一九六五)までの総 增松中佐横水本村木地 清太郎 雄 雄 生芳夫雄



ウシバ東面 East side of Ushba, Caucasus

(By K. Tsukamoto)



ウシバ西壁凹角ルート Climbing the concaved gully of Ushba West Face (By. Kyiogoku)

副隊長

小

年

小樽山岳会·JAC

# ワシバ南峰西壁登攀(1九六八年)

1

コーカサス登攀記」のイメージが頭のどこかに残っているだけ私にとってもカフカズはA・F・マンメリーの「アルプス・

カフカズへ登山家を送ることであった。 第二次RCCは上田哲農を隊長として、日本労働者スポーツの未知な世界であった。 あら、遺の形で一九六六年にカフカズへ登山隊を送った。 さらの未知な世界であった。

隊 長 塚 本 珪 一 京都府大山岳会・JAC 団 長 清 水 一 行 札幌山岳会カフカズへ登山隊を送ることになった。

木村紀夫JMCC車義久JAC

福岡 璋 祐 朝霧山岳会

塚

本

珪

京極 紘一 北海学園大岳友会中 道孝則 稜友山岳会

能力のあるものを隊員とした。いたから、準備についてもその点を重視し、クライマーとしていた。幸いにもウシバ峰登山を許可するという返事をもらって私たちは計画のはじめからウシバ峰の西壁登攀を目標として

七月六日に横浜港よりハバロフスク号で出発し、七月八日に

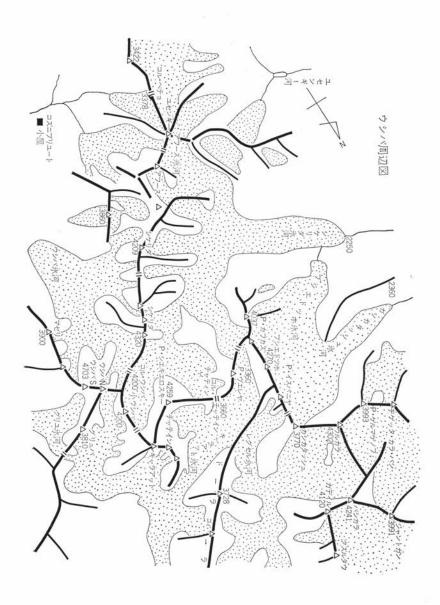
私たちに夜はやってこなかった。

私たちに夜はやってこなかった。

本陽を追って飛ぶの日の午後の飛行機でモスクワに向かった。太陽を追って飛ぶ調な山岳のない原野の旅は九日の午前十一時頃まで続いた。そはナホトカ港に着き、すぐに汽車でハバロフスクにむかう。単

ォーター空港につく。ここからエルブルース・キャンプのマイ七月十日にモスクワ空港から南へ約三時間飛んでミネラルウ

(101)



ルピニスト・キャンプは標高約一五〇〇メートルで、美しい針クロバスで約五時間かかって真夜中にキャンプにつく。このア

画の検討がなされ、結局、四名は西壁、二名はマルシュ・ルーウシバ西壁の登攀者であるマナガロフ氏を中心に私たちの計葉樹の林の中にある。

ところで、雪の山々がま近にせまっている。次の日は早朝に出ところで、雪の山々がま近にせまっている。次の日は早朝に出ところで、松の林がゆるやかに登っている。芝生とお花畑が続いてユセンギーの河原でキャンプをすることになる。牧歌的ないてユセンギーの河原でキャンプをすることになる。牧歌的ないてユセンギーの河原でキャンプをすることになる。牧歌的ないてユセンギーの河原でキャンプをすることになる。牧歌的ないてユセンギーの河原でキャンプをすることになる。牧歌的なところで、松の林がゆるやかに登っている。次の日は早朝に出ところで、雪の山々がま近にせまっている。次の日は早朝に出ところで、雪の山々がま近にせまっている。次の日は早朝に出たいる。次の日は早朝に出たいる。次の日は早朝に出たころで、雪の山々がまがいる。次の日は早朝に出たころで、雪の山々がまがまっている。次の日は早朝に出たころで、雪の山々がまがまった。

2

進めた。

ルート隊はウシバ氷河末端の大滝の上部まで登ってキャンプを

っていた。 でいた。 でなり、魔女の住み家とスワネチュア人の言うウショシャの魔の山、魔女の住み家とスワネチュア人の言うウシ

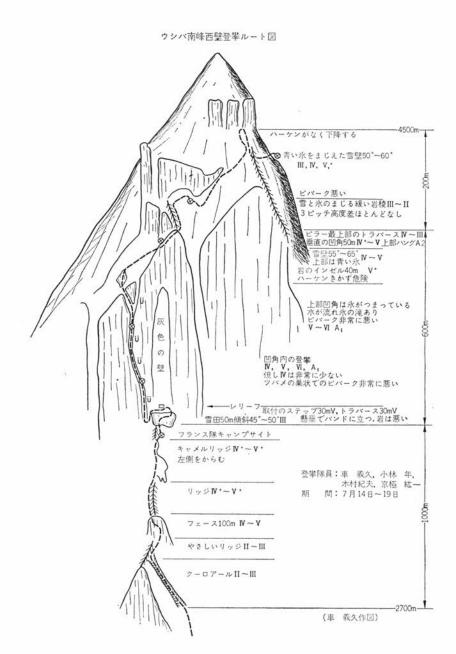
七月十四日、ウシバ西壁に二つのルートから登るという私たちの具体的な行動が始まった。ウシバ氷河のモレーンをたどりちの具体的な行動が始まった。ウシバ氷河のモレーンをたどりで様にもどった所から本当の壁の登攀が始まった。ジャヌーにび様にもどった所から本当の壁の登攀が始まった。ジャヌーにび終って、フランス隊のハーケン等が散乱しているキャンプ・が終って、フランス隊のハーケン等が散乱しているキャンプ・が終って、フランス隊のハーケン等が散乱しているキャンプ・が終って、フランス隊のハーケン等が散乱しているキャンプ・サイトで最初の日は終った。

車、木村、小林、一段下の外傾した所で京極がビバークするこれではくきいた。雪田が終って岩壁下部のステップの上に一九とくだって凹角ルート(一九六五年初登)にとりつくことにする。凹角は約八○度はあってほとんどフリークライミングは不る。凹角は約八○度はあってほとんどフリークライミングは不る。凹角は約八○度はあってほとんどフリークライミングは不る。凹角は約八○度はあっておとがです。本村、小林、一段下の外傾した所で京極がビバークすると画、木村、小林、一段下の外傾した所で京極がビバークすると画、木村、小林、一段下の外傾した所で京極がビバークすると画、木村、小林、一段下の外傾した所で京極がビバークすると画、木村、小林、一段下の外傾した所で京極がビバークすると

後、小林、車、京極、木村の西壁隊と福岡、中道のマルシュ・う林にたどりつきベース・キャンプとする。一時間 余り 休息で急な斜面を下って、ドーラ河のそばのプコワラ・ロシャとい通訳のレオニード氏はひきかえした。峠からドーラ河にむかっ

ツーリストたちも長い列をつくって登ってくる。ここで日本語高峰エルブルースの双耳峰がみえる峠で、雪がしっかりつき、発して、三三七八メートルのベチョ峠をこえる。カフカズの最

(103)



ピラー頂稜より雪田に入り露岩部でビバークとなる。

ものを使っての登攀で、かなり強引に西ピラー上部に出る。 おくらすことにする。ハーケン、クサビ、ボンボン等あらゆる

西

十八日午前四時、風強く寒さもきびしいため出発時間を少し

とになる。

七月十六日の夕刻の交信時にはマルシュ・ルートの福岡の声

ドが切れて、食料、装備の一部が失われ、悪いことにはトラン シーバーも消えてしまった。 が続いており、三ピッチ目あたりで小林のザックの背負いバン な状態が与えられはじめた。この日凹角ルートでは六級の登攀 だけがベースに届き、西壁隊からは交信がなく、ベースに不安

人入ってビバークとなる 流れる水が完全に凍結するのを待たずに、二人用ツェルトに四 凹角内は午後になると水が流れ、シャワークライムとなる。

七月十七日の早朝、凹角内部の凍結している間に登攀をはじ

となくひきかえしてきた。

二時までには帰りつかねば遭難したことになる じめていた。私たちはエルブルースキャンプに二十一日の午後 の間にまったく交信がとだえてしまったので救援体勢をとりは 部の稜壁でビバークとなった。ベース・キャンプでは西壁隊と いたのは六○度~七○度の氷壁が五~六ピッチで、西ピラー上 い雪壁を経て最後の凹角から西ピラーの肩にでる。次に待って め、巨大なハングを左にまき、ピラー・リッジ直下の六○度近

> 共にエルブルース・キャンプへ戻り、マルシュ・ルートを敗退 した福岡と中道はウシバ氷河西壁下部まで偵察にでかけたが ベースではスポーツマスターのバリスミハロウは清水団長と

壁隊の様子はつかめなかった。

であるクーロアールの見えるところまで行ったが、何も得るこ 度ビバークをすることになった。ベースから中道とアレキサン ダーはウシバ東面のグリュー氷河に入り、西壁隊の下降ルート る。スワネチュアのバラ色の山々の見える所で私たちはもう一 西壁の登攀に私たちはすべてを使い果たしてしまったともいえ 壁を登るには私たちのハーケンは不足だった。頂上よりもその 十九日は六○度あまりの雪壁の登攀に始まった。 上部頂上岩

リップして膝を強く打ち、皿をわってしまった。小林の体を二 からモレーンを下るも空腹のために道のまん中で眠ってしまっ の懸垂を何回かくりかえして氷河に下りたった。グリュー氷河 リーのコルからスワネチュア側のクーロアールに入り、岩稜上 ム・マゼリー下のクーロアールに達した。ジャンダルム・マゼ マゼリーまでの長いトラバースにかかり、なんとかジャンダル をして京極と共に残すことにした。車と木村はジャンダルム・ ミメートル上のテラスに移して、ザイル、ハーケンでビレー て、車が残置ハーケンを発見した時に小林は三〇メートル程ス 小林がスリップしたのは二十日の朝であった。下降をはじめ

た。二十一日、車と木村は夏小屋でパンと牛肉をもらってやっ

ジャはベースへ車の手紙をもってきてくれ、すぐにイリアナが にころがり込んで事故を知らせる。インストラクターのワロー と人間らしくなり、マゼリーまで下ってツーリスト・キャンプ

だろう。この日の夕刻には車と木村がブコワラ・ロシャのキャ ロシャ文字になおして、中道がユズニブリートまで届けた。今 日のうちにはエルブルース・キャンプへ馬で届けてくれること

ルピニストが救援のために到着したのには驚いた。

ンプへかえってきた。エルブルース・キャンプからは二人のア

がトランシーバーをひびかせた。

は小林等に十分な食糧をあたえることができ、小林の元気な声 た。シャクナゲが一面に咲くすばらしいところだった。木村隊 ーティーも上部へ移動し、グリュー氷河のモレーン まで 登っ は無数のホタルが飛びかうのだった。二十四日には私たちのパ

二十二日、ブコワラ・ロシャのキャンプにはバリスミハロウ

をリーダーとする救助隊が集結をはじめ、午後には木村、ワリ

ラ河沿いにマゼリー村まで下り、ビチョ村のはずれまで登って 遅れて、バリスミハロウ、塚本、ドクター、イリアナ等がドウ ヤ、ミシヤ、アシクの四名が食糧を持って先発する。二時間程

リュー氷河末端まで到達していた。二十三日は木村隊はジャン キャンプをする。そこには炭酸泉があった。この日木村隊はグ アルピニストの友情がいかに美しいものであるかが、私たち

して知らしてくれていた。

ウシバが、山の世界に生きている今日の日をはっきりと感動と にうかんでいるスワネチュアの白い山々、ふりかえれば怪峰の 午後の四時に出発して氷河上で全員合流した。二十七日、小林

二十六日には後発の救助隊と木村隊が合流し、ドクター隊が

と私とイリアナは馬で下山することになった。中空に幻のよう

がカフカズの山行で得たもっともすばらしいものであった。

(106)

夜に

い。私は一日のんびりとアポロチョウを追っかけていた。 じてきた。私のパーティーはまだビチョ村を動こうとはしな ダルム・マゼリーに到着し、小林、京極が元気であることを報 レーニン峰はこのトランス・アライ山脈の最高峰であるが、

いうソビエトの国父的指導者の名が冠せられたのは、かつてレソビエトでは第三の高峰でしかない。この第三峰にレーニンと

# ーニン峰登頂(これ六九年)

=レーニン生誕百年記念登山に参加して=

ソビエト領中央アジアの高峻山岳はギルギス、タジクの両共

和国に凝集している

であったアライ谷でつながっている。
ール高原のあるタジクは、かつて西洋と東洋を結ぶ主要な陸路であったアライ谷でつながっている。

アライ=南のアライという意)と呼ばれている。れ、そのほとりに数多くのオアシス部落をもつ幅二十キロもある標高三千メートルの高原である。このアライ谷をはさんで北る標高三千メートルの高原である。このアライ谷をはさんで北アライ=南のアライという意)と呼ばれている。

松本龍雄

- 10 馬条と思っていたいらである。 ルが空白部として残されていた四十年ほど前では、この峰が第として、南へアフガンのヒンズー・クシュに連らなる大パミーとして、南外アフガンのヒンズー・クシュに連らなる大パミーーニン峰が可視的探索の限界であり、ザ・アライ山脈を北周縁

たる一九六九年夏期の登山シーズンに、ソビエトが主催し、主われわれがこの地域へ入山したのは、レーニン生誕百年にあ一の高峰と思われていたからである。

ートル)、スベルトフォーク(五五四一メートル)、ラズジェリ峰(七一三四メートル)、その他セルジンスキー(六七一三メ国の参加による合同登山が計画され、その主要目標のレーニン日本、モンゴル、ネパールなどのヨーロッパやアジアの十五ヵとして東欧諸国、それにフランス、イタリー、オーストリア、として東欧諸国、それにフランス、イタリー、オーストリア、

らである。派遣要請は全ソ労働スポーツ協議会から日本労働者ナヤ(六一四八メートル)などの諸山への登山が勧奨されたか

(107)

員に安川茂雄、佐内順、松本龍雄が選抜された。 スポーツ協会(会長岩井章氏)になされ、隊長に上田哲農、

隊

### 行 動の 概 要

七月八日 ナホトカ、ハバロフスクを経てモスクワ着。 九六九年七月五日 横浜港発

七月十一日 モスクワより航空機にてギルギス共和国フェルガ ーナ地方のオーシに入る。

七月十二日 バス、ローリー(運用トラック)を乗りついでア

七月十四日~七月二十一日 佐内、松本、高度順化をかねてラ ○メートル)到着、ベースキャンプ設営 ライ谷、アチク・タッシュ、バゾボイキャンプ(標高三六○

七月二十二日~七月二十六日 休養と悪天候による停滞 七月二十七日 レーニン峰に向かい、C1(四二〇〇メートル) ズジェリナヤ峰(六一四八メートル)に登る。

七月二十八日 C2 (五二〇〇メートル)。

に入る。

七月二十九日 C3 (五九〇〇メートル)。 七月三十日 佐内不調のためC3を五四〇〇メートルにおろ

七月三十一日 佐内不調のため松本のみラズジェリナヤ峰の肩 を越え、六〇七〇メートルのコルのC4に至る。

> 八月一日 八月二日 六五〇〇メートルに最終キャンプC5設営 レーニン峰登頂、C5に戻る。

八月三日 C1に下山

八月四日

八月五日 ベース・キャンプに帰る。 ギルギス共和国。

八月六日~七日 オーシ。

八月八日~十五日 モスクワ。 八月十八日 帰国。

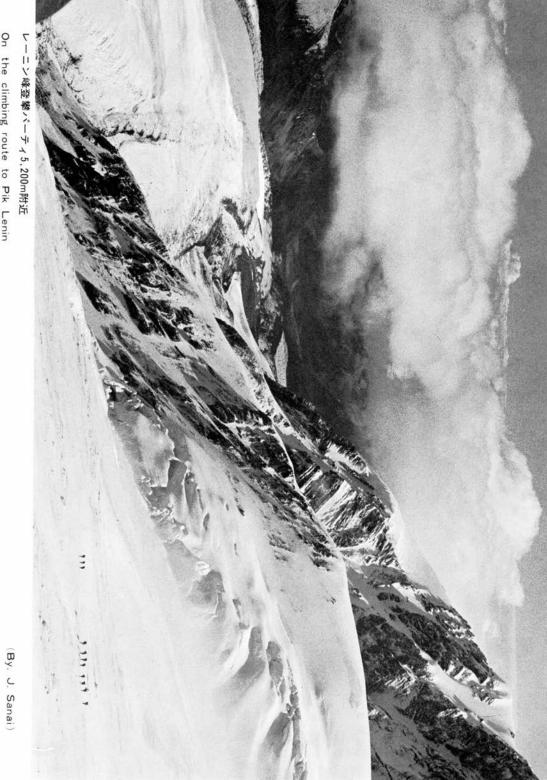
### ベースキャンプまで

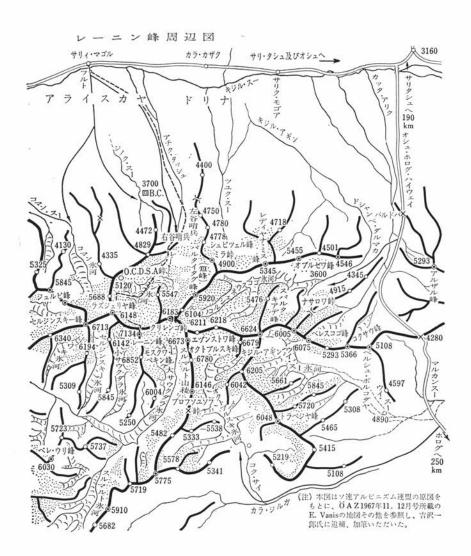
りと日本語で「ヨクイラッシャイマシタ」と書かれた赤い横幕 ジアの小さい黒い顔がいっせいにほころび、駈足で花束をかか とセンターポールの日の丸がわれわれをとまどわせる。オーシ の中でギルギスの小学生の歓迎をうける。登山隊員と同数のア のオーシ飛行場に着く。空港の焼けるような半砂漠地帯の熱風 姿が褐色のフェルガーナ平原をきらめく氷の衝立でさえぎって る。三時間に若干不足する飛行で、右側にパミールの高峰の雄 えてくる。ダリヤとグラジオラス、濃いエンジ色のバラの強い香 いるのがみえてくる。午前九時三十分、海抜一五〇〇メートル スクワ空港を飛びたった。ターボ・ジェットの中型航空機であ ントと中央アジアの主要都市を結ぶ定期便が三時間程遅れてモ 七月十一日午前二時四十分、オーシ、サマルカンド、タシケ



在、推鰲のあるに12か、フーコノ縣(4、Innumは)鏡の) Pik Leuin. Seen at right hand

(By. J. Sanai)





と馬駱による各国登山家の交歓パーティで夜を過す。いう中継休息所でバスをかえし、ウズベク、ギルギスの羊料理いう中継休息所でバスをかえし、ウズベク、ギルギスの羊料理と馬駱による各国登山家の交歓パーティで夜を過す。

をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。をのぼりきると三八○○メートルのバゾボイキャンプである。

### 高度順化とラズジェリナヤ

を問われた。われわれは最年長の上田哲農氏を含む全員登頂をこの間登頂ルートとパーティの編成がなされ、日本隊の希望

トル ルに荷上げをしたにとどまっている。これ以上遅れると七月末 ○○メートルに達しているのに、日本隊はC1四二○○メート 他の諸外国パーティはすでにC1からC2の設営を終り、五五 くむことになった。が、レーニン氷河への迂回路四一〇〇メー り、日本隊も翌十八日から佐内、松本とレニングラード出身の は特別計画であるフェドチェンコ氷河への旅にでる ことに 第一線級のみで編成し、 した。しかし、十七日の調整会議で各国とも登頂隊員は若手の されるラズジェリナヤ峰六一四八メートル経由のルートを選択 目標にしていたので、ルートとしてはもっとも長いが易しいと ビエト側の強い希望で松本とヤシンだけで登高を継続すること の各国一斉登頂に参加することが困難になるとの理由から、 スポーツマスターであるヤシン氏とで本格的な高度順化にとり "霧の峠"の登りで佐内不調、全員の下山を協議したが、 高齢者は登頂隊員のサポートかある

と若干の装備をデポ。高度順応の遅れをとり戻すため登高を続に着く。十時二五分C2予定の五二〇〇メートルに到着、食料に着く。十時二五分C2予定の五二〇〇メートルに到着、食料に着く。十時二五分C2予定の五二〇〇メートルに到着、食料に着く。十時二五分C2予定の五二〇〇メートルに到着、食料に着く。十時二五分C2予定の五二〇〇メートルに到着、食料に着く。十時二五分C2予定の遅れをとり、茶とスープを作り六時四五分出発。

山することになった。その日十六時十五分C1着

になり、サポートの上田、安川、

通訳のニコライワと佐内は下

入りをさせたい」とある。 で十九日のドクターの診断待ち、許可がでれば二十日にもC1 らの手紙を届けてくれる。「佐内の容体は大したことはなさそう を終え就寝の準備をしているところへ、オフチニコフが安川か で沈むが大事に至らず、十八時半レーニン氷河に降りる。夕食 味な口をひろげている。その一つをとびそこねたヤシンが胸ま て下山。北壁の下部は連日高温で氷雪がゆるみクレバスが無気 せている。C1から一五〇〇メートルを獲得したことに満足し の北方にアライスキーの峰々がその頂稜の部分だけを白く輝か の主稜線(五七〇〇メートル)に立つ。紫色の大パミール高原 ほどで稜線直下の氷のクーロアールに着く。十四時二五分待望 ○○メートル)を通り過ぎ北壁の大トラバースに入る。一時間

壁下に天幕とスノーホールが設営されている。この時点での最 な国際色の満開である。五九○○メートル、ラズジェリナヤの が行動している五七〇〇メートルの主稜線上のコル一帯は豊か ト、ルーマニア、ポーランド、フランス、イタリーなどの各隊 好であればラズジェリヤナ峰に登頂を試みることで一気に遅れ を取り戻すことにする。二一日晴。 ○○メートルの氷穴でビバーク、高度に馴れる。翌朝体調が良 を助ける行動を開始する。十六時、C2に向かって出発、 二十日晴。昼近く佐内の元気な顔が現われる。 六時氷穴を出る。 彼の高度順化 ソビエ 五.

> ミールの針峰群が数え切れない程の頂を連ねている。 三〇分ドーム状の頂上に立つ。レーニン、コルジェネフスカヤ 登高はきびしい。 高所キャンプである。ここからはじまるラズジェリナヤの壁 巨峰が真近かにそびえ、その二つを結ぶ稜線の西南側に西パ ムニズム、 ガルモが抜きん出て高い。 一歩一歩が肺腑にこたえるラッセルで十五時 ピーク

0

コ

ける。十一時四五分、ソビエトパーティの最高キャンプ

(五四

## レーニン峰登頂

ラズジェリナヤ峰の登頂で佐内のコンディションも見事に回

くなり風が冷たくなる。レーニン氷河で雪が降り始める。 ストリアパーティは胸までのラッセルで苦闘しているという。 四名の合同パーティでレーニン峰に登ることになった。 復して、日本隊佐内、松本、ソビエト隊オフチニコフ、 日夜半から二六日中続いた多量の降雪で、北東稜登攀中のオー ユーシン正面の大岩壁は素晴らしい。峠にかかる頃から雲が多 五分に短縮される。アチュク・ターシュの支流の向こうに見る ィのためローリー(軍用トラック)が用意される。ネギの谷 時間余の歩行は激しく揺れるトラックの堅い板に腰かけた十 七月二七日、レーニン峰登頂へ最後の行動に入る各国パーテ ヤシン

を整理する

今日の雪も本格的な降りである。C1でアタック用の食料装備

く出発する。 各国隊共同のラッセルで深い新雪が踏み固められ

されないソビエトのアルピニズム体系のなかでは、ここからの える全装備と一週間分の食料。シェルパやポーターの使用を許 な白濁色の雲の堆積と共にやって来る。七○○○メートルに耐 雪も小降りとなり、 び降り出した雪の中で天幕を設営する。夜を徹して降り続いた ていくが登高は遅々としたものとなる。十七時やっとC2、 灰色の朝がレーニン氷河からせり上る尨大 再

を訴えている。二〇時、 化に使用した張り放しの無人テントにもぐりこむ。佐内が発熱 気力も使い果たしていた。天幕も張らずにソビエト隊が高度順 定地にたどり着いた時には、オフチニコフもわれわれも体力も のパーティがラッセルを担当する。五九〇〇メートルのC3予 オフチニコフのトランシーバーに北東

六四○○メートルに最終キャンプを設営する。

頂上まで七五〇

メートルを残している

登高がもっとも苦痛なものとなる。重荷に耐えながらわれわれ

ある。 落ち重傷、 ャーであるオフチニコフは指揮系統の強化のためC1に下るこ 例年にない早い降雪などの悪条件を考慮し全隊のマネジ オーストリア隊が救援活動に入っているとの報告が

稜登攀中のソビエト科学アカデミーパーティ二名がクレバスに

四 る。

が起せない。 隊に加わる。 とになり、 スに患害されたらしい。 かわりにレニングラードのコーリヤ氏がわれわれの 佐内の体調がはっきりせず、正午になっても行動 高度順化の不足と古いテントの残留物が発生した 五五〇〇メートル の地点まで下り仮

泊するも結果不良。三一日午前五時三○分、オフチニコフと通

ネパールに続く山波と過し下山する。疲労した体には登高と変

く佐内を見送り、八時三○分五九○○メートル。ラズジェリナ ヤを越え六○七○メートルのコル着、 強風の中で天幕を張る。

二時半と二十四時頃天幕が吹き倒される。地吹雪の激しい朝ソ われわれより高いところにいる。 追うように出発する。 ビエト隊のしんがり、最強といわれるクレツコパーティの後を パーティはヤシン、コーリヤ、松本の三人である。この夜二十 国際隊もその他のソビエト隊もそれぞれ 強風と雪にピッチはあがらず

誕百年オベリスクが置かれ、二本の赤い旗が強風に鳴っている 大な頂上の南端にある大きなケルンの下にレーニンの胸像や生 ブルガリヤ、 を残している。 ン峰ではここから頂上までにゆるい長い下りと最後の登り斜 十八時、短い頂上での 一時頂稜の北端に着く。 翌二日、順応の不足とかなりの疲労を感じながら 岩稜と凍った雪稜を強い風にあおられながら登高する。 ルーマニアなどの国際隊に続いて頂上に立つ。 十七時二十分、ドイツ、モンゴル、ネパール、 一刻を西パミールからヒンズー・クシュ、 遠望すると二つピークに見えるレー 天 幕 を 広 出 面

訳のニコラエワが天幕をたたきわれわれを起す。参加国

てに登頂をのぞむソビエト側は不調の佐内を下山させ、

一人だけでも是非とも登頂して欲しいと要請して来る。

止むな 日本人 一のすべ

腑も厳しい寒風に一呼吸ごとに脱力する不気味な疲労でおかし谷間。すべてが巨大なものの一部でしかないのに、いつしか肺き、遥か下の雲海、あの厚い雲の下は死の谷と呼ばれる日蔭のらぬ苦痛が続く。華麗な黄昏の真紅の輝きと中天の星のきらめ

くなった。

大きな体、赤いテレイコートを恥かしげにシュラフに詰め込大きな体、赤いテレイコートを恥かしげにシュラフに詰め込った。疲労の極限と酸素の不足、眠れないために陽光と変りなった。疲労の極限と酸素の不足、眠れないために陽光と変りないほどの夜空の明るさが力を授けてくれる。
悲惨な朝が来る。ドクターのグレイプだけが躁急に飛び廻っ悲惨な朝が来る。ドクターのグレイプだけが躁急に飛び廻っ

る。

名が過労と肝臓障害で歩行不能の危機にある。
ー。ヒーベラーとシュナイダーのパーティは東南稜で死闘を続しけている。科学アカデミーパーティを救援し登頂の機会を逸しけている。科学アカデミーパーティを救援し登頂の機会を逸したオーストリアパーティは、ダウラギリの登頂経験者を含む二たオーストリアパーティは、ダウラギリの登頂経験者を含む二くいる。ひどい高山病の症状にあるソビエト人を元気なトレーている。ひどい高山病の症状にあるソビエト人を元気なトレー

ベースキャンプで受けることができたのは好運であったといえる。おそらくは特別の好意であろう。このバッジナンバーを蜂登頂者は百三十人を越えた。私の登頂ナンバーは九○○番で峰登頂者は百三十人を越えた。私の登頂ナンバーは九○○番でいる。おそらくは特別の好意であろう。このバッジナンバーをある。おそらくは特別の好意であろう。このバッジナンバーをある。おそらくは特別の好意である。

#### P 九 東 面 (一九六九年)

#### ま え が き

くものである。 の西面、一九六三年ポスト・モンスーンの東面よりの踏査に続 登山隊をP二九に送った。これは一九六一年プレ・モンスーン 大阪大学山岳会はネパール政府の登山解禁とともに三度目の

その西面に安全な登路を発見することは出来なかった(『山岳』 見、ドナ・コーラの確認等種々の学術的成果をあげたものの、 第一次隊はP二九西面の未知の領域に入り、ツラギ氷河の発

り、東尾根を登って六三〇〇メートルに達し、つぶさにその東 壁を観察した。そしてP二九を東面より登頂することは困難で 第五十七年参照)。 ったが、サマ部落よりプンゲン・コーラ沿いにP二九東面に入 第二次隊は五人の隊員中登攀隊員は三人という偵察隊ではあ

> はあるが可能であると言う結論をもって帰国した(『山岳』 第

玉.

井

康

雄

五十九年参照)。

測量を行なうことを目的とした。 査、チベット医薬の研究を行ない、更にプンゲンコーラの写真 他学術調査として、前二回より引続いての研究である植物の調 究と準備をもとに、東面よりの登頂を第一の目的とした。その

今回の登山隊は、この結論にもとづき、登山禁止期間中の研

隊の構成は左記の十一名よりなる。 長 吉 仙 也 (42歳) 大阪大学医学部勤務

大工原 玉 井 康 恭 雄 (31歳) (30歳) 大阪大学歯学部勤務 富士写真フィルム(株)勤務

副隊長 隊

員

枝 沢 日出夫 礼 子 (29歳) (37歳) 古河電工勤務 東京芸術大学学生 薬学部OG

野

大

輔

(28歳)

大阪大学理学部大学院学生

トマンズを出発し、モンスーンの明ける前にベースキャンプを言える。この短い期間を有効に利用するためには一日も早くカンスーンとジェット・ストリームのはさみうちに会っていると

渡部 洋(25歳)大阪大学理学部研究生石 浜 高 明(27歳)日立造船(株)勤務

田 甲 中 田 田 治 吉 朗 樹 彦 (22歳) (22歳) (24歳) 大阪大学工学部学生 大阪大学基礎工学部学生 大阪大学附属病院勤務

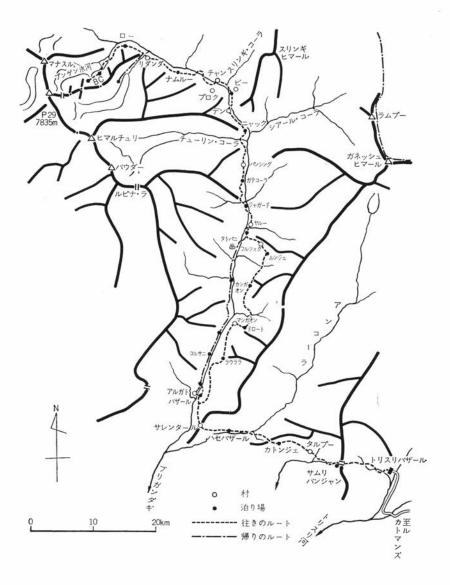
し、隊員は分散して空路もしくは海路カルカッタへ向かった。一九六九年七月二十二日に約三トンの荷を名古屋港より送り出

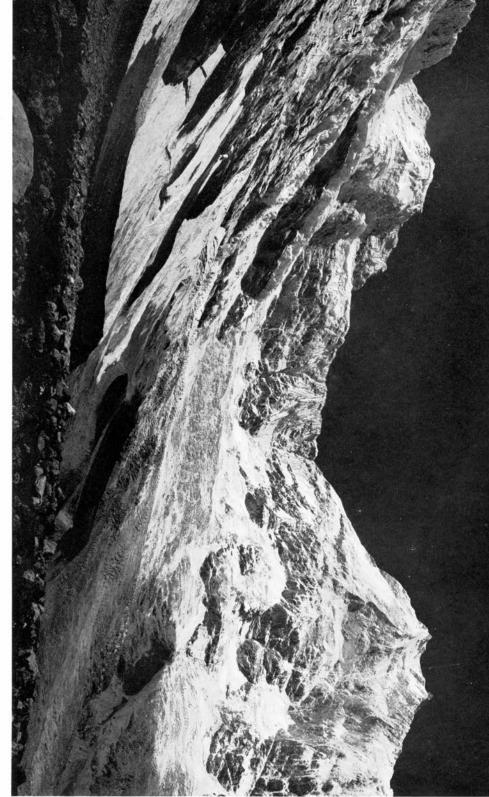
## トマンズ

> しまった。 のトラックとともにカトマンズへ着いたのが九月二日になってのトラックとともにカトマンズへ着いたのが九月二日になってし、荷を積んだ船はダッカで遅れてしまい、最後の隊員が二台つくり、冬の風が来る前に登頂を試みなければならない。しか

## 雨中のキャラバン

九月四日リエゾン・オフィサー(D·B・バスネット君28歳) 九月四日リエゾン・オフィサー(D·B・バスネット君28歳) 九月四日リエゾン・オフィサー(D·B・バスネット君28歳) 九月四日リエゾン・オフィサー(D·B・バスネット君28歳) 九月四日リエゾン・オフィサー(D·B・バスネット君28歳) 九月四日リエゾン・オフィサー(D·B・バスネット君28歳) 1はブリ・ガンダキに架かっていた橋は流失しており、釣越しがかわりについている。ここで食糧品を補給した後、いよいよブリ・ガンダキ左岸を登る、いわゆるモンスーン・ルートに入った。 1はブリ・ガンダキをはるか下に見下ろす高捲きの連続で、ポープについている。ここで食糧品を補給した後、いよいよブリ・ガンダキ左岸を登る、いわゆるモンスーン・ルートに入った。





Peak 29 (7835m) (left) and Manaslu (8125m) (right) seen from Base Camp. ベースキャンプより見たピーク29 (7835m) とマナスル (8125m)。



第5キャンプから見たP-29東壁登攀中の隊員。 Two members climbing up the east face of Peak 29, seen from Camp 5. (By. Y. Tamai)

易に携わる商人である。 リンVに会う。 行方のつかめなかった第二次隊のときのシェルパ、アン・ツェ った。 ラを渡ってからはブリ・ガンダキの川幅も狭まり、橋も多くな がした。デン上方で道は再び左岸にもどるが、スリンギ・コー トがあり、 いてセティバスには無電設備をもつインド軍のチェック・ポス 悩ませた。マナスル以来おなじみの上高地(ヤルー)上流でブ われフルツォク下方でブリ・ガンダキに降りるまでわれわれを 流失したとのことであった。 途中二度ダムが崩れ、 九六八年の三度にわたる山崩れにより出来たものであって、 ここのチェック・ポストで通行許可書が調べられた。 ガンダキ右岸に移り、 チャンの近くで、 中印両国との国境をもつこの 彼はいまやオメガを腕にはめ、 洪水が起こり、そのためアルガトの橋が 彼はこれから以後、 われわれがカトマンズではどうしても 鬱陶しい天気の中でジャガートに着 有名な蛭はマシガオン付近より現 国の複雑さを見た思い しばしばベース・ チベットとの交 つづ

> ベース・キャンプを張った)。 に入ったためである を渡ってベース・キャンプを設営したのは九月二十二日であっ 天候のためよくわからず、P二九東尾根よりおりている枝氷河 し、このカルカよりベース・キャンプ予定地までのルー やかな行進となり、プンゲン・コーラ沿いに登って九月十 上げに活躍してくれた。 ース・キャンプで装備をうけとり、全期間低所キャンプ間の荷 について来た屈強なポーターはそのままわれわれに同行し、 れ替えることになった。 に住民の要求を入れてカトマンズ・ポーターとロー住民とを入 ラバンを続けることが出来た。 ーになりたいという希望が出されたが、 ていなかったわれわれを驚かせた。 には出来てから一年目というチェック・ポストがあり、 キャンプを訪れ、 ーの最奥のカルカに入った。出発以来十七日目だった。 遅れた原因は、 わ われわれが直接ローからプンゲン氷河右岸 れ (第二次隊はサマからプンゲン左岸に入り われの現地食調達に携わっ なお、 ローからは女、 ベース・キャンプは 第二次隊 ソロ・クーンブからチョ しかし、 この部落の住民からポータ 子供までまじっ 次の泊り場ローでは遂 なんとかロー た。 ナムル までキャ 予想し トが 九 ~ 日

H

が水をたたえていた。

ガンダキには、左岸の大崩壊によりダムが出来、大きな自然湖

帰路聞いたところによると、このダムは

れわれにとっては痛い損害であった。

ターが消えてしまった。

びえてしまい、

八日にはラウララのテント地より三十名のポ

ポーター全員に雨具をわたしていたわ

カシガオン下方のブリ・

カトマンズから来たポーターの一

部はこの道の悪絶さに

ター

のためにしばしばフィックスド・ロープが必

要で

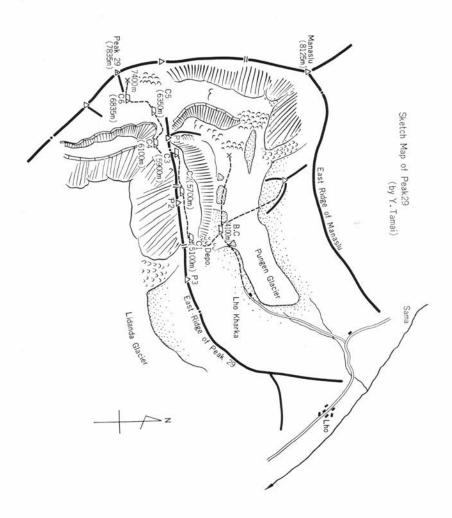
あ お 0

#### 登 Щ 活 動

第 地

一キャンプの約三〇〇メートル下方のプンゲン氷河右岸の草

に設けられた。



田中、

甲田、

黒田の若手七隊員により東壁のルート工作が繰り

作る。 雪が深く、ここの道つけは全期間にわたって苦労した。結局私 九〇〇メートルのP1手前の台地に第三キャンプを建設した。 根沿いに進むことが出来ず、北側をかなり廻りこむ形で標高五 人は甲田、 から ははかばかしく進まない。 山側氷河沿いに進むが、 びえている。ここから第二キャンプ予定地へは東尾根北側面の 隊の第二キャンプの西より約二○○メートル、標高五一○○メ キャンプを建設したのは九月二十七日であった。ここは第二次 と黒田と牧野が先行し、つづいて住吉隊長・石浜・田中が第 かったものの、降雪時は表層雪崩が多発した。上部の急斜面は るが、その後しばしば氷河上部を洗う大雪崩が観察された。 は、ここベース・キャンプから見る限りでは魅力的な登路であ られるという判断が下った。 またどる東尾根ルートがより安全で、かつ迅速に東壁直下に出 直下の鞍部へ出るルートを調べたが、第二次隊の登路をそのま 建設され、 ス・キャンプより東尾根へ登るルートは氷雪崩の危険は少な ルの氷の棚の上で、 この付近は第二次隊の時にくらべると山容が変化し、 牧野のサポートを得てC1の手前に第三キャンプを 渡部、 黒田、 毎日十時頃からは天候が悪化し、 頭上には東尾根の大きな黄色い岩がそ ダワ・ノルブが入る。十月五日、 三十日P2の東北部に第二キャンプ 氷河をダイレクトに登るルー ~ 1

窓三キャンプのすぐ上は約三十メートルの氷壁であり、ここの第三キャンプのすぐ上は約三十メートルの第四キャンプ予定地に到とサーダーが標高六二○○メートルの第四キャンプ予定地に到とサーダーが標高六二○○メートルの第四キャンプ予定地に到とサーダーが標高六二○○メートルの第四キャンプであり、ここの第三キャンプのすぐ上は約三十メートルの氷壁であり、ここの第三キャンプのすぐ上は約三十メートルの氷壁であり、ここの第三キャンプのすぐ上は約三十メートルの氷壁であり、ここの

不良であり視界が悪い。

まず偵察としてプンゲン氷河から本峰

九月二十三日より登山活動がはじまった。天候は依然として

プを建設した。この日から一週間、牧野、三沢、 浜、渡部が遂に本峰直下六八五〇メートルの地点に第六キャン し、実際に見ると、危険な個所もなく、二十四日には牧野、 距離的に長くかつ高度差もあり、 プから第六キャンプへの登路は、 ふくらみがわずかに頂上へのルートを示していた。 壁は青光りのする急斜面の連続であり、頂上へ突き上げる氷の ルの地点に第五キャンプを建設した。ここから仰ぎ見る東峰東 高到達点を越えて遂に東峰・P1の鞍部、 ーダーが第四キャンプへ、十八日にはこの三人が第二次隊の最 た。天候が安定したこともあって、十七日には渡部、 十月十四日には先きに休養をとっていた隊員が登山 もっとも心配していた。 ヒマルチュリからの写真では 標高六三五〇メー 渡部、 第五キャ 黒田、 を開始 カン

渡部が約七二〇〇メート

ルに進み、第六へは隊長が、第五へは私と三枝が入り、

返し行なわれた。二十八日には石浜、

田中のサポートをうけた黒田、甲田の両隊員は早朝より行動を れはじめた。 終了した。九日、うろこ雲の中にそびえるP二九に最後の挨拶 キャンプへ登りはじめた。各キャンプの撤収は十一月七日無事 で交信の中継のためにベースで頑張っていた大工原隊員が第三 な声がトランシーバーにのって各テントに飛んだ。そして今ま もう限界であった。かくしてその夜、隊長の撤収をつげる悲痛 は急に下がりはじめ、 のペースでは更に一週間の工作が必要であろう。しかし、 われわれは持っていない。このまま直接頂上に向かうには現在 テントがほしい。しかし、この急斜面に張るに適したテントを ○メートルまで進んだ。これが今回の遠征の最高到達点となっ いに傾斜が増しはじめ、 ク体制が整った。この頃まで壁の工作は順調に進んだが、 十一月二十四日カトマンズに到着。二十六日には外務省を 残り約四五〇メートルを登るためにはこの地点にもら一つ われわれは再びトリスリを目指してキャラバンを開始 午後二時すでに日蔭となった東壁のほぼ中央部七四〇 十一月一日、 強風が吹き出した。食糧も隊員の体力も 前日の工作終了点に到着する時刻が遅 強風が頂稜を洗いはじめる。石浜と 気温 しだ

訪れ、一九七○年秋の登山許可を申請し帰国の途についた。

## らと がき

る日を待ってカンバ兵が住みついている。サマとチベットとの ていった。なお、サマとローの中間には未だにチベットへ戻れ 中一度だけサマの住民がベースを訪れ、マナスルには登らせな 書の不備でリエゾン・オフィサーの許可がおりなかった。 ればサマ部落を訪れたいという希望をもっていたが、 まく行なわれたことの二つをあげることが出来よう。 部キャンプ建設が遅れたのも残念である。成果としては①東壁 ていたが、現実の氷壁は更にきびしかった。天候不良のため上 因は最後の壁に対する認識が甘かったというより他ない。 交易はかなり盛んな様子で、ラルキヤ・マーケットには役人が いと申し出たが、P二九を登るのだと伝えるとおとなしく帰っ からの登頂に明るい見通しを持ったこと②高度順化が非常にう われは壁に対する一週間の工作で頂上に達せられるものと考え 今となっては全て結果論ではあるが、やはり今回の失敗の原 通行許可 帰路出来

人国境通過をチェックしているとのことであった。

名誉会員)という登山家に興味をもったのである。

した。初期の『山岳』をにぎわした大平晟(会員番号三十一、

今年四月四日、七月十一日と二度にわたって大平家をお訪ね

# 大平晟メモ

辺真

渡

は思えない。
は思えない。
は思えない。
は思えない。

前庭は実際より広く感じられる。

は石垣が組んであり、門から玄関への道順は逆L字に敷かれ、は石垣が組んであり、門から玄関への道順は逆L字に敷かれ、道路側である。道路側である。道路側である。道路側である。

第二十五年第三号までで合計三十八篇に及ぶ。編者注・大平晟氏が『山岳』に寄せられた記文は、第一年第一号から

教え子、または山の後輩にあたる高頭仁兵衛はあまりに有名であり、いろいろと語られているが、大平の場合、死亡時期であり、いろいろと語られているが、大平の場合、死亡時期追悼文のようなものも載っていないということを藤島玄氏に聞追悼文のようなものも載っていないということを藤島玄氏に聞かされた。登山史上の大平は、高頭の顔を出す時にしか現われかされた。登山史上の大平は、高頭の顔を出す時にしか現われが、つまり高頭という刺身のツマにしか扱われていない場合がず、つまり高頭という刺身のツマにしか扱われていない場合がず、つまり高頭という刺身のツマにしか扱われていない場合がある。

大平には大平らしいユニークな登山があったし、独自の登山大平には大平らしいユニークな登山家の一人である。が、だんだんと忘れさられていく登山家の一人である。が、だんだんと忘れさられていく登山家の一人である。お孫さんの成氏よりお話をうかがったり、遺品を見せていたが、だんだんとおいた。もう少し評価されてもいいと思うのだいたりして若干のメモをとっておいた。

## レリーフ

して教え子たちの手で建てられることになった。楽天園というった。そして今秋、同じレリーフが大平邸前の楽天園に、主との発起人の努力により苗場山頂に温顔の大平最のレリーフが建昭和十年夏、高頭、藤島、稲田、雲尾氏等教え子、県内岳人

(121)

育て楽しんでいた。その植物目録は「千紅万緑」に詳しい。る。大平は自らを、楽天園主人と号し、晩年は数百種の植物をのは大正四年片貝小学校の同窓生が贈った二百坪の園芸地であ

には整備されるだろう。 戦時中畠にしたため現在は荒れているが、レリーフがたつ頃

リエにあったのである。 人も実は知らぬことだったが、それは製作者羽下修三氏のアト人も実は知らぬことだったが、それは製作者羽下修三氏のアト

羽下氏がこの作品に打込んだのは四十代の製作意欲のもっと 羽下氏がこの作品に打込んだのは四十代の製作、愛蔵した。依頼主に渡してしまうのが惜しく、もう一つ製作、愛蔵した。依頼主に渡してしまうのが惜しく、もう一つ製作、愛蔵した。依頼主に渡してしまうのが惜しく、もう一つ製作、愛蔵した。依頼主に渡してしまうのが惜しく、もう一つ製作、愛蔵していたのであった。個展等にも度や出品していたというくいが、

ところで氏は、最近悟るところあって身辺の整理に思いをはせ、その作品を遺族に贈ることを決意された。大平家へ直接おせ、その作品を遺族に贈ることを決意された。大平家へ直接おき、小千谷市公民館の手を経由して昨夏大平家へ帰ったのである。いかにも芸術家らしい細かい神経の行き届いたとりはからいであった。

たってもらおうと準備に入り、今秋 (一九七○年) 十一月三日教え子たちの喜びはことのほかで、さっそく先生に楽天園に

完成の予定である。

ふたたび楽天園にたって金倉山を日に日に仰ぎ眺めることが大平晟かえる。

七月十一日に訪れた時、昭和十年の「大平晟先生寿像建設会できる。けだし満足なことと思う。

そのような関係で募金に応じたのであろう。信にも氏の名前が載っており、田部重治氏らとも登山をされていた。著『岩波茂雄伝』にくわしく出ている。また当時の『山岳』の会員通編者注・岩波氏が登山を好まれたのは有名で、氏の登山歴は安部能成編

## 自叙伝

較的新しい『山岳』(昭和十年前後のもの) が数十冊数えられた。山に関係した本ですらほとんど散逸しており、わずかに比大平が愛蔵していた書物を見たいという期待はう らぎ られ

「卑賎ノ家ニ生レ困苦ノ間ニ成長シ、

而シテ遂ニ身豊富ヲ致シ

るくらいである。

る。 
を和書風に製本されてある。教師らしい几帳面さがうかがわれい穫であった。毛筆で和罫紙に美しい楷書体で書かれ、きちん収穫であった。毛筆で和罫紙に美しい楷書体で書かれ、きちんと和書風に製本されてある。 
を初書風に製本されてある。教師らしい几帳面さがうかがわれる。

私をして驚喜せしめたものは「大平最自叙伝」という自筆の私のように大平に興味をいだく者には大いに参考になった。や昭和十三年に出版した私家版「結婚五十周年に方りて」等はまた、晩年に書いた「履世自志」というエンピツ書きのメモ

貧農の伜としての生いたちから、明治十三年の片貝小学校代自伝があったことである。

費してこの八十数頁を書いた。 ・その苦闘の歴史を子孫に伝えようと明治三十年、一カ年を若さで校長に出世するということは当時としては異 例 で あっしく律した半生を生々しく伝えている。貧農の伜が三十二歳の用教員をふり出しに、明治三十年、同校々長にいたる自己を厳

ねんに清書されたものである(挿入写真参照)。 は、越後立部長藤島玄氏が『越後山岳』 にたんり寄贈された。高頭翁が原稿用紙(虎ノ門時代の『山岳』用)にたんり寄贈された。高頭翁が原稿用紙(虎ノ門時代の『山岳』用)にたんり寄贈された。高頭翁が原稿用紙(虎ノ門時代の『山岳』用)にたんり寄贈されたものである(挿入写真参照)。

警メ、其奢逸ニ流ルルヲ戒ント欲ス。是此ノ自叙伝ノ起ル所以実歴ヲ叙シテ子孫ヲシテ其祖業ヲ想ハシメ其小成ニ安ンスルヲシ、具サニ艱難辛苦ヲ嘗メ、坎坷不遇ヲ重ヌルオヤ。故ニ之カ経歴ヲ精叙シ以テ後昆ニ遺セリ。―中略―況ンヤ予清貧ニ生活国ノ偉人「ベンジャミン・フランクリン」氏ニアラスヤ、氏其英名世界ニ著レ、晩年ニ至ルマテ能ク其景福ヲ享有セシハ、米英名世界ニ著レ、晩年ニ至ルマテ能ク其景福ヲ享有セシハ、米

筆をとった。他の愛読書に福沢論吉があったに違いない。針の書として当時の若者に盛んに読まれた。刺激されて自らも冒頭の緒言である。フランクリンの自伝は明治中期、人生指

ナリ。」

てこれしかなかったといえるだろう。よりも志向性の極めて高かった大平の歩む道は、環境からいっし、上司にはよく仕えた。明治的立身出世主義をうんぬんするし、上司にはよく全をし、兄弟をいつくしみ、よく働きよく勉強を

モ猶ホ医師トナラサリシヲ喜ヘリ」(『自叙伝』から)「文一郎氏予カ励精固密ナルニ感シ屡予ニ医師トナルヘキヲ勧「文一郎氏予カ励精固密ナルニ感シ屡予ニ医師トナルヘキヲ勧「文一郎氏予カ励精固密ナルニ感シ屡予ニ医師トナルヘキヲ勧

差別がなかった (あたり前のことが当時珍らしかった)。 やや師範出の大平は光った。村長の息子であれ、豪家の子弟であれ

寺小屋あがりの無気力な教師が多数いたなかにあって、

その姿が子供たちを魅了したのであった。厳しい一面はあったが、自らの行動実践により子供を導いた。

と、および片貝高等小学校における寮制である。 大平の教育の大きな特徴は、団体による体育を最重視したこ

を入寮させた。近所の片貝町の父兄ですら入寮を希望したもの生の寮に入れたいために、近郊の教育熱心な父兄が争って子弟片貝校の寮は有名であった。片貝校の寮というよりは大平先

もいたという。

「大平先生と不肖義明」から)
「先生は自ら進んで寄宿舎の舎監は勿論料理其の他の一切を御まする』と御返事致しまして 御助力至しました。」(高頭仁兵衛が出来まするが、御教示を下さりますれば人並に御援助は致しが出来まするが、御教示を下さりますれば人並に御援助は致しが出来まするが、御教示を下さりますれば人並に御援助は致して、

から

リ、其能ク予ニ心服セルヲ以テ無上ノ快事トナセリ。」(「自叙伝

(『山岳』第二十五年第三号所収、高頭仁兵衛「山岳会と山嶽志」から)すると、 金倉山や 弥彦山や米山の登攀談を致さ れ ま し た。」る所だけが白く見えておりました。大平先生は折りがあられまておりましたので、日に焼けましたお顔に菅笠の緒の当ります

大正三年、第二の郷村、高梨小学校長に就任、大正十三年六寮生活ぶりが眼に浮かぶようである。

く続けられた。この飽くことないピーク・ハンターの足印は北年九月の金倉山登山に終わる実に延々六十六年間に欠くことな大平の登山は明治十二年六月、初めて米山に登り、昭和十五

は伝統的に今でも残っている。

の種は消えていない。片貝・高梨地区の人々の教育熱心の風土

以後悠々自適の生活を送った。大平の蒔いた一粒

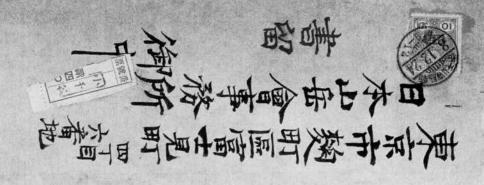
十歳で退職、

大正八年、日本山岳会より名誉会員に推薦されている。これに発達な当時としては驚異的な数字である。そして、この間に、は樺太から南は台湾まで実に百十六座におよぶ。交通機関の未

のほど本会に寄贈された(挿入写真参照) 残っており、神谷恭氏の手もとに封筒とともに保存されていたが、こ残っており、神谷恭氏の手もとに封筒とともに保存されていたが、こ残っており、神子に対する挨拶状がは高頭の力が大いに働いた。

『其の理由は如何』と質問を致しますと『誠に失礼の申し条でを名誉会員に推薦を致しましょう』と申されましたから私は、「大正八年の春『山岳』の編輯の時に梅沢親光君が『大平さん

「大平先生は日曜や祭日の休暇には必らず附近の小山に登られ



日本山岳會 大正八年三月十二日 大平 見顧 追子近日中祖影都と仕八子保 敦見矣"神祭秀益"等為"是什么"展《我民人"、我是人之人,你是以是了表"條之、不假早意、對、謹、拜承依禁仕候小生读法得素日申其器、非又自有"予范缩"堪口到、御推篇「蒙》之八辈生、光禁下入此所工有五年亦成:寶燦然入江胃每日目名聚言會

大平武自殺得 大ラ一身二長ハシタル大人豪傑,傳記八其世 經歷う精致シ以テ後見き遣とり買き夫ノ剛健 ラ船り其台景温ララ有セシハ米風ノ情人、ベンジ ヤミンフランクリン氏ニアラスヤ氏ハ自生 ナル意志ョ以ラ真善ナル道德三則り宇宙ノ母 三身趣多高の致シ英名世界:著シ晩年三至 論高遠十一道德解釋 里腹、家二生レ母苦、問二成長シ而シテ ノ氣風ラ陶冶スル 緒言 移車 力をかテムタナル コリ 大平最自記 更三數層一勢成 哲学

> ルビ展ニ不・一町不禁區芝市寮東 所 料 棚 育 岳 山 本 日 豆 鉄 七 〇 三

所 縣 蒐 稿 印

22.11.3

も畢竟は貴下の御蔭で有ります』」、高頭仁兵衛「大平先生と不肖義 と尽力をする人が他にありますか』と申されますと、

訳ですね。拙者謹んで生涯の光栄として御受け致します。これ た』『では一小学教員の拙者が博士以上の御待遇を御受け致す されましたから私は『武田君も大賛成でありました―中略―高 ず否決するという内規がありました。私がその旨を先生に御伝 でも名誉会員推薦に不賛成の人がある時には理由の如何を問は が『それに君を門下に出した丈けでも名誉会員に推薦する価値 頭君から先生に御承知を得る事に致しましょう、とのことでし は有りますからね』と申されました。其の時分には役員の一人 え致しますと先生は『武田さんは何んと申されましたか』と申 山川黙君

は有りますが、一小学校教員の身分であれだけ熱心の山岳研

究

『山岳』が手許にないので難渋している。

いずれは作って

たい。

山名が羅列されている。それを載せておく。 「履世自志」に「予が経験山岳」という項があり、 足を印した

△樺太一鈴谷岳。

△北海道—雄阿寒岳、 珠岳、 駒岳。 雌阿寒岳、 大雪山、樽前山、 真狩岳、

有

△本州—恐山、八甲田山、 榛名山、 海山、 庚申山、日光白根山、草津白根山、会津駒岳、燧岳、 月山、 石山、金城山、飯士山、仙ノ倉山、苗場山、 越三国山、妙高山、火打岳、焼山、 五頭山、 鳥海山、金北山、那須岳、三本槍岳、筑波山、 中ノ岳、 妙義山、 菱岳、栗ケ岳、守門山、鋸山、金倉山、浅草岳、 魚沼駒ケ岳、 吾妻山、 岩木山、 男体山、 弥彦山、米山、 岩手山、 南葉山、 赤薙山、 駒形岳、 谷川岳、 頚城黒姫山、 刈羽黒姫山、 磐梯山、 湯殿 赤城山 浅間 至仏 飯豊山 Щ Ŀ 八 山 八

明」から

Щ 黒姫山、 達磨山、有度山、朝熊山、 焼岳、針ノ木峠、蓮華山(白馬)、立山、白山、 五湖山、 高野山、 富士山、 那智山、 三峰山、 三ッ峠、 金剛山、 金峰山、 伊吹山、比叡山、愛鷹山、 御坂峠、黒岳、十二ケ岳、 瑞牆山、箱根駒ケ岳、 葛城山、 摩耶山、六甲山、吉 戸隠山、 烏帽子 御在所 日金山 信

主な登山の年譜を作製しようとしたが、これも根本になる古い 予カ四人目ナリ」と誇らしげに「履世自志」に書いている。 大平の厖大な山行の登山歴をたどるのは容易なわざでない。

野郡峰、

大台ケ原山の

名誉会員推セラル。志賀重昻、白井光太郎、ウェストンニ次キ る。本人は無邪気に「大正八年十二月二十日、日本山岳会ヨリ ないかとうずうずして待っていたに 違いない。「高頭君の 顔を

碓氷嶺、

八ケ岳、木曽駒ケ岳、木曽御岳山、

乗鞍岳、

槍ケ岳

たててやろう」と当時の幹事連がこの挙にでたものと推量され

と高頭仁兵衛は書いているが、日頃高頭は大平を名誉会員に推

したく、さりとて自分の口からいい出せず、誰れかいってくれ

△四国—石鎚山、神懸山

△九州—彦山、鶴見岳、由布岳、久住山、阿蘇山、霧島山、開

聞岳、雲仙岳。

△朝鮮─金剛山

△台湾─新高山(玉山)、南湖大山、大屯山。

### 大平家

展(幼名友三郎)の父は覚三郎、母はトシである。 高梨の隣長(幼名友三郎)の父は覚三郎、母は六郎右衛門といった。 五村五辺村の旧家六兵衛の分家で屋号は六郎右衛門といった。 五村五辺村の旧家六兵衛の分家で屋号は六郎右衛門といった。 五村五辺村の旧家六兵衛の分家で屋号は六郎右衛門といった。 五人 ( ) がった。 () がった。 (

月に父覚三郎は病没した。明治十八年五月の信濃川の氾濫により五辺の屋敷は壊滅、七代用教員(当時授業生)を二年つとめ、新潟師範に入校した。代出教員(当時授業生)を二年つとめ、新潟師範に入校した。

明治二十二年、同村の岡村家三女のハレ子と結婚、いらい二を新築した。六郎右衛門は高梨村に移転したのである。百円の借金をして、水害の心配のない高梨の現在の住所に家屋で土業、高梨校の教鞭をとる。同時に

なかった。もうだれもかまわなかった。若い時から皇居はあっ

先生、皇居はあちらでございます」と注意したのだが、きか

男、三女を得たが、長、三女は早世している。長岡市、脇屋家年生れだから今年七十五歳のはずである。長男国斌、二男富士年生れだから今年七十五歳のはずである。長男国斌、二男富士男市氏はいずれもいまはないが、国斌氏は実に九人の子供をもうけた。うち二人の女子は病没、二人の男子は戦死している。現在、晟の孫は長男進、四男剛、五男成、六男の亮、二女の現在、晟の孫は長男進、四男剛、五男成、六男の亮、二女の現在、晟の孫は長男進、四男剛、五男成、六男の亮、二女の現たが、今でも山を続けられているだろうか。

## エピソード

昭和十五年十一月三日、紀元節の朝、髭をたくわえた大平元のまり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちが、元年生の列に並んでいた成だけがあかい顔をしていた。カスクス忍び笑いが聞こえてくるのだが、そんな気配もない。クスクス忍び笑いが聞こえてくるのだが、そんな気配もない。クスクス忍び笑いが聞こえてくるのだが、そんな気配もない。からなりにかからないが聞いたが聞いたが、そんな気配もない。からなりにからないが聞いたのである。当初は若い先生たちがつまり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがつまり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがつまり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがつまり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがつまり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがつまり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがつなり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがつなり、いつもそうだったのである。当初は若い先生たちがたり、いつもそうだったのである。当初は若いた生たちがいる。

たん信じたものは疑わなかったのである。 ちと決めていたのである。地歴を担当したのであったが、いっ

喝一声が落ちてくるのである。 おうものなら「村の若い衆の歌うような唄をうたうな!」の大 いるところ家屋に笑声は聞けなかった。うっかり歌謡曲でも歌 家庭にあっては自らを家長と称し、大いにいばっていた。晟

易させられるのであった。「お爺さんの土産もいいが、あれが ないと――」と思うのであった。 のであった。興がのると延々数時にわたることがあり、全員辟 室に並べ、正座をさせていちいち土産の故事来歴を詳しく語る ってくるのを忘れなかった。その先が大変であった。全員を一 しかし、家長は山や遊行の帰りにはかならず全員に土産を買

連発したそうである。 た。家長は掌を額にかざし眺めあげ「絶景ナリ、絶景ナリ」を の時、鎖場にさしかかると先行に白衣の女性パーティがあっ その家長もいったん山へ入ると模様は少し変った。八海登山

くれた。 てきて「こんなのがありました」といって一枚の色紙を見せて 四月四日、そろそろ大平家を辞そうとすると成氏が奥から出

米山や百を越しませ 喜久の主

義明

「お爺さんはよい時死んでくれた。もし敗戦を知ったら自害し 高頭が古希を祝って贈ったものである。

たかも知れぬ

た。この頃、日本の大本営はまだ味方の劣勢を明らかにしなか った。教壇では思いのままふるまい、子供たちに慕われた。好 昭和十八年一月十九日、第二回目の脳卆中でこの 世 を去

だけ歩いた。幸福な一生だった。

きな山は妻ハレ子や高頭のようなよい協力者に恵まれ、好きな

雪であった。 遺体は高梨、 竜泉寺裏の雪庭で茶毗に付された。その年は大

## 大平晟略年譜

慶応元年(一八六五)七月二十二日、三島郡五辺村の小農の 家に生る。幼名友三郎。父覚三郎、母トシ。

明治二年(一八六九)戸外遊戯中、生家足下の信濃川に転落 た。 トシにより一命を助けらる。幼時はあばれん坊で手こずらし

•明治五年(一八七二)トシの実家山賀家に寄宿。公立小学校 明治十二年(一八七九)六月。学友山賀伴次郎、康雄と共に 鴻巣校入校

米山へ登り山への興味をおぼえる。翌年弥彦山へ。同年十一 上等小学校全科を卆業。

(127)

明治十三年(一八八〇) 山賀家のすすめで片貝小学校の授業

明治十四年(一八八一)十二月二十四日、幼名友三郎を長に 生(代用教員)となる。新野文資家寄宿

+: 3- 1

・明治十五年(一八八二)一月、母トシの強い要請により高梨 小学校に転職。

- •明治十六年(一八八三) 員免許試験を受け合格 新潟学校 (師範の前身)で第二種教
- •明治十七年(一八八四)新潟師範学校入校
- •明治十八年(一八八五)五月、 す。家族は五辺村山崎斧右衛門宅に仮寓。同年七月四日 覚三郎死去。 信濃川氾濫により同家 壊 父 滅
- 明治十九年(一八八六)二月、新潟師範を首席で卆業。 十円であったが、村水難により村費困窮を理由に内五円を一 高梨村の要請により再び高梨校の教鞭をとる。辞令書で月給 同年

年間同村へ寄附するよう頼まれ、それを受く。

明治二十年(一八八七)高梨村に新居を建築。教育者、村の 退職を決意。同年、幼時よりの許婚者、山賀ムロ子との婚約 あり、村会はさらに五十銭の減俸を要求す。心のうちを知り リーダーとしてのはなばなしい活躍に村会議員中に嫉む者が

明治二十一年(一八八八)十月十七日、岡村ハレ子と結婚。

を破棄する。同年四月二日、片貝小学校高等科に任ずる。

- 明治二十三年(一八九〇)二日、長男国斌生る。
- 明治二十六年(一八九三)九月、師範にて県初の正教員講習 会受講。試験の結果、首席で資格を得る。
- 明治二十八年(一八九五)三月、教育上の功労により知事阿
- 明治三十年(一八九七)九月、片貝小学校長に任ぜらる。 部浩より硯箱賞を受く。

同

- 年十二月「大平晟自叙伝」を書き上ぐ。
- •明治三十五年(一九〇二)五月、片貝上等小学校長に任ぜら る

明治三十九年(一九〇六)三月、日本山岳会入会。会員番号

明治四十年(一九〇七)七月、母トシ死去。

- 大正三年(一九一四)十二月、第二の郷村高梨校々長に任ぜ らる。以後山行多し。
- 大正四年(一九一五)三月、片貝校同窓生より自宅前に二百 坪の園芸地を贈らる。楽天園と称し、園芸を楽しむ
- •大正十三年(一九二四)三月、 大正八年(一九一九)十二月二十日、日本山岳会より名誉会 員に推せらる。 高梨校を退職。
- の生活 以後悠々自適
- 昭和七年(一九三二)斯文会より長年の教育、 導の功により表彰さる。 登山の普及指

により苗場山頂にそのレリーフがたつ。

昭和十年(一九三五)七月二十八日、日本山岳会員、教え子

- •昭和十三年(一九三八)十月、私家版「結婚五十年に方り て」を出版。
- 登る。これが最後の登山となる。翌十月第一回目の脳卆中に 昭和十五年(一九四〇)九月、高梨校六年生と共に金倉山に
- ・昭和十八年(一九四三)一月十九日、脳卆中にて死去。戒名 「崇山鑑水居士」。

昭和四十四年(一九六九)五月、苗場山頂にあるレリーフと

同型同大のもう一つの作品が製作者羽下修三氏から遺族に贈

(一九七〇・九・四・小千谷病院七〇二号室にて)

られる。四十五年十一月三日、楽天園に建立。

# エベレスト第一次偵察

藤田佳宏

## 隊の編成

登山のための偵察は本来「どこを」、「どうやって」登るかと を表その目的が「登山」と「撮影」という異なった目的であった、同時期、同一ルートで二隊が許可を受けた前例がなく、たと、の時期、同一ルートで二隊が許可を受けた前例がなく、たと、の時期、同一ルートで二隊が許可を受けた前例がなく、たと、の時期、同一ルートで二隊が許可を受けた前例がなく、たと、の時期、同一ルートで二隊が許可を受けた前例がなく、たと、それをはっきり認識するより、混同し、誤解し、前例がなく、たと、それをはっきり認識するより、混同し、誤解し、前例がない。 とえその目的が「登山」と「撮影」という異なった目的であった。 をえその目的が「登山」と「撮影」という異なった目的であった。 とえその目的が「登山」と「撮影」という異なった目的であった。 とえその目的が「登山」と「撮影」という異なった目的であった。

は、内外にそんなモヤが立ち始めた矢先であった。を得ないことだったかもしれない。偵察隊の派遣が 決っ たのないという一点にまどわされ、いろいろ取沙汰されるのは止む

これは何よりもまずはっきりさせなければならない。つまりのもう一つの目的とはこの二つの隊に与えられた入山許可の別のもう一つの目的とはこの二つの隊に与えられた入山許可の所のもう一つの目的とはこの二つの隊に与えられた入山許可の情察隊は当然現地で活動たけなわの頃で、それをこれから準備し、出発するというのでは、ことと次第によっては遅すぎての債察隊は当然現地で活動たけなわの頃で、それをこれから準備し、出発するというのでは、ことと次第によっては遅すぎての債察隊は当然現地で活動たけなわの頃で、それをこれから準備し、出発するというのでは、ことと次第によっては遅すぎて方はできていてしかるべきであるが、当時のムードとしては、エンジンがフル回転するにはまだかなり時間がかかりそうな大方はできていてしかるべきであるが、当時のムードとしては、オンジンがフル回転するにはまだかなり時間がかかりそうな大方はできていてしかるべきであるが、当時のよードとしては、オンジンがフル回転するにはまだかなり時間がかかりそうな大方はできていてしかるべきであるが、当時重要な問題であったので態度をはっきりさせることこそ、当時重要な問題であったのである。

みようということであった。そして主な調査事項として、台長予定はウェスタン・クームに入り、できれば南壁に取りついてたのが十七日。出発が二十三日と決った。ヒマラヤ登山としてたのが十七日。出発が二十三日と決った。ヒマラヤ登山としてこのような背景のもとに、四月十四日、初めて偵察隊派遣のこのような背景のもとに、四月十四日、初めて偵察隊派遣の

と、などであった。 の難易度を確認すること、自南壁のルートの見通しを立てるこ いブランクで変わったであろうシェルパの質と量の程度を把握 優秀なシェルパを確保すること、ロアイス・フォール通過

バイ・ケースでいこうということになった。 動のタクティックスに関しては、道中考えればいい、ケース・ できた。こうしてあわただしく第一次偵察隊は出発し、登山活 成の市販品で賄い、 一・三トンの荷物は、かろうじて出発の前日、空輸することが 偵察行に必要な装備、 一部のものは借用して間にあわせ、 食糧は即日収集に着手し、ほとんど既

偵察隊員とシェルパは次のとおり。 (36歳)

田

宏

員 植 菅 村 直 E 27歳 24歳

報道隊員 相 沢 文 (36歳)

サーダー 7 ン・ノルブ V 1 (35歳) (35歳)

シェルパ パサン・ノルブ (29歳)

クパ・ノルブ (30歳)

ン・チョタ (35歳)

## 行動日誌より

この入山許可の申請は、 で、特に外国で聞く外国人の演奏する君が代にいたく胸をうた はカトマンズ在住の各国大公使等五○○人。 なかな かの 盛 会 天皇誕生日の祝賀パーティに招待を受け、全員で出席。 に合わせることとし、先を急いだ。夜は日本大使公邸において ラルミンの梯子、スキー、フィックスド・バーなどの長尺物を べてオーケー。但し、別送航空貨物五十八個のうち一個、ジュ 今までのことが、馬鹿々々しくなるほどほっとして、これです めの偵察隊であることを強調したが、いろいろと心配していた エ・シャール隊(一九六五年)の残置装備の中から借用して間 一梱包したものが未着で、この不足はタンボチェで早大ローツ 四月二十九日、ネパール外務省より入山許可書を受けとる。 あくまでも一九七○年プレの本隊のた

やっとカトマンズを発つ日となった。飛行機は東に向かって真 雨があり、ルクラへの飛行が中止となり、やきもきしていたが 近づく、その向こうに真白な峰々、ヒマラヤ、その中に見える 起伏のある樹海に変り、正面にクンビラが見える。ぐんぐんと 北上する。赤っ茶けたハゲ山、白い粘土質の峠、それが大きな 直ぐに飛び立ち、間もなく大きく旋回、ドゥド・コシに沿って 五月五日、カトマンズでは珍しく四月三〇日より四日間の降

エベレストの南壁。黒く、どこからでも見える、目立つエベレ

荷物と身体が前にのめりそうになって機は止った。行く。がくんと大きなショックがあって着地。制動がかかる。行く。がくんと大きなショックがあって着地。制動がかかる。機はドゥド・コシの上で一回転し、急降下に入った。どんど

目指すルクラに着いた。標高二七〇〇メートル。かつて十余

日もかけたキャラバンの末、訪れることのできたルクラも、カ日もかけたキャラバンの末、訪れることのできたルクラも、カーマンズから僅か一時間足らずで来てしまった。土ぼこりがおさまると、シェルパの子供たちが来る。はだしの子、ふところトマンズに着いてすぐ「ルクラに行け、雇ってやるぞ」と言っトマンズに着いてすぐ「ルクラに行け、雇ってやるぞ」と言っれより誇らしげで、これで仕事にありつけるといった気持の方が強いのかもしれない。手早く機内の荷物を下ろし、滑走路の外に運び去って行く。子供も女も、まだ雇傭していないシェルパたちも皆、手伝って運んでいる。いよいよこれで私たちの入パたちも皆、手伝って運んでいる。いよいよこれで私たちの入パたちも皆、手伝って運んでいる。いよいよこれで私たちの入りの第一歩は始まった。

が、「ボーターたちはタンボチェまでだと言っているが、どうな押すと、「少し遠いが、行かれれば行く」と言う。ところが植村押すと、「少し遠いが、行かれれば行く」と言う。とサーダーに念を

ェで十分な高度順化をしていくのが決ったコースのようだが、ベレストの遠征隊は、ここ地上最高の楽園といわれるタンボチーターたちにはタンボチェまでと言っているようだ。普通、エブに対しては、できればパンボチェまで行くと言いながら、ポっているのか」と言って来た。どうもチョタレイはわれわれサー

た。「こっちへ来い!」「イエス・サー、バラサーブ」私の態度ルほど前を歩き始めていたチョタレイは、立ち止って振り返っない。私は大声で彼を呼び寄せた。「チョタレイ!」二十メート日数がないのだ。それに、そんなチョタレイの態度が気に入ら

自分たちの場合はそれをあてはめるわけにはいかない。何しろ

ボチェは少し遠い。ポーターたちは無理だ、行けないと言って今日はタンボチェまでだと言っているぞ。 どうなんだ」「パンパーチョタレイ! お前はサーダーか、ポーターか。ボーターがが尋常でないのを見て取ったチョタレイは、すっとんで来た。

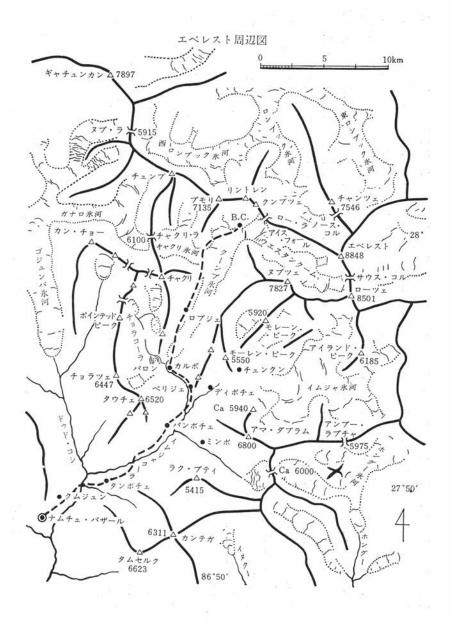
いる」

定はパンボチェだぞ、早く行け!」 連れて行くことだ。それができないなら、お前を必要としない連れて行くことだ。それができないなら、お前を必要としない

チョタレイは私のけんまくに驚いたのか、何やら大声でポー「イエス・サー、バラサーブ」

ターたちに連絡すると、先を急いだ。ヒマラヤ遠征の成功の鍵は

(132)



できなければ、何とかしてこちらの意向どうりに動かすしかな 第一にシェルパの協力だ。上手に使えればそれでいい。それが

い。最初が肝心。私は追い打ちをかけた。

だろうな。手配がうまくいかなければ交替するぞ」 「ちょっと待て。タンボチェで荷物がふえるのはわかっている

みであり、あぶれていたものとて、ただ手をこまねいているわ る。まず第一に、時期が遅く、いいシェルパは他の隊に参加済 ただと思っていたが、実際にはそうはいかなかった こと であ 止で、シェルパが大勢遊んでいて、遠征隊が行けば引く手あま だ、大きな考え違いをしていたのは、長い間のヒマラヤ登山禁 たが、大体、サーダーもシェルパも及第点であったと思う。た 今回の偵察隊では、ナムチェを出る時こんないきさつもあっ

者もいた。そんなわけで、ソロ・クーンブでもいいシェルパは いうと、決して今となっては輝かしい経歴の持主ということで 手当がつかなかったが、では、いいシェルパというのは何かと はないであろう。 ついており、米国人のサーバントとして二年も働き続けている はナムチェのチェックポストでタイピストとして安定した職に けにはいかない。私たちがかつて使ったシェルパたちも、一人

が、ポーターもほとんど着いたというのに、菅沢だけがまだ来 ル) に着いた。明日は待望のベース・キャンプ入り。 ところ 五月十三日、今日の宿泊地ゴラクシェップ(五二〇〇メート

とだろう。私はシェルパ二名に菅沢を迎えにやった。

ない。つい今しがたまで一緒に歩いていたのに一体どうしたこ

「藤田君、菅沢君はかなり参っているらしいよ。頭が痛いと言

って、さっき深呼吸していたよ。酸素不足だな

ロブジェにはスイス人の若い女性が一人でおり、皆でいい気持 カルポからロブジェに着いた時から少し様子がおかしかった。 かに高度の影響である。そういえば昨日、五月十二日、ポロン 相沢がそう言って、本人もかなり頭痛がすると言った。

なかったようだ。夕方、薄暗くなってから雲が切れたので、 スに加わったりして楽しく騒いだのに、菅沢はあまり長続きし になって、シェルパを含め歌ったり踊ったり、シェルパ・ダン

ベレストの写真を撮りに裏山へ登った時、そういえば菅沢は登

っては来なかった。「しまった」私は自分の大きなミスが情け

富士山より高い山に登るのは初めて、高度順化はゼロ。ナムチ なかった。植村と私は高所の経験がある。しかし相沢と菅沢は

入り、そのまま五四○○メートルのベース・キャンプまで直行 順化にはならない。カトマンズから一気にルクラまで飛行機で ェで一日、ポロンカルポで一日、合わせて二日の休養では高度

になってしまった。 するのは、どだい無理なことは計算していたのに、ついその気 三十分ほどして菅沢が二人のシェルパに支えられて来た。 た

とえどんなに日数の制限があっても、四人のうちの一人が、

Ł

います、どうぞ」

ーダーとしての不手際を反省する他はなかった。 マラヤ登山の最初に考えるべき高度順化に失敗したことは、

えられぬほど元気で、ほっとした。 って来た。そのときは、高度の影響を受けたことなど、全く考 して相沢は五月十七日、菅沢は十九日にベース・キャンプに入 エルパー名、ポーター二名を付けてロブジェまで下ろした。そ 明けて五月十四日、菅沢に、付き添いとして相沢、それにシ

ずるよりは行なうが易い。BCから見たアイス・フォールは、 開けるものだ。もっとも、いつもトップに立っていた植村とシ きか、全く見当もつかなかったが、登り始めれば案外ルートは 大変なアルバイトだったようだ。 ェルパの一人は、時々詰っては右に左に、登ったり下りたり、 体どこから手をつけていいのか、どの辺にルートを求めるべ 五月十六日から、いよいよC1へのルート工作。 山登りは案

「こちらBC、こちらBC、ルート工作隊感度あったら応答願 トランシーバーの交信

「こちらルート工作隊、感度良好、どうぞ」

分もそこに止まったきりだけど、どうしたのか、どうぞ」 「はい、感度良好。BCから見ていると、君はさっきから十五

越せません。右手のクレバスに一旦下りるので、フィックスを

「そちらからは見えないと思いますが、水平に走るクレバスが

しています、どうぞ。」

うぞし

IJ

「馬鹿だな、左へ行け、左へ。右へ行ったら上が詰まるぞ、ど

下りてから、左へ行くつもりです。どうぞ」 「左はクレバスが続いていて行けません。一旦右のクレバスに

して下さい。」 へ取らないと、上が出られないから、思いきり左に寄るように 「はい、了解しました。しかし全体として、ルートはもっと左 文字に記してみると実に愉快だが、 当事者は双方とも真剣

決して楽しくはない。 それでも三日目、つまり十八日にはアイス・フォールの中、

標高五八五〇メートルのC1予定地までトレースを終えた。ル

開けると、早朝、コンディションのいい時だと、僅かに三時間 ート工作に三日を費したこのBCとC1間は、標高差五○○メ クレバスには丸太の橋がかけられた。こうしてルートが完全に ートル、要所要所にロープが固定され、氷壁に縄梯子をかけ、

足らずで行かれるようになった。

ちょうど航空母艦のように見える氷塊の右手で、近寄ると二十 場と予定していた。いざテントを張る段になって、私は何とな 手に縄梯子を登った所が平坦に開けており、当初ここをテント メートル位はあろうか、大きな氷壁の下をトラバースして、右 五月二十一日、いよいよC1を建設。ここはBCから見ると

をクレバスを一本渡った一〇〇メートル上部に移させた。午前を見当らない。しかし気になる。それだけの理由でテント地いる。どうも気になってしかたがない。かといって、他にいいいる。どうも気になってしかたがない。かといって、他にいいいる。どうも気になってしかたがない。かといって、他にいいいる。どうも気になってしかたがない。かといって、他にいいいる。どうも気になってしかたがない。かといって、他にいいいる。どうも気になる。それだけの理由でテント地がも見当らない。しかし気になる。それだけの理由でテント地がも見当らない。とは思えている。

していた隣りの、あの航空母艦のような大氷塊が、雪煙の中に然、地響きと轟音が起きた。つい今しがたまでテント地と予定十時三十分頃、荷物を移動させ、テントを建てている最中、突

沈んで行くのが見えた。実感としては、ゆっくりと、そして静

一旦トレースされれば、ここは荷物の中継集積所として、原則を変が入り、脇には十五メートルほどのクレバスがあいた。C亀裂が入り、脇には十五メートルほどのクレバスがあいた。Cルー・ラが見える。運がよかった。しかし新しいテント地とて快かに。雪煙が消えてからは、今までここからは見えなかったロかに。雪煙が消えてからは、今までここからは見えなかったロ

り始め、いよいよモンスーンに入ったのだ。

い、翌二十六日に全員BCに下山した。昼近くになって雪が降

下六五〇〇メートル付近の取付点まで行き、

南壁の偵察を行な

変して、混沌とした荒れた感じは全くなくなり、静寂で、神々稜寄りのため、ここからは南壁は見えない。しかし、様相は一クームに入った所、標高六一五○メートルの付近に張った。西五月二十四日、C2はアイス・フォールを越え、ウエスタン・

を、そのままかつぎ下ろしたということであった。壁の試登ができず、南壁直下に予定したC3用の器材、

としては居住しないようにするのがよいだろう。

さを痛感するばかりだった。この日、夜半から翌二十五日早朝二日もあれば行かれるように感じられ、山の持つ大きさと、高三ヵ所のテントを設けるのだが、見た感じでは一日、せいぜい

おさまり、C2の相沢、植村、それにシェルパの四名で南壁直りのことであったが、一時はBCもC1、C2も飛ばされるのりのことであったが、一時はBCもC1、C2も飛ばされるの子報通にかけて、約七~八時間、猛烈な強風が吹きまくった。これはにかけて、約七~八時間、猛烈な強風が吹きまくった。これはにかけて、約七~八時間、猛烈な強風が吹きまくった。これは

間であった。ただ残念なのは、予想外にモンスーンが早く、南山ではモンスーン前の一週間の好天をつかめといわれるが、私山ではモンスーン前の一週間の好天をつかめといわれるが、私たちは完全にその波に乗ったと言える。しかも無風快晴の八日とあれるが、私の値線の日一日持ち続けてくれた。一口に言って、ヒマラヤ登の値線の日一日持ち続けてくれた。一口に言って、ヒマラヤ登の値線がよかったのだろう。強風が吹き始めた二十四

うな近くに見える。ここからサウス・コルまで、実際には中に

正面にはローツェ・フェースが手の届きそ

の座にふさわしく、

この切り立った四〇〇メートルの壁を避け、左右に別れる両ル

してこの壁の上が頂上直下のイエローバンドである。

ルートは

## 三、偵察隊メモ

南壁は一九五一年のシプトン隊の報告によると、エベレストの南峰から真南にのびるリッジ、これを南稜とし、サウスコルの南峰から真南にのびるリッジ、これを南稜とし、サウスコルに通ずる東南稜との間を南壁と記してあるが、私はエベレストの頂上からイエローバンドを頭として扇型にひろがる壁、つまり南稜を含め、東南稜から西稜までの大岩壁を総称して南壁と言うべきだと思う。そして、もし区別するならば、南峰フェース、中央フェース、南西フェースという分け方の方が適当かとス、中央フェース、南西フェースという分け方の方が適当かと思う。

○メートルから八二○○メートルほどにかけて、大きな雪のバンドがあり、その下部には平均斜度約四十五~五○度、雪の大きなルンゼが走っており、一応ルートと考えられた。但し、落き雪のバンドの八○○メートル付近まではルートはこのルンも雪のバンドの八○○メートル付近まではルートはこのルンも雪のバンドの八○○メートルは近まではルートはこのルンも雪のバンドの八○○メートルほどにかけて、大きな雪のバンドがあり、その下部には平均斜度約四十五~五○度、雪の大いにがあり、その下部には平均斜度約四十五~五○度、雪の大いにがあり、その下部には平均斜度約四十五~五○とは、約四○○メートルの切り立った壁で、これは登れない。そ

さて、ルートは南壁(南西フェース)の中央に標高約八○○

っきりとしたことはわからなかった。

「は、双眼鏡で二○○○メートル以上も離れての観察なので、はば西稜に通じる。いずれにしても、これらは途中からイエローば西稜に通じる。いずれにしても、これらは途中からイエローは西稜に通じる。いずれにしても、これらは途中からイエローが考えられるが、右に入れば南峰のコル付近に、左に行け

ない壁ではないと思った。 ればわかることだ」と。 八四八メートルという高さの持つ意味を、あらゆる点から考え た。「登頂の問題は、一口で言えばその高さにある。 抵のことではないだろう。羽田からカトマンズに入る途中、ニ 酸素が少ない。 としては、登れるという判断をしてきた。これは岩登りの対象 コーリー氏に会うチャンスを持ったが、彼はその時、 ューデリーにおいて、一九六五年のインドのエベレスト隊隊長 登りが、どの程度生かされ、通用するかという点だと思えた。 らで、問題は、果たして八○○○メートルの上部で、 として考えた場合、決して登りにくい岩場ではないと考えたか 三〇〇〇メートルそこそこの岩場で登ってきていた今までの岩 の鍵は、 全体として私たちは、大づかみではあるが、 高度順化と酸素で、 寒い。 風が強い。これだけを考えてみても並大 私もこの度の偵察行で、 これがうまくいけば決して登れ 下から見た感じ 南壁登攀の第 つまり八 言って 私たちが

## 工 ベレスト第二次偵察

一九六九年秋=

下 秀

樹

宮

話でたたき起こされた。 過ぎまで見て寝た直後、七月二十一日の早朝、辰沼広吉氏の電 アポロが月から人類初の地球帰還を成功させたテレビを夜中

出 発 ま で

った後も、わたしの担当している当面の食糧の集荷と再パック 「お前に第二次の偵察に行ってもらうかもしれないよ」 睡いのとそんなつもりがまるでなかったわたしは、電話を切

の事で頭が一杯だった。

来ているようだったが、計画も目標もまだほとんど固まってお さをひしくと感ずるようになった。隊員候補の腹案はほぼ出 その後諸先輩に呼び出され、種々の話を聞くうちに事の重大

> とエベレスト委員会から正式に云われた。山登りを志す者にと 得したわけではなかったが、七月二十五日、全て君に委すから カトマンズに飛んだ。隊長として二時間足らず話し合っただけ 事にした。同夜、佐藤(之)隊員が登山許可その他の交渉のため 最高の幸せではないかと考え、自分の力の無さも顧みず受ける って、世界最高峰の岩壁に始めて手を触れる事が出来るだけで

状況から一度しか参加出来ないだろうという事の了解と、副隊 だった。 長は私に選ばせて欲しいことの二点だった。そして八月二日 私がエベレスト委員会に出した条件は、現在の自分の仕事の

長 宮 下 秀 樹 (38歳) 慶応OB

副隊長

田

辺

寿

38

慶応〇B

次の隊員が正式に決定された。

務 中 島 寬 31 一橋〇B

植 西 直 政 28 31 ″ 山学同志会 明治〇B

佐 之 治 敏 郎 27 ″ 24 ″ 京大大学院 一橋〇B

涨 食 装 庶

(138)

心の登山許可も思いちがいで、現実には入手していない状態だ

何故自分が隊長を受けなければならないのか、必らずしも納

らず、スキー隊との間にモヤモヤした問題も感じられるし、肝

も納得のゆくものにしたかった。

方わたしの方は、これまで登山計画にタッチしていなかっ

く、急拠全装備を自分たちの手で再点検し、出発までに少しで

きたかった。用意された個人装備にしても、不満足なものが多

医 瘀 白 大 井 澈 夫 36 36 " " NHKディレクター 慈恵医大OB

野 П 篤太郎 36 " NHKカメラマン

木 村 勝 久 (39 ″) 毎日新聞カメラマン

ほとんどの人たちが初顔合わせである。 (31 ″) 毎日新聞記者

君たち二人で一人前だ、などと以前から日本山岳会の先輩に

とを誓い合った。 のエベレスト南西壁を試登することに、最善の努力を尽くすこ 尽すための組織づくりには絶対必要だと判断したからである。 からかわれていた田辺を片腕に選んだのは、この隊がベストを 初めて全隊員が顔を合わせた時から、 世界最高所にある未知

十月十日頃になってしまう。ポスト・モンスーン最大の難点は 荷物の到着までに少なくともアドバンス・ベースを建設してお 動は望めない。わたしの考えでは、一部荷物を空輸し、船積み 日照の短かい事と寒気である。とうていこれでは十分な登攀活 いたが、どう計算してもこの荷物がベースキャンプに着くのは すでに個人装備を除いて大部分の装備、 食糧は船積みされて

> 痛感させられた。 ら特殊なクラブの中での登山が、 た空白を埋めるべく、連日いろいろな方と会って話 激論を闘かわせたりした。話せば話すほど日本山岳会とい 何と複雑かつ困難であるかを を開 V

た

にエベレストにぶつけてみようと決心した。 め、ともかく日頃ヒマラヤについて考えていることを、まとも が、こんな厄介な状態だから命令されたのだろうと自らを慰さ うしても未踏の南西壁に挑戦しようという<br />
意識が未熟だったせ 目の偵察隊を出そうと決定した後になっても、具体的な登攀計 いであろう。周到な準備と納得出来る態勢で出掛けたかった しかし、それが現実の姿だった。会内部の意志の不統一と、ど 画が全く検討されていなかったとは考えられないほどだった。 偵察隊の隊長が一度も出席を求められなかった事である。 最大の痛恨事は、 出発までエベレスト委員会にも理事会にも

なって体重も三キロ程減った程の毎日だったが、 活躍の賜ものである。 偵察隊、本隊とも正式の登山許可を入手できたことである。こ れは現地の交渉にあたった佐藤(之)および宮原巍氏の縦横の 出発までの一ヵ月はまともに家にも帰れず、しばしば徹夜に 唯一の朗報は

べを二本背負って高所での岩登りをするという新しい経験を得 ートルに達し、できればその地点に一泊してくる。②酸素ボン 最終的に今回の第二次偵察の目標を、①南西壁の八〇〇〇メ

(139)

二十日、羽田を飛び立った(NHKの二名は遅れて合流)。 諸点に置くこととし、すべては羽田を出発してからだと、八月 の出発時には、準備について後悔のないようにする。といった に基づくできるだけ詳細な報告を本部に送り、少なくとも本隊 していない状態で本隊にバトン・タッチする。④現場での体験 る。③高度順化できた隊員を絶対事故なく、かつ大して消耗も

#### Ш

待する他なさそうだった。

ソサエティに行き、次の十名のシェルパを契約した。 佐藤記者に合流した。翌二十二日朝から早速行動を 開始した 二十一日夕方カトマンズに入り、先発した佐藤(之)と毎日

どの速さでテキパキ仕事を片附けてくれた。次いでヒマラヤン マ・ツェリンであったのも心強い。その上、十人中四人も顔見 ーダーがヒマルチュリのとき一緒だった気心を知っているミン メイル・ランナー一組二名(途中でもう一組)を決定した。サ ムチェ)、ダワ・トンデュップ(クムジュン)、アン・ドルジェ ーメ)、シェルパ=アン・ナムギャル(ターメ)、ダワ・テンジン が、ネパール外務省も商務局も十年前に較べ、信じられないほ ムジュン)、他にキッチンボーイ二名、ローカル・ポーター八名、 (クンデ)、ミンマ (カトマンズ)、テンジン・ザンビュー (ク (ナムチェ)、ハクパ・ノルブ (ターメ)、パサン・ノルブ (ナ サーダー=ミンマ・ツェリン(ターメ)、コック=キルケン(タ

井上、佐藤(茂)の二人はカルカッタに飛んだ。

リザーブ済みで、越冬予定の植村隊員の若手シェルパ発掘に期 隊、英国のアンナプルナ隊などにめぼしいシェルパはほとんど のシェルパに成長していて頼母しい。本隊のシェルパ三十名も ノルブも十年前には見習いシェルパだったが、今ではひとかど 知りがいるとはまさに奇縁であった。ハクパ・ノルブもパサン・ 一応確保するが、手廻しの良い東海支部のマカルー隊、スキー

もかく四日、荷物とともにルクラに集結できた。この間、 みの荷物を一日も早くBCに運びこむという大任を背負って、 後の登山計画を練り上げていった。 られた。各自忌惮のない意見を述べてもらい、それをもとに今 ルクラ着陸時の飛行機事故で胆を冷やさせられたりしたが、と スーンが明けきらない不順な天候のためなかなか渉らず、一方 シャンカール・ホテルの夜は大半隊員のミーティングに当て 九月一日から順次はじめた飛行機によるルクラ入りは、モン

の行動を著しく楽にさせたものと確信している。大森ドクター らの三日間の休養停滞は、高度順化をスムーズならしめ、以後 そのためベース・キャンプ入りは贅沢といえるほど思いきって タンボチェ三日、ロブジェ四日、そして十六日BC入りしてか 余裕のある行動をとった。ルクラまでの飛行便の利用、さらに 今回の南西壁試登の成否は一にかかって高度の克服である。

みを揃えてBC入りできたのは幸運だった。 を除いてみなが海外登山の経験者であったとはいえ、 全員足並

た岩屑の上にあった と、どれをとってもひっきりなしに雪崩れている稜線に囲まれ 手にロー・ラから西稜の肩、背後にはリントレンから プモリ 正面にクームのアイス・フォールを望み、右手にヌプツェ、左 BCはクーンブ氷河のどんずまり、標高五四○○メートル、

## アイス・フォールから ウェスタン・クームへ

があるにせよ、氷河の下の地形そのものとの関連があると思え が全て下半を左方西稜寄りをルートとしたのは、部分的に変化 除き、右より、左よりの二つが考えられたが、今までの遠征隊 女神チョモルンマを守る第一の難関であった。ルートは正面を フォールもBCから見ていると余り威圧感を感じさせないが、 歩セラックスの間に入るとまさに、揺れ動く混沌、母なる ま われわれも第一次偵察隊の意見を参考にして西稜寄りルー わりの大きさに圧倒されて、標高差七百メートルのアイス

> 動は著しく阻害される。そのため、連日、 ら五時半出発を励行することにした。 時間もたつと頭がクラーへして目まいがする位の照り返しに行 だ天候は安定せず、モンスーンの名残りか連日十時か十一時に ス・フォール全面に陽が当り出すと、急に雪がヌカリ始め、 なると決まって降雪があった。しかし、一旦晴れて九時頃アイ 四時半朝食、 五時

るとBC~C1間はシェルパが二〇キロの荷物を背負って、早 朝だと六時間で往復して来るようになった。 てアイス・フォールの荷上げルートも一応整備された。こうな ルミン梯子、縄梯子、あるいはフィックスド・ロープを多用し ○○メートル地点にC1を建設、丸太を使った丸木橋、 二十八日、実働六日目にアイス・フォールを抜け切った六一 ジュラ

っきに陥没し、地形全体がまるで変ってしまうほどの大変動が の崩壊は規模も大きく、一〇〇メートル四方ぐらいの地域がい 只中のセラック地帯をルートにとらざるをえないが、この付近 とくに五八〇〇メートル付近は氷河の動きも激しく、そのまっ のルートを一ヵ月も二ヵ月間も確保するところに問題がある。 較して極端に悪いとか難しいという事は無いと思う。しかしこ エベレストのアイス・フォールは、それ自体としては他と比

ま

保する事がいかに難事であっても、このアイス、フォールを通 の大量輸送および隊員の高度順化の両面から、安全ルートを確 起こる。気持としては何回も通過する気にはなれないが、荷物

抜け出る地点の二個所が殊に悪かった。

バックが遭難したと思われる地点およびウェスタン・クームに

トを採用した。やはり六十三年のアメリカ隊のときブライテン

(141)

過することは、エベレストを南側から攻める隊としては避けら

途中二十四日午後、アイス・フォール下部に散乱している古れない宿命であろう。

国隊、インド隊名残りのこわれたジュラルミン製のスコップ、い丸太を薪にしようと、シェルパに命じて集めさせたら昔の米

サインがあり、一瞬ハッとする。もしやと思って問い詰めると、手にしているシェルパがいたのでふと見ると、胸にJEKEと梯子、スノーバーなども一緒に拾って来た。中にアノラックを

云い出す。翌二十五日サーダーのみ連れ全員で発見現場に行く拾得物が発見されるに及んで、人間の遺体らしきものもあると始めは口を閉ざしていた連中もナイフ、ピッケル、時計等続々

と、全身の骨という骨は全部折れ、殊に頭部の損傷はひどかった。など、やはり六十三年の米国隊員ジョン・E・ブライテンバックと、やはり六十三年の米国隊員ジョン・E・ブライテンバックと、やはり六十三年の米国隊員ジョン・E・ブライテンバックと、全身の骨という骨は全部折れ、殊に頭部の損傷はひどかった。

ここ数年訪れる人とてなく、また登山ルートから外れてもいた

た。氷河の表面に現われて一年以上は経過していようとの事。

不能になるという)、一時丁重にキャンバス内に安置し、一同で反対もあり(彼らによれば、火葬にすると天候が悪化して登山反対もあり(彼らによれば、火葬にすると天候が悪化して登山

合掌する。遺品としてはピッケル、時計(死後四日間動いてい

日バリー・C・ビショップ氏を通じて、遺体をそのまま遺族にとんどが六年半後の今日回収出来たのも不思議な気がする(後

た)、水筒、写真機、通信器等身に付けていたと思われる物ほ

し、早速丁EKEの葬いとわれわれの登山の安全祈祷をしても折しもタンボチェ僧院のヘッド・ラマがはじめてBCに来訪引き渡すことができた)。

クームに入ると前方はぐっとひらけ、今までと打って変ってきタイミングであった。

らう。偶然とはいえ、シェルパもこれで気分を一新し、誠に良

大きなクレバスが口をあけているが、右に左に迂回すれば、平坦な氷河となる。

十月に入るともうBCで零下十度、C1で零下十三度を記録度は五十度近く、日ぶくれになった顔の皮が三回むけた。あとはラッセルと焦熱地獄に耐える事だけだ。日中の体表面温

はナムチェといえども一日も停滞させない事。隊員はタンボチサポートにシェルパを続々下山させる。指令書は繰返し「荷物え、一部シェルパの高所装備も未着のため、後発キャラバンの

する。船荷を持った後発隊の消息が判らないため稍不安を覚

と書く。
と書く。

の乾パンとラーメンが唯一の行動食であり、登攀用具もそろそ食糧はほとんど現地食に依存し、一次隊の残して行った少量

ろ底をついて来た。

問案対策に入口布を造ったりしておいた。 防寒対策に入口布を造ったりしておいた。 防寒対策に入口布を造ったりしておいた。 防寒対策に入口布を造ったりしておいた。 防寒対策に入口布を造ったりしておいた。 防寒対策に入口布を造ったりしておいた。 防寒対策に入口布を造ったりしておいた。 防寒対策に入口布を造ったりしておいた。

四日、六五〇〇メートル地点にABC建設、五日、南西壁のローツェ寄り六七〇〇メートル地点に登路の可能性を見出した。 七日、待望の船荷が一三六名のポーターに担がれてBCに到着した。スキー隊の入山とほぼ一緒だった。スキー隊はわれわれのBCからほぼ五〇メートル離れた場所にベース・キャンプルのBCからほぼ五〇メートル地点にABC建設、五日、南西壁のロの天幕、ロープなどの借用を申し込み、快く受けていただいの天幕、ロープなどの借用を申し込み、快く受けていただい。

BCでの休養をC1にきりかえる、ことを決めた。 が、残った日数などを総合的に考慮し、①ABCを六七○○ が、残った日数などを総合的に考慮し、①ABCを六七○○ が、残った日数などを総合的に考慮し、①ABCを六七○○ が、残った日数などを総合的に考慮し、①ABCを六七○○ が、残った日数などを総合的に考慮し、①ABCを六七○○

十五日、六七〇〇メートルに新たにABCを建設し、

いよい

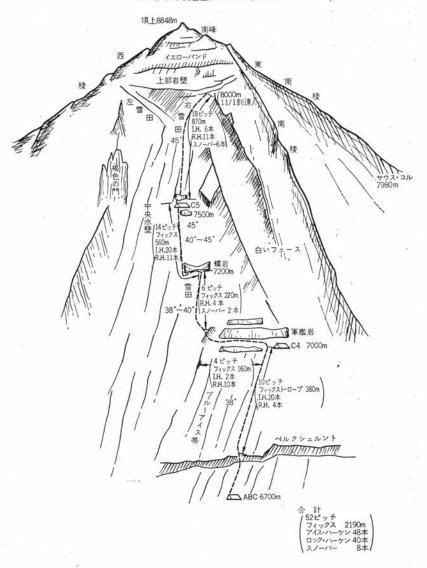
ので厳戒を要する。
ので厳戒を要する。
ので厳戒を要する。
ので厳戒を要する。
ので厳戒を要する。
ので厳戒を要する。
ので厳戒を要する。
ので厳戒を要する。

ルートは、大きなベルクシュルンドを越して七〇〇〇メート

## 南西壁の試登

ったとの事。二百メートル下方にあるスキー隊のABCに無電のクレバスが崩壊して転落死亡し、他にアン・シタが重傷を負している部分にはかなりシゴカれる。午後一時半頃、 、大の露出している部分にはかなりシゴカれる。午後一時半頃、 、大の露出している部分にはかなりシゴカれる。午後一時半頃、 、大の露出している部分にはかなりシゴカれる。午後一時半頃、 、大の露出している部分にはかなりシゴカれる。 、大の露出している部分にはかなりシゴカれる。 で下山すると、スキー隊の隊員待遇であるプー・ドルジェ 、「一九六五年インド隊のときのエベレスト登頂者)がC1直下 、「一九六五年インド隊のときのエベレスト登頂者)がC1直下 、「一九六五年インド隊のときのエベレスト登頂者)がC1直下 、「一九六五年インド隊のときのエベレスト登頂者)がC1直下 のクレバスが崩壊して転落死亡し、他にアン・シタが重傷を負 のクレバスが崩壊して転落死亡し、他にアン・シタが重傷を負

#### エベレスト南西壁(1970年秋)概念図



連絡が取れていないので、早速植村とサーダーを連絡と応援に

る。

なかったのは不運だったが、本当に気の毒な事をした。 子をかけ直そうとしての遭難であった。確実な確保をとってい た丸木橋もあと数日で両端が外れそうになっているのを見て、 C1直下のクレバス帯の動きが激しくなり、われわれの掛け 十九日、宮下もC1に下り植村隊と合流してプー・ドルジェ ルートを取っているスキー隊のプー・ドルジェが新しい梯

出て来たが、七二〇〇メートルの蝶岩を越し、中央氷壁へのル 建設した中島隊は、七〇〇〇メートルを越えて身体もヘバリが とか通れるルートを開拓した。一方十八日に軍艦岩下にC3を ト工作に懸命である。

ではなかなか見付からず、二十日夕刻やっとヌプツェ寄りに何 遭難地点を避ける新ルートを探すが、荒れたアイス・フォール

るように思えた。 崩壊は益々烈しく、モンスーン直後の深雪時が一番安定してい 後の十日間に全力を注ぐことにする。アイス・フォール上部の 能のシェルパとローカル・ポーター全員をC1以上に上げ、最 二十四日、佐藤記者のみBCに残して、報道班を含め行動可

し、固定ロープは七四五〇メートル地点に達した。 二十六日、全員ABCに集結し、今後の最終計画を打合わせ 二十五日、軍艦岩の天幕を四人用に張替えて荷上 げ を続 行

> だろうとの予想は見事に覆えされ、 なり、平らなキャンプ・サイトは未だに見出せなかった。ツェ 薄い氷雪に覆われた巨大なスレート状の滑り台みたいな地形に あの大きな南西壁の中ならどこにでも泊り場位は見付かる 登れば登る程凹凸の少ない

ず天幕を張れるという確信は無かったが、すでに零下三五度に 幕も張れなくってどうする、来年なんか登れないぞとハッパ 達する寒気とこの高さで、無事一晩を過したとしても翌日再び 掛け、断乎テントを張る事を主張する。云い出した自分にも必 元気に登れる体力は温存出来ないと判断したからである ト・ビバークによる短期決戦論も多かったが、今年二人用の

いえず、ゴム管を直接口に喰えたりしてルート工作を続ける 張る事にするが、マスクも四人分、それに余り具合も良いとは

二十七日からは、七〇〇〇メートル以上は酸素を使用して頑

二十九日、C3を出発した小西、植村隊がルンゼのほぼ中央

下同行)。二人がダウンしたが 一応一〇〇キロの荷が C4に上 ABCから一気に七五〇〇メートルまで荷上げを敢行する 朝七時よりそれぞれ十五キロを背負って、六七〇〇メートルの な日だとサーダー以下八名のシェルパを説得していたので、 ば何とか天幕を張れる事を発見、数日前より本遠征中最も大事 七五〇〇メートル地点の大きな二つの露岩の間に、 氷雪を削 早

(145)

がり、最終偵察態勢は整った。

三十日、小西隊は七八〇〇メートルに達しC3の中島隊は途

夜小西隊にメッセージを送った。「ローテーションの都合で最中にデポしてあった固定用ロープをC4まで荷上げする。その

トルに達する場合でも決して無理をせず、明晩は必ず無事このたけれど、本番は来年である。あとワンピッチで八〇〇〇メー後の最後までフィックス工作をするというめぐり合わせになっ

僕ももう少し若く、隊長という立場に無かったら、もっと近く日であるよう、君達の悔いの無い山登りをやって来て欲しい。

思われた。

トルを使いきる。正面大岩壁の基部より右側のルンゼに入り、九時固定用ロープ十三本全部を持って出発。八本、四〇〇メー十月三十一日、朝稍々風、十時頃よりガス。C4の小西隊はで君達を見守り、応援して上げられたのにと残念でならない」

佐藤(之)隊員C4に入る。 下る。よく頑張ってくれたと感謝する。この日入れ替って中島三時半約八○○メートルの高度に達した後ABCまで一気に

十一月一日、晴、C4で零下三五度。中島隊は本日の行動に大十月一日、晴、C4で零下三五度。中島隊は本日の行動に大事に持ったのでは無い。若さと体力に恵まれたが小西隊より一メートルでも高くなる事だけを期待しているのでは無い。小西隊より低くたって登る事だけを期待しているのでは無い。小西隊より低くたって登る事だけを期待しているのでは無い。小西隊より低くたってかい。若さと体力に恵まれたが、午後二時半前日の最高点に立てる中間のでは、一方のでは、「一方」の表演に、「一

たが、両隊共本当に良く頑張ってくれた。南西壁だけで延二一だった。佐藤の酸素マスクが顔にフィットせず軽い雪盲に罹っ最高到達点に達し、C4に帰ったのは真暗になった六時四十分

の威力も日増しに強まり、これ以後の登攀は相当に辛いものと十一月に入ってから気温の降下は益々厳しく、ジェット気流

九〇メートルの固定ロープが張られた。

中一月七日BCを撤収。十一日ナムチェでシエルパと別れる 中一月七日BCを撤収。十一日ナムチェでシエルパと別れる

## おわりに

で来たが、南西壁という限られた壁であるにせよ、世界最高峰の未たが、南西壁という限られた壁であるにせよ、世界最高峰の未知のルートに始めて手を触れる事が出来たわれわれは最高に幸知のルートに始めて手を触れる事が出来たわれわれは最高に幸知の、高度差八○○メートルの上部岩壁には手を付けずに帰って来たが、第二次偵察隊の結論として本隊には以下の注文を特に付した。

①アイスフォールの通過に十分以上に気を使うこと。とくに

長期間のルートとして使用する事の怖さを十分考えて欲しい。 物と床を平に出来るような特殊天幕を用意すること。 近に宿泊可能地点の無い事も併せて考慮し、落石を避ける遮蔽 ②南西壁の落石が予想以上に多い事と、七五〇〇メートル付

③シェルパについては、この登山禁止の四年間のブランクは

が先頭に立って引張って行かねば効果は上らない。 中は現代っ子的な者が多く、口先だけの命令では利かず、隊員 大きく、昔のシェルパは力が落ちて来たし、若い延び盛りの連 ④上部岩壁の突破は八○○○メートル付近に快適な天幕を張

り、技術、体力、気力の優れた二、三パーティの隊員達を配置

るものと確信している。

し、十分なる酸素の補給を行なえば、必ずや頂上への路は拓け

BC、ABCで執拗なまでに集めた高処医学のデータと、ファ クシミリまで使った井上隊員の気象観測の結果も、また本隊に なお、大森ドクターが心電計をはじめ種々の器械を駆使して

K とって貴重な資料を提供すると思われる。 に(気象観測)、植村隊員を三八〇〇メートルのクムジュン部落 また、越冬隊として井上隊員を四三〇〇メートルのペリジェ (シェルパ、ローカル・ポーターの確保)それぞれ残した。

(147)

# マカルー調査隊(一九六九年)

# 日本山岳会東海支部

松浦正司

### 目的

形造された。
日本山岳会東海支部は一九七○年プレモンスーンにマカルー
時、八四八一メートル)を東南稜から登頂する計画を五年来進
峰(八四八一メートル)を東南稜から登頂する計画を五年来進

(=)

六月八日、ヒマラヤンソサイエティと、サーダー二名、シ

ェルパ三四名の雇用契約をした。

るためには、ネパールへ直接行って交渉する以外にはなかっつの賭けであったといえる。しかし、この三つの目的を解決すていなかった。このため、調査隊の派遣は、当時の情勢では一調査隊が出発した当時は、まだネパール政府は登山を解禁し

た。

## 二、成果

☆ 調査隊および本隊の登山許可を入手した。

本券の登山午可正と入手した。同時に、本隊も許可するとの内諾を得た。さらに六月三日た。同時に、本隊も許可するとの内諾を得た。さらに六月三日上月十二日、登山解禁後最初の登山許可証が調査隊に渡され

○メートルおよびバルン氷河五○八○メートルまで偵察した。本隊の登山許可証を入手した。

この偵察の結果、キャラバン・ルートについては、橋の状

の資料を入手した。 難関)の状態、東南稜については、地形、天候、氷河の状態等トン峠(四二○○メートルの雪の峠でキャラバン・ルートの最態、物資の購入出来る部落、ポーターの雇用出来る部落、シプ

## 三、隊の構成

(1) 隊員

隊長松浦正司(2歳)

隊

員

尾

崎

祐

29歳

山 田 勇 (26歳)

田 浩 (24歳)

生

いたから、

年五月頃にはネパール大使館は申請書を受け取らないと答えてわれわれの申請書を正式に受け取ったことであった。一九六八来た理由の一つは、在日ネパール大使館が一九六八年十二月に

登山解禁が間近いことをなによりもよく示していた。当

この申請書の正式受理は、態度が変ったことを意味

シェルパ 川 務

(25歳)

(2)

ラクパ・テンジン (30歳)

リエゾン・オフィサー

ニマ・テンジン

(40歳)

(3)

ラナ

(25歳)

## 四、隊の行動概要

カトマンズでの交渉

一二月二十四日、全隊員が空路カトマンズ着、この日から三月二月二十四日、全隊員が空路カトマンズ着、この日から三月

週間以内に出すと答えた。 の大登山申請書を受理していると言い、それに対する回答は一 に登山申請書を受理していると言い、それに対する回答は一 におれが一九六八年十二月に在日ネパール大使館を通して提出 に月二十四日、登山担当官シルワル氏と会見した。彼は、わ

調査隊が登山解禁前にもかかわらず、あえてネパールに直接

ワル氏の回答は、われわれの登山解禁についての判断が間違っれは申請書を直接ネパール大使館へ提出したわけである。シルての申請書は受け取らないとの立場をとっていたので、われわ時、日本外務省は正式の登山解禁があるまではネパール政府あ

ていなかったことを示していた。

一九六八年八月に、ネパール政府は三十八峰の登山を解禁するリストを発表した。しかし、その発表が発効するのに必要なあリストを発表した。しかし、その発表が発効するのに必要な制の発表前に許可された唯一の西独アンナプルナ隊について質問した。シルワル氏の回答で安心は出来なかった。私は、新登山規則の発表前に許可された唯一の西独アンナプルナ隊について質問した。シルワル氏は、西独の大臣が来て登山許可をとってい問した。シルワル氏は、西独の大臣が来て登山許可をとっていりとなった。新登山規則の発表前でも、一国を代表するようかりとなった。新登山規則の発表前でも、一国を代表するようかりとなった。新登山規則の発表前でも、一国を代表するようかりとなった。新登山計可を与えたということが判明したわけである。私はただちに日本外務省の推薦状を入手するためのけである。私はただちに日本外務省の推薦状を入手するためのけである。私はただちに日本外務省の推薦状を入手するための手配をした。

約束の一週間が過ぎても、ネパール政府からは何らの回答も

得られなかった。

三月三日、在ネ日本大使館は、

日本外務省からマカルー隊を

ネパール政府に対する日本外務省の推薦があって以来、推薦せよとの電報を受け取ったと通告してきた。

した事態が進展しはじめた。シルワル氏は回答が延びている理した事態が進展しはじめた。シルワル氏は回答が延びている理

(149)

由を説明した。それは、登山料が山の高度によって規定されて、調査隊に対する規定がなかったために生じた問題を解決するのに手間取っているということであった。調査隊の登山料を定めるためには大臣のサインが必要であった。また、この大臣のサインは新登山規則が公表されるにも必要であった。しかし、その大臣は議会の仕事のために多忙を極めている状態で、なかなかサインが取れなかった。大臣がどこかへ出張でもされなかなかかインが取れなかった。大臣がどこかへ出張でもされなかなかサインが取れなかった。大臣がどこかへ出張でもされなかなかサインが取れなかった。大臣がどこかへ出張でもされてところへ行ってサインを取ってくれるよう依頼した。

三月十日、九日付で新登山規則が公表された。

許可の条件になるわけで、これはネパール政府としての当然のうことになった。結局、調査隊が規則違反をしないことが本隊が、正式の登山許可証は調査隊のカトマンズ帰着後に出すといび、正式の登山許可証は調査隊のカトマンズ帰着後に出すといる。これはネパール政府としての当然の当時可の条件になるわけで、これはネパール政府としての当然のうことが表現している。

### 1 信祭

慎重さであったと思う。

三月十六日、キャラバンの出発地ダランバザールに全員集結。くこととなった。

カトマンズにおけるネパール政府との交渉を終え、調査隊の

三月十九日、ポーター三十四名でキャラバン開始。アルン川

プトン峠を越え、バルン谷のムンプーカルカ着。バルン谷に入る。四月二日より積雪が現われた。四月三日、雪の降る中をシ変えて、三月三十一日セドア発。シプトン峠に向かって尾根を登ったの最奥部落セドアに着いた。ここで高地に強いポーターに

○メートルにベース・キャンプ建設。

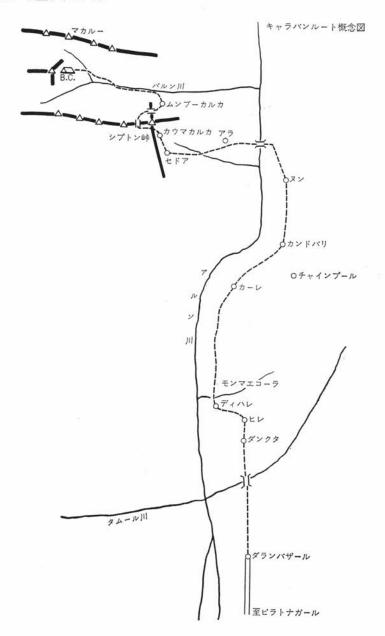
このキャラバン・ルートの偵察の結果、最難関は深い積雪と

ってからは積雪はなくなり、四月六日、バルン氷河標高四七〇

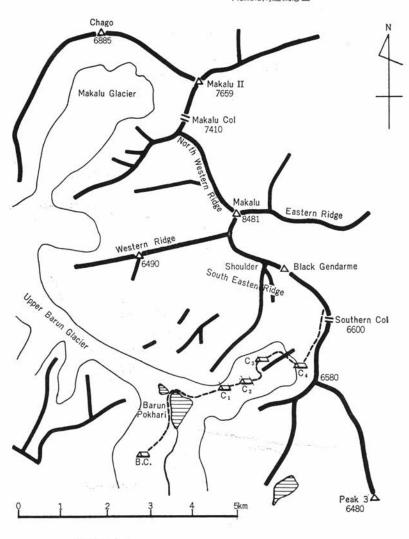
んとかシプトン峠を越えられるだろうという結論に達した。とが分った。三月の出来るだけ早い時期にシプトン峠を越え、とが分った。三月の出来るだけ早い時期にシプトン峠を越え、とが分った。三月の出来るだけ早い時期にシプトン峠越えであることが分った。三月の出来るだけ早い時期にシプトン峠越えであることが分った。三月の出来るだけ早い時期にシプトン峠越えであることが分った。三月の出来るだけ早い時期にシプトン峠越えであることが分った。三月の出来るだけ早い時期に登した。

数を考えて主に氷河地帯の偵察を中心に行動することとした。ちなる尾根とに大きく分けられる。調査隊は、その装備、隊員鞍部までの氷河地帯と、サウスコルから上部の岩壁と氷壁とか鞍部までの氷河地帯と、サウスコルのサウスコルと呼ばれているという。東南稜の偵察を開始した。東南稜はベース・キ四月九日より東南稜の偵察を開始した。東南稜はベース・キー

1建設。 四月十三日、五○○○メートルのアイス・フォールの中にC 沿いに尾根を登り下りしながら三月二十九日、キャラバン・ル



#### Makalu周辺概念図



た地点にC2建設。 四月十七日、五三一〇メートルのアイス・フォールを突破し

四月二十日、五七八〇メートルにC3建設

四月二十五日、六三〇〇メートルにC4建設。

同地点にビバーク。四月二十八日、六六五〇メートルまで進む 四月二十七日、尾崎、山田は六六〇〇メートルまで偵察し、

も風雪のためC4へ引き返えす。

進みビバーク。四月三十日、強風雪のためC4に引き返えす。 五月一日、隊員五名C3に集結 四月二十九日、小川、生田はC4より六五〇〇メートルまで

五月五日、隊員五名とニマ・テンジンでバルン氷河の偵察に 五月三日、全員BCに戻る。

で偵察し、五月七日、全員BCに戻る。 出発。五月六日、五〇八〇メートルのマカルー氷河との出合ま

開始。来た時とほぼ同じルートを通って、五月二十四日、ダラ ンバザール着。五月二十六日、カトマンズ着 五月九日、BCを撤収、ポーター十二名で帰りのキャラバン

であったこと、③サウスコルから上部は氷壁や岩壁からなり、 の本隊の時の天候を予測は出来ないが、一応の目安とはなっ の下旬から五月の上旬は悪天候であったこと(このことで来年 この偵察の結果、①四月は天候は比較的安定していて、四月 ②東南稜の氷河はブロック崩壊や雪崩が少なく比較的容易

する時期、用意すべき装備、BCの位置、前進キャンプの位置

極度の困難が予想されること、などの結論が得られ、BC入り

などの決定に参考となる資料を提供した。

政府と交渉した。新登山規則に従った登山申請書が本隊の隊長 カトマンズ帰着後、直ちに本隊の登山許可についてネパール 本隊の登山許可入手およびシェルパの雇

であった。われわれは山では三月~五月がプレ・モンスーンで て、申請の二月~七月は両季節にまたがるために発生した問題 月がプレ・モンスーン、五月~八月がモンスーンとなってい たのは登山期間についてのみであった。規則によると一月~四 ーの報告が良かったため、交渉は順調に進んだ。問題点となっ からすでに提出されており、また調査隊のリエゾン・オフィサ

あることを強調して申請通りに認められた。 六月三日、本隊の登山許可証を受け取る。

がなく、優秀なシェルパを選び出すのに苦労した。 話し合いを進めた。登山解禁の年であったために、 一方、ヒマラヤン・ソサエティとはシェルパの雇用について 六月四日、許可証を持って、尾崎、小川が日本へ向かう。 十分な資料

サエティと行なった。 これで調査隊の目的を終了し、 六月八日、シェルパ三十六名との雇用契約をヒマラヤン・ソ 六月九日、 松浦、

がカトマンズを去った。

山田、 生田 (153)

# アイガー北壁新直登ルート

### の開拓 (一九六九年

藤 滝 男

始めた。

購入した後、原をのぞきドロミテに入り、トレーニング山行を 港を出発、ソ連まわりでオーストリアに入り、ウィーンで車を

加

全日本合同隊に加藤滝男が参加。第二回目は一九六七年、マッターホル であった(編者注・第一回目は一九六五年、アイガー北壁を目指した の一九六九年海外遠征目標は、アイガー北壁新直登ルート開拓 ン北壁をはじめ、シャモニを中心に数多くの登攀を行なう)。 J·E·C·C (Japan Expert Climber's Club) 第三回目

から五年目となった計画だけに、 たどると一九六五年の第一回遠征のときまでさかのぼる。発端 った。隊員は次のとおりである。 今回は腹をすえての出発であ

今回のアイガー北壁新直登ルートの開拓という計画は、元を

ネージャー兼ドクター 加 藤 滝 男

井 通 子

> 会 装 車 先発隊六名(除く今井)は五月二十五日、バイカル号で横浜 糧 計 輌 天 野 岸 保 博 男、 知 文 進 原

勇

ト登攀、同日、根岸、加藤(保)がグランデ北壁のスーパー・ ・レショのコミチルート登攀、六月十日~十三日、久保、加藤 でも、久保、天野、加藤(滝)が、六月八日のカロータ・デル (滝)が、チマ・ディ・ラバレド・オベスト北壁のスイルルー この年は雪も多く、成果はあまりあげられなかったが、それ

かかれず、やむなくトレーニング山行に変えた。 ルに集合したが、船で送った登攀具が届かないため計画にとり 六月二十五日、全員がアイガー山麓のボーデンバルト・ホテ ディレッティシマ登攀と三つの登攀に成功した。

の台地にA・Cを設営し、下部岩壁の試登、偵察を始めた。 七月十五日、 七月十三日、装備到着、アイガー北壁下台地に荷上げする。 七月二日、イタリーで使用した装備のみで、アイガー北壁下 ホテル・アイガー設営

七月十七日、

「赤い断崖」下部に取り付く。

となり、天候悪化のためひとまず全員 B ・ C に下行し休養を七月二十五日、「赤い断崖」もあと二十メートルを残すのみ

5

アイガー別館を設営。そこでビバーク。荷上隊は「赤い断崖」 下イガー別館を設営。そこでビバーク。荷上隊は「赤い断崖」下のシャンツェ・テラスに運び、ビバーク。 は「赤い断崖」上部でハンモック・ビバーク、他は昨日同様。は「赤い断崖」上部でハンモック・ビバーク、他は昨日同様。は「赤い断崖」上部でハンモック・ビバーク、他は昨日同様。は「赤い断崖」上部でハンモック・ビバーク。荷上隊は「赤い断崖」のルート 八月二日、晴。最終アタック開始。ホテル・アイガーの七月三十一日、晴。最終アタック開始。ホテル・アイガーの七月三十一日、晴。最終アタック開始。ホテル・アイガーの

八月三日、今井、加藤(滝)は「赤い断崖」を越え、根岸隊と中央部まで荷上げ。

八月六日、晴。上部岩壁アタック開始。 八月四日、全員、ホテル・アイガー別館着。 合流。久保隊は「赤い断崖」中央部でハンモック・ビバーク。

八月十五日、二十三時三〇分登攀を終る。八月九日、晴。「センター・バンド」に全員到着。

いうまでもないが、チームワークが第一であろうとわたしは思この登山方法では、荷上げのスピードがポイントとなることはもっとも強く感じたのは、直登法による登山の安全性である。今回は、例年にない好天に恵まれて計画どうりに登れたが、

テクニカル・ノート(八十六頁のルート図参照

が異なるが、残雪の多い 初夏で、斜度三○度前後、所要時間が異なるが、アルピグレン駅からの方が道もわかりやすく楽である。 いたある。時間的にはアイガーグレッチャー駅から北壁にそって下って来るコースとアイガーグレッチャー駅から北壁にそって下って来るコースとアイガー北壁に取り付くには、アルピグレン駅からのコースアイガー北壁に取り付くには、アルピグレン駅からのコース

五十分の登りとなる。

下部岩壁への取付点は、中央部の第一バットレスから右側に下部岩壁への取付点は、中央部の第一バットレスから右側にあって、流の右側より取付き、四○メートルほどの四級の岩場を登て、流の右側より取付き、四○メートルほどの四級の岩場を登て、流の右側より取付き、四○メートルほどの四級の岩場を登り切るとガラ場に出る。その中で一乗楽なのは、右側下部あり、数本ルートがとれる。その中で一乗楽なのは、右側下部あり、数本ルートがとれる。

幅広い帯で切れ、その下に奥行き四メートルほどの 洞 穴 が あ渓に入る。これは一二〇メートルほどで、オーバーハングしたを登ると、左上に大きな岩稜が出てくる。ここでその右側の雪ら左のガラ場状の岩場に取付き、大きな階段状の岩場とガレ場出て、これを登る。雪渓を九〇メートルほど直上したところか出て、これを登る。雪渓を九〇メートルほど直上したところか

次の大ルンゼ手前から直上し、下部岩壁で一番大きな雪渓に

(155)

と名付けた。

ば、取付の岩場の上から、雪渓通しで楽に達せられるが、雪渓ホテル・アイガーまでのアプローチは、残雪の多い 時な ら

が切れると苦しいルートになる。

をされ、こうはまして、ここのは、なけらればないのである。ないのでは、かれわれは、前半の荷上げはこの雪渓通しのルートを使い、

凹角に入る。この凹角は、途中から右のスラブに出て直上し、「トルトラバース(Ⅲ)して、階段状の氷が張った岩場を登り、ホテル・アイガーからは雪壁をハング帯にそって右に三○メホテル・アイガーまで五一○メートル(Ⅲ~Ⅳ級)となる。後半は、左の岩場にルートをとった。取付の岩場から雪渓通し

に着く。このルンゼは、傾斜は緩いが意外にいい場所で(二○けて斜上すると(四○メートル・Ⅳ)、氷のつまった小ルンゼミこから左へと続く雪壁を、左上の氷のつまったルンゼ目が

小凹角の頭に出る(六○メートル・Ⅲ)。

ここから垂直のクラックに取付き、クラックを登り切ったとV)、左に人一人がはいれる洞穴のあるクラック下に着く。付くとすぐ上に小さなオーバーハングがあり(三○メートル・が張るかで、登攀がかなり困難である。下半分はスラブで、取が張るかで、登攀がかなり困難である。下半分はスラブで、取ディフィカルト・クラックはたえず水が流れるか、ベルグラ

長いバンドに着く。

メートル・V)、これを登るとディフィカルト・クラック下の細

断崖」からの落石、落氷がストレートに落ちてくるので、早くこの凹角の上にはガラ場の小テラスがあるが、ここは「赤いころから、こんどは左手の凹角を登る(四○メートル・Ⅳ)。

小テラスから頭上の小ルンゼを登り、クラックに変化した上通過しなければならない。

この雪渓は幅広く、左に行くとノーマル・ルートのいわゆる部で(二五メートル・Ⅳ)雪渓に出る。

い断崖」からの雪解け水が流れる「赤い断崖」下部に達した。われわれのルートはこの雪渓を左上し(一〇メートル)、「赤ヒンターシュトイサー・トラバースに至る。

クを直上し(三五メートル・V)小スタンスに出る。 「赤い断崖」は、水の流れるクラックから取付き、このクラッ

初登時は、ここから、一五メートル(Ⅵ)登ったピナクル状のところから右に五メートルほどの振子トラバースをし、五メートル(♡)のスラブを右上して、幅五○センチ、長さ三メートルのシャンツェ・テラスに出たが、シャンツェ・テラスと小スターンスとの間は、一五メートルほどの振子トラバースをし、五メートル(∀)をったピナクル状のけた。

壁中ただ一ヵ所のぬれない場所であった。シャンツェ・テラスは落石もなく、雨も当らぬ、アイガー北

といわれる「赤い断崖」では、まずシャンツェ・テラスから頭壁全体がオーバーハングして、三○○メートルの高差がある

イガー別館B2と名付けた

ガネ状に穴のあいたところに出る。 上に見える小凹角にルートをのばし、 七〇メートル(A2)でメ

上の幅広いバンドに立つ。この最後の二ピッチは、第二氷田か である (一〇メートル・A3)。 らの雪解け水がすごく、シャワー・クライムで苦労するところ 込むようにして岩質のやわらかな壁をぬけ切り、 メートル・A)後続く五メートルほどのハングも右からまわり ハングがあり、これを右から回り込むように乗っ越した(二〇 ここから上部へ四〇メートル(A)登ると壁はやや斜度を落 トゲのはえたような岩肌に変る。大オーバー 「赤い断崖」

B2に着く(六〇メートル)。 らわれた露岩の左側下に氷を切り開いて作ったスノー・ホール 氷壁となる。さらに四十度ほどの第二氷田を直上し、帯状にあ 右隅の小ルンゼ下に出る(一五メートル・Ⅱ)。 この氷のつまったルンゼを直上すると(一○メートル・Ⅲ) 「赤い断崖」上の幅広いバンドを左へまわり込み、第二氷田 われわれはここを、 ホテル・ア

〇メートル)。 ら氷壁を左斜に登って大クーロアール入口の左隅に達する(六 る大岩稜の下にそって左へまわり込み(二〇メートル)、そこか В - 2 からは左手の氷壁を八○メートル直上し、西稜から落ち

大クーロアール入口は一番左隅のクラックにルートをとり、

クラックからスラブ状のルンゼ中央部に出てこれを登り メートル・A・IV)、オーバーハング 下で氷のつまった 左の小

ルンゼにはいる(一五メートル・Ⅲ)。

クスされたところに出る。ここを直上し(四〇メートル・V) このルンゼから小リッジに出ると、逆層の岩場と氷壁のミッ

れを直上して小ジェードル下に達する(四〇メートル・A)。 小ジェードルを登り切ったところで(一〇メートル・A」、

最後の逆層の岩場を左へトラバースしてから氷壁にはいり、こ

左手のバンドに立ち、これを左へ進み、ハング帯の切れた所で

(一五メートル・Ⅲ)浮石の多い階段状の岩場を直上する(一

五メートル・皿)。

ースして行き(二五メートル・Ⅳ)バンドの終るところで黒い 称)で、一枚岩から左にのびるハング帯の下のバンドをトラバ

そこは大きなオムスビ形のオーバーハング(オムスビ岩と仮

ルンゼにはいる。

この黒いルンゼ(一○メートル・Ⅲ))を登ると、落石で真

黒になった黒い氷壁がある。 これを左上し(二〇メートル)もろいオーバーハング帯の下

ピナクルの下半分を中央部にそって登り(一五メートル・Ⅳ) に出る。ここからまた黒い氷壁に降り立ち、 左斜上に登って大

重なった右側のカンテを右にまわり込み、右のクラックまでザ 頭上がオーバーハング状となるところから、積木のように岩の (157)

イル・トラバースする (二〇メートル・V)。

ートルA・V)、傾斜の落ちた砂状の斜面となるが、さらに直上小クラックはピトンも良くきかず、これを直上すると(五メ

この黒いルンゼは右から取付き、左へ左へと登ると(一五メし(二〇メートル・皿)、黒いルンゼ下に出る。

ÿ

ンテには凹角が頭上へとのび、ルートをこの凹角にとる(一五ランペの終ったところは浮石の多いテラスで、その左側のカ

メートル・V)。

を登り、左斜上するランペとなるところを登る(三〇メートル

ートル・Ⅲ)、大きなハング帯の下に出る。 左の小ジェードル

傾斜の落ちた幅広いガラ場の斜面となる。側を登り、狭いクラック下のレッジに立つ(二○メートル・Ⅳ)の左側に傾いたクラック下のレッジに立つ(二○メートル・Ⅳ)。

小凹角をぬけると(三メートル・V)、大きくU字形に窪ん小カンテを回り込んだ所の凹角にはいる(七メートル・V)。このスタンスから傾斜の強いスラブを右にトラバースして、

小チムニー下の窪みにはいる(二○メートル・Ⅳ)。た岩場を右側から登り出し、上部に行って左へトラバースしてだところに出て、四メートル登り(Ⅱ)、ホールドのしっかりし

ここから小チムニーを登り、階段状の岩場を直登し(六○メ

広く続く緩傾斜帯(センターバンド)に出、これを壁ぎわまでけ、その左のカンテを登ると、アイガー北壁を横切るような幅このガラ場からは左手に見える浮石だらけの小チムニーを避ートル・Ⅲ)、一段傾斜の落ちたガラ場に出る。

登る(二○メートル・Ⅲ)。

このセンターバンドは残雪もあり、ビバーク地として良い方

ーに取付き、これを登り、チョックストンを乗っ越した上の小このビバーク地の左側から頭上に走る大きな凹角内のチムニであろう。

ここからルートを左側のクラックにとり、これを登り切ったスタンスに立つ(二五メートル・W)。

れて狭くなり(一五メートル・V)、最後にクラック左側のフェこでいったん幅広くなったクラックも、左上部に登るにつところの右側の小スタンスに立つ(一五メートル・V)。

したところから(一○メートル)こまかいホールドを使って、したところから(一○メートル)こまかいホールドを使って、この上には五級程度のチョックストンがあり、これを乗っ越

ェースに出てこれを登る(一五メートル・IV)。

頭上には小さな凹角があり、これを登り切った左側の小ハン右上して行く(一五メートル・N)。

グ下のスタンスに出る(七メートル・A)。

中央にルートを変え、大きなハング下まで直登する(二〇メーこの小ハングは左側のジェードル部分から登り出し、スラブ

タンスに立つ(一五メートル・Ⅲ)。 がンド左側の凹角を登り、小カンテをまたいで一段下り、小スパンド左側の凹角を登り、小カンテをまたいで一段下り、小スはできないが、ハンモックによるビバークは可能であった。小バンドに出る(五メートル・Ⅲ)。この小バンドは、坐ることがといい、四メートル・4)階段状のみぞを登り、幅の狭い、小っ越し(四メートル・4)階段状のみぞを登り、幅の狭い、小っ越し(四メートル・4)

トル・A、ただし途中の五メートル・V)。 ハングを右から乗

ここから左上に走るランペを登り(七メートル・V)、「セン

ルートをさらにルンゼ状の部分に取り、直上し、垂壁の下に出る(五○メートル・Ⅱ)。 はるか頭上には、数十メートルもありそうな大オーバーハング帯が壁をさえぎっている。 ま壁の下を左にトラバースして(二○メートル・Ⅲ)、小チムニー下に出て、これを登る(三メートル・Ⅲ)。

ら登ってルンゼに出る(二○メートル)。
込み、いわゆる「スフィンクス」に出る(一五メートル・IV)。
込み、いわゆる「スフィンクス」に出る(一五メートル・IV)。

ンゼを左上する(五○メートル・Ⅲ~Ⅳ)。露岩帯の下に着い露岩を左から回り込むようにして登り(Ⅴ)、その上で雪のルを登り、露岩の下に出る(二○メートル・Ⅳ)。

スして行き、一本目のルンゼにはいる(二○メートル・Ⅲ)。バンドに着く(四○メートル)。この雪のバンドを右へトラバーた後、露岩の下にそって氷壁を右に水平トラバースして、雪の

Ⅳ)で、浮石と雪の混じりあった緩斜面を右上し、アイガー山チムニーに取付く。これを登り切ったところ(二〇メートル・の終ったところから左側の氷のつまった幅狭いサンドイッチ状のかったところから左側の氷のつまった幅狭いサンドイッチ状の終ったところから左側の氷のつまった場がいまし、アイガー山

ルの長さで合計二三七○メートルである。下部取付点のベルクシュルンドから西稜に出た所まで、稜を二○メートル登った所である。

頂の一角である西稜にとび出る。ここから山頂までは西稜の雪

ころにB5を設けた(但しハンモック)。

つきあたりで登る(五五メートル・IV)。

このつきあたりのと

少し登ったところで、さらに左側のルンゼにルートを変え、

ザイ

### ヒンズー・ラジ山 ・ゾム登頂 脈

コ 1 ヨー

#### 小 笠 原 重 篤

た。登山申請書も十一月下旬、諦め切りぎりぎりに在日パキス に、コーヨー・ゾムを目標に定め、ルートも東南面(稜)と決め 二〇〇メートル)に登頂した。われわれは雁部氏の資料をもと 遠征、ペチュス氷河より稜線に達し、フラッテロ・ゾム(C六 その年の夏、 も、各方面の登山隊はコーヨー・ゾムの初登を目ざしていた。 きものであった。 われわれが 着々と準備を すすめている 間に 料とても十分でなく、われわれの魅力を憑きつけるに満足すべ トル)が対象として話題になった。その時点では未登峯で、資 であった。当然、最高峰であるコーヨー・ゾム(六八七二メー ジ遠征を計画したのは、一年前の一九六八年が明けて間もなく わたしの所属する倶楽部(東京岳人倶楽部)でヒンズー・ラ 日本からは雁部貞夫隊の三名がヒンズー・ラジに

> がおりた。われわれは大変ラッキーだった。われわれは、初登 征初めての、事情に疎いわれわれにコーヨー・ゾム登山の許可 あり、来たるべき次ぎの遠征へのステップとしても、今遠征を 頂のなされたコーヨー・ゾムではあるが、海外遠征は初めてで ゾムの初登を果たしたというのだ。だが三月に入ると、海外遠 カデミック・セクションのアルベルト・スタム隊がコーヨー 大変ショッキングな情報が入ってきた。オーストリア山岳会ア への憧憬は消えがたいものとなった。そうした中でわれわれ 変更等)を行なった。しかし、一度火のついたコーヨー・ゾム 時は入国自体が危ぶまれる情勢になり、計画の再検討 (地域

隊 メンバーは次のとおりである。 長 小 笠 原 重 篤 (28歳)

決行することにした。

装備・記録

柳 晴 好 24歳

医療・渉外

竹

謙

(36歳)

会計・食糧 (24歳)

前に在日パキスタン大使館へ提出した一切の書類が未だにIS 内軍事情報局) 庁へ挨拶後、リエゾン・オフイサーと会見するためISI へ出向いたところ、われわれが日本出発一ヵ月

クで陸送、六月一日酷熱のラワルピンデイに全員揃う。関係官

カラチで荷物の通関も無事済み、ラワルピンディまでトラッ

タン大使館へ提出したが、その後パキスタン国内の政変などで

ないことがわかった。 でツイてない。ちょうど日本からの登山隊が他に三隊も来 オフィサーの催促・折衝を重ねるが、 オフィサーの手配を申し出るが、 その後、 毎日のように在パ日本大使館を通じてリエゾン・ 即刻書類を再提出し、 なかなかはかどりそうにもな 運のむかない時はあくま 早急にリエゾン・

I

に届いておらず、リエゾン・オフィサーの手配もなされてい

る。 六月一七日、リエゾン・オフィサーと外務省の一室で会見す である。以前、 事前に通告されていた名前とは別の人物である。 チェコスロバキアのティリチ・ミール隊の われわれ 28

られてしまった。

ースに巻き込まれ、

十七日間もイライラする無益な滞在を強い

パーミッション取得のために現地交渉の最中で、日本大使

パキスタン側とも混線状態にあった。

完全にパキスタンペ

リエゾンをやったことがあり、その際千葉岳連隊とも仲良くな でも のラカポシ隊のときのリーダーだったとのことで、パキスタン ったらしく、しきりに懐かしがっていた。彼はパキスタン陸軍 につくリエゾン・オフィサーは、タモール・アリ陸軍大尉 一流の登山家らしく、山岳に対しては大変詳しい。

### + ラバ ン

トラルを出発した。 六月二五日、 馬とロバ合わせて八頭に八○キロずつ積んでチ 最終のペチュス部落まで、 マスツジでロバ

が、 L

かった一〇日間のキャラバンも終え、

七月四日待望のベース

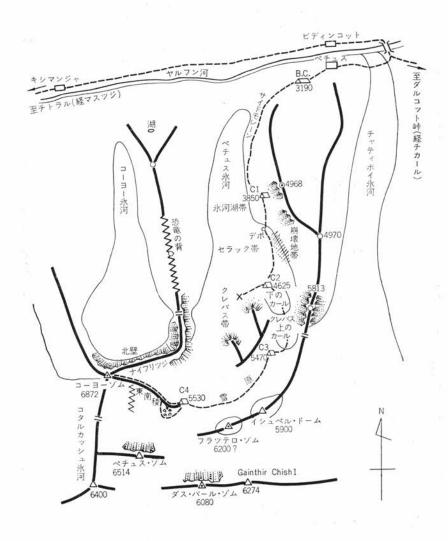
とで滅法速い。 がらヤルフーン河沿いに進む。リエゾンは歩兵部隊所属とのこ 要した。道中の炎天下、 に扱ってほしい」といって贅沢もしなかった。 である。リエゾンも「わたしは隊の一員であるから隊員と同等 追い抜かれてしまう。 交代のための一日停滞を入れ、一日約三〇キロ行程、 われわれが一時間早く出発しても三時間後には キャラバン中は全員現地食のチャパティ 岩塩をかじり、 足のマメに悩まされ われわれと同じ 十日間を

り、もらったりして吸った。また朝食に食べ残したカチカチの 釜の食事を共にし、われわれと同じ現地の安いタバコをやった チャパティを昼食にわけ合ってかじったりもした。色々な遠征

隊から聞いた連絡将校の虚栄心など一片もなかった。遠征を通

馬主連文句一ついわず、リエゾンの命令通りやってくれたもの ジ入りの際は、朝七時から夜九時までのキャラバンだったが、 責任をもってわれわれに尽くしてくれた。特に四日目のマスツ じて現地人とのトラブルもなく、馬主のストライキにも会わず

だった。マスツジでオーラン・グラム・ナビーというコックを はむしろ高揚していく。 白の高峰が真近かに迫ってきて、キャラバンの疲れも忘れて心 き抜いてきてくれた。行程が進むに従って、荒凉たる山肌と純 雇ったが、リエゾンが警察署長の専属コックを格安の値段で引 南京虫に苦しめられたのにはさすがにまいった。楽しく苦 毎夜の宿は警察または民家に宿泊した



キャンプをペチュス部落に設営した。

## ルート工作と荷上げ

BCよりパチュス水可占学のサイドモンーンと送る。まど質大げを行なう。高所ポーターは使わず、全て自分たちで荷上げを一つでは、高度順応が出来て大変良かった)。一人平均二大が一つででは、高所ポーターは使わず、全て自分たちで荷上げた。

から天候も回復し、デポAまで荷上げ。

エゾンに「一緒にアタックしよう」というと、上にいくと食糧BCよりペチュス氷河右岸のサイドモレーンを登る。まだ慣の急斜面を登り、コーヨー・ゾムが良く見える所にC1(三八の急斜面を登り、コーヨー・ゾムが良く見える所にC1(三八の急斜面を登り、コーヨー・ゾムが良く見える所にC1(三八の急が重なができる。まだ慣しまり、というと、上にいくと食糧というと、上にいくと食糧というと、上にいくと食糧というと、上にいくと食糧というと、上にいくと食糧というと、上にいくと食糧というと、上にいくと食糧をはいる。まだ慣りに、いった。

へ入る。四一六○メートル地点(デポA)で夕闇せまり、荷をりと二人でBCで留守番である。C1までの荷上げが完了した後、午後遅く若干の荷を背負って上部の偵察を兼ねて登る。C が合わない(登山中は日本食のため)から駄目だという。コッが合わない(登山中は日本食のため)から駄目だという。コッ

デポしてC1へ引き返えす。

九日、昨日のデポAより氷河の右岸通しに崩壊地帯を行き、

であった。一○日、午前中珍しく天候が崩れC1で停滞、午後下部の氷河湖は青緑がかった水をたゝえ、無気味なほど神秘的下部の氷河湖は青緑がかった水をたゝえ、無気味なほど神秘的となる。眺望も良く、明るく広々として気分の良い場所なのでとなる。眺望も良く、明るく広々として気分の良い場所なのでとなる。眺望も良く、明るく広々として気分の良い場所なので高度差四○○メートル程の雪面を登ると広い台地に出た。右に高度差四○○メートル程の雪面を登ると広い台地に出た。右に

十二日、いよいよ稜線へとペチュス氷河の上部ルート工作を行 上二日、いよいよ稜線へとペチュス氷河の上部ルート工作を行 影響も出てきたのか、C2入りした時は全員バテバテだった。 影響も出てきたのか、C2入りした時は全員バテバテだった。

下降する。十四日、天候悪化の兆しが見え、休養を兼ねて小笠下降する。十四日、天候悪化の兆しが見え、休養を兼ねて小笠を眼前に仰ぎ見、東南稜も確認する。雪原に半雪洞を掘り、ツを眼前に仰ぎ見、東南稜も確認する。雪原に半雪洞を掘り、ツを眼前に仰ぎ見、東南稜も確認する。雪原に半雪洞を掘り、ツェルトを張ってC3とし(五四七〇メートル)、夜遅くC2までエルトを張ってC3とし(五四七〇メートル)、夜遅くC2までエルトを張ってC3とし(五四七〇メートル)、夜遅くC2までエルトを張ってC3とし(五四七〇メートル)、夜遅くC2までエルトを張ってC3とし(五四七〇メートル)、夜遅くC2までエルトを張ってC3とし(五四七〇メートル)、夜遅くC2まで

た、 た、 た、 かれわれもクレバス帯を過ぎた地点(デポB)へ荷を置きC のこと、めくら同然である。そのままC2へ下降して休ませ、 のこと、めくら同然である。そのままC2へ下降して休ませ、 のこと、めくら同然である。そのままC2へ下降して休ませ、 のこと、めくら同然である。そのままC2へ下降して休ませ、 かれわれもクレバス帯を過ぎた地点(デポB)へ荷を置きC かれたと のこと、かくら同然である。そのままC2へ下降して休ませ、 かれわれもクレバス帯を過ぎた地点(デポB)へ荷を置きC

4 へ運び、佐藤をのぞく三名はC4の雪洞へ入る。 4 へ運び、佐藤をのぞく三名はC4の雪洞へ入る。 4 へ運び、佐藤をのぞく三名はC4の雪洞へ入る。 4 へ運び、佐藤をのぞく三名はC4の雪洞へ入る。 4 へ運び、佐藤をのぞく三名はC4の雪洞へ入る。 2 へ下る。十六日、リエゾンがC2 へ上がって泊まっていった

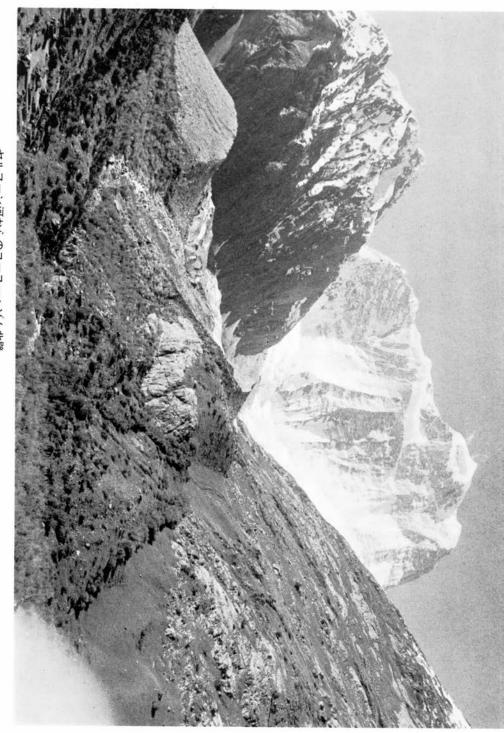
でビバークに入る。

# コーヨー・ゾム登頂

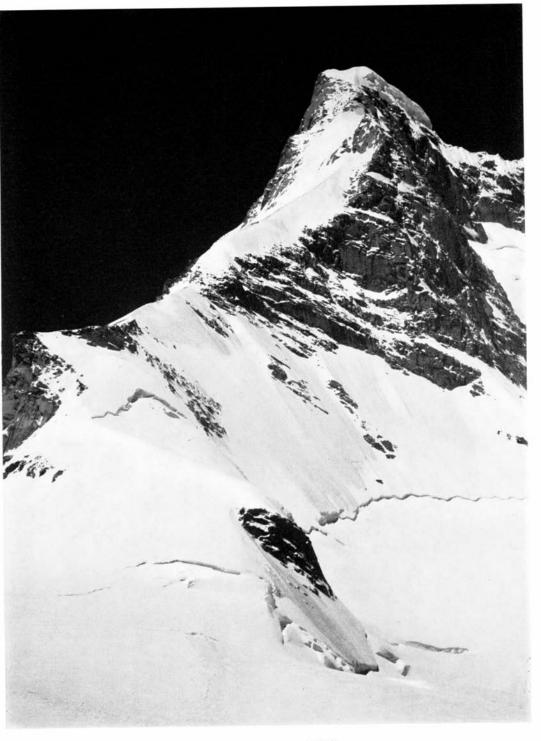
C4からフリーで急雪面を三○○メートル登り、蒼氷の急斜面上から下へとめざめていくだろう。午前七時三○分登攀開始、雪帽がひときわ赤く輝く。谷はまだ眠りにあるが、陽とともに雪相がひときわ赤く輝く。谷はまだ眠りにあるが、陽とともに

二○○メートルラッセルして登った地点(五八八五メートル)出検を利用しながら登った。三○○メートルで平坦な岩稜に飛ど出した。コンティニュアスで約一五○メートル登ると、スパッと切れたキレットに行くてを阻まれる。真中にローソク状のッと切れたキレットに行くてを阻まれる。真中にローソク状のの通過に五時間も費やしてしまう。稜は雪の深い雪稜となり、の通過に五時間も費やしてしまう。稜は雪の深い雪稜となり、の通過に五時間も費やしてしまう。稜は雪の深い雪稜となり、の通過に五時間も費やしてひまった地点(五八八五メートル)

二〇日、ピークは今にもわれわれにのしかかってきそうな感じだ。今日中にピークを踏めると計算し、ビバーク装備など全てその場に残し、身軽になって出発する(後日大いに反省すべてその場に残し、身軽になって出発する(後日大いに反省すべてその場に残し、身軽になって出発する(後日大いに反省すべてその場に残し、身軽になって出発する(後日大いに反省すべきこととなった)。コンティニュアスで百メートル登ると、岩のゴロゴロした傾斜になり二ピッチで通過、上の雪稜へ続く雪のリッジを二ピッチ登ると長大な雪稜となる。下から仰ぐと雪を状だが、実際は急雪面である。傾斜四五度以上の広大な雪面は一七ピッチもあり、強烈な日射に雪もくさって膝迄のラッセは一七ピッチもあり、強烈な日射に雪もくさって膝迄のラッセは一七ピッチもあり、強烈な日射に雪もくさって膝迄のラッセルを強いられ、高度の影響も加わり、身体はけだるく睡気が強い。一〇メートル登っては休む。頭痛がするとすぐ頭痛薬を飲い。一〇メートル登っては休む。頭痛がするとすぐ頭痛薬を飲い。一〇メートル登っては休む。頭痛がするとすぐ頭痛薬を飲んで抑えた。肩の稜から落ちの上に、ピッチで肩の稜線に出た。さらに深着氷がつまりでは、コース・ロール・ロールを強いとない。



The North Face of Koyo Zom seen from the river side of The Yarkhun ヤルフーン河からのコーヨー・ゾム北壁



C3より望むコーヨー・ゾム峰 Koyo Zom seen from Camp 3

と頂上雪帽の一角に出、二ピッチで平坦な頂上の一隅に飛び出

が

って登頂の成功を喜んでくれた。

険なため、そのまゝ坐り込んで一夜を明かす。 堅い氷が流水穴をつくり、その下はスッパリ落ちこんでいて危 いラッセルーピッチで 夕闇も近ずいたので、 ビバーク に入る (六三〇〇メートル)。雪洞を掘ろうとピッケルを振るが、下は

す。

二一日、雪煙をまき上げる頂上の雪片がキラキラ朝

日

K 輝

た。

う風の中で、 た。三ピッチの氷のリッジは、 スクリューハーケンをきかせて突破する。 はねかえされてしまう。氷面に付着した薄い雪が困難度を高め に際して使用したものだろう)。 岩稜を抜けると 今度は氷のリ らと全員意気に燃えて出発する。肩の稜線を三ピッチ登ると、 ッジである。ツァッケも受けつけぬほど堅い氷で、ピッケルも オーストリア隊のものとおぼしき捨て縄を二本発見した(下降 東南稜最後の城砦である岩稜基部に達した。岩稜は三ピッチあ 蒼氷ありオーバーハングありでアブミまで使用した。 昨日の昼から何も食べていないが、今日こそは頂上へ立と 両側スッパリ切れて高度感満点の登攀だったが コーヨー・ゾムおろしの雪片舞 氷のリッジを抜ける 途中

にベースキャンプに帰ると、 を撤収しながら下山、C3、C2と下る毎に荷は山のように増 岩稜帯で真っ暗になり、狭い岩棚で窮屈なビバークを行なう。 える。C1で一泊、二四日、 い。二二日、なおも懸垂下降の連続、 ○分楽しみ下降する。懸垂下降の連続で意外に時間を費やし、 ーストリア人が登頂、第二登も同二三日に果たした」とあ た。メモは「一九六八年八月十七日午後二時三〇分、二名の ら一段下の岩蔭に初登のオーストリア隊が残したメモを見つけ 頂に三人ならんで立った。感激の握手そして写真撮影。絶頂 日中何も食べていなかったが、 われわれもメモを残し、ヒンズー・ラジ最高峯の頂上を四 三日間の渇きと飢え、 キレットの通過を避けて南面の雪の斜面を降り、C4へ なおも最高点求めて西北方に雪原をたどり、午後五時、 睡眠不足を癒やす。 佐藤、 重荷にフラフラしながら半月振り 登頂の幸福さで空腹感 リエゾン、 遅いようでも下降 翌日から各天幕 コックが飛びあ は は 早. te オ

# ヒム・ゾム登頂(一九六九年)

藤 井 郎

に、 は一隊も送られていない。山を志す誰れでもがそうであるよう 鳥取県、島根県を含める山陰地方からは、今まで海外登山隊 われわれも長い間ヒマラヤの高峯へ夢をはせていた。一九

はじめに

標を具体化することはそれほど簡単なことではなかった。目標 六一年に鳥取県山岳協会では海外登山研究会が作られたが、目 の山の決定、資金、休暇取得、準備活動など、それこそ難問が

> 取県教育委員会、鳥取県山岳協会、 員を中心にプランニングを行なったので、この遠征を山陰支部 Bの鈴木氏の情報を得た結果である。日本山岳会山陰支部の会 決定した。これは一九六七年ルンコーを初登頂した東海大〇 の正式な行事とし、遠征隊の名称を日本山岳会山陰支部ヒンズ ズー・クシュのルンコーの近くにあるピーク六四四一に目標を ・クシュ遠征隊(略称 S・H・E・69)とした。後援は鳥 山陰放送。

隊員の構成は次のとおりである。

井 郎 (29歳)

船 越 元 熙 (29歳) 食糧、 会計

隊

広 江 研 27歳 記録、

医療

隊

員

井

上

豊

重

(27歳)

装備

# 二、ヒム・ゾムおよびその周辺の紹介

峯は登られているが、われわれの登ったヒム・ゾム周辺の北部 地域の北部にこの山は位置している。ネパールの登山禁止以 は、ほとんど登られずに残っていた。ヒム・ゾムから西には、 後、入山の比較的容易だったヒンズー・クシュのほとんどの高 ズー・クシュ山脈のうち、東部ヒンズー・クシュと区分される パキスタンとアフガニスタンの国境からイランまで続くヒン

低くても初登頂を、さらに費用、

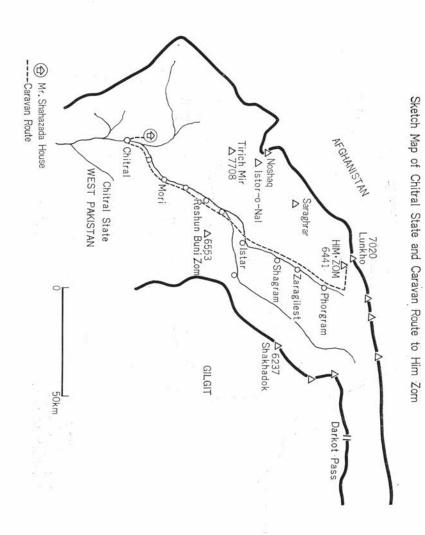
日数その他の条件から入山し 人のあまり入っていなくて、

禁止令が出されたため、目標を、

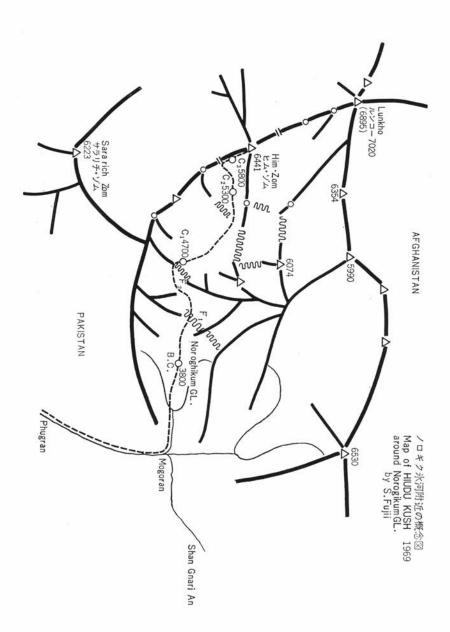
う」という合言葉で結集した。一九六五年以降ネパールの登山

山のように立ちふさがってしまう。われわれは「とにかく行こ

やすいヒンズー・クシュにねらいを定め、最終的には東部ヒン



(167)



はノロギク氷河を登山ルートとした。

ヒム・ゾムはキャラバンの途中一度だけイスタル付近で姿を

見せ、その後ノロギク氷河に入ってベース・キャンプ周辺までき近の行程で七~八日間、急げば四~五日間であった。 見地、その後ノロギク氷河に入ってベース・キャンプ周辺まで普通の行程で七~八日間、急げば四~五日間であった。 日本出発の直前になって得た情報として、東京教育大学O・に日本出発の直前になって得た情報として、東京教育大学O・に日本出発の直前になって得た情報として、東京教育大学O・に日本出発の直前になって得た情報として、東京教育大学O・で普通の行程であった。チトラルからベースキャンプまでき通の行程で七~八日間、急げば四~五日間であった。

人々も別に気にとめている風でもなかったのは興味があった。を得ていないかなり大がかりな登山隊にも出合ったし、現地の国隊はかなりフランクであるようにみられた。とくに登山許可国が、日本ではやかましくいわれている登山許可について、外だが、日本ではやかましくいわれている登山許可について、外にが、日本ではやかましくいわれている登山について現地に行って感じたこと

六月八日羽田空港を出発し、六月十七日チトラルに入る。チトラルでは、ここを訪れるたいていの日本人がお世話になっているというシャザーダ氏宅にわれわれもお世話になった。テトラルを出発し、必要な事務手続をすませ、買物等準備を整えた。六月二十一日、六頭のロバに四百キロほどの荷物を積んでチトラルを出発した。途中落石でガソリンタンクに穴があいたりして前途の多難を感じさせたが、六月二十三日、キャラバン中で最大の部落であるレシュンに着いた。

話は白けて、皆は絶望的な気分になった。やっとここまでキャ

ってくるように、というものであった。今までの熱のこもった

が事実と異なって流布していたのである。その噂は、日本人が 共に出発して、ベース・キャンプを建設し、荷上げをすること 隊を二つに分けることになった。先発のキャラバンはムサ氏と ことになったが、ピンディー組は十一日に帰れず、やむを得ず 護までやって、大変な忙がしさだった。この間、二隊員はラワ た。彼は通訳から、ポーターとロバの手配、夜はわれわれの警 でいわゆるエリート・コースに乗ってかなりの地位についてい れは喜んでその好意を受けた。紹介された警察官はモハメッド んどは安全のため警察官をつれてゆくように提案され、われわ るが、七月七日、S・Pも納得して事件は解決した。そしてこ れたらしい。そのため、真相究明のため呼びもどされたのであ て来た外国人が盗難にまきこまれた最初のケースとして重視さ 盗難ではなくて、強盗にあったというもので、チトラルにやっ 理由がはっきりした。盗難事件は大変なことになっていた。噂 シャザーダ氏宅へ落ちつき、そこでわれわれが呼びもどされた を考えると気持はやりきれなかった。七月四日、チトラル着。 た。多分盗難事件に関するものだろうとは考えられたが、前途 二十九日、キャラバンは進路を逆にとってチトラル へ 向 ラバンを進めて来たといっても、命令には服さねばならない。 ルピンディーへ行き、パスポートの再発行等の手続きをすます ・ムサといって、まだ若いが学歴もあり、チトラルの名家の出 か 0

あった。

部落にキャンプしており、明日目標の山に向かうということでリア隊は近くのサラリッチ・ゾムの偵察のために現在一つ奥のと変えす際に約束しておいたポーターが待ちうけていた。彼等き返えす際に約束しておいたポーターが待ちうけていた。彼等はわれわれの目標の山にライバルが現われたことを非常に心配はわれわれの目標の山にオーストリア隊が向かったというニュルに入ったため、予定より一週間遅れてしまった。

ベース・キャンプでの再会を約して別れたが、その隊は別のめているさまは、いささか拍子抜けの感じであった。せて昼頃オーストリア隊に追いついた。やはり目標は同じだっせて昼頃オーストリア隊に追いついた。やはり目標は同じだっそこで、翌日われわれは暗いうちに出発し、ポーターを急が

に目上に日、ハコギカ水可上とドース・キャンプ(三八))、六千メートル峯を登山中とのことであった。人に聞いたところでは、プグラムから見える谷の奥正面にある山に目標を変え、会うことはできなかった。下山の際、現地の

ム・ゾムの頂上が見られるだけで、谷は狭く、両岸は深い岸壁の上で、第一アイス・フォールの直下にあたり、谷の奥にはヒメートル)を建設する。キャンプはモレーンにおおわれた氷河土日十七日、ノロギク氷河上にベース・キャンプ(三八○○

にした。後発のピンディー組は結局飛行機がだめで陸路チトラ

遠くには、

ヒンズー・ラジ、

ヒンズー・クシュの国境近くの

にかこまれていた。夜になるとまわりのアイス・フォールやモ レーンの崩れる音が一晩中鳴り響き、ヒマラヤらしい第一夜だ

った。

を乗っ越した。その上部はクレバスだらけの幅広い氷河で、さ 偵察に出かける。 イス・フォールよりもさらに大きなセラック帯である。 らに奥には第二のアイス・フォールが待ちうけていた。第一ア まどわされた。午後遅くなってようやくこのアイス・フォール えながらいくら登ってもなかなか着かず、スケールの大きさに はかなり困難に思われた。近くに見えるのですぐ着きそうに見 七月十八日、 荷物の整理をして、十時頃アイス・フォールの アイス・フォールはセラック帯となり、 通過

崩壊しており、谷いっぱいに轟音を響かせていた。

絶えず

たどりつくと高度障害に苦しめられるが、さらに百メートルほ

ンプ(C3・五八〇〇メートル)を作ることにする。

二十一日、C3の偵察と荷上げ、さすがに苦しい。

尾根上に

ふり返えれば下方にわれわれのたどった氷河がうねり、はるか と上部にはヒム・ゾムをはじめいくつもの氷の高峯が鎮座し、 出る。すでに高度も高く、すごく息が切れる。氷原に出てみる したが、昨日偵察したように直接突破は不可能であった。 ト工作のおかげで、快調にアイス・フォールを突破する。その はムサ氏一人で、心細そうにわれわれを見送ってくれる。ルー ス・フォールの右岸にあるガレ場を登って上部の広大な氷原に 十九日、上部氷河へ荷上げ開始。ベース・キャンプに残るの 三時間も氷河をつめると第二アイス・フォールの直下に達 アイ

なかった。

山々が連らなっていた。午後も遅く、その地点を第一キャンプ (C1・四七〇〇メートル)とした。

ら南下している尾根にとりつき、その尾根上にアタック・キャ ところではなかった。これからはC2を前進基地とし、頂上か サイトは多数のクレバスがテントのまわりを走り、気持のよい ャンプ(C2・五三〇〇メートル)を建設した。このキャンプ をヒム・ゾムの頂上から落ちている岩壁基部までつめ、第二キ 二十日、 高度はかせげないが、クレバスの発達した長い氷河

から標高差約九百メートルのロングランを覚悟しなければなら た第二岩峯も何とか通過できる見通しがついた。 的容易であったため、荷上げが順調に運んだのに安心した。こ の日の偵察の結果、C2からの遠望では最大の難関と考えてい けてくる。尾根上に荷物をデポしてC2へ下る。ルートが比較 ど上部の第一の岩峯を偵察にゆき、格好のテントサイトを見つ

った。 プに下る。あれほど悩まされた頭痛がうそのように消えてしま 二十二月、 二十三月、 後発キャラバン隊が到着する。二十四日、 荷上げと偵察をすませていったんベース・キャン 後発隊

(171)

はかなり疲れていたようであったが休養はとらず、全員でベー

天気に追われるようにして登る。八時四十分頂上着。かなりの

(172)

った。頂上では、日本、パキスタン両国旗および鳥取県旗をか ロングランになると予想していたのに、意外に早く登ってしま

ス・キャンプを出発する。先発の二名は高度に慣れたのか、た

いして息切れもしない。後発の二人は苦しそうだった。その日

はС1どまり。二十五日、С2にはいった。すでに高度に慣れ かげパノラマ写真を撮った。またたくまに一時間がすぎ、天候

メンバーをサポートに当て、二十六日、C3を建設し、アタッ 下り、第二次隊がC3に入る。

悪化のすすむ頂上をあとにした。この日アタック隊はC2まで

二十八日、前日来の悪天候もどうにかもちなおした。ベース

昨夜はビバーク用シュラフのためすごく寒かった。コンロの調 が、何とかそれを克服し、無事登頂に成功、全員C2に集結し キャンプに入って五日目の第二次アタック隊は高度に苦しんだ

た。二十九日、ベース・キャンプに下る。ベース・キャンプで

はムサ氏がわれわれの成功を大喜びで迎えてくれた。

在でもこの山に名前がついていないことから、この山にヒム 帰国後、 山陰地方初めての遠征隊を記念するために、また現

ゾム(雪の山)と命名した。

二岩峯を乗っ越したのもつかの間、雲が急速に広がってくる。

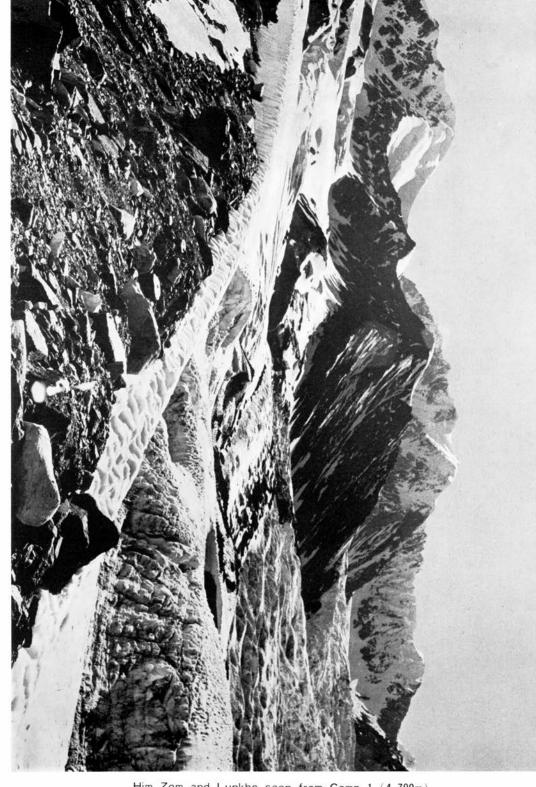
トルの高山を登っているとは思えないようだ。七時頃難関の第 影響は見られない。 少し 呼吸が 苦しいだけだ。 六四〇〇メー 子が悪く、いらいらしながら食事を作る。どうにかラーメンを

一杯だけながしこみ、五時二十分出発する。全く快調で高度の

ク隊二人がC3にはいった。

二十七日、三時三十分起床。いよく、アタックの日である。

ている先発メンバー二人をアタック隊とし、後発キャラバンの



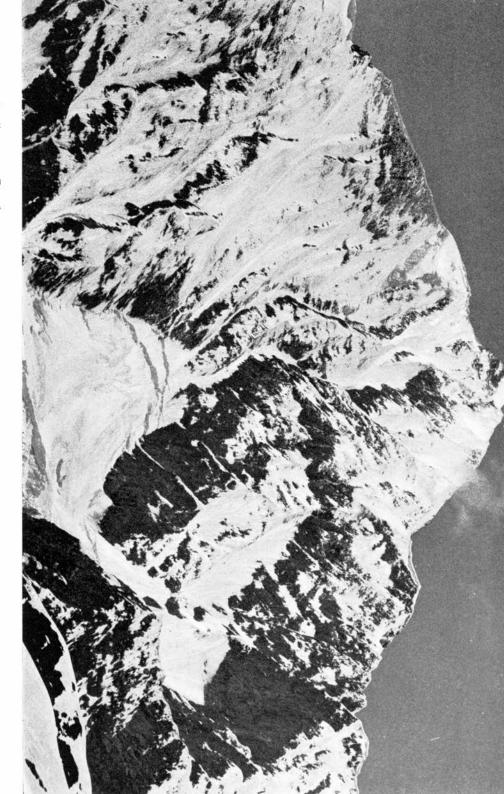
Him Zom and Lunkho seen from Camp 1 (4,700m)



ヒム・ゾム頂上からのルンコー(7020m) Lunkho(7020m)seen from the summit of Him Zom



Hanuman Tibba seen from Solang Pass. Camp 1 C1よりハヌマンティバ



ビアスクンドよりハヌマンティバ Hanuman Tibba seen from Beas Kund, Base Camp

パンジャブ・ヒマラヤ(一九六九年)

中心に、海外遠征の話が持ち上り、話し合いの結果、全員がヒ

日本山岳会の下部組織である学生部に出入りしていた仲間を

属する寄り合い世帯になることなどを考慮し、経済的に負担が マラヤ遠征は初経験であること、各人が別々の大学山岳部に所 山隊を迎えている。

梶

が、ラホール、スピティ、ザスカル、チャンバ等にまたがる広 ○○○メートルを越える高峰もなく、高度の点では見劣りする インドにおけるパンジャブ・ヒマラヤはヌン、クン以外に七

> ークへの登頂をトス氷河より行なうことに決定する 少なく、天候・高度の点から各人が思いきって行動できる条件 にあるホワイトセール(六四四六メートル)をはじめ二つのピ のそろったパンジャブ・ヒマラヤに目標を決定した。スピティ 隊の編成も最終的に左記のとおり決定した。

(年齢は出発当時)

森 本 勲 夫 24歳

長 員

成 長崎大学山岳部

隊 隊

田 義 宏 (22歳) 東京都立大学山岳部

梶 野 正 和 彦 22歳 (22歳) 青山学院大学山岳部 上智大学山岳部

横浜を約四○○キロの荷物と共に四月十四日出港、

ボンベイ

五月六日、二十二日間の船旅の後、ボンベイに上陸。

に向かう。

中を飛び回り、それだけで目がまわりそうであった。 五月八日、全員パタンコット行急行に乗り込む。森本、梶は

野はそのまま荷物を輸送、十二日パタンコット経由マナリ着。 インド登山財団との折衝のためニューデリーで下車。成田、 正 彦

イン内にある状態であるが、唯一の例外としてクルー・マナリ この山脈も、例にもれず、興味ある山塊はすべてインナーラ 興味ある地域となっている。

大な地域に六〇〇〇メートルを越す山を連ねて、小遠征隊には

る。この山塊の登山基地となるマナリは、首都ニューデリーか 山塊がある。この地域はパンジャブ・ヒマラヤの中では日本に 番なじみの深い地域で、インドラサン、デオ・ティバ等があ

どの困難はないので、毎シーズン、国内、国外から数多くの登

ら二日で達せられ、アプローチも短かく、

許可の点でもそれほ

(173)

国立西部登山学校にすべての荷物を運ぶ。

に関しても、すべて許可になっていた。 (三十六歳)が任命されていることを知る。われわれの登山目標にわれわれのリエゾン・オフィサーとしてムルク・ラジ少佐、にっニューデリーの二名は、インド登山財団と連絡をとる。すで

ヒマラヤ初経験の学生ばかりの隊であることを考慮しての決定インドでは有名な登山家であり、インド側としてはわれわれがの隊員で、その他幾つもの大遠征隊に隊員として参加しているムルク・ラジ少佐は、第二次、第三次インド・エベレスト隊

ューデリーを発ったのは、小雨降る十九日の朝であった。二十食糧などの買い出しを行ない、三名が登山基地マナリに向けニ暑いニューデリーで、リエゾン・オフィサーを加えた三名で

共に乗り込む。

日マナリ着。先着二名の出迎えを受ける

であったと思われる。

は梶、リエゾン・オフィサーの二名で、キャラバン出発地点でしながらニューデリーよりの返事を待つ。二十二・二十三日にに電報を打ち、出発の準備も進める。トレーニングや岩登りを式文書がないので入山はまかりならぬとのこと。ニューデリー式 上り現地との交渉を開始する。登山許可に関し、公二十一日より現地との交渉を開始する。登山許可に関し、公

二十五日、クルーから来た郡役人より、公式文書がくるまで

あるパルバッティ谷マニカラン村までロバ、ポーターの確保に

マナリ西部の山々、ハヌマンティバ(五九二八メートル)他幾得策でないと判断した。そこで、目標を許可なしで入山できるも入れ協議した結果、天候の関係があるのでこれ以上待つのは

つかの山の登頂に変更した。

この時期には他にも幾つかの登山隊がここマナリを中心とし

少々待たされることを知らされ、国立西部ヒマラヤ登山学校長

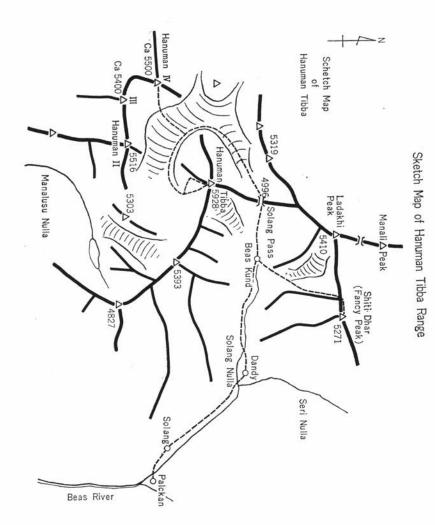
それにリエゾン、ハイポーター一名の合計六名がすべての荷と(二十歳)というハイポーターしたトラックに、われわれ四名、て行動していたので、ハイポーターを一名確保できただけであった。

がら、ソーラン・ヌーラ沿いのキャラバンである。ンディまでは、ロータン・パスから西に延びる山稜をながめなンディまでは、ロータン・パスから西に延びる山稜をながめなったという牧場まで行き、ここからキャラバンを開始する。ドガルチャン村でポーターをトラックに乗せ、車道が終るソー

ビアス川のかなたにインドラサン、インドラキラー、デオ・テ上流を望むとハヌマンティバの白い峰が高くそびえ、下流には

ドンディはすばらしく展望のきく美しい羊の放牧場である。

持って上ってくる。賃金が折り合わないために今日はポーターラムがニューデリーから届いたホワイトセールへの入山許可を二十九日、パルチャン村にポーター集めに下っていたボラ・ィバが望まれる。



(175)

が来ないので、テントキーパー一名を残して、全員ベースキャ

三十日、ポーターを使ってベースキャンプ(BC)建設。BCンプ建設予定地点を偵察する。

ボン・W、 BIC1予定地点まで偵察を行なう二名(成田、メートル)、明日C1予定地点まで偵察を行なう二名(成田、はビアスクンドと呼ばれる大きな雪原上に置かれ(約三八○○

星野)を残しドンディに戻る。

三十一日、快晴。ポーターを使用し、すべての荷をビアスク

までで引き返えす。 達せず、クーロアールを抜けた上部雪田(四七○○メートル) 達祭隊二名は、慣れぬ高度に手間どり、ソーラン・パスまで

発以来続いた好天も、午後から厚い雲におおわれた。する谷をつめ、四三○○メートル付近で引き返えす。マナリ出する谷をつめ、四三○○メートル付近で引き返えす。マナリ出た月一日、全員で高度順化のため、ラダキ・ピークに源を発

トル)にC1建設。

はラダキ・ピークからの谷をつめ、二名(成田・梶)はラダキを合わせて行なう。二パーティーに分け、二名(森本、星野)しているラダキ・ピーク、マナリ・ピーク、ムカルベーの偵察二日、昨日に引き続き、高度順化とハヌマンティバの後予定

星野パーティーは軟雪に手間どり四四○○メートル付近から引

・ピークより東に延びる稜線に出ることを目標に出発。森本・

き返えす。

成田・梶は、

ビアスクンドに稜線より真南に降りて

くる小尾根にルートをとり、尾根を忠実につめ、ラダキ・ピー

んで見えるのみであった。マナリ・ピーク、ムカルベーは雲の峰上に着いた時は天候も崩れ始めており、ラホールの山がかす峰(約五二五○メートル)に登頂後、雪の中をBCに戻る。岩クとシティダラ(別名ファンシー・ピーク)間の稜線上の一岩

中であり偵察できなかった。

カ。クーロアールの中約四三〇〇メートル付近の岩の台地にデ三日、テントキーパー(森本、リエゾン)を除き四名でボッ

ポ。小雨の中帰幕

1建設に向かう。クーロアールの中では右側からの落石に注意五日、体調の悪い二名(森本、梶)をBCに残し、四名がC四日、雨のため停滞。

南面の氷河を上流に向かう。この氷河のラビ川への下降点の地六日、ソーラン・パスより雪原を西に下り、ハヌマンティバ

形は複雑である。C2は氷河上約五〇〇〇メートルに建設。

上に達した。頂上付近は雪庇になっていて慎重に登る。星野・イス・フォール左側から上部に抜け、急な雪面を登りつめ、頂パーティーが頂上を狙う。ハヌマンティバ南面中央部にあるアポーティーが頂上を狙り。ハヌマンティバ南面中央部にあるア

2帰幕は午後一時半。BCの二名はソーラン・パスのC1を出ボラ・ラムは八時三○分、成田・リエゾンは十時に頂上着。C

て雪原を下降し、 午後は降雪 氷河合流点付近 (約四七〇〇メートル) に幕

三名(成田・星野・リエゾン)はBCに下る。 峰下の氷河上にて会いボラ・ラムは二名についてC2にもどり 八日、C2を出た四名と氷河合流点を出た二名はハヌマンIII

ト・ルートだ」と喜ぶボラ・ラムに迎えられる。 雪に悩まされながら午後一時四○分C2に着いた。「ファース パーティーのとったルートを使用したが、強い日射でゆるんだ スピティのすべての山々を望むことができた。下りは二日前の しく、北にはシャカルベー、ムカルベーが大きく、ラホール、 て尾根を頂上へ。頂上着十時。快晴で頂上からの展望もすばら てきたところでスタカットとし、ハヌマンティバ西稜上部に出 雪壁をコンティニュアスとスタカットをまじえて登り、岩がで トをとらず、クーロアールを直上。クーロアール上部に開ける かせて快調に高度をかせぐ。アイス・フォール上部に出るルー 九日、森本・梶は四時五〇分C2発。堅い雪にアイゼンをき

頂上着。 バを背に東面の日当りの り頂上までそのまま急な雪の斜面を直上。大きなハヌマンティ 動。六時十五分新C2をたってハヌマンIV峰を目指す。氷河よ ハヌマンIV峰を目指す。朝C2をハヌマンIV峰下の氷河上に移 頂上からのチャンバ方面の展望はすばらしかった。ゆ ハヌマンティバを囲む山の中で唯一の未登の山である いい斜面をひたすら登りつめ、 十二時

> る。C2着午後三時二〇分 るんだ雪にボラ・ラムが足をとられるのに神経を使いながら下

の生徒達に迎えられる。夕方全員で隊長の誕生パーティーをす およびフィールドトレーニングに来ていた登山学校基礎コー 十一日、三人で小雪の中を撤収。 小雨の中BCで先着の ス

る

に決定する。 次の目標であるマナリ・ピーク登頂をあきらめて下山すること 医者である隊長が付き添って下山することになり、 われわれも

十二日、登山学校基礎コースの生徒の中に病人がでたため、

十六~十八日、 十四、十五日、 ドンディの放牧場にて休養。 両日にわたってドンディへの荷下し。

終始励まし、応援してくれたのは学生部担当理事であった宮下 ヒマラヤ遠征経験者が一人もいなかったこの若いわ 遠征隊は七月四日ニューデリーにて解散 十九日、パルチャン村経由マナリへ帰る。

秀樹氏および学生部の仲間たちであった。

指導いただいた。以上記してお礼を述べておきたい。 氏および秘書チャクラバティ氏の歓迎と御支援を受けた。 リエゾン・オフィサーになっていただいたムルク・ラジ少佐に インドにおいても、 未熟なわれわれを山の中のみならず都会生活においても御 われわれはインド登山財団会長サリーン

(177)

## 最近のブータン事情をみる

#### 小方全弘

る。一九三七年のスペンサー・チャップマンの記録はよく知らチョモラリは一九三七年と一九七〇年の二度、登頂 され てい置するチョモラリを除いては、ほとんど全てが未踏峰である。ブータン王国の北部山岳地帯にある高峰は、ほぼ西北端に位

れているので省略する。

現在、ブータンで語源については、探せばもっと多くの説がである。ブータンが明日のブータンであるわけではない。私は機会をが一年半の間にブータン王国は大きな変貌を遂げていた。か一年半の間にブータン王国は大きな変貌を遂げていた。か一年半の間にブータン王国は大きな変貌を遂げていた。という説がある。また、"十万の経文を彫った石"という説もという説がある。また、"十万の経文を彫った石"という説もという説がある。だから今日

わりしておく。

てくることであろう。

かった所似である。 かった所似である。 がった所似である。 ですることができなくなった。ブータンの高山岳地帯を歩けなの接近はもちろんのこと、いわゆるグレート・ヒマラヤには接から北へ外国人を入れないようになった。このため北部国境へかった所似である。

でのはチャツェ氏の上司、ウォンディ大尉であったことをお断たのはチャツェ氏(二十八歳)が勤めていた。私はチャツェ氏にある。そしてここに、ブータン人としてチョモラリの頂上に立ある。そしてここに、ブータン人としてチョモラリの頂上に立ある。そしてここに、ブータン人としてチョモラリの頂上に立ある。そしてここに、ブータン人としてチョモラリの頂上に立ある。そしてここに、ブータン人としてチョモラリの頂上に立ある。そしてここに、ブータン人としてチョモラリの頂上に立たチャツェ氏(二十八歳)が勤めていた。私はチャツェ氏にったチャツェ氏(二十八歳)が勤めていた。私はチャツェ氏にある。そしてここに、ブータン園のでいる。これはアールに対している。これに対しないる。これに対している。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるにはいる。これにはいる。これにはいるにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるにはいる。これにはいる。これにはいるにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるにはいる。これにはいるにはいる。これにはいるにはいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいるいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはいる。これにはいるいる。これにはないる。これ

ある。いろいろ質問したが、最後までブータン人らしい謙虚さチャツェ氏に始めて会った印象は、小柄で実直そうな青年で

いう。頂上へ達する稜線はおおむねチベット側を歩いたものら

い。稜線は若干の起伏はあってもさほど難かしいところはな

よそ四二〇〇メートルくらいのものであろう。割合い、早いペ

かった。

正確には

わからないが、

チョモラリ・ゴンパは、

おお

を失わなかった。

スである。

チャツェ氏の言葉によると、インド・ブータン合同登山隊がチョモラリに登頂したのは一九七〇年四月二十三日のことである。五人のシェルパを含める隊員が頂上に立った。合同登山隊のリーダーは、ダージリンにある登山学校のクマール大佐で、のリーダーは、ダージリンにある登山学校のクマール大佐で、カンド人七名、ブータン人三名、シェルパ十一名から成るかなり大きなチームである。

第一次登頂隊が成功したあと、第二次登頂隊が四月二十四日 第一次登頂隊が成功したあと、第二次登頂隊が四月二十四日 を、 インド隊員二名、シェルパー名である。一九七〇年のブータンはモンスーンが早くやってきた。チャツェ氏の登頂した日 も、 風こそ弱かったが天候は悪く視界は全くきかなかった。 頂 とに立ったとき、「どうやって帰ろうか」と思ったのが、いわ ゆる第一印象であったという。この年は雪量も多かったらしい。ベースキャンプはチョモラリ・ゴンパに建設されたが、そい。ベースキャンプはチョモラリ・ゴンパに建設されたが、そい。ベースキャンプはチョモラリ・ゴンパに建設されたが、そいの、ベースキャンプからはテントを二つ出しただけで頂 いわれる。ベースキャンプからはテントを二つ出しただけで頂上へ達した。 稜線に到達するまでは若干の難かしさはあったと上へ達した。 稜線に到達するまでは若干の難かしさはあったと

正氏もこの山行に加わっていると思われる。山の訓練をしたことはないと本人は言う。しかしブータン人の山の訓練をしたことはないと本人は言う。しかしブータン人の山の訓練をしたことはないと本人は言う。しかしブータン人の山の訓練をしたことはないと本人は言う。これまでに特に登

うことである。
・
大が登頂者になるだろうと予想した者は一人もいなかったとい氏が登頂者になるだろうと予想した者は一人もいなかったとい実、この合同登山隊に参加したブータン軍人の中で、チャツェに際立った登山の資質があるようには思えなかったという。事

彼の上司、ウォンディ大尉の言葉によれば、

チャツェ氏は特

それはともかく、登山期間中、チャツェ氏がもっとも不満だったのは、インド人とブータン人の食生活の差にあったようだ。チョモラリ登山について、どのような経費負担であったかは、チャツェ氏自身も知らなかったが、高所用食糧は全てインド側の負担であったらしい。そして缶詰が主であったようだ。ブータン人は米と肉を食生活の基本としている。もし、インドド員にベジタリアンでもいたら、ブータン人としては、とても耐えられなかったことであろう。「もし、ちゃんとした食事ができたら、私以外のブータン人が登っていたことでしょう」と感想をもらしていたチャツェ氏であった。

(179)

ェ氏の結論でもあるようだった。 チョモラリは、高いわりには登りやすい山というのがチャツ

ガンサー博士の調査の結果、ブータン王国内にある最高峰はギ チョモラリ以外の高峰についてはまだよくわかっていない。

七五〇〇メートル前後のものであろう。ギャンケプンツムとは の語ったところによると、東北国境地帯にはギャンケプンツム もそう信じているようである。くわしい標高はわからないが、 ャンケプンツムだろうといわれる。ほとんどのブータン人自身 "冷たい三人の兄弟。という意味だと聞いた。あるブータン人

> の山々は今後の研究にまたねば何もわかっていないのである。 はないので真疑のほどはわからない。いずれにしても、ブータン 噂さでは、イギリス人がブータンの最高峰の登山許可を申請

てきた。だが、その道具が日の目を見るときがないのではなか しているそうだ。私も登山道具をブータン人の親友の家に預け

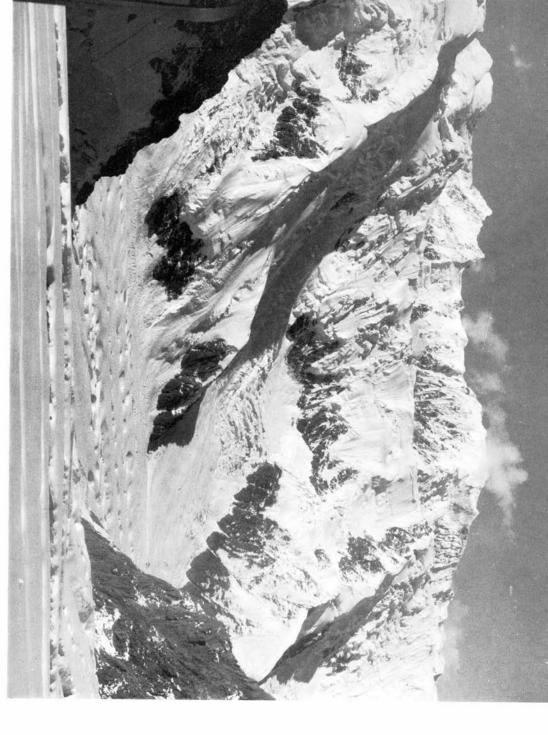
たとえそうであっても、もし許されるならブータンへは、何

度でも行きたいものである。

ろうかと不安である。

(180)

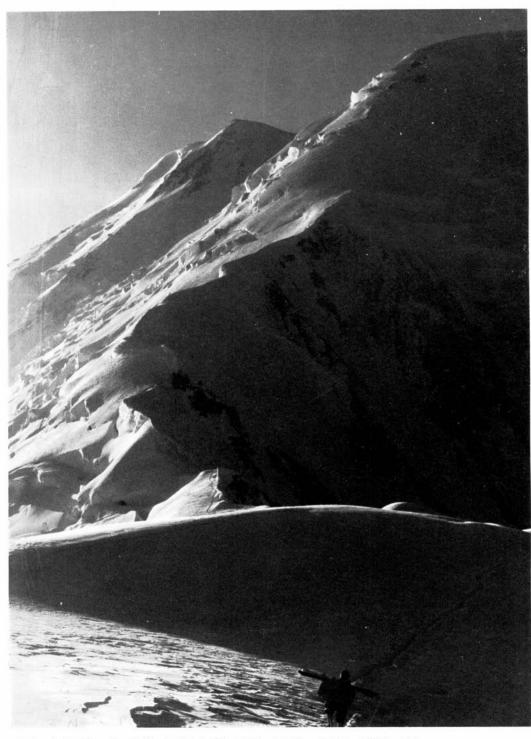
より高いと思われる山があるそうだ。もちろん測量したわけで



C2よりセンテニアル山群を望む。 The Centennial Range from Camp 2.



西稜4,200mの頭付近よりルケニア峰(5,226m)正面は、4,800mの頭からの懸垂壁 The summit of Mt.Lucania(5,226m)from the snow plateau at 4,200m



暁光の中をアタックに出発。正面は4,200mの頭への雪壁。その奥、4,800mの頭 The upper part of the west ridge from the advanced base camp. The 4,200m peak. right and the 4,800m peak. left.



西稜4,200mの頭への斜面下方はチチナ氷河 The snow slope on the west ridge down from the 4,200m peak. The Chitina glacier seen in background.

た。

さらに東方約一○キロのスティール峰まで縦走する計画をたて

#### ル ケニア西稜登攀と スティール峰への縦走

東北大学山の会 東北大学山岳部

は

Ľ

80 に

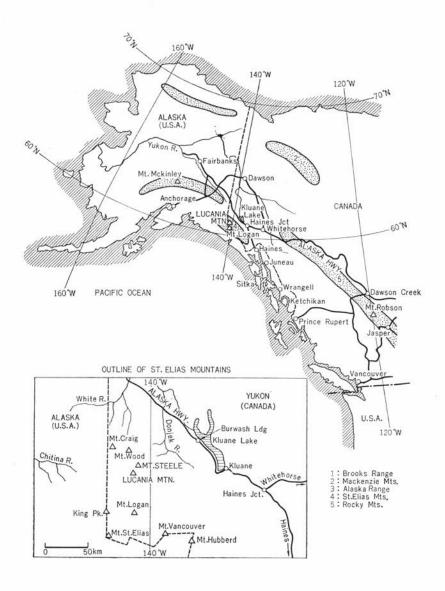
こでわれわれは、頂上に直接つき上げるルケニア西稜を登り、 ら、また一九六七年には米加合同隊により北稜から登頂されて ティール峰 に出て、その後にルケニア峰に達するルートをとっている。 いる。ところがこれらはいずれも、一旦スティール峰とのコル ケニア峰は一九三七年にウォッシュバーンにより南東側 北部のルケニア峰(Lucania Mtn., 5,226 m)登頂およびス 九六九年夏、 (Mt. Steele, 5,071 m) カナダ・ユーコン準州、 までの縦走を行なった。 セントエライアス山 か

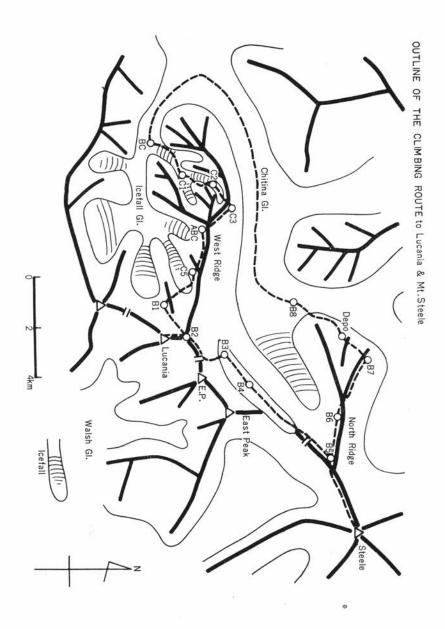
> 折の危険、また上部雪原への荷あげなど、不利な面も十分に考 最後の四名で縦走した。 康夫(3歲)、菅村和夫(3歲)、 (2歳)、西尾文彦(2歳)、秋山康夫(2歳)、目邦雄(25歳)、 より縦走をより迅速かつ安全に行なえるものと判断した。 慮に入れねばならないが、検討を重ねた結果、スキーの使用に の有用性を身をもって体験していた。転倒とそれがもたらす骨 条件の似た山行を多く行なってきた。そして、その際のスキー 走はその典型的な例である。 の両者をつなぐ高距二千メートルを超える雪稜の攻 略に 劣ら 隊は三橋亮一(37歳)を隊長とし、阿部郁夫(26歳)、氏家 頂上付近の雪原をいかに安全かつ迅速に通過するかが、 登頂の成否を左右する場合が多い。今回の計画、ことに縦 般にセントエライアス山群では、 われわれは国内の冬山で、 川本明(20歳)の九名で構成され 山体下部の氷河のみなら 比較的 山下

偵察隊を派遣していた。 夫、目邦雄、 使用の有用性を調査するため、 なお一九六八年夏、西稜ルートの可能性と氷河の状態、 足沢貞成(22歳)、 中津哲夫(21歳)の五名からなる 葛西森夫 (隊長46歳)、 阿部郁 スキ

#### 渡航および入山

荷物はすべて手荷物扱いとする。北米大陸上陸後は、これらの 六月上旬、 三隊に分かれて船で日本を発つ。 合計約二トンの





荷物はレンタカーと路線バスで運ぶ。

ない。七月三日になり、やっと入山することができた。 湖畔のバーウォッシュ ランディング (Burwash Ldg.) に集 コプターは森林火災の消火に追われ、なかなか順番が回ってこ 結する。早速入山に備えたが、われわれのチャーターしたヘリ 六月二十八日、全隊員、全梱包がユーコン準州・クルアーネ

は、

#### ェ 作

をデポしておく。 行の際、縦走隊の下山路にあたる北稜の末端付近に予備の食料 点に入山し、ベース・キャンプ(BC)を建設する。最後の飛 んでいるアイス・フォール氷河(仮称)の二一〇〇メートル地 七月三日、チチナ氷河の支流で、ルケニア峰の南西に食い込

3を設け、順次撤収しながら登行することにする。 および西稜に出た三二〇〇メートルの各地点にC1、C2、C である。途中、氷河上の二五〇〇メートル、二八〇〇メートル、 氷河」をつめて西稜に出、 を採る。すなわち、BCの眼前に押し出している「取りつきの 察隊によりトレースされており、本隊も原則として同じルート ABC予定地(西稜三七○○メートルの頭)までは昨年の偵 以後は稜づたいに登頂をねらうもの

アイス・フォール地帯は、昨年のルートどおり難なく通過 七月四日、全員でC1まで荷上げをする。BC C1間の第

> 隊三名と荷あげ隊六名に分かれる。 第二アイス・フォール地帯を目前に控えたC1で、ルート工作

十四日になりやっとC3までの荷あげを完了する。 八日、ルート工作隊により設けられたが、その後天候が悪く、 岸より、左岸ぞい、の三通りのルートの可能性が考えられ、 のトラバース部にはロープ(一五〇メートル)を固定する。 候補であった左岸ぞいにC2予定地までのルートを拓き、岩壁 五日午後から六日朝までの白夜を徹しての工作により、最後の かけ、中央部、右岸より、左岸ぞいの順で順次偵察する。結局 央部のものが最有望視されていた。そこで四日午後から六日に C2より上部の氷河はスキーを用いて荷あげをする。C3は C1とC2予定地の間に広がる第二アイス・フォール地 昨年の偵察隊が調査したところによれば、氷河中央部、 中 右

て、西稜の北側の斜面(三〇~四〇度)に出、ラッセルを続け イスビルディングがそびえており、これをチチナ氷河側に捲い を工作し、登行を続ける。三五〇〇メートル付近には巨大なア 三四〇〇メートル付近の急斜面に再びロープ(六〇メートル) を伸ばす。やがて尾根はやや広くなり、傾斜もまた緩くなる。 バケツを掘り、ロープ(一五〇メートル)を固定しつつルート とすぐ、北側に大きく雪庇の張り出した急傾斜の雪稜となる。 ルート工作を進め、ABCまでのルートができる。C3を出る ルート工作隊は八日から十日までの三日間を要して西稜上の 1

トルの頭までのルートを確保する。

建設した。 はテント数張り分の平坦地が有り、この格好の地にABCをにはテント数張り分の平坦地が有り、この格好の地にABCを

しかし、十日午後から天候が崩れ、十二日夜半まで降雪が続く。ABCの三名にとってシケモクが貴重品になり始めた十三日になりようやく天候が回復する。そこで、ABCの三名は十三日夜から四二○○メートルの頭に向かってルート 工 作 を 始め、C3の荷あげ隊は「取りつきの氷河」のカールボーデンかめ、C3の荷あげ隊は「取りつきの氷河」のカールボーデンからABCが整う。

岩を利用してロープ(三〇〇メートル) ゆるく、平均四十五度くらい、 根としての姿を失う。計画段階から、登路での難関のひとつと 斜面となっており、その上部には三個の露岩が縦にならんでい して危惧していた壁である。しかし予想していたよりも傾斜は 続く雪壁の基部に達する。西稜はここで雪壁に吸い込まれ、 は、 ロープ(一七○メートル)を固定し、四二○○メートルの頭に ABCから先のノコギリの歯のような雪庇の発達し 両手に持ったピッケルとアイスバイルで高度をかせぐ。露 雪質の変化が目まぐるしく、結構手間どる。 高距約三〇〇メートルの堅雪の を固定し、四二〇〇メ 途中二個所に た尾 尾 根

## ルケニア峰登頂および縦走

える。 る。さらにその奥に、 から落ちる蒼氷の懸垂壁が圧倒的な高さと広がりを誇 料などをデポする。ここより上部の西稜は、尾根というより 袋一、炊事用具に制限し、ビバークを繰り返すことにする。 ーデンが雪原をなし、その向こうには、四八〇〇メートルの 大きな階段状の台地となっている。 ○メートルの頭には、 軽量化に努める。 十六日、サポート隊と縦走隊に分かれてABC発。 縦走隊にとっては迅速な行動がそのまま安全につながるため 団体装備をツェルト一、エアーマット二、 ルケニア主峰を含む幾つかのピークが見 緊急用のキャンプとしてC5を設け、 目の前には広大なカール って 四二〇 寝 ボ は

二時間かかってカールボーデンを横切り、懸垂壁の比較的緩くなっている南端(向かって右)の部分に取りつく。この日はくなっている南端(向かって右)の部分に取りつく。この日は悪重壁を約四六○○メートル付近まで登り、氷の棚を削ってツェルトにもぐり込む(B1)。さすがに寝袋なしでは寒い。十七日、氷と堅雪の懸垂壁を越えるとルケニアの頂稜プラトーに出る。ここから先はいよいよスキーが効力を発揮する。明日からの縦走に備え、プラトーを大きく回り込み、頂上の北方にツェルトを張る(B2)。

(185)

この間にサポート隊はほとんど空身でルケニアの頂上に立つ

にはスティールの秀峰が、また北方にはウッドなどが、それぞーガン、キングピークなどの『島々』、さらに目を転じれば東(午後三時三○分)。南に広がる雪と氷の海、その上に浮かぶロ

を行なったのち、C5に下る。 走隊のビバーク・サイトに向かう。そこで最終的な打ち合わせれ高さと雄大さを競い合っている。約一時間で頂上を離れ、縦

この台地までの高距一○○○メートルに達する下降路は、すべに走る棚状台地をつたってトラバースする。頂稜プラトーからのコルまでは、ルケニア峰の北面、標高四○○○メートル付近十八日午前七時、縦走隊もルケニアに立つ。スティール峰と

てスタカットで行動する。台地に下り、ガスの中でスキーを進

めていると、われわれのホームグラウンドともいうべき蔵王が

最後の五○メートルはスキーをアイゼンに替え、頂上に立ったのち、白夜の中をシールを利かせてスティール峰に向かう。ツェルトを台地からスティール峰とのコルに近い北稜上に移しる。濃いガスに妨げられ、十九日はほとんど動けない。二十日思い出される。この日は台地にツェルトを張ってビバークす

再び雪稜となるあたり、標高三二○○メートル付近まで下って氷河に向かってアイゼンで下降を始める。やがて岩稜となり、どおり無用の長物となるためスキーを放棄し、夕刻からチチナれ、また行動時間を大いに短縮できたが、北稜の下半では文字

雪の棚を見つける。濃いガスのため視界が悪化したのでこの棚

でツェルトにもぐる(B7)。

越えると青い大きな池があり、その畔で最後のビバークをする二十三日、チチナ氷河に下り立ち、氷河上のセラック地帯を

(B8)。二十四日、BC帰着。

しつつ登路をひき返す。二十一日午後からは天候が悪化し、連縦走隊と別れたサポート隊は、十八日以後逆ボッカを繰り返

八月二日、予定より一日早く来た迎えのヘリコプターで、日小雪が舞う中を二十七日にBCまで戻る。

員バーウォッシュ ランディングに帰る。 (氏家記

付記

された山脈で、各ピークにはカナダ各州の名前がつけられていた山脈(Centennial Range)について簡単に触れておきたい。これは、カナダ建国百年を記念する一九六七年の米加合同ルル山群(Cython Centennial Expedition)により命名が上手を発出している。

る。主峰、センテニアル・ピーク、ケベック峰をはじめとする

(186)

これまでのルートではスキーの使用によりラッセルが軽減さ

れの目を十分に楽しませてくれたものだった。 かではない。全登山期間を通じて、その岩と氷の峰々はわれわ くが、隊長ローチ氏からの私信はこの点にふれておらず、詳ら ないが、その鋭い山容と、ほとんど手つかずの処女性には登高 ールの登頂と前後して、センテニアル山群にも隊を送ったと聞 欲をそそられる。一九六七年米加合同隊は、ルケニア、スティ

Ш

々は、いずれも四〇〇〇メートル未満で高度こそさほどでは

#### Ш 岳 第六十四年(一九七〇年三月刊

富士山と私 バタゴニア氷床横断 (一九六八一九年) グリーンランド氷床の横断(一九六八年)

ランガール登頂(一九六八年) 回想の日高山脈

シャー・イ・アンジュマン登頂(一九六八年) イストル・オ・ナールとジロ山

メルセダリオ南壁(一九六八年) コルディエラ・キムサクルスとイリマニ縦走 アルゼンチン中部アンデスの登山

7 カス・ベーカー峰登頂(一九六八年)

羅臼岳と硫黄山の原名について 日印合同登山 (一九六八年) パンジャブ・ヒマラヤ

イストル・オ・ナールの山座同定 追悼・図書紹介・会務報告・英文梗概

A5判三〇〇頁・写真四八葉・図版二五面

山岳総索引

海外登山年表=一九六八年=

第二十六年第一号(一九三一)―第六十年(一九六五)までの総 索引が出来ました。

定価一〇〇〇円

東京都千代田区神田駿河台2の1

溪 堂

体育会山岳部 早宮 吉 阿川高 佐立 阪 吉 上秀太 田 部 Ŀ 木藤花 田 泰 京 重 男隆夫子則修郎郎 郎

英 禎 治子勲

中

定価二〇〇〇円 中松 田 島田 雄栄 寬一 蔵

(187)

# ネパールの気候に関する覚え書き

田 知 充

#### Ш

まえが

要である。個々の山についての気象報告はこれまでにもかなり 山を含むその地域の気象の平均的な状態を知っておくことは重 なされているが、ヒマラヤ登山の計画やネパールの自然を論ず あるいは登山をより深く味わうためにも、対象とする山または 登山行為は山という自然を相手にしている以上、安全の確保

カ所の気温の観測資料を入手することが出来た。この資料にも eology からネパール 全国にわたる 一〇九ヵ所の降水量と二〇 幸い、ネパール政府の Department of Hydrology & Met

には観測点はない。

どまとまった気象資料が無かったからである。

された例がない。その理由は簡単で、要するに気候を論ずるほ る上で欠くことの出来ないネパール全国の気候については報告

> に北大山岳部でこれまでに蓄積されていた若干の気象資料、お よび筆者が一九六七年十一月から一九六八年二月にかけてカリ

ガンダキ上流、ゴサインクンド、ソロ・クーンブ地方の自然に

とづいてネパールの気候に関する覚え書きを報告する。その他

マラヤ研究の資料となり得れば幸いである。 接して得た経験を参考にした。 この報告が登山の資料としてだけではなく、今後の詳細なヒ

### 二、資料について

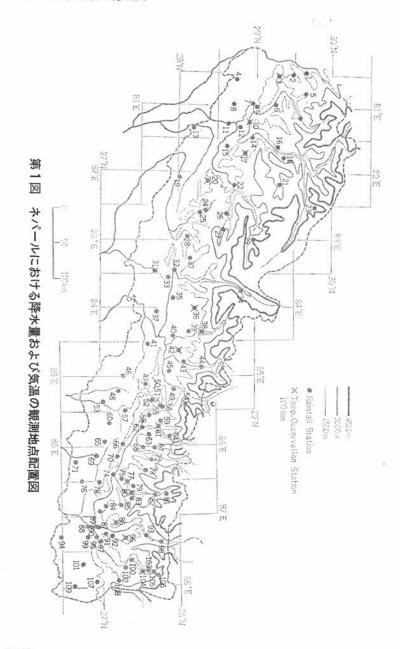
は三七八七メートル(観測点二三)で、これより高い山岳地帯 か設けられていない。そのため観測点の中でもっとも高い地点 測を継続しているので、常に人が居住しているような集落にし じたものである。まれこれらの観測点では人手によって定常観 離、交通の難易、 西北ネパールは非常に少ない。これは主都カトマンズからの距 みると、西部および北部へ行くほど観測点は少なくなる。特に 観測している所となると数えるほどしかない。またその分布を よって降水量観測所は充実されてきたが、気温その他の要素も ネパールはガンジス河の源流地帯であるため、インド政府に 第一図は観測地点の配置図であるが、●印は降水量の観測点 人口の分布と密度などの結果から必然的に生

No.	Station	Latitude	第1表 Longitude	Elevation		点に	Ме	ean Mo	onthly	Amoun	t of P		tation(				Mean Annual Amount (mm)	Years
No. 1	KAKERPAKHA	29°39'N	Longitude 80°30'E	840 m	Jan. 40.0	Feb. 34.8	Mar. 56.4	Apr. 42.5	May.	Jun. 220.6	Jul. 465.7	Aug. 384.4	Sep. 216.8	Oct. 55.9	Nov. 13.8	Dec.	Amount (mm)	9
2	PATAN	29°28′	80°32′	1212	35.5	29.7	51.4	37.8	53.6	167.1	382.3	320.9	191.0	45.7	14.8	20.2	1350	10
3	DANDELDHURA	29°18′	80°35′	1837	67.5	52.5	64.8	33.5				371.0		94.1	6.1	33.4	1497	9
4 5	DHANAGARHI PEPALKOTE	28 °41 ′ 29 °37 ′	80°36′ 80°52′	280 1363	32.3 52.8	16.5 40.8	24.5 52.2	1.8		Control Sollie		100 C	283.6 312.1	Mark State	4.1 13.4	10.7 27.5	1591 2295	9
6	SILGARHIDOTI	29°16′	80°59′	1060	66.5	39.6	49.8	19.5					159.3		9.1	16.2	1169	10
7 8	BENIGHAT SHAREPANI	28°57′ 28°42′	80°59′ 81°00′	340 152	16.6 20.3	39.2 6.9	36.4 28.7	19.2 10.5				299.9 586.6	500 Sept. 1	33.4 67.9	2.1 5.2	14.9 9.2	1397 1876	3
9	KATAI	29°00′	81 °01 ′	1363	68.2	51.9	41.1	31.2	10120000	Table Comment		549.7	240.7	82.5	3.1	17.4	1997	8
10 11	PUSMA CHISAPANI KARNALI	28°53′ 28°39′	81°15′ 81°16′	950 225	18.3	- 11.0	23.4	14.9	32.8	241.7	719.4	670.7	222.7 359.5	44.2 46.7	5.4 13.1	20.8 12.4	1518 1623	3
12	JAMU TIKUWA KUNA	28°47′	81 °20 ′	260	6.7	15.9	6.1	9.3	9.1	201.5	507.0	364.2	193.8	7.0	0	13.7	1334	3
13 14	GULARIA ASRA GHAT	28°10′ 28°57′	81°21′ 81°27′	152 650	34.3 23.8	20.6	32.6 28.4	11.5 18.8	100 CONTRACT	F.S.V.S.		Section Co.	208.6 132.7	89.6 28.1	0.7 2.4	11.4 15.6	1245 937	9 3
15	SURKHET	28°36′	81 °37 ′	606	34.7	38.7	31.8	26.6	54.3			832.3	C. C	99.6	1.4	17.1	2674	10
16 17	BIJAYA PUR RASKOT DAILEKĤ	29°14′ 28°51′	81 °38 ′ 81 °43 ′	1515 1304	64.6 37.8	46.7 18.6	46.1 39.0	21.9 26.9	60.2			216.1 511.2		71.1 53.1	5.0 7.4	18.2 19.4	930 1529	8 7
18	THIRPU	29°19′	81 °46′	1212	66.0	32.3	41.9	16.2	34.0	49.8		1000	12000		3.4	18.1	520	6
19	KUSUM	28°01′	82°07′	152	40.6	21.7	24.1	17.4	20.6				192.7		1.6	5.2	1514	9
20 21	SALLYAN JUMLA	28°23′ 29°18′	82°10′ 82°12′	1666 2424	42.6 32.4	14.7 34.1	44.5 41.5	16.2 23.3	33.1	4-5-5-10-5-3		252.3 155.1	1200000	4.0 35.3	0.4 2.6	4.0 9.9	903 697	10
22	JAJARKOT	28°42′	82°12′	1212	40.3	48.9	19.2	14.8	26.5	Construction Const		Company of the	187.6		0.9	27.8	1549	7
23 24	MUGU BENI BAZAR	29°45′ 28°21′	82 °33 ′ 82 °34 ′	3787 915	169.7 35.6	75.1 35.7	153.9 42.1	93.7 32.2	76.4 66.2	STATE OF		1900	116.9 182.6	136600	9.7 8.0	30.5 12.7	1286 1406	7
25	LIBAN GAON	28°18′	82 °38 ′	1363	31.4	43.2	37.1	57.7	59.1	205.5	401.0	410.4	204.6	55.3	2.6	7.3	1515	9
26 27	RUKUMKOT SEHRA GAON	28°36′ 28°35′	82 °38 ′ 82 °49 ′	1591 2046	23.2	42.1	55.0 48.0	57.0 55.8	TOTAL PROPERTY.	100000000000000000000000000000000000000	100	10000	364.9 182.5	98.9 64.0	5.9 14.3	13.7 10.1	2770 1343	8
28	BIJUWAR PUTHAN	28°06′	82°52′	890	27.1	43.9	23.1	29.5	48.8	232.8	355.7	276.6	126.3	63.1	4.3	7.9	1225	8
29 30	DUNAI MUSIKOT	28°56′ 28°10′	82 °55 ′ 83 °16 ′	2803 1818	63.4	58.7 18.2	84.5 30.7	56.2 32.4				I	126.5 147.9	59.4 42.7	18.2 0.5	45.1 11.0	1159 1457	8
31	BUTWAL	27°42′	83 °23 ′	263	16.0	14.6	18.7	20.9	57.6	405.2	680.7	813.0	331.2	90.8	9.2	3.8	2465	9
32	RIRIBAZAR TANSEN	27°57′ 27°52′	83 °26 ′ 83 °33 ′	606 757	37.3	17.1 19.9	32.4 45.9	26.9 34.5	10 Med 50 and	www.com	2000 NO. 12 TO	306.3 464.4	Page 100 per	57.0 72.6	1.7 0.2	10.0 9.7	1269 1691	10 8
33 34	JOMOSOM	28°47′	83 °43 ′	2819	24.1 30.5	28.3	38.4	20.6	19.4		42.3	STATE OF	PART NO	23.3	1.1	2.1	275	9
35	СНАРКОТ	27°55′	83 °49 ′	606	46.4	41.3	57.2				La constantina		204.7	98.2	3.4	10.9	1452	8
36 37	POKHARA HOSPITAL GIRWARI	28°11′ 27°40′	84 °00 ′ 84 °03 ′	833 303	33.1	35.6 8.0	44.0 13.6	83.5 30.3	STATE OF THE STATE OF	-02 STAGE	(4.5) O 100	0.000	493.0 320.7	- C.	20.5 5.2	12.6	3458 2401	10
38	KHUDI BAZAR	28°18′	84 °21 ′	823	27.1	38.1	79.0						391.2		7.4	7.1	3215	9
39 40	KUNCHA BANDIPUR	28°08′ 27°56′	84 °21 ′ 84 °24 ′	909 1061	30.7	23.8 15.0	62.1 40.0		250 To 100 To 10	September 1	\$3000 SASS	March Common	268.9 165.1	69(3)(2)(6)	20.6 6.3	8.7 2.6	2344 1792	10 10
41	JHAWANI	27°35′	84 32′	1515	18.4	19.1	18.4	11.5	87.0	302.7	405.3	526.4	263.8	94.0	12.5	4.0	1763	7
42 43	GORKHA ARUGHAT BAZAR	28°00′ 28°03′	84 37' 84 49'	1212 606	37.3 25.8	5.0	13.0 42.5	270 000	0.0000000	100000	10000	Section 1	176.7 322.0	74.1 94.7	21.2 12.2	7.8	1652 2375	6
44	JAGAT SETIBAS	28 °22 ′	84 53′	3003	33.4	47.3	97.3	54.0					149.4	1000000000	8.3	100000000000000000000000000000000000000	1298	9
45	DHADING AMI EKHAGANI	27°52′	84 56′	1440 303	26.8	37.1 5.8	62.0 22.4	THE REAL PROPERTY.	1000	the state of	Section 1	30,000	337.3 332.3	-00000	4.3 14.6	5.7 2.3	2626 2091	9
46 47	AMLEKHAGANJ CHISAPANI GARHI	27°17′ 27°33′	85 00' 85 08'	1728	15.1 28.5	30.1	32.7	Contract Con	CHEST CONTRACTOR	Commence of the Commence of th	100000000000000000000000000000000000000		222.9	78.6	8.1	4.7	2031	8
48	NIJGARHI	27°12′	85 10′	151	20.4	12.6	19.1	32.4	Significant Control	Comment.		5.500	273.1	0.00	12.6	2.3	1822	8
49 50	NAWAKOT GODAVARI	27°55′ 27°42′	85 10′ 85 20′	909 1515	29.6 33.7	32.4 9.4	32.9 44.3	40.5 37.0	100000000000000000000000000000000000000			STORTHON	260.0 237.1	59.4 49.9	2.4	5.7 3.7	1847 1863	6 10
51	KATHMANDU	27°42′	85 20'	1288	16.9	17.7	27.9	44.3	104.5	224.8	361.0	360.7	146.8	500,800,000	7.9	2.7	1361	19
52 53	KOPUNDOLE BAIRIA	27°41′ 27°00′	85 20' 85 23'	1303 152	15.8 25.5	15.4 10.2	24.2 17.0	34.7 26.0					287.3 204.1		1.9	1.5 0.5	1148 1478	10
54	TIMURE	28°10′	85 23′	2-1	27.4	30.1	56.7	28.7	32.3	125.8	260.4	263.5	138.9	41.6	4.0	5.9	1015	9
55 56	SUNDARIJAL POWER HOUSE SUNDARIJAL R.	27°45′ 27°47′	85 25′ 85 26′	1364 1576	21.2 17.8	20.8	32.6 24.4	100001700		DANSEL CLASSES	04-170-1005 (ADS //	239 200000000	282.5 309.6	56.7 58.3	6.3 7.1	2.6 0.2	2142 2264	22 23
57	HARIHARPUR GARHI	27 °20 ′	85 30'	303	30.6	26.4	35.1	45.3	170.0	559.4	777.2	632.6	362.2	104.0	5.0	0.0	2748	7
58 59	DHULIKHEL NAWALPUR	27°37′ 27°48′	85 33′ 85 37′	1666 1818	22.9	21.9	29.8	46.6	200001/00000	Contraction of the	Cluster Section	CONTRACTOR S	194.4 328.7	2000000	8.4	2.4	1492 2317	17
60	PATHARKOT	27 °05′	85 40'	227	25.0	7.7	16.9	31.5					273.8		17.8	0.9	1871	11
61 62	CHAUTARA NEPAL THOK	27°47′ 27°27′	85 43′ 85 49′	1515 757	18.7 18.2	21.6 10.6	29.1 38.6	68.3 54.9	1000 pt 5	The Charles	Jan Stranger	Grander II	275.8 209.6		12.1 5.3	5.9 5.6	1953 1179	14 13
63	DOLAL GHAT	27 °38′	85 43	1372	8.2	16.3	24.2	30.8					133.4	30.0	7.7	0.7	1014	12
64	GUM THUNG	27 °52′	85 52'	1667	55.6	26.3	34.6	52.4	- Statement	578.0	252000	# 93550 FO	- 010.2	- 00.0	15.0	-	1670	15 11
65 66	TULSI SINDHULI ĞARHI	27°02′ 27°17′	85 55′ 85 58′	303 1364	17.7 44.7	5.3 8.9	25.2 41.0	88.2 75.1	2,540,111,100,00		100000000000000000000000000000000000000		219.3 302.8			000000	1679 2454	11
67	CHARIKOT	27 °40 ′	86 03′	1981	26.5	2000	200	1000000		1000	Control of	FIGURE 15	376.6	200000	240,550,35	271.33	LEARNING TO	7
68 69	MELUNG CHISAPANI BAZAR	27°31′ 26°55′	86 03' 86 10'	1515 735	13.5 17.1	24.3 8.2	24.1	70.2					216.4 187.0		14.5	10000000	1638 1601	9
70	KALIMATE	27°11′	86 10′	1515	27.1	24.9	57.1	10,22,763	216.7	530.0	513.0	581.1	295.6	110.0	3.7	9.6	2597	5
71 72	SIRHA JIRI	26°39′ 27°40′	86 13' 86 14'	76 2003	24.3	10.1 30.1	15.4 31.6	23.1 71.0	100000000000000000000000000000000000000	F-0703-1557	0.550.555	120000000	188.6 321.4	75.8 93.7	15.6 3.1	1.6 3.4	1408 2325	18
73	SIRWA	27 °33 ′	86 23'	1818	4.0	23.3	20.2	28.5				118.6		33.6	3.9	1.1	675	4
74 75	KURLEGAT MANEBHANJANG	27 °08 ′ 27 °12 ′	86 25' 86 27'	606 1515	32.1 23.9	12.8 20.8	37.1 45.2	54.3 62.5	1404001410		SATERCANO.	1417-1119-2009-100	127.1 132.0	27.2 40.9	5.7 7.1	0.9	995 1227	16 19
76	LAHAN	26°44′	86 30'	1515	24.3	22.1	18.7	28.4	100000 0000				178.5			0.0000000	1513	11
77	OKHALDHUNGA	27°19′	86 31'	2121	20.4	19.1	28.2	5000000000	P 100 (000 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00 00	35 (36)(1) 7 (3.5)		5-0/0/5150	189.2	0.00000000	13.7	Lawren	.0000000000	12
78 79	UDAIPUR GARHI PAKARNAS	26°56′ 27°26′	86 31' 86 34'	1390 2272	29.9 11.3	12.5 13.8	26.0 32.6	29.8 37.8					334.5 310.9	72.6	23.4 8.3		2120 1758	14 14
80	TAPLEJUNG	27°21′ 27°50′	86 40'	2450	27.0	19.3	55.3	THE STATE OF	0.0000000000000000000000000000000000000	325555575	222000000000000000000000000000000000000	06001394500	291.5 158.4	81.3 54.9	14.8	100.000	2017 1020	16 12
81 82	NAMCHE BAZAR CHAURI-KHARKA	27°42′	86 43' 86 44'	3450 2438	58.3 16.9	25.7 10.5	30.8 25.1	30.0 49.8					356.6		10.4		2274	16
83	AISYALU-KHARKA	27°21′	86 45 ′	2879	22.1	10.1	22.4	78.2	163.7	483.3	464.1	595.0	325.2	119.2	9.4	8.4	2401	16
84 85	KHOTANG BAZAR DWARPA	27°02′ 27°13′	86°50′ 86°51′	1212 1818	13.8 13.8	12.3 4.8	34.8 57.2						131.6 221.5	39.7 38.7	6.7		1127 1569	7
86	BHOJPUR	27°11′	87°03′	1666	27.4	10.5	19.8	48.0	108.8	225.4	245.6	236.7	137.2	54.0	9.3	3.6	1108	11
87 88	TRIBENI CHATRA	26 °56 ′ 26 °49 ′	87°09′ 87°09′	152 152	23.6 21.6	10.8 16.9	19.1 23.6	55.5 53.9					255.2 349.3			0.5 3.3	1814 2237	14 18
89	M ACHUAGHAT	26°58′	87°10′	182	18.2	15.4	24.4	46.0			August 194		168.0	10.000 00.000	6.7	1.2	1387	17
90 91	BARAKSHETRA MUNGA	26 °52 ′ 27 °02 ′	87°10′ 87°14′	146 1212	21.9	14.2 6.5	30.0 26.6	52.6 36.5		11-1-2 0 2 0 2 0 0 0 0			413.7 169.0		9.2		2445 1251	19
92	LEGUA GHAT	27°08′	87 14 87°17′	303	17.8 14.7	3.1	15.0	36.5 42.7	100000000000000000000000000000000000000			158.7	- November		8.1 8.5		695	13 10
93	NUM BIRATNAGAR	27°33′	87°17′	1363	97.8	56.4	90.2	110000000000000000000000000000000000000	368.1	604.1	520.7	595.9	479.1	165.1	72.1	34.3	3090	5
94 95	BIRATNAGAR MULGHAT	26 °28 ′ 26 °55 ′	87°17′ 87°18′	76 303	23.3	5.8 7.1	11.4 23.4		6.3				294.6 102.5		3.5 3.8	0.0 4.7	1750 915	14 11
96	CHAINPUR	27°17′	87°20′	1212	12.3	11.4	22.0	72.9	154.5	203.4	303.9	301.6	176.1	53.3	12.2	2.7	1379	19
97 98	DHANKUTA CHEPUA	26°59′ 27°46′	87°21′ 87°25′	1060 2591	6.9 47.1	8.6 79.8	28.8 142.7	41.4 99.4				200.5 486.0	81.1 371.0		4.0 41.1	1.6 14.7	899 2511	16 6
99	DHARAN BAZAR	26°49′	87°29′	303	20.9	4.7	16.8	43.8	145.7	306.7	589.1	659.2	405.9	120.9	-10.00	4.6	2334	13
100 101	DUMUHAN DAMAK	27°21′ 26°43′	87°36′ 87°40′	758 198	17.1 0.0	8.1 3.8	47.9 9.9	98.4 39.2					218.0 224.0		14.3 9.0	6.3	1653 2454	14 3
102	ANGBUNG	27°16′	87 40 87°43′	1212	11.5	12.1		129.5	153.6	298.3	261.9	218.1	162.0	56.3		2.2	1445	13
103 104	LUNGTHUNG TAPLETHOK	27°33′ 27°29′	87°47′	1818	18.4	23.8	69.9	74.5	125.9	330.1	507.6	503.7	392.6	91.7	19.3		2146	18
104	TAPLETHOK WALLUNGCHUUG GOLA	27°29° 27°41′	87°47′ 87°47′	1372 3048	24.5 30.8		92.7					I	353.6 278.8			THE R. P. LEWIS CO., LANSING	2316 1677	15 14
106	PANGTHANGDOMA	27°41′	87°49′	2818	26.9	44.8	87.4	82.9	88.9	227.3	435.3	330.6	193.8	70.0	31.6	20.5	1643	14
107 108	ILAM MEMENJAGAT	26 °55 ′ 27 °12 ′	87°55′ 87°56′	1061 1818	15.6 16.9	10.1 12.8	15.5 52.3						216.8 262.4		6.8	3.5 5.6	1499 2051	9
_109	RANIBIRTA	26°38′	87°59′	152	8.2	6.8	A 27 A 27 A 28 A	1970 1770 1770				Section Sections	350.0		20,237	1.7	2400	8

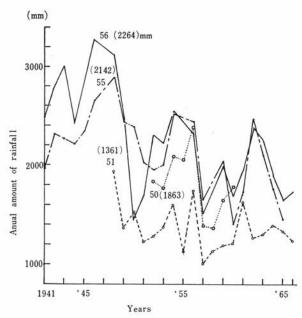
第2表 ネパール各地における月別平均気温(日最高,日最低,日平均)

Station	/	1	T2 1	1.0			T	Tempera				1	1 -	Mean Annual	Years
NO.		Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May.	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.	Temp.	Loais
3	Max.	11.7	12.9	18.0	22.4	25. 7	26.3	23.3	23.4	21.1	20.8	16.6	13.4	19.8	6
	Mix.	4.1	4.7	8.8	12.9	15.1	17.2	16.8	16.8	15.4	12.1	8.1	5.3	11.3	6
	Dai.	8.0	9.6	13.4	17.6	20.3	21.7	20.1	20.1	19.1	16. 5	12.4	9.4	15.6	6
10	Max.	20. 5	23.2	26.6	32.7	36.3	34.0	29.9	29.6	28.3	27.9	24.5	21.0	27. 9	3
	Min.	6.8	9.8	12.6	15.8	21.2	23.0	22.1	21.4	19.5	14.9	10.8	7.1	15.5	3
	Dai.	13.6	16.5	19.6	23.4	28.8	28. 5	25.9	25.5	23. 9	21.3	17.6	14.0	21.7	3
17	Max.	15.6	18.3	21.9	26. 9	29.8	29.1	26.4	26.0	25.7	23.5	20.3	17.6	23.5	5
	Min.	5. 3	7.7	10.7	14.1	16.8	18. 9	19.3	19.4	18.7	14.7	10.3	6.5	13.7	5
1100000	Dai.	10.6	13.1	16.4	20.6	23.3	24.1	22.9	22.8	22.3	19.1	15.3	11.8	18.6	5
20	Max.	17.1	18.6	23. 0	27. 5	29.8	28. 9	26.6	26.1	25.8	24.2	20.8	17.9	23. 9	4
	Min.	5. 9	8.0	12.1	16.5	18.8	20.2	19.5	19.0	17.4	14.1	9.9	6.6	13.5	4
	Dai.	11.4	12.8	16.9	21.6	24.7	24.2	23. 2	22.5	21.6	18.8	15.4	12.0	18.4	3
31	Max.	24.2	26.4	31.1	35.8	37.5	35.4	32.4	32.2	32.4	31.0	27.6	24.1	30.9	6
	Min.	12.4	14.4	18.2	22.7	25.3	25. 9	25. 4	25. 1	24.2	21.3	16.9	13.1	20.5	6
V/25	Dai.	18. 3	19.5	24.9	29.6	31.7	30.7	28. 9	28.6	28.4	26.3	22.3	18.6	25.6	6
34	Max.	11.7	12.2	14.9	19.5	22.3	24.5	24.6	24.0	22. 9	19.1	15.3	13.4	18.8	5
	Min.	-1.5	-1.0	1.6	4.6	7.2	12.5	14.1	13.8	11.2	5.6	1.4	-1.5	5.5	5
gentour	Dai.	4.4	5. 5	8.6	11.9	14.9	19.0	19.5	19.1	16. 9	12.1	8.1	5. 2	12.1	5
36	Max.	19.3	21.6	25.7	30. 2	30.5	30.0	29.3	29.2	28.7	26.2	23. 2	20.1	26.3	9
	Min.	6.8	9.8	13. 2	17.0	19.0	21.1	21.9	21.8	20.7	15.6	11.8	8.7	15.8	9
	Dai.	13.4	15.6	19.5	23.7	24.8	25.5	25.6	25.5	24.7	21.6	17.6	14.1	21.0	9
38	Max.	19.8	22.4	25.5	29. 1	31.4	30. 2	28. 5	28.1	28. 2	25.8	23.4	19.6	26. 5	1
	Min.	7.4	10.7	13.7	17.2	19.5	21.0	21.2	20.9	19.5	14.4	11.5	7.3	15.8	1
	Dai.	13.8	16.8	21.2	24.9	26.2	25.8	25.0	24.7	23.6	20.0	17. 9	13.4	21.1	1
42	Max.	17.9	21.0	24.5	28.9	30.0	29.2	27.3	27.1	27.0	25.3	21.8	18.5	25.1	5
	Min.	9.4	11. 2	14.8	18.9	20. 4	21.6	21.3	21.0	20.3	17.3	13. 2	10.2	17.3	5
*	Dai.	13.3	15.4	20.3	24.1	25.4	25.8	24.2	23.8	23. 7	21.3	18.8	14.0	20.8	5
	Max.	13.8	14.8.	18.1	20.0	22.4	22.4	22.1	21.0	21.3	21.1	18.9	16.1	19.2	4
	Min.	3.4	3. 2	6.4	9.6	12.5	14.0	15.4	15.8	15.5	14.5	10.7	6.8	10.7	4
-1	Dai.	8.7	8.8	12.5	14.8	17. 6	18.1	18.4	18.4	18.5	17. 8	14.8	11.5	15. 0	4
51	Max. Min.	18.6	20.7	24.5	27.7	29.4	29.6	27.7	27.3	27.7	26.4	23.0	20.0	25. 2	5
		1.0	3.8	6.7	10.8	14.5	19.0	20.1	19.7	18.0	12.8	6.7	2.0	11.3	5
_,	Dai.	9.7	12.2	15.6	19. 2	22. 0	24.3	23. 9	23.5	22.8	19.6	14.8	11.0	18. 2	5
54	Max.	15.5	17.1	20.7	24.8	26.9	27.3	25. 9	25. 8	25.5	23. 7	18.3	16.5	22.3	7
	Min.	2.7	4.8	8.1	11. 3	13, 4	17.7	17.8	17.6	16.0	11.3	8. 0	4.0	11.2	7
	Dai.	9.1	10.8	14.5	18.9	20.7	22.4	21.8	21.7	20. 9	17.6	12. 8	10.1	16.8	7
61	Max.	17.8	20.2	24.6	26.7	28.3	28.3	26.5	26.4	26.1	25.0	21.5	19.1	24.0	3
	Min. Dai.	5.8	7.8	11.6	14.1	16.2	18. 2	18.5	17. 9	17.3	14.5	10.0	7.1	13.1	2
77	Max.	11.9	14.0	18.1	20.4	21.9	23.3	22.3	22. 0	21.7	19.7	15.8	13. 2	18.6	2
"	Min.	13. 9	15.8	19.3	21.9	23. 2	23.4	23.6	23. 9	23. 2	21.7	17.9	15.6	20. 2	3
	Dai.	4.3	7.1	9.4	13.0	14.8	17.0	17.2	16. 9	16.0	13.0	8.6	5.8	11.7	3
80	Max.	9.1	11.4	14.3	17.4	18.9	20.2	20. 3	19.9	19.3	17.5	13.4	10.7	15. 9	3
00	Min.	13. 8 4. 1	15.7	19.3	23.3	23.1	24.4	24.1	23.8	23.7	21.4	17.9	15.4	20.5	5
	Dai.	8.9	6.1	8.7	12. 1 17. 7	14.1	17.0	17.7	17.5	16.1	12.4	8.4	5.5	11.6	5
86	Max.	14.1	10.9 16.6	14.0	23. 0	18. 6 23. 9	20.7	20.8	20.6	19.9	16. 9	13.1	10.4	16.1	5
.00	Min.	6.1	8.6	19.8 · 11.4	14.7	16. 2	24. 4 18.1	23.6	23.7	23.5	22. 0	18.4	16.1	20.9	5
	Dai.	10.1	12.6	16.0	19. 2	20.0	21.3	18.4 21.0	18. 3 20. 9	17.3	14.3	10.5	7.9	13.5	5
90	Max.	23. 4	26.7	31.0	34. 2	32. 0	33, 3			20.5	18.3	14.9	12.0	17.3	5
11500	Min.	10.4	12. 9	16.6	21.4	22.8	24.4	31.3 24.0	30. 8 23. 6	31. 0 23. 0	30. 2 20. 2	27.3 15.6	24.6	29.8	5
	Dai.	16. 9	19.9	23.8	27. 9	28. 4	27. 9	27.7	27.2	23.0	25. 2	21.5	11.9 18.3	18.9	5
96	Max.	17. 0	20.0	23. 3	28. 1	27.9	27. 9	26.5	25.5	25.4	23. 9	18.5	17.6	24. 4 23. 9	5
	Mi n.	8. 9	10.8	13.6	16.4	17.3	19.8	20. 3	19. 8	19.1	16.6	12.9	9.8	15.5	3
	Dai.	13.0	15.4	18.5	22.4	22. 9	23. 9	23.3	22.6	22. 3	20.3	17. 0	13.7	19.7	3
104	Max.	18.4	20.1	23.8	25. 7	26. 9	27.7	27.1	26.8	27.0					
101	Min.	6.3	8.3	11.0	14.3	15.8	18. 2	18.6	18.3	16.9	25.8	22. 4 10. 5	19.8	24.2	4
	Dai.	12. 3	14. 2	17.3	20.1	21.3	22. 9	22.8	22.4		14.4		7.0	13.4	4
105	Max.	6.5	6.4	8.5	11.7	13.7	15.6	16.3		23. 3	20.2	16.4	13.4	18.8	4
100	Min.	-5. 1	-5. 0	-2. 0	1.4	3. 9	7.6	9.0	15. 9 7. 3	15. 2 5. 7	13.0	9.9	8.2	11.7	4
	Dai.	1.0	0. 9	3.8	7.2	9.1	12.4	13. 1	12.8	11.9	2.6	1.2	-3.3	3.1	4
	~u1.	1.0	0.5	0.0	1.2	J. 1	16.4	15. 1	14.0	11.9	8.8	4.9	3.0	7.4	4

<sup>\*</sup> KAKANI Lat. 27°48′ Long. 85°15′ Elevation 2121 m



(189)



第2図 年降水量の各年別変動

量の変動を示したものである。

カッコ内の数字は第一表

距離は最大八キロ程度しかはなれていない)での年降水

号·50、51、55、

56いずれもカトマンズ盆地内にあり、

二図をみればよくわかる。これは四つの観測点(地点番 々の変動が非常に大きいということである。その例は第 この表で注意してほしいのは、特に降水量というのは年

ある。 える。 均値があるが、統計年数が多いほど平均の値に近いと言 値から±二〇~三五パーセントもずれることがある。 に示した平均の年降水量値であるが、年によってはこの 均値を各月別に示し、その年平均値と統計年数を示して 第二表は日最高気温、 一表に示した観測地点では三年から二三年までの平 統計期間がいずれも短いが、平均気温は降水量の 日最低気温、 日平均気温の月平

数字は大体平均値と考えてよいであろう。 気候を支配する二つの大きな要素である気温と降水量

ように大きな変動をすることはないので、ここにあげた

カカニ(カトマンズの北西約一〇キロ)のみは降水量を 各点における降水量と気温をそれぞれ第一表と第二表 各図表における観測地点番号は共通であるが

に示す。

観測してないので※印で示した。

第一表には各月別と年間降水量、統計年数を示した。



(191)

れらのデータを基礎としてネパールの気候を広い観点から解析で、これらの表から類推せねばならない。そのために、次にこで、これらの表から類推せねばならない。そのために、次にこのこれらのデータから、自分が出かけようとする地域の特徴はのこれらのデータから、自分が出かけようとする地域の特徴はのこれらのデータから、自分が出かけようとする地域の特徴はのこれらのデータから、自分が出かけようとする地域の特徴はのこれらのデータを基礎としてネパールの気候を広い観点から解析

#### 三、解析結果

してみる。

第三図は第一表の降水量のデータから五○○ミリメートルご第三図は第一表の降水量のような分布図を作るには、特に西北ネパールにおいてまだまのような分布図を作るには、特に西北ネパールにおいてまだまけることは、第二図のように同じカトマンズ盆地内の近接したけることは、第二図のように同じカトマンズ盆地内の近接したが高でも観測値が大きく違うことから明らかであろう。

は、観測点を増設して細かく調べると分布はもっと変ってくるる。従ってこの第三図も、ネパールのような山地の多い地形であ。従ってこの第三図も、ネパールのような山地の多い地形であた。そこから得られた観所に移設すると地形が少し違ったために、そこから得られた観

あって、前に述べたように降水量は年々変動しているから、降またこの図は数年間の平均的な降水量分布を示しているので

すく示したのが第四図である。このような谷がどうして西ネパ

ールには見られなくて東ネパールに顕著に現われるのか、今の

であろう。

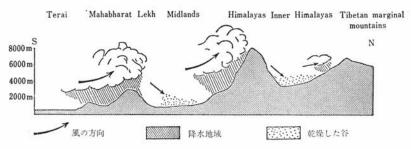
五○○ミリメートルに満たない地域が存在する(東京での年間は第三図がネパールとカリ・ガンダキ上流では年降水量が実には推察できるであろうが、主な地域的特徴は次の通りである。は推察できるであろうが、主な地域的特徴は次の通りである。との図から目的地が雨の多い所か、少ない所かというのは推察できるであろうが、主な地域的特徴は次の通りである。しかし現段階で大量分析図も年ごとに違っているはずである。しかし現段階で大量分析図も年ごとに違っているはずである。しかし現段階で大量のでは、

(2) 東部ネパールのマハバラート・レク背面(北面)に比較降水量は一五○○ミリである)。

後で述べるようにネパールの大部分は夏のモンスーンによる的降水量の少ない谷が存在している。

本量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。この様子をわかりや水量の少ない、乾燥した谷を出現させる。

(192)



第4図 地形的にみたヒマラヤの降水地域

C

B

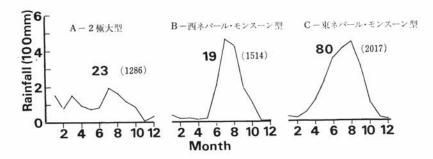
うに名付ける。

二極大型

いあるため、 もに、冬の西方低気圧による降水も夏とあまり変わらないくら Aの型は西北ネパールおよび中央ネパール北部に見られる。こ 地域はわずかではあるが夏のモンスーンの影響を受けるとと 第五図は以上A・B・Cの典型的な例を示したものである。 東ネパール・モンスーン型 西ネパール・モンスーン型 降水量の月変化が夏と冬の二極大型を示している

量としては夏に比べるとわずかではあるが、冬に西方低気圧に 降水分布の山が七、 後半から七、 Bの型はモンスー 八月に年降水量の大部分が集中する。したがって 八月にピンと立ったものになる。その上、 ンの影響を受けている期間が短かく、 六月 ものである。

A・B・Cの三つの型にわかれる。これらの型を便宜上次のよ 阻止されるため、年降水量は三〇〇ミリに満たないほどである 北に侵入することはない。特にカリ・ガンダキ上流部はアンナ ほとんどの水分を失い、勢力を弱め、普通グレート・ヒマラヤの 侵入し、グレート・ヒマラヤへ向かって高度が上がるにつれて ところよくかわらない。 プルナとダウラギリの巨大な山塊によってモンスーンの侵入が 次にこれらの雨はいつごろ降るのかを調べてみると、大きく モンスーンはその後、 谷沿いに北へと



第5図 ネパールにおける降水の型

ら四月までよい天気が続く。特に十一月、十二月は一番天気が響で降水をみる他は、ほとんどネパール全土にわたって十月か北部および北部の高所で一月から三月にかけて西方低気圧の影

高度五〇〇〇メートル程度までの山なら低緯度のため気

日本の山とは比べものにならないほど

よって供給されていることがわかる。

一方、冬のネパールは西

分は、年降水量の実に八五パーセント以上を夏のモンスーンに

以上のことから、西北部と中央部の北を除くネパールの大部

東ネパールで主に見られる型である。

温も高度のわりに高く、

均気温の差は主に高度の違いで生じていると考えてよかろう。次に気温についてのべてみる。一般に気温は緯度と高度が上しかないが、高度に関しては南はテライのジャングルから、北しかないが、高度に関しては南はテライのジャングルから、北はグレート・ヒマラヤまで五○メートルから八八○○メートルはグレート・ヒマラヤまで五○メートルから八八○○メートルはグレート・ヒマラヤまで五○メートルから八八○○メートルはグレート・ヒマラヤまで五○メートルは緯度では四度程度の幅に大きな差が生じるはずはないので、ネパールにおける年平均気温の差は主に高度の違いで生じていると考えてよかろう。

示す。 よる降水もあり、Aの型に属さない西ネパールが主にこの型を

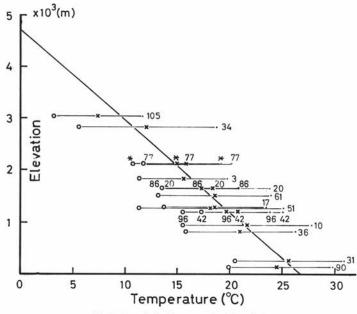
Cの型はモンスーンの影響を五月から九月まで受けており、

とはない。そして冬の西方低気圧の影響をほとんど受けておら

その期間が長いので、

七、

八月に特に降水が集中するというこ



第6図 高度差による気温の変化

低下している。

を付近の観測地点のデータから類推できるし、

降水量の

である。図の中の数字は観測用番号である。年平均気温

最低気温の年平均

(〇) の高度による分布を示したも

測点の年平均気温(×印)、日最高気温の年平均(・)、

この図は縦軸に高度、

横軸に気温をとって、各観

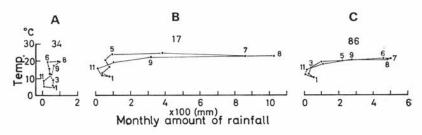
高度のちがいによるこの気温の変化の程度を第六図に示

高度による気温減率は大体斜めの実線のようなもので、

○○メントル高度が上がると気温は摂氏約○・五七度

この数字を使って高山岳地帯の平均気温

と大体六〇センチぐらいだ。降っても大したことはない の一月の降水量は約六〇ミリである。これは新雪に直す される。 これから四〇〇〇メートル付近では一月の平均気温は約 所として、オカルドゥンガ(七七)を参考にする。 状態を知りたいと思ったら、近くでなるべく標高の高 ばクーンブ・ヒマラヤの四〇〇〇メートル付近の一月の 項で述べたことから天気の概況も把めるであろう。それ ことはあまりないであろう。ナムチェ・バザール(八一 高地とほぼ同じ気温である。 零下二度位であることがわかる。これは十二月ごろの上 から摂氏約十一度の気温の違いが推察できるであろう。 によって、旅行日程、携行装備なども決ってくる。 しかし降水量ではここはA型である。雪が降る かなり冷えこむことが予想 高度差 例え



第7 図降水量と気温の月ごとの変化

で気候が極端に変わることになる。

はもう零度になるので、ネパールを旅行する場合は、短い期間は二六度もあり、熱帯圏に属するが、標高四八○○メートルで

このようにみてみると、海抜一〇〇メートルでの年平均気温

小値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述かにに達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述か値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述が値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述が値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述が値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述が値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述が値に達している。一例しかないので何ともいえないが、上述が値に達している。

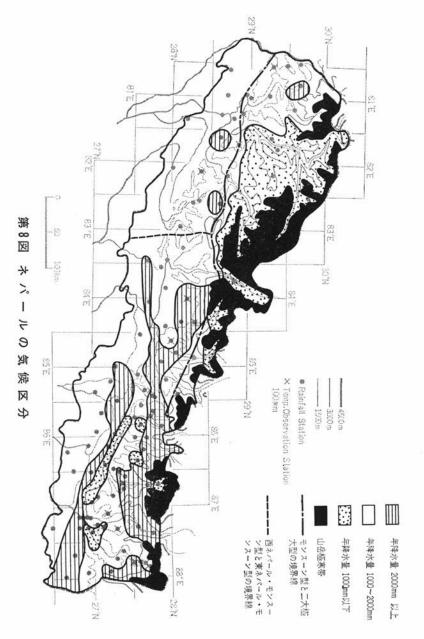
であろうと思われる。

のような変化は西方低気圧の影響を受ける西北ネパールの特徴

モンスーン地域の典型であるBとCのうち、Bは西ネパール

ようなこともあることは忘れてはならない。それは日本の山で極端に暖かい日も寒い日もあり、また一時的に雪が多量に降るであろう。もちろん、こういった類推は平均的なものであり、

も同じことである



でほとんど変化なく経過し、その後は翌年の一月まで一様に降る。一月から四月または五月まで一様に上昇し、九月か十月まールのモンスーン地域の大部分は一月に平均気温が 最低に なの例、C は東ネパールの例である。気温についていうと、ネパ

下する。その間の降水量についてはすでに述べた。

暑さを感じさせないのである。
七、八月と変わらないのに雨が少ないためである。七、八月にひのはモンスーンによる降水があるお蔭で、われわれに五月ほどのはモンスーン地域の五月は非常に暑く感じる。気温そのものは

すると、点をうって表示した地域は年降水量一〇〇〇ミリ以下 型を示す地域であり、 年平均気温零度以下の地域である。山岳極寒帯と仮に呼んでお に注目したネパールの気候区分を試みた(第八図)。北部ネパー 五〇〇ミリ以下の地域もある。横線で表示した地域は年降水量 の地域である。 した点線の西側は、 の黒く塗りつぶしたところは四七〇〇メートル以上の高地で ル・モンスーン型に属する地域である。降水量に関して区分 資料不足ではあるが、以上の結果をまとめて、降水量と気温 モンスーン型を示す地域のうち東経八三度線に沿って下ろ 一点鎖線―・―・―の北側は全て月々の降水分布が二極大 特に西北ネパールとカリ・ガンダキ上流部では 西ネパール・モンスーン型、 その南側はモンスーン型を示す地域であ 東側は東ネパ

地域である。

#### 四、むすび

解析を試みた。
解析を試みた。
解析を試みた。

これまでの議論には山岳地帯の気象資料はほとんど使っていたい。使いたくても非常に断片的で、参考になるものはあったが、まずほとんど無いといってよい状態である。多分日本全国が、まずほとんど無いといってよい状態である。多分日本全国け、何がしかの気象資料を集大成すればかなりの分量になり、十け、何がしかの気象資料を入手されたら、ぜひ生データの形ではまことに少ない。これからもし登山その他でネパールに出かけ、何がしかの気象資料を入手されたら、ぜひ生データの形でよいから公表していただきたいと思う。そういうふうな小さなデータの積み重ねがあってはじめて、未知の領域が解明されていくのである。

二〇〇〇ミリ以上の地域でモンスーンの影響を強く受けている

追

どを『山岳』誌上に発表し、登山界を啓発された。

プス方面を跋渉するようになり、その都度旅の記録や想い出な

# 冠 松次郎氏 (一八八三—一九七〇)

大損失である。

大損失である。

大損失である。

大損失である。

私が冠さんをはじめて知ったのは、大正十二年春のことである。大正九年六月に冠さんが『山岳』第十五年第二号に「西沢、る。大正九年六月に冠さんが『山岳』第十五年第二号に「西沢、西沢(笛吹川)を探ってみたいと思っていた。そして大正十二年五月二十五日の夜行で出発、西沢を遡行して二十八日に帰ってきた。それを知って、当時小集会の当番幹事だった冠さんから頼まれ、小集会で「西沢七ッ釜とホラノ貝」という題名で講ら頼まれ、小集会で「西沢七ッ釜とホラノ貝」という題名で講演をしたのだが、冠さんとのつきあいはそのときからのことである。

そのとき以来、私も渓の美しさと面白さに魅入られ、渓とい

にお邪魔して旅の想い出を語り、また一緒に来年の計画にうちて、何時かはその神髄たる黒部の秘境を探ってみたいという念て、何時かはその神髄たる黒部の秘境を探ってみたいという念大正十三年九月、冠さんに同行して黒部渓谷行が実現した。越大正十三年九月、冠さんに同行して黒部渓谷行が実現した。越大正十三年九月、冠さんに同行して黒部渓谷行が実現した。越村へツリを経て鐘釣へ出る計画をたてたが、渓谷の状態が悪く大へツリを経て鐘釣へ出る計画をたてたが、渓谷の状態が悪く大へツリを経て鐘釣へ出る計画をたてたが、渓谷の状態が悪く大へツリを経て鐘釣へ出る計画をたてたが、渓谷の状態が悪くれが冠さんと最初に行った山行であるが、この時から私はお宅れが冠さんと最初に行った山行であるが、この時から私はお宅れが冠さんと最初に行った山行であるが、この時から私はお宅にお邪魔して旅の想い出を語り、また一緒に来年の計画にうちにお邪魔して旅の想い出を語り、また一緒に来年の計画にうちにお邪魔して旅の想い出を語り、また一緒に来年の計画にうちにお邪魔して旅の想い出を語り、また一緒に来年の計画にうちにお邪魔して旅の想いという。

鉄太郎さんと私の三人が例の長次郎を先導者として鐘釣から上大正十四年八月下旬、道のない黒部川を遡り、冠さん、沼井の

こむようになった。

での通過に成功した後は、あふれるような渓谷の印象を胸に秘 素晴らしい渓を見ない者は気の毒だ」などと気魄万丈で、平ま ることができた。そして夜は、明月の冴えた夜営地で「こんな ら上流大へツリまでの豪壮な渓谷を苦心しながら初めて通過す 流の平まで完遡した。このときは連日天候に恵まれ、 めて立山温泉から千垣に下った。 十字峡か

の途についた。 平小屋に辿り着き、 下に剱沢平を眺めながら退却を余儀なくされた。やむなく池の に戻った。翌日は仙人支脈を下ったが、これまた悪絶を極め直 みたが、劔大滝上までで下降を阻まれ、引きかえして三の窓下 又川を遡り、劔三の窓下に野営し、上流から劔沢渓谷下りを試 次いで大正十五年八月には別宮さん、冠さん、私の三人で小 翌日は小黒部谷を下り、鐘釣温泉から帰京

休養の後弥陀ケ原から帰途についた。 から黒部別山北尾根を経てハシゴダン乗越に出て、弘法茶屋で 入り、本流に架橋して劔沢に入り、途中二泊して苦心の末久遠 剱大滝の直下に到着し、感激を新たにした。その後は剱沢平 翌昭和二年八月には前年と同じメンバーで十字峡から神潭に

のない黒部そのものを探りはじめたのは、 を染められたのは明治四十四年であるが、 黒部新越から平、上ノ廊下を通過、有峯までの旅を試みた。 冠さんは明治三十五年頃から登山を始められ、 和三年八月には例の三人のほか渡辺漸氏が同行し、 登山人が入ったこと 大正七年の夏からで 黒部流域に足 74 人で

ある。

年八月、 黒部のほかにも冠さんは黒薙渓谷を探勝されている。 同十月、昭和七年八月と相次いで黒薙川に入り、

ときであった。このときは下ノ廊下を歩かれたが、黒部第四発 電所の工事がほとんど完成し、ダムの上流に約十五キロの山 谷、北又谷の秘境の印象を発表されている。 冠さんが最後に黒部を訪れたのは昭和三十七年夏、八十歳

湖が出現した頃であった。

二十年八月終戦、それから十年ぐらいは種々の事情のため山 当歩かれていたが、昭和十六年十二月太平洋戦争が勃発し、同 入る機会がなく、 冠さんは、昭和十六年までは春、 その後は七十歳をこえて山歩きが困難になら 夏、 秋の三季にわたって相

ず、四国、九州にも行く気をもっておられたがとうとうその機 北海道、東北、 木曽方面など曽遊の意向もあられたが果たさ れてしまった。

会を得られなかった。

静居して山川を語る老の春

推薦されている。 昭和二十八年六月に日本山岳会から二十一人目の名誉会員に

を接してあらわれてくる美しい渓谷を、心ゆくばかり楽しんだ り、珠玉のような梓川の風景に魅せられ、明治四十四年に白馬 ことを喜んでおられた。 岳から祖母谷を下って初めて黒部の渓谷に接したが、次々に踵 明治の末はじめて上高地に入って日本アルプスのよさを 知

高瀬の谷ではワリモ沢、

双六谷を中心に探られたが、

(200)

れた。その他、吉野熊野の大杉谷、北又川も訪れ、日本アルプ を中心として、嶮岨と幽凄を秘めたこの高瀬の渓を好いておら は金木戸、中ノ俣川、広河原、コグラ谷、打込谷、奥抜戸など スにはない美しさを味われた。

いものがある。 巻を完結されたが、その内容の豊富なことは他の追随を許さな り、最後には六十余年の紀行、随筆をまとめて『山渓記』全五 部渓谷』を出版されてから著書は全部で二十数冊を数えるに至 かくてこれらの旅の記録をまとめ、最初にアルス社から『黒

思うものである。 遊の山谷または未知の高山深谷に、独り寂しい旅を続けたいと 冠さんの長逝に深く哀悼の意を表わし、君の霊と相携えて曽

岩永 信雄)

### 略歴および山歴 (初登攀を中心として)

明治三十五年七月 富士山に登り、以後日光の山々、筑波山、赤城山、 明治十六年(一八八三年)二月四日 東京に生まれる。

明治四十二年七月 はじめて北アルプスに入り、上高地から槍ケ岳に登 浅間山など関東周辺の山を登る。

明治四十二年十二月 日本山岳会入会(会員番号二三七番・紹介者辻村

明治四十四年七月~八月 白馬岳に登り、祖母谷を下り、渓谷の美しさ

を知る

追

大正三年八月

白峰三山縦走。

悼

大正七年八月 大正五年七月 大正六年七月 大正四年七月 ることを目的とした山行)。 立山登頂後御山沢を下り、黒部に出る(はじめて渓を探 剱岳早月尾根初登 (同行飯塚篤之助) 真川から岩井谷をつめ薬師岳に登頂。 劔岳登頂、平蔵谷を初めて下降する。

大正九年八月 立山から御山沢を下降し、さらに黒部川下の廊下を黒部 大正九年六月 笛吹川西沢から国師岳に登り、東沢を下降。 大正八年七~八月 聖沢から聖岳に登頂、 遠山川初下降。

大正十一年七月 下流から下の廊下を探る(仙人谷-黒部別山 別山沢落ち口付近まで探る。

大正十三年八月 双六谷を登り、黒部川上の廊下を下降 ーサル又のカール―立山―劔岳)。

大正十三年十一月 乾徳山から黒金山に登頂

大正十四年八月~九月 鐘釣温泉から平まで黒部川下の廊下の完全遡行

に成功(同行沼井鉄太郎、岩永信雄)。

大正十五年八月 小又川から奥大日岳登頂。さらに劔沢下降を試みるも 失敗(同行別宮貞俊、岩永信雄)。

昭和二年八月 千垣から立山温泉経由、平の小屋から棒小屋の小屋場ま 峰に登る。 岩永信雄の両名と三人で劔沢に入る。その後、十字峡から黒部別山北 で下降(同行石井鶴三、田中薫)、下流から上がってきた別宮貞俊、

昭和四年八月 を下降。 コグラ谷(双六谷支流)を遡り、笠ケ岳に登り、

昭和五年八月 西尾根を黒部下の廊下に下る(同行渡辺漸) 新越沢および赤沢を下降。 大冷沢から鹿島槍東尾根初登攀。さらに種池から岩小屋

昭和五年十月

(201)

年八月にも大所川、北又谷、柳又谷を探る。 昭和六年八月 黒薙川を遡り、雪倉岳から白馬岳に登る。同年十月、翌

昭和七年五月 白馬岳主稜を登攀 (第二登)。

昭和三十二年八月 尹藤祈首から鷲羽乗或、雲のF。の故障のため山から遠ざかる。戦後の山行としては次のものがある。の後昭和十六年までは毎年何回かの登山を続けたが、以後戦争と種々昭和八年八月 北鎌尾根登攀。この頃しばしば高瀬渓谷周辺を探る。そ昭和八年八月

昭和三十四年六月 棒平から下の廊下、のち葛温泉から三俣蓮華小屋、昭和三十二年八月 伊藤新道から鷲羽乗越、雲の平。

十七歳。 | 中一大郎 | 本会名誉会員に推挙される。 | 中一大歳。 | 中一大坂 | 本会名誉会員に推挙される。

#### 王要著書

山と渓谷社)、山の味谷の味(昭二十七・文徳社)、四季のたかね(昭三 十八・墨水書房)、雲表を行く(昭十八・墨水書房)、 十七・墨水書房)、わが山わが渓(昭十七・墨水書房)、山への味到 ンカ 山旅(昭十二・改造社)、峰・渓々(昭十三・書物展望社)、峯・瀞 六谷(昭七・第一書房)、 黒部渓谷(昭三・アルス)、立山群峯(昭四・第一書房)、劔岳(昭四・第 (昭六・木星社書院)、白馬連峯と高瀬渓谷(昭七・梓書房)、渓からの 書房)、黒部(昭五・第一書房)、後立山連峯(昭七・第一書房)、 山渓記全五巻(昭四十二~四十四・春秋社)。 (昭十四・三省堂)、廊下と窓(昭十五・三省堂)、雲表を行く(昭 黒部(昭三十四・修道社)、渓(昭三十七・筑摩書 破片岩(昭八・耕進社)、 (編者) 日本アルプス大観 渓想(昭二十一· ť 双

# 加藤 誠平氏 (一九〇六一一九六九)

加藤誠平氏は、同じ学校の山岳部の出身で私の山の先輩である。とはいえ、年齢に約十年のひらきがあるから、山を盛んに登っていたころは全くの他人であった。『山岳』誌上に故人の追替を述べるのには若輩にすぎる。加藤さんと山やスキーを共にされた同輩の方に語っていただきたかった。しかし、故人の最なれた同輩の方に語っていただきたかった。しかし、故人の最された同輩の方に語って、母校の若い連中と老先輩を押したて、特望のヒマラヤにでかける機会をえた。そのとき、たとえとしがちがい、山行きを共にした経験をもたなくても、ただ「山が好きがい、山行きを共にした経験をもたなくても、ただ「山が好きだ」ということだけを信頼して、安心した、たのしい山旅のきだ」ということだけを信頼して、安心した、たのしい山旅のきだ」ということだけを信頼して、安心した、たのしい山旅のきだ」ということだけを信頼して、安心した、たのしい山旅のきだ」ということだけを信頼して、安心した、たのしい山旅のきだ」ということだけを信頼して、安心した、たのしい山旅のもから、山行きを共にした。

加藤さん、通称カッチョは静岡高等学校時代から山岳部のメンバーだったらしい。大学時代には、例の劔沢小舎が雪崩にやられたときで、山岳部の同僚を雪の下に失っている。また、その時代は毎年、京大と東大のスキー交歓合宿が行なわれていたころで、今西、西堀といった猛者連と笹ヶ峯の小舎で痛飲していたことであろう。

追

ある。 私は、 屋の先駆者である。木材を運ぶのも人を運ぶのも原理は同じで である。今日の言葉でいえば、カッチョは日本におけるリフト 方面を専攻した。日本ではこの種の学問のパイオニアーの一人 る他はない 加藤氏は林学の出身であるが、 そこで日本の観光業界はカッチョを大いに重宝がった。 加藤さんが専門の学問の分野でどれほどの仕事をされた 造林学よりも森林工学という

ころが、 山岳会に岩登りのコーチを依頼してきたということである。 は軍当局からあまりお目みえのよい団体ではなかった。 をしていたらしい。当時、 接には承知していないが、 い会員である。山岳会々員としての活動については、筆者は直 る。山岳会にも学窓去って早々に入会しているから、 本の三千メートル級の頂きは全て訪問しつくしたという話であ 盛んだった。カッチョもスキー登山派であった。夏の山では日 山地戦闘の技術として岩登り法の必要を痛感した軍部は、 和 の初期は、 当時の理事連中はこの申出に抵抗したらしい。そこで 吾妻、 上信国境の中級山地へのスキー サロン風の団体色の濃い日本山岳会 戦時中に、西堀氏や中司氏等と理事 かなり古 登山 しか ع ガニ ち、

カッチョ先輩はそんなにえらいのかと。しかし、仲間たちの発 1º さなかに、カッチョは「日本の造園」という講義をするために ルリン大学に招かれるということになった。私は仰天した。 一九六二年の秋、私たちがカラコルムへの旅仕度をしている

提案しつづけてきていた。 に主張しているだけでなく、 がくることを予見していたのである。

積極的にその手法を自から考え、

しかも、自然保護をたん

を最後の宝として、真剣に育て保全していかねばならない時期 護事業へと広く関係していく道筋のなかには、現代文明が森林

たということになる。カッチョが国立公園の仕事から自然保

日本の森林の緑地空間としての重要性を早くから見抜い

く主張されていたそうだ。これはまさに卓見である。

すな

7

かなり以前から森林における「第三の利用」という問題を強

観光関係の知人の話では、

カッ

チ

は

か評価する資格がないが、

う話である。

軍は、言うことをきかない山岳会のとりこわしにかかったとい

詳細ないきさつについては筆者は全て承知してい

ともなれば小さいエピソードになってしまうが、温和なカッチ して、ねばりにねばり、とうとう山岳会を守りつづけた。 ないが、この件についてカッチョはかなり重要な役割りを担当

今日

のなかにこうした造反的な根性がひそんでいたことに敬服す

りザー 頑張った。私は一日行程先きを歩いていたので、 でロイマチスの激痛に耐えながら、インダス上流の二日の旅を 旅の途中で宿病になったロイマチスにとりつかれた。 その胸中を察してあまりある想いである クに乗ってシガールの谷を下りていく姿を目にしなか 初老の身 促進をお願いしよう、というのであった。老先輩はこのときの 想は、それは好都合だ、帰途カラチに寄って登山許可の取得の

ての国際的活躍はかなり派手なものであったらしい。 未亡人のお話によると、 昭和九年に日米親善のためにとい

加藤さんの山

歴は地味なものであったが、

専門の林学を介し

ったそうである。世界林学会のときにシアトルでその石と御対面という場面があかすめとってアメリカに送付したことがあった。そして戦後、とがあり、そのおかえしにと、冬の富士山に登り、山頂の石をらことでマウント・レニヤの山頂の石が日本に送られてきたこうことでマウント・レニヤの山頂の石が日本に送られてきたこ

好きな山と自分の仕事とを上手に結びつけて、自からも楽しから御冥福を祈る。

#### 略歴

昭和二十九年 大正十五年 大正十二年 明治三十九(一九〇六)年二月七日 和十九年 和 和 六 五. 四 年 農学博士授与。 東京高等師範附属中学校卆業。 東京帝国大学助教授。 東京帝国大学大学院を経て、 日本山岳会入会(会員番号一三三三番)。 東京帝国大学農学部林学科卆業 静岡高等学校理科卆業 東京都文京区丸山町にて誕生。 内務省国立公園課に勤務。

よる心不全。享年六十三歳。

(渡辺 兵力)

# 久世 秀治氏(一八九一一一九六九)

父は明治二十四年、富山市の中心街の商家に生まれ、市井の父は明治二十四年、富山市の中心街の商家に生まれ、市井ので、山を愛し、山歩きを唯一の楽しみとして終始したが、いわた。山を愛し、山歩きを唯一の楽しみとして終始したが、いわた。山を愛山をたのしみに己が天職にいそしみ、足ならしを兼ね二度の登山をたのしみに己が天職にいそしみ、足ならしを兼ね二度の登山をたのしみに己が天職にいそしみ、足ならしを兼ね二度の登山をたのしみに己が天職にいそしみ、足ならしを兼ね二度の登山をというよりは、中国の大のであるり。

なって後、ゆとりのない家業ながらも八月の盆休みを期して登欠かさなかった。分家して醤油、味噌の醸造工場を営むように収かさなかった。分家して醤油、味噌の醸造工場を営むように心を深くつかんでいるが、亡くなる前々年まで毎年立山登山は心を深くつかんでいるが、亡くなる前々年まで毎年立山登山は山を深くつかんでいるが、亡くなる前々年まで毎年立山を登山し、それによって成人すると当地では若者は必ず立山に登山し、それによって成人すると当地では若者は必ず立山に登山し、それによって成人すると

昭和四十四年五月七日

伊東国立温泉病院にて歿す。病名ロイマチスに

停年退官、

五月名誉教授。

東京大学カラコルム遠征隊々長

昭和三十三年

東京大学農学部教授

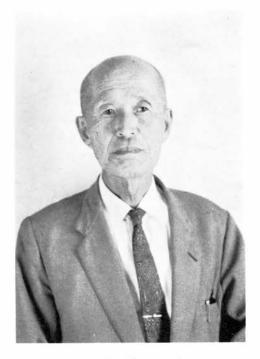
日本農学賞授賞



名誉会員 冠 松 次 郎 氏 Matsujiro Kamuri (Hon. member) (1883 – 1970) (32年8月、祖父岳の頂にて、塚本福治郎氏撮影)



加 藤 誠 平 氏 Seihei Katoh (1906~1969)



久 世 秀 治 氏 Hideharu Kuze (1891-1969)



梶本徳次郎氏 Tokujiro Kajimoto (1921—1969)



加 藤 数 功 氏 Kazunari Katoh (1902-1969)



工 藤 元 平 氏 Genpei Kudo (1889-1968)



中田清兵衛氏 Seibei Nakada (1876-1970)

は廃村と化した山里、さては人なつかしい峠路なども父は好ん くする」ことを知らされた。ダムに水没の日の近づいた谷、今 う語もあるように、「山は水を伴ってはじめて 山の味わいを深 りで、 ている。水かみに遡る山行きも好み、私も学生時代伴われて庄 地は山に恵まれ、また高山から流れ下る水清らかな川に恵まれ 子ども達も登山に伴われ、「父と山」の思い出にみちている。当 あとは交通の便利になった立山に登るのを楽しむに止まった。 立山、劔など近くに限られ、その後北ア、谷川、南アなどに行 じく焼失し、登山歴を確かめるすべもない。戦後数年の登山は く思われる。また学生以来一日も欠かさずつけていた日記も同 らは敗戦まじかの空襲ですべて焼失してしまい、何よりも惜し ッチ、俳句なども書きこみ、下山して写真を貼りこむと出来上 和紙の屏風だたみになった集印帳を携行し、略図、記録、スケ 満七十歳の時再び甲斐駒、 家族も見て楽しみ、それによって山の知識を得た。これ 白川郷から高山へと共に歩いたが、「山水」とい 仙丈などに登ったのを最後に、

山は自分のペースで登る。これはまた父の人生の歩き方でもしばらくの病臥で逝った。生前の父と家族の希望にそい、墓は足下の富山市街をへだてて空に聳える立山連峰を一望する呉羽山の中腹に建てた。そこは晩年楽しみにして集うた山岳会のクラブ「富山山荘」にもほど近いところ、父はいま愛する山に対しつつ安らかに眠りについている。

#### 略 歴

た父は思い出を楽しむために登山のつど記念帳を作っていた。

飾らず淡々と出立していった姿が思い出される。日々山を眺め

次の計画に思いをはせていたのも幸せな事だった。ま

まの堅実な登山行だったので信頼され、家族も全く心配した事にとってよき山の先達となり、おだやかで几帳面な人柄そのま山をいろいろコースを変えてはくまなく登った。身近な者たち

登山の準備、後始末は一切自分で行ない、服装も

ながら、

がなかった。

Ш

し、次第に足をのばして壮年の昭和初期は北アルプス一帯の

で歩いていた。

昭和四十四年(一八九一年)七月三十一日 富山市に生まれる。明治二十四年(一八九一年)七月三十一日 富山市に生まれる。明治四十二年 富山県立富山商業学校卒業。昭和四十一年秋 生存者叙勲の栄を受く。昭和四十一年秋 生存者叙勲の栄を受く。昭和四十一年秋 生存者叙勲の栄を受く。昭和四十一年秋 生存者叙勲の栄を受く。昭和四十四(一九六九)年八月八日逝去。

(久世 壬生野)

岡部 浩子氏 (一九四三—一九六九)

何の前ぶれも胸さわぎのひとつもなく、彼女は黒部の荒れた

うか。遭難から一年以上の月日がたってしまった今も、口惜しも、どうしてあの魔の三十分をすりぬけてくれなかったのだろも、どうしてあの魔の三十分をすりぬけてくれなかったのだろう。それにして河原でいなくなってしまった。昭和四十四年八月十一日、北ア河原でいなくなってしまった。昭和四十四年八月十一日、北ア

ス月十一日の朝、降り続く雨をついて東沢出合の奥黒部ヒュス月十一日の朝、降り続く雨をついて東沢出合の奥黒部ヒュッテを四つのパーティが相次いで出発した。最初のパーティはッテを四つのパーティが相次いで出発した。最初のパーティは、東沢を渡れず引き返している。福田善明、岡部たパーティは、東沢を渡れず引き返している。福田善明、岡部に逃がれへリコプターに救出された。最後に小屋を出ようとしに逃がれへリコプターに救出された。最後に小屋を出ようとしたがれて東沢出合の奥黒部ヒュさと腹立たしさが私の胸を去来するのである。

番、そして夕方小屋に戻ってくる仲間の雪をホーキでおとして番、そして夕方小屋に戻ってくる仲間の雪をホーキでおとして場高などの技術講習会に参加し、いつのまにか私たちの仲間になって会の仕事を手伝ってくれるようになった。原宿へのルームの移転をはじめ、当時の山岳会もほとんどが会員の奉仕でそムの移転をはじめ、当時の山岳会もほとんどが会員の奉仕でそムの移転をはじめ、当時の山岳会もほとんどが会員の奉仕でそムの移転をはじめてように思う。集会の通知や準備、講習会のの機能を果していたが、彼女は率先してそれらの仕事を手伝ってくれた。スキー合宿に行けば、食糧の買出しからボッカ、火のくれた。スキー合宿に行けば、食糧の買出しからボッカ、火の人種になったのはお茶の水時代のルームの機能を果していたが、彼女は率先してその様になったのはお茶の水時代のルームの機能を果していたが、彼女は国体を表している。

の便りなのである。

である。 てある。

昭和四十一年十一月から翌年二月にかけて私たちはニュージであった。この四人は、どれをとっても「何か足りない」けれであった。この四人は、どれをとっても「何か足りない」けれであった。この四人は、どれをとっても「何か足りない」けれであった。美人なのに男の子のような恰好をして肩をゆすって歩くれた。美人なのに男の子のような恰好をして肩をゆすって歩くれた。若花の免状を持っていて、山でも町の中でも珍しい花を見つけるとさかんに写していたが、写真の腕はそんなによかったとは思えない。彼女の写真には、たいてい指だのカメラのケースがどこかにうつっているのである。手紙とか文章を書くのはいちばん苦手だったようである。みんなが寝静まった小屋やナントの中で、一時間も二時間も何か書いている。翌朝きいてテントの中で、一時間も二時間も何か書いている。翌朝きいてカると会の皆さんに出す寄せ書だったりして、それは五、六行みると会の皆さんに出す寄せ書だったりして、それは五、六行

られもせず食べていた彼女。一月三日、ホプキンスのキャンプる。作りすぎたオートミールを、ブツブツいいながら毎朝捨ての彼女も声をあげて、引っくり返って笑っていたのを覚えてい残りの三人がとたんに吹き出して笑い転げた。この時はさすが残りの三人がとたんに吹き出して笑い転げた。この時はさすが残りの三人がとたんに吹き出して笑い転げた。この時はさすが彼女は声を立てないで笑う。ウェリントンの知人宅で夜中ま

追

るのである

そうだったヒロコ。 での誕生日を、缶詰のいなり寿司とたくあんで祝った時の嬉し 日本に帰ってから二年程、彼女は病気がちであった。 。咳息が

ひどいのにドクターストップを無視して山やスキーに行ってい き使い、いつかヒマラヤへ行こうと話していた矢先であった。 たようである。それもほとんどよくなって、これから大いにこ

倒木をのみ込んで十メートルもの高さで黒部川を半ば埋めてい に積んだ二つの大きなケルンは跡かたもなく、東沢は左岸沿い もない限り絶望的であることを再び思い知らされた。去年出合 が右岸から左岸に変ったりした。東沢への川沿いの道は寸断さ に奔流となって流れていた。下流に押し出した白砂の堆積は、 の黒部で、私たちは遺体はおろか遺品の発見さえもが、奇跡で 合は荒れ果てた広大な河原になっている。そして四十五年八月 れ、至るところで鉄砲水や山崩れのあったことを物語り、 五メートルもの高さに押し出していた砂の山が崩れ落ち、 舟をつけた入江は、今日は白い砂の洲になっていた。目の前で った湖水は茶褐色に濁って流木が水面を覆っていた。東沢の出 索当時の黒部はまるで生きもののように動いていた。 青か 昨日

す静かな場所に、記念の指導標が建っている。この荒凉とした 石ころだらけの東沢出合の、 奥黒部ヒュッテから赤牛岳への登り口の、 一体どこに彼女はいるのだろう 東沢を見おろ

> なにか口惜しかったろう、と、胸が熱くなるのである。 いない彼女の気持を想像すると、たまらない思いである。 か。豪雨のなかのまっ暗な東沢で『しまった!!』と思ったに違

#### 歴

略

九六五年九月 九四三年一月三日 日本山岳会入会(会員番号五八一〇) 生

九六九年八月十一日奥黒部ヒュッテを発ち平の小屋へ向かう途中、 砲水、山崩れにより消息を断つ。

鉄

〇当口 節子

# 梶本徳次郎氏 (一九二一一一九六九)

社の一室に松方さんを迎えたことを憶えている。 やわらかな歩き方や登り方に見とれていたことを思い出す。 やったことに深い敬意を払っていた私は、彼の細っそりとした 達と谷を登って来た。屏風の第一ルンゼ冬期初登攀を新村氏と 憶している。彼はエーデルワイスの人達や大阪山岳会の若い った。藤木さん達の呼びかけで、登山関係者が集り、 京阪神地区で開催されたのは、終戦翌年の昭和二十一年十月だ 第二の出合いは終戦後である。戦後第一回の国民体育大会が 梶本君との出合いは、戦前、六甲紅葉谷の岩場であったと記 登山部門を大

(207)

梶本君を中心に若い者が準備に走り回ることとなった。いので、種々協議の上講演会と展覧会を開催することに決り、阪でやってほしいとの事であった。本格的な登山行事が出来な

結成されたのも、このことからであった。
岳会関西支部が再建されたのも、関西登高会等の新しい団体がながら実行出来たことで、岳界は大きく動きはじめた。日本山ながら実行出来たことで、岳界は大きく動きはじめた。日本山

準備にあたった」と結んでいる。その半頁の小さな誌面による準備にあたった」と結んでいる。その半頁の小さな話面によるり上る若い力によって自治的な再建を図る」とあり、また「委り上る若い力によって自治的な再建を図る」とあり、また「委り上る若い力によって自治的な再建を図る」とあり、また「委り上る若い力によって自治的な再建を図る」とあり、また「委り上る若い力によって自治的な再建を図る」とあり、また「委り上る若い力によって自治的な再建を図る」とあり、また「委り上る若い力によって自治的な再建を図る」とあり、また「委り上る若い力によって自治的な再建の立役者であった。昭梶本君は国体の準備、実行、支部再建の立役者であった。昭梶本君は国体の準備、実行、支部再建の立役者であった。昭根本君は国体の準備にあたった」と結んでいる。その半頁の小さな誌面による

業後雪線社で登山活動を続け、昭和十六年に大阪山岳会に入っ 梶本君の登山歴は昭和八年天王寺商業山岳部にはじまり、卆

前述のように日本山岳会と関西登高会での山行に

らの人達は戦後の日本山岳会関西支部再建に御尽力下さった人三二四二番前後の人が関西支部にはたくさんおられるが、これ

その時集団で入会したのだった。

員約百名出席の上再建総会が開かれている。

梶本君の会員番号

と、二十二年三月七日午後五時より朝日新聞社四階大広間で会

仕事をしっかりと把握して行けなかったからである。与えられ なき人生の憩いでもあった。唯只管に山が好きになったのは、 の山の生活は一方では激しい生への対照であり、 業学校卆業の翌年閉鎖されている。彼は山日記の中で「何年か を亡くし、家業は母の手で営まれていた。その家業も天王寺商 ふれる登山で、彼の生涯を通じて実践した登山観が確立し 初登攀をやり、 亦希望の遠征に一脈通ずるものである」と書き残している。 ばれている。真実の要素は格段の相違を持つだろうが、 三年間の兵役生活を送っている。彼の古ぼけた当時のアルバム ねのけた時代であったのだ。昭和十七年八月教育召集をうけて 培われたものである」といっているように、苦しみを闘志では 彼が自ら「求心的な激しい性格は天性であり、 のだ。その上彼は山仲間の雪線社から退部を迫られ苦しんだ。 さえ捨て、外地に行き、思う存分仕事に打込む事を考えていた 友や山友達が次々と兵隊にとられて、仕事に悩む彼は好きな山 より一層活気に充ちたものとなるだろう。」といっている。 んどんこれに傾注して行けるような仕事があれば私の人生は今 かして四つに組める程の仕事が欲しい、山で得た新しい力をど た全部を尽した余裕が私の場合総べて山に向けられた……どう る。またこの十年は彼の大変苦しんだ時代でもあった。 「戦争と登山、私にとって、この二つは形而上同一信念に結 七年三月には新村正一氏と組んで積雪期屏風岩第 同年八月に応召している。 この十年間の闘志あ 更に山によって 他方またこよ ル

のことであった。 無かった。彼が岩登りの写真による技術書を出したのもこの間 に関係することで頼まれて、 代といえるだろう。彼が関西登高会という小さなグループを、 感もあったし、友達にも恵まれていたし、彼の一番満足した時 と考えることが出来ると思う。 技術教育や、頼まれれば映画の製作にも力を貸し、こと山登り のは皆さんもよく御承知の通りである。更に彼は自衛隊の登山 大会以降技術指導員としての行動は、全国の岳人に親しまれた 部委員としての活躍も支部再建以来続け、特に第四回国民体育 彼の登山観通り教育し育てて行ったし、また日本山岳会関西支 ことに精進を続けた。そのピークが昭和三十六年の ジュ ガ 彼のよき師北条理一氏を失い、 情熱を燃やす活動となって、第二の登山期を迎える。 ル・ヒマール遠征であった。この十六年間を彼の第二の登山期 新しい仲間づくりに成功し、彼の登山を一歩一歩実践する 嫌だと言ったことを聞いたことが この間彼は仕事に打込める充実 学校時代からの岳友を亡くした 戦争では 1

う事が多かった。山登りでも仕事でも決して主張をまげぬ人で での八年間は、 られぬものを持っていた。 かしヒマラヤ遠征は彼の仕事を二度も変えさせているし、体 昭和三十七年から、 遊びである登山での妥協は嫌だ」と常に言っていた。仕 山の議論はよく仲間でやったが「私は仕事では妥協す 彼の厳しい人生観と性格は、時に周囲の人に入 円熟した彼の第三登山期だと私は考えている。 四十四年ニルギリの山中で生涯を終るま 彼のリアルな冷い態度は反感を買

> 友人間でも首をかしげるほどであった。 なかった。特に近年の彼の円熟した人生観は、 も厚く、意外と涙もろいところがあるのを理解している人は少 昔を知っている 彼は義理人情味

理 事も 事での妥協がどの程度であったかは知らぬが、

登山期を埋めているのだ。 いる。 の教育者としての活躍は、 関西支区における登山教室、大山で毎冬行なわれる ているし、 会の講師として数回にわたり大山、八ガ岳、 々出かけている。 しての活躍はめざましいものがあった。文部省登山 ていたし、 この八年間は特に日本山岳会との関係は大きく、 全国高等学校体育連盟積雪期講習会にも主任講師として度 また自衛隊レインジャー部隊の特別訓練の主任教官や 登山研修所が立山に開かれるや、 海外登山の審議員もやっていた。特に技術指導員と 頼まれれば九州にも数回出かけている。 この最後の八年間に集中し、 講師を度々勤めて 谷川岳等に参加し 登 指導員講習 山 講 勤

会

目が躍如としていた。 の指導を感謝し、彼を惜しむ言葉の多かったことにも、 りの広さと深さが思われ、 はじめとして、各登山団体の弔辞や弔電に彼の登山界への交わ なわれたが、広い境内が山岳関係の人で埋 めて考えさせられた。 彼の告別式は昭和四十四年十一月十七日に大阪の太融寺で行 特に全国から寄せられた弔意の中に、そ 指導者としての地位や業績をあらた まり、 日本山岳会を 彼の面

ギリに抱かれて昭和四十四年十月二十九日に急逝した。 彼は念願のアンナプルナを眺め、ダウラギリに見守られ、

ル

している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起している。会員を指揮し事故処理に当る彼の真剣な姿を思い起した東又白の二重遭難事故をはじめとして、彼は度々事故に関いる。

死の直前まで山を楽しみ、努力した彼は、新しい仕事でもその成果を高め、業績をあげていた。いよいよこれから彼の手腕の成果を高め、業績をあげていた。いよいよこれから彼の手腕で、やっとむくわれた人生を送ろうとしていた時だ。彼に育てられ、引っぱられて来た関西登高会も、二度のアラスカ遠征にられ、引っぱられて来た関西登高会も、二度のアラスカ遠征にられ、引っぱられて来た関西登高会も、二度のアラスカ遠征にられ、引っぱられて、といよいた。いよいよこれから彼の手腕の成果を高め、業績をあげていた。いよいよこれがらない。

#### 略歴

大正十年二月二十七日 大阪市西区京町掘通二丁目五番地に生れる(長

昭和十三年三月 大阪市立天王寺高業学校卆業後、家業(梶本運動用品!

)に従事。

昭和二十八年二月 日莫株式会社に社名変更、同大阪文店勤務。昭和十四年十一月 家業の閉鎖で、大日本輸出莫大小株式会社に入社

昭和二十八年三月 大阪日英株式会社に入社。

昭和三十二年五月 大阪三崎産業株式会社常任監査役を兼務、昭和三十一年四月 同社取締役総務部長となる。

昭和三十六年九月 株式会社山晴社専務取締役兼営業部長、大阪営業所昭和三十六年一月 大阪日英株式会社、大阪三崎産業株式会社を退社。昭和三十三年四月 株式会社山晴社取締役を兼務。

長に就任。

昭和四十四年十月二十九日 ヒマラヤ山中にて死亡。昭和四十年三月 同社専務取締役総務部長に就任。昭和三十九年十月 同社総務部長。昭和三十九年十月 泉工機株式会社嘱託。昭和三十九年一月 株式会社山晴社退社。

#### 山歴

昭和八年 大阪市立天王寺商業学校山岳部入部、岩登り、スキー練習等

昭和十一年 七月槍ケ岳―小槍―北穂高岳、昭和十年 七月燕岳―槍ケ岳―穂高縦走。

八月西穂高岳ー

·和十二年 一月德本峠-上高地-燒岳、七、八月涸沢合宿生活、前穂高北尾根。

奥又白谷

昭和三十一年 昭和三十年

昭和十三年 昭和十五年 一月御岳、鹿島槍冷沢生活、四月鹿島槍東尾根、六月木曽 月大山、四月御岳、 月大山スキー合宿、七月涸沢岩小屋生活。 七月穂高涸沢生活、上高地生活。

昭和十六年 駒ケ缶、 山ー剱岳ー針ノ木峠、八月燕―天丈沢―北鎌尾根―槍ケ岳―上高地。 岳、十一月常念岳、十二月御岳スキー登山、十二月白馬落倉 八月涸沢生活、屏風岩aルンゼ、九月鹿島槍ヶ岳鎌尾根 一月岳沢ージャンダルム、二月大山指導者練成会、四月立

長。

昭和十七年 三月屛風岩第一ルンゼ積雪期初登攀、四月冷沢―鹿島槍岳

一五竜岳、七月上高地—奥穂高岳—前穂高岳—奥又白谷—徳沢、八月

昭和二十二年 召集(三ケ年兵役) 一月立山—劔岳、三月鹿島槍鎌尾根、六月石鎚山、 八月

- 槍見温泉、十月燕岳。

昭和二十三年 岳、八月涸沢生活―屏風岩第一ルンゼ。 穂高岳涸沢生活、槍ケ岳ー槍平 一月上高地―徳沢―槍ケ岳、六月ウェストン祭―西穂高

昭和二十六年 昭和二十五年 昭和二十四年 一月燕岳—大天井岳、十月第五回国体—鈴鹿山脈 一月遠見尾根合宿、十月第四回国体—富士山 一月穂高岳沢合宿、十月第六回国体一大山。

昭和二十九年 昭和二十八年 昭和二十七年 一月穂高岳凅沢合宿—前穂高岳、十月第八回国体—石鎚山 一月白馬岳猿倉合宿、三月白馬岳主稜登攀、十月第七回 一月遠見尾根合宿—五竜岳。七月第九回国体 大雪山。

昭和三十三年 イ岳―ペテガリ岳(リーダー) 一月北海道日高山脈合宿―札内川―コイカクシュサッナ

九月屏風岩第一ルンゼ登攀。

一月穂高合宿—奥又白谷—北穂高岳往復 一月穂高岳奥又白谷合宿—前穂高岳

追

昭和三十四年 一月屏風岩中央カンテ登攀隊(リーダー)、四月劔岳―八

昭和三十五年

昭和三十六年 二月一六月全日本山岳連盟ジュガール・ヒマール遠征隊 一月人津谷―大日岳―劔岳(リーダー)

昭和三十七年 加。 八月文部省登山指導者講習会講師として大山、八ケ岳、谷川岳等に参 三月全国高等学校体育連盟積雪期登山講習会主任講師、

昭和四十二年より四十四年まで
文部省登山研修所講師として立山、 低 大日岳に登る。 劔

昭和四十四年 十月ネパール王国ニルギリ南稜試登、十月二十九日病死。

(浅野

### 加藤 数功氏 (一九〇二—一九六九)

っぷりと含ませると、大きく三つの字を書いた。それは加藤さ はもつれ、手はかすかにふるえていた。しかし、毛筆に墨をた なった。意識の混濁が少しずつ見られるようになった。 十四年の秋に入ってからで、十一月十七、八日ごろから重体と んが愛してやまなかった「九重山」という字だった。これが絶 二十日午後、夫人に筆と紙を持ってくるようにいわれた。 加藤さんは三年間病床にあった。病が重くなったのは昭和四 П

戒名通り、 時間後、 加藤さんの一生は一貫して山に捧げられたものだっ 眠るようになくなられた。 高峰院釈一貫居士。

は加藤さんの次男も参加していた。 ラヤ研究会が送り出した大分ヒンズー・クシュ登山隊が、中部 山群のコー・イ・モンディ登頂に成功した日であり、登山隊に 月三日―それは昭和四十年に、 加藤さんは明治三十五年七月三日、 加藤さんを中心とした大分ヒマ 北九州市で生まれた。 七

業して帰郷。 ルピニストとしての精神、 注目を集めたものだ。慶応大学に進み、登山も本格化する。 の開花が遅れていただけに、山を登り回る中学生はあちこちで 東筑中学在学中から山登りを始めた。 九州のスポーツ登山は加藤さんを迎えて 花 開 技術、 体力が備わる。 九州ではスポーツ登山 昭和三年、 卆 ア V

われた。 六、七年の間に十九にものぼる初登攀、 とえば、 諸島まで、 動が始まる。 群 年、 霧島山群、 祖母・傾山群といった一地域を例にとっても、 しかも、そのほとんどがパイオニアワークだった。た 福岡で筑紫山岳会を結成、 足跡は九州一円におよび 九重山群はじめ祖母・傾・大崩山群、 九州背稜、英彦山、 九州の山々での精力的な活 ″九州に加藤あり″ともい さらには屋久島から南海 初縦走などを記録して 由布・ わずか

Щ

九重山硫黄鉱業所から招かれると、 とりわけ加藤さんが愛したのは九重山群だった。 九州炭鉱連盟の職をあっさ 昭和十六年

作りだった。

埋めてもよい」とたびたびいわれていた。 りと捨てて、鉱業所所長として九重山に入った。「九重なら骨を

五年、 協会、さらに大分県山岳連盟を組織して初代会長となる 次九州岳連を発起させて副会長となり、二十三年には九重観光 て指導と自然保護に当った。戦後二十一年には、いち早く第一 山登りのかたわら、町では登山人の組織化に努力した。 九州山岳連盟発足。加藤さんは名実ともにリーダーとし

めた。別府から九重を越えて阿蘇、 来ごとだった。九重では法華院主人の弘蔵孟夫さん、 九州における国立、 加藤さんらの提唱によって建設されたものである。このほか、 工藤元平さんとともに九重三人男といわれ、開発と保護につと た山群中核部を開放したものとして、九州登山界の画期的な出 の縦走路″奥祖母新道』は、一般の人たちが全く近づけなかっ 二十四年、 加藤さんを中心として開かれた祖母~傾十七 国定、 県立の各公園のほとんどは加藤さん 長崎に走る九州横断道路も

によってその魅力を引き出された。

ドブックとしては最初のもの。愛着も深かったらしく、 陛下に献上するための『九重山群・四季の花』というアルバム 著作だが、これをしのぐ写真集は九州の山に関する限り未だに してその一冊がヒツギに納められた。『九州山岳大観』も古い の写真集など著作も多い。『九州山岳案内』は九州の山 出ていない。 昭和三年の『九州山岳案内』とそれに続く『九州山岳大観 最後の仕事は、 四十一年の大分国体のさい、 々のガイ

追

仲間たちとかなり具体的な計画を立てたが、多忙のため実現出 来なかった。そこで後輩に夢を託したのが先述の大分ヒマラヤ 研究会である。一度はヒマラヤに立ってほしい人だった。 ヒマラヤにも夢を燃やしていた。三十二、三年ごろ、親しい

思い込むと脇目もふらずに前進し、妥協を知らぬ強い一面もあ グループが生まれていた。協力者も出てきた。 が、その人間的魅力によって、 そのものの紳士。 った。そのため、ときには誤解を受けて孤立することもあった ていない人は少ないだろうともいわれる。どこから見ても温厚 った。いまの九州岳人で、 ともあれ、加藤さんは九州における類いまれな山の指導者だ しかし、こと山に関する限り、自分がこうと 加藤さんの直接、 加藤さんのまわりにはいつしか 間接の影響を受け

だった。加藤さんは山に還った。自宅には、まだまとめられて いない貴重な資料がうず高く積まれている。 記念塔に納められた。山仲間たちが生前から用意していたもの る坊ケつるの草原に読経と山の歌声が流れ、 待つだけの九重山群。その一角、九州岳人のメッカともいわれ 四十五年五月末、ミヤマキリシマがほころび始め、 加藤さんのお骨が 山開きを

だった。いまも加藤さんは、古びた靴にピケ帽、無造作にリュ き回っていることだろう。 涯を飾っている。受けて当然だったが、そうしたことには淡白 ックを肩にし、 大臣表彰、知事表彰、その他数多いもろもろの栄誉がその生 独特のスタイルで九重をはじめ九州の山々を歩

#### 略

歴

明治三十五(一九〇二)年七月三日

福岡県北九州市に生まる。

昭和五年 昭和三年 九州山岳連盟設立。九州登山界のリーダーとなる。 慶応義塾大学卆。筑紫山岳会設立。

昭和十年 九州採炭KK入社 昭和七年九月 日本山岳会入会(会員番号一三七五)

昭和十四年 石丸鉱業KK入社

昭和十八年 九重山硫黄鉱業所所長(昭和二十四年まで)。

昭和二十三年 昭和二十一年 九重観光協会会長。大分県山岳連盟会長(昭和二十七年 第二次九州山岳連盟設立、副会長

昭和二十四年 天皇陛下御幸にさいし「大分県の山々」を進講

まで)。

昭和二十五年 大分県嘱託。

昭和二十八年 昭和二十六年 九州山岳連盟代表。二十九年顧問 大分県文化財専門委員(昭和三十六年まで)。

昭和三十一年 自然公園指導員

昭和三十五年 昭和三十二年 九州山岳保護協会長。日本自然保護協会九州支部設立。 屋久島資料を天皇陛下に献上。

昭和四十一年 昭和三十七年 征委員会代表。ヒンズー・クシュ登山隊派遣 大分ヒマラヤ研究会設立。昭和四十年 『九重山群・四季の花』を献上。大分登高会顧問 大分ヒマラヤ遠

#### 主 要

昭和四十四年十一月二十日逝去

九州山岳案内 (昭和三年)

九重山(昭和十六年、昭和三十六年) 九州山岳大観(昭和十一年)

由布山(昭和三十三年)大分県自然公園シリーズ(全六集)(昭和二十七年~三十六年)九州の山(第四集まで)(昭和三十二年~三十五年)九重風物誌(昭和二十八年)

祖母・大崩山群(昭和三十四年)

## 九州の山における主なパイオニアワーク

[項山山手谷(昭和四年九月)、傾山―夏木山―五葉岳―鹿納山―大崩傾山山手谷(昭和四年九月)、禁彦山] 深倉谷=大屏風、小屏風、星見岩、高岩(昭和八年五月)、日本チダ谷、鹿納山―五葉岳、中野内―古祖母山(昭和三年十一月)ウモチダ谷、鹿納山―五葉岳、中野内―古祖母山(昭和三年十一月)ウモチダ谷、鹿納山―五葉岳、中野内―古祖母山(昭和三年十一月)ウモチダ谷、鹿納山―五葉岳、中野内―古祖母山(昭和三年十一月)ウモチダ谷、鹿納山―五葉岳、中野内―古祖母山(昭和三年十一月)ウモチダ谷、鹿納山―五葉岳、中野内―古祖母山(昭和三年十一月)ウモチダ谷(昭和四年八月)、禁彦山 ] 深倉谷=大屏風、小屏風、星見岩、高岩(昭和八年五月) | 英彦山 ] 深倉谷=大屏風、小屏風、星見岩、高岩(昭和八年五月)

年十二月)、緑川-三方岳(昭和十一年五月)。 『背稜山地』 上米良-石堂山(昭和四年五月)、皆越-白髪岳(昭和七

山完全縱走(昭和三十三年五月)。

|月―昭和六年二月| |屋久島|| 永田岳、安房山主流、耳岳―割石岳など全域(昭和五年十二

(梅木 秀徳)

# 工藤 元平氏 (一八八九一一九六八)

愛する山を求め続けてそれをやってのけた。を越す登山をするなど容易なことではない。工藤さんは、わがたとえそれが自宅の庭先にあるような山でも、生涯に一千回

大草原である。
大草原である。
大草原である。
外住高原は九州の屋根といわれる九重山群の南に広がる草原
大草原である。北に久住山(一七八七メートル)はじめむらがり立つ
の山々を背負い、草原は阿蘇の外輪山まで連なっていく。
の山々を背負い、草原は阿蘇の外輪山まで連なっていく。

山に一千回の登山をした。 日になくなるまで、一筋にこの高原と九重の山々を愛し、久住日になくなるまで、一筋にこの高原と九重の山々を愛し、久住日になくなるまで、一筋にこの高原と九重の山や三年十一月三十二年 工藤さんは、ウェストンの祖母登山の前年、明治二十二年三

時、九州の山々はまだまだ信仰登山の域を出ず、スポーツ登山歩き回る。そして大正の初め、郷里の久住町に帰ってきた。当研究所時代、皮切りは伊吹山だった。以来、全国各地の山々を朝夕眺めてきた山だったが、登山の"味"を知ったのは、この昆虫研究所に入った。九重山群は工藤さんが幼時から親しみ、昆虫研究所に入った。九重山群は工藤さんが幼時から親しみ、

追

を忘れた

に登り、 0 いわれた黒岳を初日に踏破、続いて大船山、星生山から久住山 た「九重山群探検調査」だった。参加者二十二人。人跡未踏と されるのは、 て、工藤さんは九重山群の開発に全力をあげる。なかでも特筆 ゆかたに麦ワラ帽子といういでたちだった。 大正四年、 九州で初めての社会人山岳団体である。この会の頭領とし 工藤氏はまず登山の気風を起こした。 久住高原の反対側にある飯田高原に下山した。そろい 工藤さんを中心に久住町で九州山岳会が結成され 大正五年八月十九日から二十日にかけて行なわれ

などはほんの一部の人たちのものだった。

そんな情

勢の

な

か

なかったが、 使い。どこに一千回登山のエネルギーがひそんでいるかわから ど欠かさず顔を出された。小柄なからだ、やさしい目とことば 岳会に入る。死去される年まで、 ŋ わけその主峰久住山とともにあった。昭和二年九月に日本山 工 藤さんの一生は、これをきっかけに、まさに九重山群、 研究心と実行力はずば抜けていた。 山にかけた情熱は昔とちっとも変わらなかった 東九州支部の例会にはほとん ٤

本、長崎三県に働きかけて三県連合の九州横断国 立公園指定を働きかけたのを皮切りに、 も一生をかけた。大正十年、 では地元を結集して国立公園期成会を発足させ、 工藤さんは自分が山に登るだけでなく、九重の観光と宣伝に 開き、 これを基盤に国への働きかけを強める。 田村博士を迎えて阿蘇、 昭和四年には大分、 文字通り寝食 際観光遊覧幹 九重の国 一方 熊

> 九州山岳会の手で出された。工藤さん自身の著作も『久住山志 年には、こうした人たち多数の歌を集録した『久住山の歌』が 晶子などを呼び、山と高原の名歌を作らせたのも有名。 るきっかけでもあったが、このほか、北原白秋や与謝野鉄幹、 に造られた新登山道を中腹まで登った。これが九重を有名にす 府の油屋熊八氏と三人で高原に馬を走らせ、久住山の原始林中 府温泉に来られた高松宮を案内、 さんは知名士をたくさん久住高原に招いた。 こうして昭和九年、 九重は国立公園となった。 観光宣伝にかけては有名な別 昭和 この間、 二年八月、 昭和八

・植物編』『久泉全集』などで世に出されている。

は公職がつきまとい、公民館長、 次いで、ついに昭和二十七年四月、久住町長にしてしまった。 ギーを捨ててはおかず、学務委員、 ていたのがこの仕事だが、地元の久住町では工藤さんのエネル た。工藤さんの登山活動、あるいは観光宣伝活動を裏から支え ぐに郵便局長となり、戦後の昭和二十二年までその職 いえば久住郵便局長だった。大正四年、つまり郷里に帰ってす は昆虫学、植物学の学徒で、その関係の著書も多いが、 県自然公園審議会委員、 っぱり出し、郵便局長をやめたあとでは、町農業委員会会長に "山登り町長"が誕生したわけだ。町長退任後も、工藤さんに ところで、工藤さんはその学歴でもわかるように、 町観光協会長など、なくなるまで仕 文化財調查委員長、 社会教育委員など公職に引 あるいは もともと にあっ

は絶えなかった。

表彰歴でもそれがわかる。

国立公園で厚生大臣、

農地制度改

新聞社文化賞などなど。そして四十三年春、勲五等瑞宝章を受それぞれ表彰され、全日本観光連盟、国立公園協会、あるいは革で農林大臣、地方自治で自治大臣、郵政事業で郵政大臣から

#### 略歴

けた。

昭和六年 昭和二十七年 昭和二十五年 昭和二十一年 昭和十七年 昭和七年 昭和四年 昭和二年 昭和二十六年 昭和十六年 昭和十三年 昭和十一年 昭和九年 大正十年 明治四十一年 明治二十二年 九重山群、国立公園に指定される。 大分県風景協会評議員 九重山群の国立公園指定運動を始める。 久住郵便局長(昭和二十二年まで)。九州山岳会設立。 国立公園協会地方幹事。 日本山岳会入会(会員番号一〇四七)。 久住国立公園期成会常務理事 大分県協力会議員 大分県方面委員。 国立公園協会理事。 大分県観光協会に参画 久住町長 (昭和二十九年まで)。 久住町農業委員会会長 久住町公民館長(昭和三十二年まで)。 大分県観光協会参与。 久住町農地委員 岐阜市名和昆虫研究所卆。大分県立農学校助教諭。 大分県直入郡久住町大字久住に生まる

昭和四十三年十一月三十日 逝去。昭和三十九年 久住町観光協会会長。昭和三十五年 大分県自然公園審議会委員。

### 主要著書

久住の景勝(昭和十六年) 久住山の歌(昭和八年)

**久泉全集(昭和二十四年)** 久住山志・植物編(昭和二十三年、昭和四十年)

(梅木 秀

# 行方 沼東氏 (一八九六一一九七〇)

あなあはれシダに水やるその他に用なくなりし行方沼東 この歌は行方沼東会員の晩年の短歌である。行方さんは明治 この歌は行方沼東会員の晩年の短歌である。行方さんは明治 といる。戦時中は町会議員や青年団の顧問をしたり、戦社につとめた。戦時中は町会議員や青年団の顧問をしたり、戦社につとめた。戦時中は町会議員や青年団の顧問をしたり、戦社につとめた。戦時中は町会議員や青年団の顧問をしたり、戦社につとめた。戦時中は町会議員や青年団の顧問をしたり、戦社につとめたが、その後は野にあって一市民として、昭和四十五年三月二十日、その生涯を終わられたのである。享年七十三歳。

久住町文化財調查委員会委員長

るのである。この稿の最初にかかげた和歌は、行方さん昭和四 の会をつくり、なくなられるまでに会報は九十七号を数えてい くもつづけて出したり、植物の方では昭和二十七年に日本シダ くんでいたが、和歌では戦前「金鈴」という同人誌を十号近か 洋画、登山、 和歌その他多くのものに取 n

一年の作なのである。

を求め、その記事に動かされて、早速その夏八月休暇を利用し 正八年、山へのスタートの年であろう。 で田部重治名誉会員(旧、 さて、山登りの方は横須賀の海兵団時代、横須賀市内の書店 友人山田氏をともない八ケ岳に登山したのである。時に大 南日)の『日本アルプスと秩父巡礼』

後立山縦走等 たのである。燕岳から槍ケ岳、上高地。針の木越えの薬師岳。 その後間もなく、海兵団除隊後は田部名誉会員とも近づきを 山の話をききつつ、毎夏一回づつ、北アルプスに足を印し

その後、松井幹雄さんたちの「霧の旅」会誌を見てからは急

シダの研究に向かって行かれるのである。 人といえばこのあたりでは、まったくすくなかったので、 に低山に向かうようになって、それと同時に植物採集、 たしも行方さんと同じ成田にすんでおり、 戦前に山に登る とくに わた

くろうとしたとき初めて相談にうかがった。 休みに日本アルプスや尾瀬行きをさそった。その参加者が仲間 五年制であったので、三年生から五年生の連中によびかけて夏 その頃の中学校は

5

しが成田中学校の生徒だった昭和二年の春、

同志と山岳部をつ

と別に短歌も寄稿していただいた。 を出しはじめた。行方さんにはその第一号にも「尾根を伝ふ」 となって渓谷会という山登りの会をつくり、昭和四年から会報

この時は何とかというシダがあるからと、さそわれたが、こち トボトボと鹿野山に登った。門前の旅館に泊ったが、翌朝の九 らはシダはチンプンカンで、歩く方はお供だけならと愚妻と二 十九谷に朝霧のかかった景色は今も印象に残っている。 人で参加した。その日は寒く、佐貫駅からウネウネした道路を 度はある年の正月元日千葉県の鹿野山から三石山にぬけた。 山へ行方さんと同行したのを戦前は二度ほどおぼえている。

もあり、 ないが、なつかしく思い出される旅であった。この時は真冬で えている。これも一泊旅行で、わたしと二人だけの山登りであ の会報にのせられている。わたしの参加したことは記されてい ふみに行こうというのであった。この行については日本山岳会 そのつぎの山行きは阿武隈の猫鳴山であった。お正月に雪を 植物のことはあまり気にされていなかったようにおぼ

郎であった。日本山岳会へは昭和七年に入って、会員番号は一 でいるのでこのような号をつけられたのであろう。本名は富太 小島烏水両会員であろう。 三八九番、田部、小島氏の紹介になっている。 行方沼東の沼東(しょうとう)は号で、印旛沼の東方にすん 勿論、田部重治

会報にはよく寄稿されていた。その主なものをひろってみよ

リモーリス クライスへいまり	ウェストンと同時代の一外人登山	南洋委任統治諸島の山々	大滝根より万太郎へ	八溝山より高笹山へ	
11111	六八号	五五号	三〇号	二八号	

一利根川区志」の著者赤松宗旦義知のこと

羽越、荒川峡と鷹の巣温泉

清澄の裏山路 三石山と羊歯

〇六号

一四号 一〇号

一九号

なお、戦後は会報への寄稿はほとんど見られないようである 呼石・和尚山・湯岐

二五号

**逐田山** 

栃木鉱泉と五社山 猫鳴山と吃兎屋山

二十九年、信濃豊口山、乾徳山、上州黒滝山。三十年、遠州戸 が、主な山登りをあげよう。昭和二十六年、古賀志山。二十六 安房高塚山、三石山、南伊豆、清澄山。二十七年、奥武蔵。

中山、会津駒ケ岳、尾瀬、遠山川北又沢。三十二年、下野石裂 である。 国山、紫尾山、甫与志岳。三十六年、野間岳、 山。三十三年、朴の川山、五台山、段戸の裏山。三十四年、吾 磯間山などなの

著書はふたつを数えることができる。

シダの採集と培養(B6)昭三六・一二・一五加島書店(東京) (付記) この稿を草するにあたって、行方さんの友人山田清吉 (歌集) 昭四一・一〇日本シダの会(成田)

氏に負うところもありました。記して感謝の意を表します。

#### 歴

昭和四十五 (一九七〇) 年三月二十六日 逝去。享年七十三歳 昭和七年 日本山岳会入会(紹介者=小島鳥水、田部重治両氏・会員番 明治二十九(一八九六)年十月十日 号一三八九)。 成田市に生まれる。

た「行方沼東さん逝く」を筆者の了解を得て転載したものである。 〔編者注〕本稿は会報「山」第三〇二号(一九七〇年八月)に寄せられ (小野

# 河合 良成氏 (一八八六一一九七〇)

者、役人、政治家、実業家のコースを歩んだ財界の長老でもあ 寸見当らないので、覚書程度のことを記しておきたいと思う。 は、氏が生前小松製作所会長、元厚生大臣等の要職にあり、学 つの頃か不明だが会籍を離れ、昭和三十七年(一九六二)七月 (十月頃と推定される)。会員番号は二〇三番。しかし、戦前い 人は既に物故者が多く、追悼記を書いて頂く方も会員中には一 ったので、御存知の方も少なくないと思うが、登山関係での友 去る五月十四日、逝去された永年会員河合良成氏について 河合氏の日本山岳会入会は明治四十二年(一九〇九)である

追

富士山、

浅間山登山、

また前橋、

長岡間の強行軍などを行

載されたのは、当時の編集者古沢肇氏の特別の配慮によるもの ねている。従って、劔岳登頂後に石崎氏あるいは吉田氏のすす もがするように立山に登り、ついで第四高等学校では田部隆次 談社から発行された河合氏の著『明治の一青年像』には、 初めて一般に示されたものであろう。なお昭和四十四年四月講 された記録を収載したものであり、河合氏自身の記録としては と思う。右は昭和三十八年(一九六三)四月一日NHKで放送 回顧談なるものが、本会々報二二七号(一九六三年六月)に掲 ページ以下) 通りである。その原資料は吉田孫四郎氏 に めで本会に入会されたものと思う。 で、劔岳に登頂した年であり、この一行中に河合氏が名をつら とほぼ同文の放送記録が二二二ページ以下に収められ ている 七六ページに劔登山の記述があり、また前記の会報二二七号 「越中劔岳」(『山岳』第五年第一号)であるが、河合氏自身の 個所が認められる。 この劔岳登頂は、本邦登山史上きわめて重要な記録であるこ 河合氏は富山県福光町で生れ、高岡中学在学中、越中男の誰 (田部重治氏の令兄)や林並木氏から登山について 教えら 石崎光瑶氏らが、柴崎測量官の登山 後から河合氏自身の加筆もあるらしく、この方が稍々詳し 山崎安治氏もその著『劔の窓』で記している (明治四十年) につい その よる

> あり)は河合氏と同郷の東大学生で、 柄であり、吉田氏、野村義重氏(但し河合氏の著書には植村と また劔岳登頂時の一行の一人石崎光瑶氏とは同郷の親しい 河合氏は当時東大二年生

だったと前掲書には書いてある。

明治四十二年というのは、その七月に日本山岳会の吉田孫四

だが、少年時代からもちつづけた山や花への愛着は終生に亘っ たようであり、昭和三十七年には日本を花いっぱいにとの願 で「財団法人日本花の会」を設立したり、公共施設に苗木の寄 この登山のあと、河合氏がどのくらい山に登られ たか は

付を続けたりした。 同氏の略歴は次の通りである。

助役、同十八年日本木造船建造部長兼運輸省船舶局長、 年農林次官、同二十一年貴族院議員に勅選された。同年第一次 を経て満州国顧問、内閣委員などを歴任し、昭和十七年東京市 年東大経済学部講師を兼ね、日華生命、福徳生命、 小松製作所社長、二十七年衆議院議員、三十九年小松製作所会 吉田内閣の厚生大臣、二十二年十月第百生命社長、 船、日産汽船各取締役、団体生命監査役、その後帝人事件災厄 騒動の後、大正八年退官、同年東京株式取引所常務理事、 る。明治四十四年東大法学部卆業、 明治十九年(一八八六)五月十日、富山県福光町で生ま 農商務省書記官となり、 同年十二月 東京湾汽

(219)

三十七年第一回訪ソ経済使節団長として日ソ親善の糸口をつく 長、三十六年藍綬褒賞、三十九年勲二等旭日重光章を受けた。

最近はシベリア森林開発に力を入れ、また四十一年十二月

経済交流を促進した。

昭和四十五年(一九七〇)五月十四日午前零時二十分、幽門とくと老衰のため新宿区市ヵ谷河田町の東京女子医大病院で狭さくと老衰のため新宿区市ヵ谷河田町の東京女子医大病院で狭さくと老衰のため新宿区市ヵ谷河田町の東京女子医大病院で続くような、盛大な告別式であったが、河合氏が青年時代に劔岳の早期登山者であったことを、果たして何人のひとが知って岳の早期登山者であったことを、果たして何人のひとが知っているであろうかという思いが、列に加わった筆者の脳裏に去来いるであろうかという思いが、列に加わった筆者の脳裏に去来した。

て敬意を表した次第である。

の一青年像』等多数がある。

(望月 達夫)

# 中田清兵衛氏(一八七六一一九七〇)

私が中田一族の縁につらなるとは勿論思いもよらぬときであっ茶の木屋だけが城の如く残っていた」と話しているのを聞いた。事で行くと、今しも富山から帰った客が「富山は全く焼野原だ。事で行くと、今しも富山から帰った客が「富山は全く焼野原だ。

尽力されたことに対し感謝の意を表するため、市議会全会一致

の偉大さについての思いは更にこのエピソードで深まり、改め取然火中に残り、あらゆる消防用具を整え「続け」の号令のも改然火中に残り、あらゆる消防用具を整え「続け」の号令のもと勇士数十名を従え消火にあたり、焼けただれんとする三十数と勇士数十名を従え消火にあたり、焼けただれんとする三十数と勇士数十名を従え消火にあたり、焼けただれんとする三十数と勇士を得た。それによるとこの時二十三歳であった清兵衛はく機会を得た。それによるとこの時二十三歳であった清兵衛はく機会を得た。それによるとこの時二十三歳で深まり、改めて大力に乗り、表別を開いた。最近その時火中にあった人から類焼をまぬがれた次第を閉た。最近その時火中にあった人から類焼をまぬがれた次第を閉た。

は翁が多年市の産業、教育、文化の興隆発展並びに治安確保に い呉羽の民芸館を富山市に寄贈されたこともあり、 統的に纒めあげられた。後日勇吉さんが父清兵衛翁の米寿を祝 と配慮を示された事もあった。その他戦災で失なわれた富山東 の同窓会長に推され、高齢(八十四歳頃)にも拘わらずその司 並々ならぬものがあった。また昭和二十六年七十五 歳 別院再建の際には、身をもって設計にあたられる等社会的貢献 た。更に学生が返済に持って来たお金を、その父の京都参詣に 立派な社会人となり訪ねて来るのを大変楽しみにし ておられ 会は堂々たるものであった。また学生修学の世話もよくされ、 れている。他方教育方面にも熱心で、富山大学附属小学校最初 き、北陸銀行初代頭取として一身を捧げられたことはよく知ら 『中田家開祖三百八十年記念』を編集印刷、中田家の歴史を系 清兵衛翁が地方銀行トップといわれた十二銀行頭取 湊富山市長 K 引 追

社会的に多忙な日々を過してきた清兵衛翁は、終戦後一息 尚当時勲四等瑞宝章を受けておられる。 の議決を経て、四十年十二月十八日富山市名誉市民に推挙せら

先の三名に野村、平田克治、清水利男、 イドに勇吉夫妻の一行で登山したが、この時はケーブル、登山 の六名で称名より八郎坂を越え劔御前を通り立山を縦走してい 十四年には若手密田章、平田克治、武男に清兵衛翁、野村、私 加え五箇山を経て再び乗鞍に赴き頂上をきわめている。また二 詣して富山へ帰るという大旅行であった。二年後の二十五年、 て秩父宮が宿泊せられた帝国ホテルへ泊る。五日目松本より木 りあげた岩魚が並び舌鼓をうつ。四日目河童橋まで戻り、 という壮挙に出られた。その最初は昭和二十三年八月五日の乗 いたところで、 崎湖に至り滄浪閣にて泊る。翌日青木湖畔を探索、善光寺に参 鞍行であった。清兵衛翁、 この時は若手三名が清兵衛翁の肩代りとして剱へ登ってい ついで平湯より徒歩にて安房峠を越え上高地清 水屋に 更に三十五年孫愛子を始め、 三日目は上高地の奥に進み横尾の小屋に着く。夕食には釣 翌日この年開通をみた登山バスに乗り不動岩まできわ 齢七十にしてかねてより念願の登山を敢行する 私 翁の孫武男の三名でまず平湯に 佳男、 明男、 重男、和男、民男氏を 順子、徹男をガ かつ 宿

> 迎え、 バス等登山路が整備された新立山で、私は一行を千寿ケ原にて 称名川のコッヘルの会にのぞんだ。

行なわれた。 逝去、六月六日富山県民会館にて厳粛かつ哀愁に満ちた市葬が とめて出向かれたが、ついに四十五年五月二十六日東京にて御 十七年四月より不自由なベッド生活が続き、 清兵衛翁は日本山岳会員たることを喜こんでおられたが、 富山、 軽井沢へつ

に叙せられる。 松緑院釈祐徳、 享年九十四歳。 当日総理大臣宣により従五位

#### Щ 歴

昭和二十三年 第一回乗鞍登行(七十二歲

昭和二十四年 立山縦走 (七十三歳)

昭和二十八年 昭和二十五年 丸池、菅沼(七十七歲 五箇山より第二回乗鞍登行(七十四歳)

昭和三十五年 立山頂上(八十四歲) 昭和三十年

木曽、三浦ダム、天竜下り、

佐久間ダム(八十歳)

昭和三十五年十一月 日本山岳会入会(会員番号五二〇四)

(中田栄太郎)

### 山に忘れたパイプ

五〇〇円 藤島敏男著 〇年五月 茗渓堂発行 ジ 写真三二ページ 別に限定特製本あり 菊判本文五六七ペ 定価二

る。

その藤島君がそのまま本になったような本だ。そうだとすれ 者からすれば、過去何十年かの日本の登山の変遷を知るために 玩味せられよと、一言で用は足りるのである。しかし、如何に ば、これまた改めて紹介の必要はない。是非一本を購い、熟読 問題はない。 いるわけではない。若干の説明は必要となる。ことに一般の読 日本山岳会の会員といえども、三千の会員が全て著者を知って いて今さら紹介の必要はない。この『山に忘れたパイプ』は、 読に値する本だ。山の本が好きだという人ならば、もちろん かつはまた日本の山河半世紀の変貌振りを知るためにも、 が藤島敏男名誉会員 ---昨年十二月から永年会員 トにつ

年代からすれば前後半世紀にわたる文章がそこに盛りこまれて 何はともあれ、 その永年会員が生まれて初めて出す本だから

> 憶』七篇、『訳章』五篇、『書評』二四篇、『山のたより』二八 おのずから読みごたえもある、ということにならざるを得 理的の重量だけではない。内容にしても、東西古今にわたれば ている。挿入された写真は三二葉。どしっと手にこたえる。 いる。一朝一夕にして出来上ったものではない。編集は大変だ いると思えば、それも当然のことだ。 い。まさに当代類い少ない大著ではある。だが五十年かかって ったろうと思うが、内容は『随想』三八篇、『紀行』七篇、『追 それに著者の詳細な登山歴すなわち『登山譜』が加えられ

うした本にはならなかったと思う。その意味で、これだけのも に、 なろうと考えたこともないに相違ない。書けば書き終った瞬間 難いことだ。書いた当人からすれば、まさか今日、こんな本に て来るのは一通りのことではなかったろうと思うが、 するのと違い、著者が目の前にいて、その著者が、 した深田、小林、 のを一冊の本に纒める難事業を進んで引きうけて、著者を動か を考えていたに相違ない。だから、黙っていればいつまでもこ 島君がこれだけのものを折りにふれて書いてくれたことは、 らといってどうだというわけのものでもない。と考えれば、 はそれのお蔭でこの本を自分の書架に加えることができたわけ かけては人一倍やかましいときているのだから、ここまで持っ 山登りからいえば、あくまでも山登りそのものが 肩の荷でもおろしたようにさばさばとして、次の山のこと 帰ってきて何を書こうとどうでもいいことだ。書かない 望月三勇士の功績は絶大である。 本のことに 中心で あ か

代の写真も美しい。ぼくは中でも「ツムットの村」と「ロータ

ヨーロッパ時代の紀行や通信も懐しいものばかりだ。

この時

がある。

らいよいよ難しいのである。だからここには、あっさりと読後 感の幾つかを記すに止める。 とはできない。長篇も短篇も、一つ一つが独立しているのだか ところで五六四ページという大冊の内容を簡単に紹介するこ だ。感謝にたえない。

ろはまた読みかえせばよい。 しないで読む。それでよいのだと思う。そして気に入ったとこ むのがよい。とにかく座右に一本を備えて、あとさきなど気に ない。読む方も、折にふれて気の向くままにどこでも開けて読 大冊とはいっても、憲法の講義でもなければ、大河小説でも

んなことが頭に浮ぶ。)

たような思いだ。 味で貴重な文章だ。ぼくなどは一足飛びに大正時代に逆戻りし 予期して山へ参り申侯」といった侯文、まことにいろいろな意 いった調子である。『山のたより』も古いところは「秋晴れを わり、偃松の濃烈な香を放ち、無数の高根の花の妍を競う」と る湯沢、これが五十年前の姿なのである。「純白な恒雪の横た 大廻りして、湯沢の駅に入る。駅はもちろん停車場ではない 崎へと海岸を走っていくのである。そして午過ぎにようやく、 前の晩に上野で乗った汽車は柿崎をすぎて、日 本 海 沿いに柏 何と思うだろうというこどだ。例えば上越境の山に行くのに、 「うまや」・宿場である。それもいまや廃駅とならんとしてい ぼくとして一番興味のあるのは、この本を近頃の人が読んで

エの峠」を推す。

山深谷』を出す計画をしたらどんなものだろう。余談ながらそ んとも嬉しい限りだった。(それにつけても、そろそろまた『高 スやシャール・ゴーからの訳章など、ここで再び会えたのも何 旅」や『高山深谷』に載せられた短章の幾つか、そしてアミチ かつて愛誦し、深く心に残っていた文章、例えば 「五月の山

登山の技術を教えてくれるわけでもない。 の皆さんが行くような華々しいところではない。かといって、 だ。案内書としては古かったり、そもそも舞台そのものが今日 と藤島君は小泉さんの言葉を引用しているが、さし ずめ この 『山に忘れたパイプ』なども「読まないでもよい書物」の一つ 「読まないでもよい書物を読むときほどたのしいことはない」 だからこそ読む値打が大いにある。また大いに楽しい 本 だ

と、実はぼくはいいたいのである。 もっとも中味が全く昔話ばかりではない。 詠嘆調、 П 顧

筆になるものだ。それだけでも読む者をして奮起せしめるも 最近のニュージーランド紀行のような新しいものもある。とに の本だと誤解されては困るからひとこと加えるが、 かく七十も半ばに及んでなお今日、毎月山に登っている人間 年代的にも 趣味

松方

### 残照の山

九八〇円 九年十月 日高信六郎著 挿画 九ページ 一九六 二見書房発行 定価 別に限定特製本あり A5判三五〇ペ

けで本会(当時の山岳会)に入会、北九州の山歩きを 皮 切 り 学二年生の折に高頭さんの『日本山嶽志』に接したのがきっか も喜寿を迎えてなお続く山旅へと、その回想は尽きるところを に入って海外勤務の多い頃の欧州の山への近づき、さらに戦後 に、次第に中部山岳へ踏み入る学生時代の山登りから、外務省 知らぬように見える。 2の山旅の想い出が収められている。一九○七年、十四歳で中 この本には、本会名誉会員、日高さんの六十余年という長い

にまたがる著者の回想も、かなりの重複を見せつつ、いろいろ 語る文章も少なくない。また、それら古い時代と新しい時代と ど既に半世紀以前に執筆されたものがあるし、近年の山歩きを として紀行、第二部が考証、 いものでは、一九一七年に『山岳』第十一年第三号に掲載の イ中心となって、全部で四十九篇の文章が収録されてい 「武尊山」とか、 編集は安川茂雄氏にゆだねられて、その構成は、第一部が主 同第十四年第一号に寄せた「白砂登山記」な 評伝、研究、 第三部が短いエッセ る。 古

> しているともいえる。 では、アット・ランダムにページを開いて拾い読みするのに適 の文章の間には意図された脈絡というものは存しない。その点 な形で物語られている。その折々に書かれたものなので、

しかし、著者の長い山との交わりを想い、

本会の創期会員

心残りを感じさせる。 欲深い読者の気持は、この本では満たされない点、少なからず ては、当然山歩きを中心とした日高さんの「自伝」として扱 ち、とくに木暮さんなどへの親しい近づきを知れば、読者とし い、そういう気持で読みたくなる。ところが、そういったやや そういう読者には、この本の巻末に付されている十四ページ

ができると思う。 文章の間の脈絡がついて、かなり自伝的な色合いを感じること 者の山歴を頭の中に入れた上で、改めてページをひもとくと、 年の交わりを物語ってくれる資料である。この年譜を読んで著 これはファクトの列記だが、なによりも端的に著者と山との永 に及ぶ「略年譜」をまず最初に見られるように私は勧めたい。

手紙の形をとった文章は、日高さんらしい表現で、 り、印象に深く残る。また「山から帰っての便り」など友への わたしのなかに在るから、といいたくなる」と述べているあた て「わたしは今、じぶんの山登りを回顧反省してみると、山が 著者の風格をしのぶ言葉を見出せないわけではない。 「山は終生の友」のなかで、「なぜ山に登るか」の問いに答え もっとも、一つ一つの文章を切離して読んでも、そのなかに 私の好

本書の装幀は佐藤久一朗氏が担当、

挿画には川喜田壮太郎氏

ケッチしたものばかりだから、 って岩角を攀じ、スキーを駆使し、

見る者に山旅の実感が伝わって 天幕に泊まりなどして、 ところである。

50 参考にして書き上げられたものだけに「ギド・レイについて」 であればこそ、自信をもって書くことができたのだと私 に北イタリアの山地にも親しみ、その国語にも堪能な日高さん い総合的な一文だといってよい。イタリアの土地を知り、とく に寄せられたものだが、ギド・レイに関する、わが国では珍し よる追悼文とか、いくつかのレイに関する権威ある評伝とかも かけてイタリアで刊行されたギド・レイ全集にも目を 通した イについての長文の評伝は、 紀行や回想の文章に加えて、この本に収録されているギド・ レイが晩年の山行を共にした若い友ウゴ・デ・アミチスに レイの主な著作を原書で読み、とくに一九五三~五四年に かつて『山岳』第四六・四七年 は思

いきさつを伝えていて、著者の並々ならぬ尽力のほどもうかが 究の余話として、日伊双方の山岳会を結びつける絆の強まった イ旧蔵の日本名山図会」と題する一文は、著者のギド・レイ研 この評伝のあと、著者が本会の会報に寄せられた「ギド・レ は高く評価されるべきだと思う。

とを見逃すべきではない。 に努められた。その一面も本書のあちこちににじみ出ているこ 観光事業審議会の委員にも任ぜられて、自然保護のため献身的 年から六二年までつとめられたが、同時に、自然公園審議会や 今さら付け加えるまでもなく、著者は本会の会長を一九五八

> 九枚が色刷りで特に貼付されており、また装幀は着茣蓙に焼印 云えば、普通版の簡潔な装いの方を採りたい。 のスケッチが提供され、三百部限定本の方にはスケッチのうち 感じといった凝った趣好のものだが、 私の個人的な好みから

0

島田

#### H 本 0 Ш 旅

一九七○年四月 足立源一郎著 A 版あり 定価三六〇〇円 茗渓堂発行 百部限定特製

として、 愉しい。著者の永年に亘る多くの、そして広い山岳遍歴の結晶 ジを追うごとに、各地の春夏秋冬の山容が展開して、まことに り、北は利尻岳から南は屋久島の山々まで網羅してあり、ペー 四五葉を精選して、 本書は、 讃辞を贈りたい。 足立画伯のたくさんのスケッチの中から、 一冊に纒めたものである。書名の示す通 日 本の Ш

(225)

ここには机上の作品は一つもない。著者みずから重い荷を背負

著者はただ山を眺めて描く人ではなくて、登山画家である。

くるのは、当然と言えよう。

その意味でも、スケッチ帖を再現したことは、本書の成功で、足立さんがいつもポケットにしのばせている画仙紙のスケッチ帖の折り目に生じたかすれが、そのまま版になっているのに親しみが持てる。そして、著者がリュックサックを置いてスに親しみが持てる。そして、著者がリュックサックを置いてスケッチしている姿が想像され、傍から覗きこんでいるような気になる。

待するものである。

川崎

部)、おきなぐさ(関西中国)、英彦山の古祠(九州)がそれで飛驒朴葉にぎり(日本アルプス)、ふでりんどうとわらび(中飛驒朴葉にぎり(日本アルプス)、ふでりんどうとわらび(中に、例えば山を眺め続けた眼を、ふと足もとに転じたときていて、例えば山を眺め続けた眼を、ふと足もとに転じたときていて、例えば山を眺め続けた眼を、ふと足もとに転じたときていて、例えば山を眺め続けた眼を、ふと足もとに転じたときなが、その扉ページに草花や各地方がセクションになっているが、その扉ページに草花や

のページごとに添えられた経験や感想と共に、年代その折々を「序にかえて」、「随想・山旅片々」と題した著者の二文は、画

者の将来を物語っていて面白い。に連れられて高野詣でをした印象が強く残っているそうで、著彷仏とさせて、風格ある読み物である。幼時、旅行好きの両親

き届いており、敬服させられる。の配列や装幀は無論のこと、活字の形や大きさなどに神経が行の配列や装幀は無論のこと、活字の形や大きさなどに神経が行の配列や装幀は、ベテランの山下一夫氏が当たられたので、画

ッチが温存されてあるからと思われる。その上梓をも併せて期ランス、スイスをはじめ西欧諸国、支那大陸などの傑れたスケいだ、と仰言る。「日本の山旅」を一冊に纒められたのは、フリコプターに便乗して積雪季の槍や穂高に画架が立てられて幸著者は今年齢八十を迎えられてますますお元気で、近頃はへ

### 山岳浄土

年十二月発行(私家版)非売品
A5判一二四ページ 一九六九

中村清太郎氏はすでによく知られているように日本登山史に中村家の私家版として出されたのがこの本のいきさつである。郎氏を語るにふさわしい部分を集めて安川茂雄氏が編さんし、中村清太郎氏没後、氏が生前書かれた文章のうち、中村清太

ど愛しつづけた人である。しかし、それだけでなく、氏の文章

たぎらせてつき進み、死ぬまで山歩きを求めてやまなかったほ 山旅を楽しみ、自然の破壊されてゆく事を嘆き、そして情熱を 表現には色彩感が豊かに表われていることである。よき時代の

内容をみて気のつくことは、さすがに画家で、山々の自然の

わしているが、当時の探検登山期においてピッケル、ルックザ もいえる「白峯山脈の南半」(『山岳』第八年第一号所収)を著 歩き、日本山岳会入会後は明治四二年に当時としては画期的と 代は友人と「原人講」なる山旅グループを始め、 逸することのできぬ存在である。氏は高等小学校のとき講中の ックなどをもっとも積極的に使用したパイオニアーの一人でも 一員として富士山に登って山への洗礼を受け、以後府立三中時 各地 の山々を

章十九篇より成っているが、最後は令息浩太郎氏の「回想の 父」と安川氏の後記になっている。 本書はこの中村氏が昭和の初期から晩年にかけて書かれた文 ある。

いる。 をもとめて七九年の生涯を山に捧げた。それはこの書物の書名 霊で山を愛した。山は壮大で厳粛な大自然の聖所であり、 するどさであり、氏の山への情熱のはげしさに私はぐいぐいと ともなった核心の「山岳浄土」の章にもっともよくあらわれて に登山をするには敬虔の情をもって襟を正し、登山に宗教と美 ひきこまれた。中村氏にとっては登山は信仰であった。全身全 文章を読んでゆく内にすぐに気づいた事は中村氏の感受性の

> から古来の宗教的な精神に立脚し、その上で近代アルピニズム 山語りの息吹きがわれわれの胸に伝わってくる。 精神と相まみえた、この時代が生んだ一人のすぐれた登山家

0 0

りながら年譜も登山歴も記していないからであり、注文を示せ に著者の肉筆の水彩画のスケッチが一葉づつ添えられている。 するにふさわしい書物を編さんしてくれる事を望みたい。 解者の一人である安川氏に、できうればもう一度中村氏を解明 てもよいのではないかという気がする。著者のもっともよき理 ばもっとあらゆる角度から中村氏を語るにふさわしい書物が出 何かものたらない一面が残るのである。それは著者の遺著であ 出版されたのであろうが、氏をよく知る人々にとっても、まだ なお、本書は限定私家版として百五十部発行されたが、各冊 本書は故人が生前交友のあった一部の人々にだけ配布すべく

幻想のヒマラヤ

U 1 ツ -・シャール登山の記

六八〇円 写真八ページ(文中多数)一九 B6判二五〇ペー 冬樹社発行 定価

ゴジュンバカンの帰途、たまたま早大隊とカトマンズのホテ

ドクターから経過をきいてその症状の重さに驚き、 ルで同宿した私は、憔悴しきった著者をこの目でみ、また宮本 帰国後、治療に専念して、複視などの後遺症に悩みながらも 心を痛め

社会に復帰した著者が、自分の体験をもとに本を出すというこ ラヤ」である。 とを聞き、その発行を心待ちにしていたのがこの「幻想のヒマ

雪崩に足をすくわれ急峻なルンゼに滑落する。 き第三章「遭難・必死の救出作業」にいたる。四月一八日、 していく第二章を経て、この本のクライマックスともいうべ 川隊長と共に第四キャンプからルート工作に出た成川隊員が、 ながら、きびしいローツェ・シャールの西南稜にテントを伸ば 第四キャンプに 吉

高山病とインフルエンザに次々と隊員が罹患する苦境を克服し 織り込みながら記述している第一章「高所への旅」に始まり、

楽しいヒマラヤのキャラバンを著者自身が画いたスケッチを

成川隊員を第二キャンプに収容した翌日、著者は第二キャンプ す。しかも、全く休むことなく、不眠不休ともいうべき凄絶な 病しながら、食糧もマッチも羽毛服もシュラーフもないまま 救出作業をその後一週間以上にわたって繰りひろげ、ようやく に、七〇〇〇メートルの高所の危険なルンゼの中で一晩をすご

いた著者は、テントを肩に現場に下り、成川隊員を確保し、

第四章は、倒れた著者に代って成川隊員が著者の病状とその

で意識を失って倒れる。

後の登山活動を記述している。

プからBCへ、カトマンズへと帰ってきた著者が、見続けて た夢ともつかぬ幻想を、克明に記述している。そして、 第五章は、約一カ月の間、意識を失ったままで、

に挑む危険と難しさに言及するが、結局は問題の解明がなされ を加え、また過去のヒマラヤにおける遭難の数々に触れ、 った異常な事態を解明すべく、当時の行動を省み、医学的考察 意識を取り戻した著者は一カ月間の空白に当惑する 第六章は「高所の生活と限界」と題し、著者が自分自身に起

素人が書いたものとしては誤りもほとんどない。 をさらけだして、異常な体験の解明にとりくんだ情熱には頭が 下がる思いがする。医学的な記述も多いが、よく調べてあって いつも穏かな微笑を絶やさない温厚な著者が、全てのデータ ない不満のまま結びとしている。

る。 ったことに、医者のはしくれとして申し訳ない気持で一杯にな 著者の努力と願いにもかかわらず、満足な解明が得られなか

しかし、現実には高度順化そのものすらまだ十分に解明され

約を逸脱した救出作業の連続、それに異常な体験に基づく精神 的要因と、考えられる発病原因は甚だ多く、 てはいない現状であり、あれだけの高所環境で、全く医学的制 簡単な解決を求め

ることは無理である しかし、著者は不満であってもこの本は「人間に与える高所

の恐しさ」を十分に読者に教えてくれている。これからヒマラ

上はっきり感じさせる本を私は知らない。 〔長尾 悌夫〕(係の、先輩後輩でしっかりつながれた大学山岳部の良さをこれ以向け直した執念、先輩をおもい、後輩を気づかう暖い 人間 関隊員達、退いて当然とも思える苦境の中で、行動の矢印を上にまた、驚嘆に値する救出作業を当然のこととしてやり遂げたまた、驚嘆に値する救出作業を当然のこととしてやり遂げた

### ブータン素描

五○円 芙蓉書房発行 定価六年十月 芙蓉書房発行 定価六年十月 芙蓉書房発行 定価六年の フロールカルルー

ラリの麓亜東関よりラッサにはいったとスケッチをそえて述べたい国になってしまったようである。探検などという言葉はもはい国になってしまったようである。探検などという言葉はもはい国になってしまったようである。探検などという言葉はもはい国になってしまったようである。探検などという言葉はもはい国になってしまったようである。探検などという言葉はもはいる最初の記録とされている(明治三十四年十一月、河口慧による最初の記録とされている(明治三十四年十一月、河口慧による最初の記録とされている(明治三十四年十一月、河口慧はもはい国になって、異邦人の入国にはいったとスケッチをそえて述べかって禁断の国といわれていたネパールはいま、全く人くさかって禁断の国といわれていたネパールはいま、全く人くさかって禁断の国といわれていたネパールはいま、全く人くさかって

査隊(原寛隊長)の二隊だけであった。 をのは一九五八年の中尾佐助氏、一九六七年の東京大学植物調 どの短期旅行で、そのうち比較的長期間ブータン国内に滞在し 人は約三十人ほどいるが、それも大部分は一週間から十日間ほ がの短期旅行で、そのうち比較的長期間ブータン入りの最初の記 はないかと思う)。第二次大戦後 ブータン入りの最初の記

著者はブータンにとりつかれた男の一人といってよい。ブータン入国の場合はパスポートだけでなく正式なインナー・ライタン入国の場合はパスポートだけでなく正式なインナー・ライタン入国の場合はパスポートだけでなく正式なインナー・ライタン入国の場合はパスポートだけでなく正式なインナー・ライタン入国の計画を必要とする。著者は資金集めに走りまわる一次、入国許可の取得にも日本で孤軍奮闘をしていた。当時JA方、入国許可の取得にも日本で孤軍奮闘をしていた。当時JA方、入国許可の取得にも日本で孤軍奮闘をしていた。当時JA方、入国許可の取得にも日本で孤軍奮闘をしてブータンに潜在中親友で、コロンボ・プラン技術指導者としてブータンに潜在中親友で、コロンボ・プラン技術指導者としてブータンに高いた。当時JA方八年目のことであった。

から始まり「パロの洪水」、「謎のチョモラリ」、「首都ティンプめあげた。題して『ブータン素描』という。「ブータンへの道」うまでもない。帰国するとすぐその見聞記を一冊の書物にまとしかしこの滞在中著者はあらゆるものに目を光らせたことはい在は著者にとってはまったく短かいものであったに違いない。

一九六八年九月から十一月までの足かけ三カ月のブー

ータン滞

は一つの山の名前ではなく、下から見たところでは登攀の対象が三章「謎のチョモラリ」で、チョモラリ(七三一四メートル)は一九三七年イギリスのチャップマンによって登られたことになっているが、著者の偵察行によるとチョモラリというのとになっているが、著者の偵察行によるとチョモラリというれる秘境ブーーの人々」の四章にわけ世界のパラダイスといわれる秘境ブーーの人々」の四章にわけ世界のパラダイスといわれる秘境ブー

再度プータン入りをした。本書の続篇がまたれる。さわしい領域といえる。著者はことし(昭和四十五年)の夏もまさにブータン・ヒマラヤはエクスプロレーションの名にふ

穂頂上に着いた。

呼ばれていたという。

になりそうな頂上は五つほどあり、それがすべてチョモラリと

〔山崎 安治〕

### 西穂高落雷事故調查報告

に打たれ十一名の生徒が死亡し、十三名が重軽傷を負うという二学年、学年登山前班四十六名の一行が北ア西穂高岳独標で雷昭和四十二年八月一日、午後一時四十分ごろ、松本深志高校

それが急速に発達している雷雲と気付かず、十二時二十五分西程で、七月三十一日朝五名の職員に引卆されて上高 地入 りを程で、七月三十一日朝五名の職員に引卆されて上高 地入 りを程で、七月三十一日朝五名の職員に引卆されて上高 地入 りを し、明神池方面を散策した。八月一日の朝は快晴で、一行は七し、明神池方面を散策した。八月一日の朝は快晴で、一行は七し、明神池方面を散策した。八月一日の朝は快晴で、一行は七し、明神池方面を散策した。八月一日の朝は快晴で、一行は七十一時才でに二泊して西穂高へ向かった。このころからガスに覆われたが、十二時二十五分西

下山にかかった十二時四十五分ごろから大粒の雨が断続的に降り出し、そのうち小豆大の雹と変わり、先頭にいた引卆リー降り出し、そのうち小豆大の雹と変わり、先頭にいた引卆リーダーの鈴木教諭は落雷の危険を感じたが、ちょうど独標にかかっていたのでやせ尾根のため退避の場所がなく、一刻も早く独標を越そうと下降を続けていたとき落雷があった。このとき独標の南斜面に十名、独標上に八名、北斜面に二十三名、鞍部から次の斜面にかけて五名がひたすら下降を急いでおり、落雷のら次の斜面にかけて五名がひたすら下降を急いでおり、落雷のち次の斜面にかけて五名がひたする。

一日追悼文集「独標に祈る」を発行、その後さらに京大防災研の原因究明に乗り出し、その中間報告として昭和四十三年八月設け山岸教諭以下十二名の委員を決めこの事故の状況調査とそする「西穂高遭難特別委員会」を組織し、この中に調査部門をする「西穂高遭難特別委員会」を組織し、この中に調査部門を決している。

中島教授、畠山前気象庁長官ら専門家に調査概要の分析検討を 依頼し、本書がまとめられた。

計、靴、バンド、カメラなどの被害状況の写真が生々しく、雷 とした。雷はまことに恐ろしいし、またそれが集団登山であっ く止んだが、後でこのときあの事故があったことを知り、暗然 り、まことに貴重な文献となっている。ちょうどこの遭難のあ 録と行動上の問題点」、「寄稿篇」、「資料篇」の四章に分け、 ただけに、この事故について多くの問題点を提出しており、時 覆われ、そのうち劔岳にもポツリ、ポツリと降り始め、間もな った日、筆者も剱岳に登っており、はるか穂高方面が厚い雲に わしくこの世界の遭難史上でも例を見ないケースを報告してお 主な内容は「学年登山の計画準備とその問題点」、「遭難の < 記

## "That Untravelled World"

の猛威を示している。

山崎

安治

-An Autobiography by Eric Shipton-

Hodder and Stoughton, London,

ンソロジーとなっており、若年の頃のアフリカの山々から、 シプトンの自叙伝である本書は、主に彼の登山探検紀行のア 1969, 45 S. 年

> ところであろう。 半生の山々」吉沢一郎訳)という、彼の前半の山行を集約して と、一つ一つの紀行がそれぞれにユニークであることなど、余 とであり、それらとは内容が重複していることは止むを得ない アの山々に関する彼の著書も既に発表されているのは周知のこ 書き上げた著書があり、中には本書と部分的に同一の記述があ 人の追随を許さない素晴らしさがある。こういう彼の山行のア に絢爛たる趣きがある。その活動の場の多岐にわたっているこ までの、数多くの探検行が次々と述べられているところは、 老いても尚盛んにパタゴニア、フェゴ島の未踏地域を踏破する ったりもする。また、別にカラコルムや中央アジア、パタゴニ ンソロジーは、既に "Upon That Mountain" (邦訳「わが

るかも知れない。 に読んだ読者にとっては、本書は逆に中途半端な感想を持たせ 征記を読まなければならないし、また一方、それらの著作を既 させ、じっくりと彼の足跡をたどろうとするにはそれぞれの遠 圧縮して書き込まれているために、いささか物足りなさを感じ しかしながら、本書ではその多岐にわたる活躍があまりにも

いがたいのは、やや不満を感じるところである。 てはいるものの、それほどの強い個性が表現されているとは言 そういうものも盛り込もうとしたのだとシプトン自身が説明し 検家としての人生の私生活的な告白である。この点について、 かしい業績の裏にある彼自身の人間的な葛藤とか、登山家、

だから、むしろ彼の自叙伝に期待したかったものは、

その輝

ない生活の有様、ガラパゴスやアラスカでの最近の活躍、最近 こと、中国の領事だったころの暮しなど、他には発表されてい もちろん本書には、幼年時代の出来事とか失恋や結婚生活

ないのであり、人間・シプトンとして身近かな存在になって欲 その辺の事情が語られている。そうした私事をあからさまにし い。また、一つの山行を終えてから次の山行を始める間に、 検家・シプトンがただはるか遠い英国の紳士であってはつまら のかも知れないが、われわれの尊敬して止まない偉大な登山探 ない遠慮深いやり方は、つまり彼の人となりの為せるところな 烈な個性がしのばれて面白いが、いつもあまりにもあっさりと ろいろ思案したあげく、結局の所、また山へ出かけることにな の登山界への批判などが面白く述べられていないわけで はな ってしまうところなど、山々の世界に惹かれて止まない彼の強 V

とか山登りのこととなると、非常に個性的なところが を極度にきらう性質だったらしい。しかしそれがいったん遠征 が出来る。子供のころから劣等感を持っていて、人前に出るの は面白く、またそれがシプトンの最もシプトンらしいところで 臆病ともいえる程おとなしい性格であるのはうかがい知ること 一見頑固な位自分の主義主張を通そうとするようになるの かし本書を通じて、シプトンが非常にひかえ目な、むしろ 出て来

しいと思うのである。

大遠征隊が気に入らないからといってあっさり棒に振ってしま 九五三年のエベレスト遠征の隊長に推されながら、 軍隊式 はないかと感動し、共感を覚えるのである

い、ハントに当然彼に帰すべき名誉をさらわれてしまったとこ

ろなどはもっとも象徴的である。

からといって主張しているが、結果的に見るとそれがもっとも ある。それをシプトンは頂上へ登るための効果的な手段である 彼が昔から小規模遠征隊の遵奉者であることは周

る。それと共に、彼は山を見たら行ってみたくなる登山家であ う彼の欲望をもっとも満足させるやり方であったからと思われ 彼の好む形であり、未知の世界に惹かれ自然に親しみたいとい

を歩き回っているにもかかわらず、高峰へ登ったというのはカ 方である。一寸他人にはまねることの出来ない程広く、世界中 上をねらうというより、人の行っていない所へ行ってみたがる りながら、登山家というよりむしろ探検家であって、執拗に頂 メットとムズターグ・アータ位で非常に少ないのは特徴的であ

をした後で、 せず他人の行かない氷河などにばかり行きたがってしまったの 感じ、所詮自分は能力がなかったから、難しい山には登ろうと 岩登りの名人であるトム・ボーディロンと話し合って劣等感を る。シプトンは本書の中で、エベレスト南面の踏査行のとき、 だと告白しているが、とにかくあれだけの多方面にわたる活躍 尚もこれだけ謙虚であるというのは、シプトンの

やり方をあくまで自分のものとして失わず、いつまでも真面目 動に一つの傾向が著しいのを反省はしながらも、尚自分だけの に取り組んで、 面目躍如たるところである。 パタゴニアやガラパゴスに出かけて行く(今も しかしながら、こうして自分の活

また行こうとしているらしい)その真摯な態度は正に偉大であ

受ける。

うべきであろうか。その他のどのような理屈もすべて余計なも 記録そのものに如実に現われ、彼自身を物語っているのだと言 れた能力に敬服するのである。彼の登山家、探検家としての秀 したというできかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀 したというべきかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀 したというべきかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀 したというできかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀 したというできかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀 したというできかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀 したというできかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀 したというできかも知れぬが)彼の登山家、探検家としての秀

ぎららば、を交り戈責なごはないだいで、内省りな生各りたり第一章幼少時代。Early Influence というのがこの章の表題わらせてもらおう。

のであるのかも知れない。

さて、以下に本書の内容を一と通り説明して本書の紹介を終

第二章 Mountains ノルウェイやアルプスで彼は山の洗礼をにパッとしなかったらしいが、子供の頃から自然に親しむことにパッとしなかったらしいが、子供の頃から自然に親しむことにパッとしなかったらしいが、子供の頃から自然に親しむことにのいるが、学校の成績などはさんざんで、内省的な性格のためであるが、学校の成績などはさんざんで、内省的な性格のためであるが、学校の成績などはさんざんで、内省的な性格のためであるが、学校の成績などはさんざんで、内省的な性格のためであるが、学校の人間であるが、

第三章 東アフリカ East Africa ウィン・ハリスやティル第三章 東アフリカ East Africa ウィン・ハリスやティル

50

を誰よりも広く知ることとなったのは、本懐とするところだろ

第四章 Himalayan Hey-day 一九三一年カメット遠征に参

かなりくわしく述べている。三九年のヒスパー、ビアフォ行にクスガム遠征はシプトンにとっても快心の遠征だったらしく、第五章 カラコラム (The Karakoram)。一九三七年のシヤ三三、三五、三六年のエベレスト遠征についてもふれている。 別したあと、三四年にナンダ・デビー内院の踏査を行なう。又加したあと、三四年にナンダ・デビー内院の踏査を行なう。又

の二回にわたって、シプトンはカシュガルの総領事を つと め第六章 カシュガル Kashgar 一九四〇一四二、四六一四八ついては簡単にしか書かれていない。

南省の首都・昆明の総領事をつとめる。この所は山にはまったそうに描写している。この時ティルマンと行なったムズターグそうに描写している。この時ティルマンと行なったムズターグる。カシュガルの自然環境にめぐまれた生活をシプトンは楽し

トンはエベレストのネパール側も歩きまくり、エベレスト周辺び五二のクーンブ氷河、チョー・オユーの踏査行。これでシプび五二のクーンブ氷河、チョー・オユーの踏査行。これでシプび五二のクーンブ氷河、チョー・オユーの踏査行。これでシプリカンはエベレスト南面 Everest from Nepal 一九五一及ところなど変化に満ちた事件が面白く書かれている。

登頂について述べている。ア・南部アイス・キャップの縦断、フェゴ島・ダーウィン峰のけての、前後三回のパタゴニア遠征。特に第三回目のパタゴニ第九章・パタゴニアとフェゴ島。一九五八年から六二年にか

(233)

第十章 ガラパゴス諸島他 Boundaries, Tortoises and 第十章 ガラパゴス諸島他 Boundaries, Tortoises and Bears 一九六六年、シプトンはチリー、アルゼンチン間の国ではガラパゴスを訪れ、火山の探検や、亀の生態の観察などをたてメリカ山岳会のボブ・ベイツに招かれて翌年アラスカを訪れたシプトンは、マウント・ラッセルを試登したり、パタゴニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、奥地の氷河のキニア遠征の時の仲間マラングニックを訪ねて、東地の氷河のキャンプへ旅行したりした。

第十一章 The Springs of Enchantment と題する、この最終章では、彼の登山の動機が純粋に自然に対する憧憬から出たあり、危険が内在するからといって冒険を否定出来ない、といあり、危険が内在するからといって冒険を否定出来ない、といあり、危険が内在するからといって冒険を否定出来ない、という主張などを述べている。この章は主にアルパイン・クラブのう主張などを述べている。この章は主にアルパイン・クラブのう主張などを述べている。この章は主にアルパイン・クラブのう主張などを述べている。

倉知 敬

# 日本山岳研究

二二○○円 ポニージ 写真十二ページ 写真十二ページ 一九六九 写真十二ページ 一九六九

本書は今西錦司氏が "五〇〇山登頂記念』と銘うって、これ本書は今西錦司氏が "五〇〇山登頂記念』と銘うって、これ本書は今西錦司氏が "五〇〇山登頂記念』と銘の一篇は「四十年の回顧」と題するまとめだが、各篇の意図や考え方を述べると同時に、四十年たった今日の時点における新たな位置づけを行ない、そこから改めて鋭い批判を展おける新たな位置づけを行ない、そこから改めて鋭い批判を展おける新たな位置づけを行ない、そこから改めて鋭い批判を展別している点でユニークな位置を占めている。 十篇のうち二篇が書きおろし、八篇が過去に発表されたものである (掲載誌一覧の部分で「垂直分布帯の分ち方について」を第三十二年としているが、これは第三十一年の誤まり)。 その第三十二年としているが、これは第三十一年の誤まり)。 その第三十二年としているが、これは第三十一年の誤まり)。 その意とを考えると、たしかに時代も変わってきたのだろうが、最

感ぜざるをえない。著者は自序のなかで、あえて本書を「日本しかも単調で小さな枠にはまったものになってきつつあるのを近の『山岳』誌上にみられる山の世界が何となくうわついて、

の警鐘と読みとることもできる。
の警鐘と読みとることもできる。
の警鐘と読みとることもできる。

山岳研究」という形で一冊の本にした理由として「現在の社会

者にもはっきりとわからすことができるであろうか」と述べて とかいうことを、 にいるのだとか、 たって「ひらの登山者、 易々と読めるわけではないが、例えば垂直分布帯を論ずるにあ れぞれ著者の全力投球をしたすぐれた論文ばかりだから、 が、著者の一貫した姿勢は、山とはわれわれによってどのよう がって素人のわれわれには何となくとっつきにくい感じもする ものであり、それらに関する論文が並列的に並んでいる。 年雪、垂直分布帯、ヒラタカゲロウ、イワナとヤナメといった とができる。対象としてとりあげられているものは、雪崩、 もかかわらず、本書はまぎれもなく「日本山岳研究」というこ に登っているとき、どのようにしたら、 ろにあり、けっして単なるアカデミックな論文集ではない。 なものとして認められるべきか。というテーマを追求するとこ きって日本の山の概説や日本の山岳の特色を総体的に論じたも のを想像しがちだが、本書はそのような書物ではない。 「日本山岳研究」という題をみると、 自分自身はもとより、 あるいはもう亜高山地帯にはいっているのだ あるいは一介の山岳研究者として、 またそれを、 いま自分はまだ山地帯 われわれはすぐに正面 一般登山 それに そう した Щ 万

体系があるとすれば、当然根幹におかなければならない点だろの問題に帰するものとして逃げているけれど、もし登山技術のおいては、そのような問題は個々の登山者の資質あるいは経験がいては、そのような問題は個々の登山者の資質あるいは経験の問題に帰するものとして逃げているけれど、もし登山技術書にあれては、そのような問題は個々の登山者の資質あるいは経験の問題に帰するものとして逃げているけれど、もし登山技術書にあれては、そのような問題は個々の登山者の資質あるいにに入れていて考えさせしかし、どれをとっても著者の鋭い目が光っていて考えさせしかし、どれをとっても著者の鋭い目が光っていて考えさせしかし、どれをとっても著者の鋭い目が光っていて考えさせ

察とが一体となって独得な境地をつくっているといえよう。の種の棲みわけを調べたり、戸籍を調べたりという客観的な観山を歩いたり、釣りを楽しむといった主体的な行為とそれぞれ

のである。時々刻々に動きゆく山の変化に応じてこれを掴んでを、いや雪崩んとする雪を看破するより外に道はないと悟ったう。著者は「雪崩の見方」のなかで「私のこの生きた眼で雪崩

実際自分の全体をあげて当らねば駄 目だと思

ゆくためには、

登山技術の根底にあるものを明確に示した言葉はあるまい。 う。これは研究的態度というよりも、なにかもっと直接的な強 い感じで、おそらく戦闘の第一線に立つものの心構えとでも った方がよいであろう」と述べているが、これほど登山ない

こる第一次雪崩と、

雪崩について著者は発生的観点に立つ。そこから、降雪中に起

降雪後日射または気温の上昇という要因が

どわかっていない。登山の技術やタクティクスに関する問題に が、いずれにしても、これは今日の登山者に射かけられた矢で を嘆き、その理由として日本の雪崩学の外国模倣をあげている 年たった現在でも雪崩の研究がいっこうに進歩していないこと のなかで、最近の雪崩の分類を詳しく比較検討した上で、四十 をもとに個々の具体的な臨床データを集積して、登山者の立場 けでは仕方がないので、それと同時に誰の目にも明らかな症状 あがり、カリウムが何グラムふえるといったことがわかっただ な立場からする病理学的な分析はそれなりに重要であることは 十分に解明されていない。しかも、この点については、専門的 ヒマラヤ登山には常についてまわる氷河の形成過程さえほとん 山ラッシュであるが、ヒマラヤの場合をとると、気象をはじめ ていないことが多すぎるのである。例えば、世はあげて海外登 ある。このように考えると、わかっているつもりで何もわかっ 加わって起こる第二次雪崩を区分する。さらに「四十年の回顧 ついても、 高度順化と衰退という基本的なメカニズムさえまだ 例えば高度障害の場合には血液の濃度がどれだけ

から総合的な推論を導くといったこともきわめて大切なのでは

を読んでいると、そのような登山者としての経験の総合化とい

ないだろうか。本書の感想から大分飛躍してしまったが、本書

が、それは別に譲るとして、本書は著者の山や探検について直 て書かれたものである。あとから加えられた書きおろしの う姿勢を、もっと大事にする必要があることを痛感する。 接語ったり書いたりしたもの以上に、登山者、 書の紹介をするのにふさわしい方々は他にいくらでもいよう あるいは土台を示すものということができる。その意味では本 めたものであり、今西学とまでいわれる雄大な学問体系の原点 種類のカゲロウの棲みわけを発見したのを契機として、著名な 流のヒラタカゲロウ」も、一九三三年初夏に加茂川において四 「棲みわけ理論」をつくりあげていくまでの過程の研究をまと 本書の各論文はいずれも著者の二十代後半から三十代にかけ とくに若い登山

者の必読の書としてあえてペンをとった

### 会 務 報

# 九六九年七月~一九七〇年六月

◇七月理事・評議員会 七月三日(木)ルーム 出席者 深田、吉沢、辰沼、山崎、大塚、飯野、広谷、川上

井、折井、金坂、沼倉、堀田 藤田、長尾、浜野、野上、小倉、牧野内、中島、津田、藤

一、エベレスト登山に関する件

二、その他報告事項 詳細は「山」二九〇号参照)

◇臨時理事・評議員会 八月一日(金)ルーム

出席者 吉沢、辰沼、山崎、大塚、松田、飯野、中島、村木 原、浜野、藤田、川上、小倉、長尾、野上、藤井、村山、

▽議事、報告 金坂、石原

一、エベレスト登山に関する件

二、ヒラリー卿招請の件

(詳細は「山」二九一号参照)

◇ 九月理事・ 評議員会 三田、深田、 九月四日(木)ルーム 吉沢、山崎、松田、飯野、広谷、

一、エベレスト登山に関する件

二、北海道支部設立の件

三、年次晩餐会の件

四、その他報告事項

、詳細は「山」二九二号参照)

◇十月理事・評議員会 出席者 三田、吉沢、松田、山崎、小倉、辰沼、浜野、野上 十月二日(木)ルーム

藤田、飯野、牧野内、大塚、長尾、織内、藤井、折井、沼

倉、石原、後藤

▽議事、報告

一、昭和四十四年度収支予算補正の件

二、会務分担変更の件

四、中華全国山岳委員会出席の件 三、UIAA総会の件

五、エベレスト登山に関する件

六、その他報告事項

(詳細は「山」二九三号参照

◇十一月理事・評議員会 十一月六日(木)ルーム 浜野、松田、 三田、吉沢、山崎、野上、広谷、 川上、辰沼、折井、村山、 藤井、金坂、 大塚、藤田、

金坂、 藤田、 石原、後藤、高山 野上、 原、小倉、渡辺、 折井、 織内、 沼倉、

藤井、

(237)

## ▽議事、報告

一、エベレスト登山隊本部設置の件

二、会員に対するエベレスト登山募金推進の件

「山岳」広告担当理事の件

五 四、万博ネパール館のカラー・コルトン製作の件 その他報告事項

◇常任評議員会 出席者 (詳細は「山」二九四号参照 渡辺、 十一月二十五日(火)国際文化会館 織内、村山、藤井、沼倉、中尾、中田、

▽議事

三田、吉沢、

飯野

一、名誉会員推薦に関する件

三、神河内山荘建設運営委員会復活の件 二、エベレスト募金促進の件

(「山」二九五号参照

◇十二月理事・評議員会

十二月四日(木)ルーム

出席者 深田、吉沢、山崎、 織内、沼倉、他に宮下エベレスト第二次偵察隊長 上、中島、長尾、川上、金坂、藤井、中田、中野、石原、 大塚、 飯野、松田、 小倉、

▽議事、報告

一、エベレスト第二次偵察隊帰国挨拶と報告

三、この一本展の件 二、年次晩餐会の件

支部長会議の件

運営資金借り入れの件

名誉会員推薦見送りの件 会員に対するエベレスト登山募金促進

九、その他報告事項

エベレスト登山記録映画の件

(詳細は「山」二九五号参照)

◇支部長会議 十二月五日(金)ルーム 出席者 深田、吉沢、山崎、 飯野、 大塚、

石原

中野、小林、山本、熊沢、藤島、

後藤、

伊達 辰沼、

浜野、

中田

一、各支部の現状および本部への要望の件

二、支部長会の今後の運営の件

◇十二月緊急理事・評議員会 十二月二十七日(土)ルーム (詳細は「山」二九五号参照

織内、 田、藤田、小倉、村木、辰沼、金坂、沼倉、石原、島田、 堀田、他に松方エベレスト登山隊々長

出席者 三田、深田、飯野、山崎、野上、川上、大塚、

▽議事

一、エベレスト登山隊員決定の件

二、エベレスト登山募金の件

(詳細は「山」二九六号参照)

◇一月理事・評議員会 出席者 深田、吉沢、飯野、山崎、広谷、野上、小倉、長 尾、浜野、川上、大塚、辰沼、金坂、石原、沼倉、藤井 一月八日(木)ルーム

(238)

の件

四十五年度役員の件

Æ,

エベレスト登山募金の件 山岳図書を語る夕の件

四

エベレスト登山隊の件

二、四十五年度予算の件 エベレスト登山の件

(詳細は「山」二九六号参照)

その他報告事項

◇二月理事・評議員会 二月五日 (木) ルーム

出席者

深田、吉沢、

辰沼、

山崎、

野上、原、牧野内、

大塚

浜野、

小倉、金坂、

藤井、石原、

沼倉、中田、

織内、

中屋

石原 中島、 小倉、松田、 藤田、 川上、長尾、津田、金坂、 沼倉

一、四十五年度役員の件

▽議事、

三、エベレスト登山募金の件 二、エベレスト登山の件 エベレスト隊歓送会の件

(詳細は「山」二九七号参照)

五、その他報告事項

◇三月理事・評議員会 出席者 川上、望月、 三田、深田、 三月二十四日 吉沢、山崎、 飯野、 火 辰沼、野上、 ルーム 長尾

▽議事、 村山、中田

沼倉、

織内、

後藤、

二、四十五年度予算案の件 一、四十五年度事業計画案の件

三、四十五年度役員の件

◇四月理事・評議員会 (詳細は「山」二九八号参照)

その他報告事項

出席者 三世 深田、 吉沢、 四月十五日 飯野、 (水) ルー 長尾、 川上、 4 山崎、

▽議事、 報告

一、四十四年度事業報告の件 一、四十四年度収支決算の件

三、エベレスト登山隊の件

現地小集会の件

**玉** ネパール国王来日の

六、その他報告事項

◇昭和四十五年度通常会員総会 (詳細は「山」二九九号参照) 四月二十五日

3

向井ビル

出席者 三田会長以下六十四名

▽総会次第

一、会長挨拶

二、昭和四十四年度事業報告

二、支部報告

越後支部(藤島玄)、富山支部

(中田勇吉)、

山梨支部

山

飯 野 田 幸

享 夫

(239)

村正光)、秋田支部(佐藤兼治)、 北海道支部 (中野征紀 享

玉 昭和四十四年度財産目録報告 昭和四十四年度決算報告

野

◇支部長会議

四月二十六日(日)ルーム

、詳細は「山」三〇〇号参照

飯 野

享

田 弥

六、監查報告

(以上承認)

七、昭和四十五年度役員選任の件

/理事/ 董子、 四十五年度役員として次の各氏を選任した。 (以上再任)、中尾健弌、藤井運平、神原達、芳野赳夫、松 川上隆、中島寬、浜野吉生、野上成勇、牧野内昭武 三田幸夫、深田久弥、吉沢一郎、山崎安治、

郎、長尾悌夫、加藤泰安、辰沼広吉、村木潤次郎、松田雄 雄(以上新任)。退任された大塚博美、飯野享、広谷光一 永敏郎、熊谷義信、大森薫雄、宮下秀樹、倉知敬、丹部節 一、藤田佳宏、原真の十氏の労を謝した。

<監事> 掘田弥一氏の任期満了に伴う後任として今井雄二 /評議員> 安、渡辺兵力、掘田弥一、田口二郎、 後藤幹次、水野祥太郎の 六氏が 退任され、 新たに加藤泰 氏を選任。 沼倉寬二郎、藤井運平、中尾健弌、石原憲治、 辰沼広吉、 伊達篤郎

原案どおり承認 昭和四十五年度事業計画案

の六氏を選任、退任された六氏の労を謝した。

(原案どおり承認)

昭和四十五年度収支予算案の件 飯 野

享

山 崎

安

治

吉沢、藤井、山崎、

出席者 山=中田、静岡=山本、東海=熊沢、石川=小島、 北海道=中野、 秋田=柴田、佐藤、

▽議事

丹部、松永

一、深田副会長挨拶

三、その他、会報「山」、「山岳」等に対する各支部からの意 二、静岡、石川、東海各支部報告

(詳細は「山」三〇〇号参照)

見、各支部の現状についての懇談

◇五月理事・評議員会 出席者 金坂、 小倉、 三田、深田、吉沢、中屋、 浜野、 渡辺(兵)、村山、今井 神原、 五月六日(水)ルーム 熊谷、芳野、松永、 藤井、 倉知、 山崎、 川上、 丹部、 田口 野上

▽議事、

一、常務理事互選の件

二、常任評議員互選の件 中屋、藤井、山崎、丹部、 中島の五氏を互選

三、役員任務分担の件

加藤、折井、金坂、渡辺(兵)、村山、中田の六氏を互選。

中屋 絡)、小倉(婦人懇談会)、川上(集会、学生部)、芳野(日 山莊、支部)、中島(山岳)、丹部 (総務、自然保護)、山崎(庶務、 (庶務、 会報)、藤井

(240)

越後=藤島、

富

深田、

山協、遭難対策)、松永(指導研究)、熊谷 (医療)、宮下 (学生部、日山協)、 倉知 (山岳)、 (学生部)、大

学生部、日山協)、野上(図書)、牧野内(山日記)

四、エベレスト隊成田隊員死亡の件

六、その他報告事項 五、UIAA総会の件

(詳細は「山」三〇〇号参照

◇六月理事・評議員会 六月三日(水)ルーム 出席者 深田、吉沢、中屋、藤井、山崎、川上、野上、

織内、折井、村山、今井 神原、宮下、牧野内、熊谷、丹部、芳野、金坂、渡辺(兵)

▽議事、 報告

二、現地支部長会議の件 一、各委員会委員選任の件

三、エベレスト登山の件 シェルパ同行帰国の件

エレベスト学術調査隊の件

ヒラリー卿来日の件

神河内山荘の件

(詳細は「山」三〇一号参照) その他報告事項

×

◇小集会

▽第二五三回 昭和四十四年七月八日(火) 於·高輪和彊館

エベレスト第一次偵察隊帰国歓迎会

▽第二五四回 グリーンランド横断の記録 昭和四十四年九月十一日 (未 於・ルーム 田

重氏

▽第二五五回 昭和四十四年十月二十五日(土)~二十六日(月)

於箱根湖尻キャンプ場

▽第二五六回 昭和四十四年十一月十四日(金)

於・日体協会

遭難対策シンポジューム

(詳細は「山」二九五号参照)

▽第二五七回 忘年会 昭和四十四年十二月二十三日(火)於・ルーム

▽第二五八回 昭和四十五年三月二十八日(土)~二十九日(日)

於・蔵王山の家

(詳細は「山」三〇〇号参照)

▽第二五九回 昭和四十五年五月十七日(日)~十八日(月)於

金山平

▽二六○回 第八回木暮翁碑前懇親会 昭和四十五年六月十日(水)於・ルーム

グルジャ・ヒマール登頂

師

◇主なる行事および集会

▽第一回女子登山指導者研修会

研修所。参加者四十三名(詳細は「山」二九三号参照)。 昭和四十四年九月二十日(土)~二十三日(火)於・立山登山

▽第十回登山技術講習会

(241)

屋付近。参加者二十九名(詳細は「山」二九六号参照 昭和四十四年十二月五日(金)~八日(月)於・富士山御庭小

▽昭和四十四年度年次晩餐会

三三名(詳細は「山」二九五号参照)。 昭和四十四年十二月五日(金)於・マツヤサロン。出席者二

▽第八回「この一本」展

昭和四十四年十二月五日(金) 於・マツヤサロン。(詳細は

▽第二十四回ウェストン祭 「山」二九五号参照

昭和四十五年六月六日(土)~七日(日)於・上高地 (詳細は「山」三〇二号参照

▽第十三回有志閑談会

▽第一回現地支部長会議(兼『日本山嶽志』復刻版出版記念) 昭和四十五年六月二十日(土)於・六義園。出席者三十五名 「詳細は「山」三〇二号参照

四十五年六月二十八日(日)~三十日(火)於・弥彦山、 (詳細は「山」三〇二号参照)

◇海外登山界との交流

▽本年度は三○カ国、六八団体と機関誌の交換を行なった。

クワ)が出席した(詳細は「山」二九八号参照)。 われた国際山岳連盟(UIAA)総会に田村俊介氏(在モス 一九六九年十月三日~五日チェコスロバキアのプラハで行な

▽シエラ・クラブから、一八二名の会員がアウティングで来日

九四号参照)。 (一九六九年七月~十月)、各地で交歓した(詳細は「山」二

▽七月七日~二十六日、フランスのシャモニで開催された国際 アルピニスト集会に松島利夫、望月亮の両氏が参加した(詳

細は「山」二九六号参照)。

▽テンジン・ノルゲイ氏来日、一月五日本会ルームにおいて交 歓会を行なった(詳細は「山」二九七号参照)。

▽ジャン・フランコ氏来日、二月七日、本会ルームにおいて交 歓会を開催した(詳細は「山」二九七号参照)。

▽ネパールのビレンドラ・ビル・ビクラム・シャハ・デバ皇太 子のご成婚を記念し、銀製のピッケルを贈呈した。

▽万国博覧会ネパール館の建設に対して協力した。 (詳細は「山」二九八号参照)。

◇海外登山

▽エベレスト登山

懸案のエベレスト登山を実施した。

○四十四年八月~十一月 宮下秀樹隊長以下十二名(うち四 西壁八〇〇〇メートルまで達し、登攀の一応の目途をつけ 名は報道班)からなる第二次偵察隊を派遣、エベレスト南

三八~一四七ページ参照)。 て帰国した(詳細は「山」二九〇~二九五号および本文一

○四十年二月~六月 松方三郎隊長以下三十九名(うち九名 果に基づき南西壁からの登頂を目指したが八〇五〇メート は報道班)からなる本隊を派遣、第一次、第二次偵察の結 ルまでで敗退、東南稜から二隊が登頂を果たしたにとどま

った(詳細は「山」二九五~三〇二号参照)。

▽マカルー登山 施、目標を達成した。 東海支部では東南稜からのマカルー登山を実

○四十四年二月~六月松浦正司隊長以下五名からなる調査隊 三ページ参照)。 を派遣。(詳細は「山」二九三号および本文一四八~一五

四十五年二月~六月熊沢正夫総指揮、伊藤洋平隊長以下十 六名からなる本隊を派遣、六月二十三日東南稜からの登頂

▽ヒンズー・クシュ登山 に派遣、ヒム・ゾムの登頂に成功した。 藤井信一郎隊長以下五名からなる登山隊をヒンズー・クシュ 山陰支部では一九七〇年五月~七月

に成功した(詳細は「山」三一一~三一二号参照)。

▽一九六九年は別掲 (海外登山年表=一九六九年=」) のとお り八七隊の登山隊が海外の山に出かけたが、これらの各隊に は本会会員が多数参加した。

▽第八回海外登山技術研究会 は「山」二九五号参照)。 において行なわれ、本会からも多数の会員が参加した(詳細 (日)、日本山岳協会主催で八王子市の大学セミナー・ハウス 十一月二十九日(土)~三十日

> ▽第一回ヒンズー・クシュ会議 昭和四十五年三月七日(土)~ (早大)(詳細は「山」二九三号参照)。

細は「山」二九八号参照)。 九日(月)裏磐梯国民休暇村桧原荘において開催された(詳

◇山岳 集者望月達夫。 第六十四年(通巻一二三号)を三月三十一日発行。

◇山日記 ◇会報「山」第二八九号~三○一号発行。編集代表山崎安治。 一九七〇年版(第三十五輯)を発行。編集代表牧野

内昭武

×

◇その他のトピック

▽全日本学生山岳連盟設立 一九六九年十月四日、東京大学山 上会議所において設立総会が行なわれ、全日本学生山岳連盟 が発足した。本部は日本山岳会内、初代委員長久 新 大 四 郎

# 九七〇年度役員

常 副 務理 슾 事 長 中屋健弌、 吉沢一郎、 藤井運平、 深田久弥 山崎安治、

丹部節雄、

슾

長

三田幸夫

事 小倉董子、川上 隆、 浜野吉生、野上成勇、牧野

内昭武、神原

達、芳野赴夫、松永敏郎、

理

事 小原勝郎、今井雄二 大森薫雄、宮下秀樹、倉知

常任評議員 雅美、中田勇吉 加藤泰安、折井健一、金坂一郎、 渡辺兵力、村山

員 中野征紀、今西寿雄、 達夫、織内信彦、辰沼広吉、藤島 渡辺公平、島田 巽、 堀田弥 高山忠四朗、三井松男 田口二郎、 玄、津田周二 望月

評

議

書

記 岩佐義宗

口秋人(東九州)、三谷孝一(熊本)

(関西)、織田

収(山陰)、

末松大助

藤島 中田勇吉(富山)、小林雄二郎(石川)、今西寿雄 (山梨)、山本朋三郎 (静岡)、熊沢正夫 玄 (越後)、 塚本茂樹

(信濃)、

三井松男

(東海)、

中野征紀(北海道)、柴田均一(秋田)、 (山形)、伊達篤郎 (宮城)、伊藤弥十郎 後藤幹次 (福島)、

支

部 長

(244)

#### The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: Mukai Bldg, No. 23, Kanda Nishikicho 3-Chome, Chiyoda-ku, Tokyo

•••••

(April, 1970~April, 1971)

President: Yukio Mita

Vice-Presidents: Kyuya Fukata, Ichiro Yoshizawa

Honorary Secretaries: Kenichi Nakaya, Yasuji Yamazaki, Unpei Fujii

Honorary Editor: Tatsuo Mochizuki Honorary Librarian: Kyuya Fukata Honorary Treasurer: Toru Iino Auditors: Katsuro Ohara, Yuji Imai

> ...... Committee

Kenichi Nakaya Hiroshi Nakajima Takashi Kawakami Toshiro Matsunaga

Hideki Miyashita Seiyu Nogami

Yasuii Yamazaki Sadao Tanbe Toru Kanbara Yoshinobu Kumagai Kei Kurachi

Akitake Makinouchi

Nobuko Ogura Takeo Yoshino Shigeo Ohmori Yoshio Hamano

Unpei Fujii

#### ..... Council

Taian Kato Masami Murayama Kohei Watanabe Jiro Taguchi Hirokichi Tatsunuma Masanori Nakano Matsuo Mitsui

Kenichi Orii Hyoriki Watanabe Tatsumi Shimada Tatsuo Mochizuki Gen Fujishima Toshio Imanishi Tokuro Date

Yukichi Nakata Ichiro Kanesaka Yaichi Hotta Nobuhiko Oriuchi Shuji Tsuda Chushiro Takayama

......

#### Chairman of Local Sections

Hokkaido: Masanori Nakano Yamagata: Kanji Gotoh Fukushima: Yajuro Itoh Shinano: Shigeki Tsukamoto Shizuoka: Tomosaburo Yamamoto

Toyama: Yukichi Nakata Kwansai: Toshio Imanishi

Fukuoka: Daisuke Suematsu Kumamoto: Koichi Mitani

Akita: Kinji Shibata Miyagi: Tokuro Date Echigo: Gen Fujishima Yamanashi: Matsuo Mitsui Tokai: Masao Kumazawa Ishikawa: Yujiro Kobayashi

Sanin: Osamu Oda

Higashi Kyushu: Akito Noguchi

#### SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXV 1970 Issued in April, 1971 Contents (In English) The First Ascent of Gurja Himal, 1969......By Yoshimi Yakushi..... 1 Japan-Mongol Joint Mountarneering in Mongol-Altai, 1968 .....By Mitsuo Kawamura..... 6 Chap Darya-i-Ismurgh, 1969.—the second Ascent of Peak Peak 29, 1969.....By Yasuo Tamai.....11 Two Reconnaissance Parties of the Japanese Everest Expedition '70 in 1969......By Hiromi Ohtsuka.....12 The Recoooaissance Party of the Japanese Makalu Expedition, 1969·····By Masaji Matsuura·····14 Climbing the West Face of Ushba South Peak in Caucasus ......By Keiichi Tsukamoto.....16 Panjub Himalaya, 1969......By Masahiko Kaji.....16 East Hindu-Kush, 1969......By Shin-ichiro Fujii.....17 The First Ascent of the West Ridge of Lucania, 1969......By Ikuo Abe.....18 (In Japanese, except the articles mentioned above) The Winter Climbing of the Eiger North Face, Direttissima route------By Masaru Sanba-----48 Random thoughts on the South Pole explorations....By Masami Murayama......97 The Japanese Pik Lenin Expedition ......By Tatsuo Matsumoto ... 107 Note on the original member, Takashi Ohhira......By Shinichi Watanabe... 121 The Eiger North Face, new Direttissima route······By Takio Kato··· 154 The Second Ascent of Koyo Zom, Hindu Raj.....By Shigeatsu Ogasawara... 160 The excursion to Bhutan in 1970------------------------By Masahiro Ogata--- 178 The Short study on Nepal's meteorological features ......By Tomomitsu Yamada... 188 In Memorial: M. Kamuri, S. Kato, H. Kuze, H. Okabe, T. Kajimoto, K. Kato, M. Kudo, S. Namekata, Y. Kawai, S. Nakata ...... 199 Book Reviews------ 222 Club Proceedings------ 237 Chronicle of Japanese Overseas Expeditions, 1969 .....Ed. by Yasuo Tamai & Hiroshi Nakajima.....21 Editor: Tatsuo Mochizuki Associate Editors: Yasuji Yamazaki, Seiyu Nogami, Yasuo Tamai, Kei Kurachi,

Hiroshi Nakajima

#### The First Ascent of Gurja Himal, 1969

#### By Yoshimi Yakushi

After the long period of closing the Himalayas from mountaineering expeditions, the Nepalese Authorities released them again in 1969 and the thirty-eight peaks were opened to climbers in the world. Then the Tomari Mountaineering Club of Toyama Prefecture submitted to the Nepalese Government an application for an expedition to one of Nilgiri group which had been already explored by our reconnaissance in 1965<sup>(1)</sup>. But they replied, to our regret, that it was not possible to grant the permission, and was desirable to change the peak for another one. Our first aim was, accordingly, to be unwillingly changed, and the second one was at Gurja Himal (7,193 m=23,599 ft.). Another application was in return permitted at the end of June.

Gurja Himal, known locally as Dhaulashri, is the lowest of the Dhaulagiri range and has consequently tended to be overlooked by the expeditions in favour of the higher peaks of Dhaulagiri I, II, IV, Churen Himal and so on. It has so grand a figure, seen from the south side where it consists of inaccessible cliffs, so we decided to take the long approach from the west though it would in effect have to make a roundabout course (12–13 km.) from Base Camp to the summit. This route from the west had been taken by James Roberts in 1962<sup>(2)</sup> and the Royal Air Force Expedition to Dhaula IV in 1965<sup>(3)</sup>, to the upper basin of the Kaphe glacier. The lower part of this route had also been visited by some Japanese trekking groups since 1965. And they had looked into the course from the Base Camp of the 1965 R.A.F. Expedition to their Glacier Camp or to the foot of the "side-glacier" of the Kaphe glacier.

Although we reached Kathmandu on August 28, our baggages of 2,800 kg. arrived by lorry on Sept. 15, much later than the date scheduled. As a result, we could not leave Kathmandu until Sept. 20. Some of our members, however, flew to Pokhara on Sept. 15 and 16, to arrange for food and porters with the help of Indra Man, Govinda Man and Amrit Prasad Serchans of the Thakalis, who had been among my best friends since my first visit in 1965. The porters had arrived from Darbang, and their wages were twelve Rupees a day from Pokhara to Base Camp. The main members of us flew to Pokhora by a chartered plane on Sept. 20.

On Sept. 21 we started from Pokhara with 68 porters. Two of us however, remained behind with two Sherpas to wait for the rest of our equipments and rations for high altitude activities coming from Kathmandu, and they left Pokhara with 18 porters on Sept. 24. It rained almost everyday in the afternoon on the way, and on Sept. 30 we reached Gurjakhani via Kusma, Beni, Darbang. and Muna. But a trouble arose there. All of the porter sfrom Darbang area, fearing snows of the high pass on our way to Base Camp, turned back home from there. We had to employ new faces with high wages, 20 Rs, a day. but couldn't get together enough porters in need at once. Again the party was divided into two groups.

On Oct. 2 we started again with 53 Gurjakhani porters, almost all of them a caste of Chantial of the Magar tribes. Crossing the Darsinge khola, we climbed up a steep ridge called "Nuntala-Kagar" by natives. Over the high pass "Budzunge-Bara" about 4,500 m. in a snow storm, we went down to the Thar khola and camped there on the next day. The Base Camp at 4,100 m. was settled at the end of the moraine of the Kaphe glacier on Oct. 4, after the up-journey along the left bank of Kaphe khola. This area, overhung as it is by Churen Himal, is called "Dhuptel" by porters of Gurjakhani and has a most bracing alpine atmosphere. Moreover, the rainy season seemed to have ended, for the weather was generally fine from now on.

Mountaineering activities began towards Gurja Himal from the following day. Some members who had stayed at Pokhara and Gurjakhani arrived at our Base Camp on Oct.7 and 8, bringing with them the rest of our baggages. For the first time since the day of our departure from Japan all the members were together here.

On Oct. 9 we set up Camp 1 at 4,750 m. at the foot of the first ice-fall. Making our way from Base Camp slowly along an ablation valley without water on the left bank of the Kaphe glacier, and across a big side-moraine, we descended onto the glacier. From here we progressed without difficulty. With few crevasses to hinder us, it took four hours from Base Camp to Camp 1, and then gradually three hours or so. Close to our Camp 1 we found the remains canned powder juice and coffee, ground sheets, and so on of the R.A.F. 1965 Expedition's Glacier Camp.

Just above Camp 1 lay the first barrier, an ice-fall of about 100 m. in height, with gaping crevasses and tottering séracs. We avoided a direct ascent like the R.A.F. Expedition, and traversed the glacier towards the right of the ice-fall

where there were exposed rock slabs on which we fixed the rope of 150 m. There we found also some old ropes and pitons. This route, taken by Roberts in 1962, was still open to danger from ice-avalanches coming down from the side-glacier falling directly from flank of Ghustung Himal. At the edge of the debris of the side-glacier after 20 minutes' walk around it, "temporary" Camp 2 at 5,000 m. was set up on a level site safe from avalanches on Oct. 14. The side-glacier, which had offered the route to higher camps to the R.A.F. Expedition, looked more complicated than in 1965 owing to the drier conditions and larger crevasses. It was too dangerous and difficult for us, so from temporary Camp 2 we pioneered a new route through the flank of the north ridge of Ghustung Himal on the left of the side-glacier. It was the key to our climbing to discover a route on that flank composed of rocks and snows. The Italian Churen Himal Expedition led by Paolo Consiglio arrived on Oct. 15, accompanied by more than one hundred porters, and settled their Base Camp within a short distance of ours.

At last Camp 2 was set up on a small rock terrace at 5,300 m. on Oct. 18 and temporary Camp 2 dismantled. Above Camp 2 much steeper slopes of snow and rocky ribs led up to Camp 3 at 5,750 m. on the ridge of Ghustung North. We were safe from avalanches there, but we fixed 1,200 m. of rope from temporary Camp 2 to Camp 3 and on Oct. 20 two of the party with a Sherpa reached the ridge. Camp 3 was set up at this point and was finally occupied on Oct. 22.

The west face of Gurja Himal was now revealed and the route to the summit lay before us. We first planned to reach the top either from the ridge connecting the unnamed peak (so called Dhaula-VI) and Gurja Himal, or from the col between Ghustung South and Gurja Himal. But looking at this west face, we saw that the sub-glacier diverging from the Upper Kaphe glacier offered a better route to the West Shoulder of the summit. Camp 3 commanded a clear view of the ridge between Dhaula-VI and Gurja Himal, and of the basin of the Upper Kaphe glacier. We also observed two routes to Dhaula-VI. One was by way of a subsidiary ridge leading to the ridge connecting Dhaula-VI and Gurja Himal. The other was by a ridge inclining down to the south-west of Dhaula-VI itself. The east glacier of Churen Himal formed two wide terraces on its upper part from which ice avalanches frequently fell directly onto the Lower Kaphe glacier, obviously very dangerous.

From Camp 3, the route to Gurja Himal went round the foot of Ghustung North, and then descended slightly into the upper basin of Kaphe glacier. We had to re-ascend again out of the basin. On the three kilometres' crossing, conditions were such that the leader sank into the snow knee-deep and sometimes even waist-deep.

On Oct. 24 a route was made to the site of Camp 4 at 5,900 m. in the snow field of the basin and some equipment was deposited there. I decided that we should open an all-out attack on the following day, seeing that the site of Camp 4 was now decided and that another Camp would bring the party within reach of the summit. During the days before and after the 24th all the members, as well as the Sherpas, had taken a rest in rotation at Camp 1 or Base Cmp preparing for the final assault.

The first attacking team, composed of S. Kanayama, H. Sakai and Tenzing Girmi Sardar, with two Sherpas in support, set out for Camp 3 from Camp 1 on Oct. 26, and the next day established Camp 4 in the glacier basin. With a little snowfall in the afternoons we were lucky in our weather conditions, but were still worried about the risk of strong west wind. It was now the end of October.

Other members and Sherpas shifted the necessary loads to Camp 3 from Camp 1 and 2 at a high speed, and on Oct. 29 the whole party was gathered together at Camp 3. This turned into the Advanced Base Camp, while the first team of three occupied Camp 5 at 6,500 m. on the sub-glacier of the Upper Kaphe glacier, and at the same time the supporting team of Sherpas continued preparing the route, reached a height of 6,750 m. and then descended to Camp 4.

On Oct. 30 the first team set out for the summit. Although helped by fine weather, they had to turn back after reaching the West Shoulder at 6,800 m. of Gurja Himal because of no good conditions of deep snow and extreme cold. Members, two of whom got frostbitten slightly, were tired out with the work of establishing Camps 4 and 5. M. Nukui and Ang Tharkey, on the other hand, stood on Ghustung North (6,529 m.) from Camp 3, but they could not observe the whole landscape by clouds. This same day two members and a Sherpa, comprising the second team, went up to Camp 4 and the following day changed places with the first one.

On the 1st of November T. Saeki and Lhakpa Tenzing, with N. Ito in support, set out from the Camp, followed the tracks of the first team and reached the Shoulder after two and a half hours' walking. From the Shoulder they began to climb along the ridge to the summit, using a climbing-rope of forty metres which the first team had left behind, and keeping a little to the left of the crest of the ridge having hard snows in good conditions. N. Ito, starting from Camg 5 later than the other two, watched their movements on the ridge from the Shoulder and then turned back to Camp 5. From noon the sky clouded over and snow fell. At about 1:30 pm. the two stepped onto some small rocks and then climbed in to reach the summit. The snow stopped and the sun shone for some time. After six more hours' climbing from the Shoulder they had reached the top of Gurja Himal: it was 2:45 pm. The altimeter pointed to 7,050 m.

Through gaps in the clouds they caught glimpses of the tent of Camp 3, of the ridge extending to Dhaula-VI and the sanctuary of the Konabon glacier just below the top of Dhaula-IV where the Austrian party was now challenging; to the south they saw the chain of ridges and slopes extending from the Buzdunge-Bara pass to Gurjakhani. Had it not been for the clouds, they would have had an even better view. The men on the summit took some over-exposed photos with two still-cameras and a 16 mm. cine-camera, stayed there for twenty minutes, and then began to descend. They drove a piton into a rock just below the summit as evidence of their ascent. On the way down they left the ridge for the steep snow slopes and made their way direct to Camp 5. At 5:40 pm. they got back to the tent where N. Ito was waiting for them.

It was misty and snowy in the afternoon, with the result that those at Camp 3, having seen the two climbers just below the summit at about 2:30 pm., could not follow their further progress to the top. And, what was worse, wrongness with our wireless sets prevented us from knowing whether or not they had succeeded in the ascent. But we had a firm belief in their success, and the second team descended from Camp 5 to Camp 3 on the following day.

With the high camps taken away, all the members and Sherpas were down at Base Camp by Nov. 4. On gathering together at Base, we were feted by the Italian Expedition and we wished their success. The Gods must have been with us, for, during the days just after our success, we noticed snowdrift like plumes on all the ridges caused by the bitter west wind. Had it been one day later our attack might not have succeeded.

One of the party went down the valley to Gurjakhani with two Sherpas to arrange for porters to come and take away our Base Camp. Thirty porters came and we all left on the afternoon of Nov. 8. Marching along the same route we had taken we reached Gurjakhani next day where a festival called "Tiwal" was being held. We stayed there for two days because we had to employ the villagers as porters to Pokhara, at a cost of Rs. 125 per man by contract.

On Nov. 12 we left Gurjakhani with 32 porters under the clear sky, the weather so different from on the approach march. It was quite an exhilarating trek. On Nov. 19 Pokhara was reached, and on the next day our expedition ended at Kathmandu.

- Members: Yoshimi YAKUSHI (leader, age 33), Nobutaka ITO (deputy-leader, 33), Masa'aki NUKUI (30), Sei'ichi KANAYAMA (27), Tomokuni SAEKI (26), Hiroyuki SAKAI (26), Akira INOUYE (correspondent, 37), Ken'ichi SHIMODA (TV-cameraman, 38), and Deva Bahadur Thapa (liaison-officer of Government of Nepal, 32)
- Sherpas: Tenzing Girmi (Sardar, Namche, age 49), Lhakpa Gelbu (Namche, 33), Ang Tharkey (Namche, 35), Lhakpa Tenzing (Namche, 32), Phurba Kitar (Surke, 38), Nurbu (cook, Khunde, 33), and Ang Tshering (kitchen-boy, Namche, 23)
- Notes: (1) SANGAKU, Journal of J.A.C., vol. 62, 1967, pp. 83-100 and La Montagne et Alpinisme, 1968-October, pp. 335-336.
  - (2) Alpine Journal, vol. 68, 1963, pp. 188-197.
  - (3) Alpine Journal, vol. 71, 1966, pp. 75–88 and vol. 73, 1968, pp. 113–114.

#### Japan-Mongol Joint Mountaineering in Mongol-Altai, 1968

#### By Mitsuo Kawamura

Although several peaks of the Mongol Altai mountain area have been climbed by Mongolian and other countries' teams, most of them are still unexplored. Many people who have endeavored to enter the area in vain have found that the reason for this is not so much geographical as political. In the summer of 1968, thanks to the kind invitation of The Central Council of Mongolian Union for Physical Culture and Sports, we, eight members of the Alpine Club of Tokyo University of Foreign Studies, were allowed to enter the western part of Mongolia for a joint expedition to Harhiraa mountains, which lie in the northwest of Mongol Altai, 1700 kilometers west of Ulan-Bator. This was the second overseas expedition dispatched by our club, the first being the

Andes expedition in 1964.

On July 20, we set off, together with all necessary equipments and provisions, from Yokohama for Nakhotka, from there we travelled to Irkutsk, where we received visas for Mongolian territory, and arrived in Ulan-Bator one week later. It was on July 30 that the joint expedition team headed by Mr. Z. Dashidendeb was officially organized, the members of which were as follows;

from Japan	from Mongolia
Ozawa, Shigeo (42)	Dashidendeb, Z. (33)
Kubota, Kiyoshi (35)	Zolig, R. (37)
Kawamura, Mitsuo (31)	Djantsan, Y. (34)
Sato, Masaki (33)	Dorj, M. (30)
Atsuzawa, Tsuneo (32)	Zanaabazar, R. (26)
Tanaka, Masaru (26)	Baatur, S. (30)
Miyake, Osamu (36)	Tsebeen, R. (22)
Tsuji, Michio (33)	

Besides these members, a guide, two hostlers, a doctor, a cook, two orderlies, and a cameldriver (all Mongolians) were to join us in the Harhiraa valley.

We were aware that The Cencil Council had intended to have cancelled the invitation but now that we had arrived they said that they were willing to carry through with the plan. Before departure everything went well except one thing. We found that foreigners were not allowed to use a 16 mm. motion picture camera in Mongolia. Despite our every effort we could not obtain the permission.

After three days' pleasant trek by caravan consisting of 25 horses, a man riding each of them, and 8 camels loaded with more than 200 kilograms of provisions or equipments, we established the base camp in a green valley called Buuchin Züün Salaa. The altitude was 2700 meters. At that time of the year the climate there was much milder than we had thought and it made our camp life comfortable.

- Aug. 4. Cloudy. All members went to Ulan Harhiraa to observe the geographical features of the region.
- Aug. 5. Fine, later a little snow. All members rested. It was decided that a higher camp should be established for the assault upon Harhiraa I, II, III and that a return trip should be made to Harhiraa V, VI.

Aug. 6. Fine. Divided ourselves into three groups—Olympia (Harhiraa V) group, Harhiraa (I, II, II) group and base camp group. Olympia group (Zolig, Kubota, Tsebeen, Atsuzawa, Zanaabazar, and Miyake) started at 7: 30 a.m., directly ascending the snowwall, reaching the summit at 3: 03 p.m. It took them exceptionally long to ascend and descend the icy slope which had two mammoth crevasses. They returned to the base camp by the same route at 9: 45 p.m. The 3860 m. peak was named Olympia Peak for world peace and international friendship.

Harhiraa group (Djantsan, Kawamura, Dorji, Tanaka, and Baatur) left the camp at 8.00 a.m. and made the advance camp on the boson of a glacier coming down from the foot of Harhiraa III.

followed the ridge leading northwards to the peak of Harhiraa III, and stood on the rocky top at 9:15 a.m. This peak was named Japan-Mongol Friendship Peak in memory of everlasting friendship between our two countries. Then we went down the icy slope of the other side of the ridge to the glacier 600 meters below and went up to Harhiraa II (3990 m.), and then Harhiraa I (3950 m.). the tops of which were reached at 3:20 p.m. and 5:25 p.m. respectively. The route between the two peaks was a narrow ridge covered with snow overhanging the ridge lip on the eastern side and required great caution in movement. From Harhiraa I, we came down onto the glacier adjacent to the one from which we went up, and returned to the base camp at 1:10 in the morning, Aug. 8. The advance camp was broken down and secured by Kubota and Atsuzawa, who were at the base camp.

Aug. 7. Fine. Harhiraa group, leaving the advance camp at 5:15 a.m.,

The base camp group kept in constant close radio contact with the two climbing groups by the transceivers.

Having rested on Aug. 8, we were again in the saddle and came back to Ulan Gom on Aug. 11. We spent the next day at the health center in a nearby village and then flew back to Ulan Bator on Aug. 13. Everywhere we were heartily congratulated on our success in mountaineering assaults.

All peaks we climbed were virgin except Harhiraa I, which had been climbed by Mongolian alpinists including Prof. Zolig and Baatur. Climbing in general was not very difficult, but crumbling rock and iron-hard icy slope made it quite dangerous. Fortunately, the weather was very good during the expedition and it enabled us to carry out rush assaults upon peaks at a good distance from

the camps. We found Mongolian alpinists astonishingly tough and very good at outdoor activities, though their equipments seemed inadequate for climbing at higher altitudes. People in the valley were friendly and willing to help us.

For all the great differences in languages and customs we found that we could understand each other very well and we believe this joint expedition will help greatly to improve both the countries' relations in future.

#### Chap Darya-i-Ismusgh, 1969

the second ascent of Peak 6392 m from the new route-

#### By Go Hirai

In the summer of 1969, the Medical Alpine Club of Hiroshima University (MACH) sent four members to Wakhan of Afghanistan. Our main object was originally the ascents of some virgin six-thousanders situated at the upper reaches of Chap Darya-i-Ismurgh. But, only two weeks' stay in Wakhan was permitted for us by the Afghan Authorities. It was not enough time to make ascent there. We could get only one of them, the summit of the peak 6392 m. But it had already been ascended by the Austrian Party(\*) one year before our expedition, which was later informed after our returing to Japan.

The names, heights and Wala's numbers of the mountains in the panorama photograph from the summit were identified by Mr. J. Wala and Mr. I. Yoshizawa. I am grateful to their kind co-operation.

Our party consisted of following four Japanese and one Afgan members.

Dr. Go Hirai, M.D. (38)Leader

Sugimura, M.D. Dr. Isao

Yahata

Deputy leader (33)

Katsushi Hiroshi

Toishigawa

(22)

(22)

(21) Guest member, Kabul University A. Samad Saadat

We left Kabul on July 14 for Wakhan by truck, and arrived at Khandud on July 22.

On July 24, our caravan set off from Ismurgh, an upper village of Khandud,

and went up along the Chap Darya-i-Ismurgh.

On July 27, we set up the Base Camp (4550 m) on the moraine in face to the north side of the peak. In that evening it became to snow and the next day all members gathered there.

On the 27th and 28th of July, we spent all day to observe the condition of the northern face of the peak, especially about the courses of avalanches occurring frequently on the median northern snow face that we called "avalanche-cirque".

On July 29 we tried to find the climbing route on the southern face, going up the the glacier between our aiming peak and Kohe Hevad. But, what with our "limited-time in Wakhan", we decided to ascend by way of northern face along the north-east ridge at first and then east-north ridge, which were of safety from avalanches occurring frequently on the "avalanche cirque". Three members were chosen for the final assaulting members, G. Hirai, K. Toishigawa and H. Yahata. During the next day, it was exhausted in carrying the baggages up near the place planned as Camp 2. It became snowy in the evening.

On July 31, our three members set up Camp 1 (4600 m) on the moraine near the "Conchoidal Glacier". The next day we pitched Camp 2 (5000 m) in the crevasse in the steep icy snow slope upwards the north-east ridge. On August 2, we established Camp 3 (5280 m) on the snow terrace after crossing the steep icy slope with 40 m rope fixed. On August 3, Camp 4 (5790 m) was established on the steep icy snow slope. From there, in a short distance, we looked at the avalanches sliding down on the "avalanche-cirque". Using propane gas range, we made a lot of juice and warm soupy food easily and quickly. The next day, owing to a long sustained effort in crossing the hidden crevases here and there, we were very tired with climbing and compelled to bivouack on the rockwall (6250 m) at the shoulder place where the north-east ridge and the east-north ridge were joined. Having no propane gas, in that night, we had to take water by dissolving the snow in each mouth. Except for it, we camped comfortably and had a sound sleep as same as at the previous camps, with feather clothes of each and one pocketable tent.

On August 5, we left the bivouacked site at dawn of the day. After about five hours of struggle, we reached the summit of peak 6392 m.

It was also friendly fine. There, we were surrounded with many snow-peaks, Baba Tangi in the far east, Hevad in the south presence, Urgent in the far west, and the peak of Karl Marx and Engels in the north. (\*) Peak 6392 m (Wala's number 354) was ascended for the first time from southern side on August 18, 1968. by Grimmlinger and Presel of Austrian Party.

#### Peak 29, 1969.

#### By Yasuo Tamai

We, the Osaka University Mountaineering Club (O.U.M.C.), sent a expedition to Peak 29 (7835 m) in the postmonsoon season of 1969. This expedition was the third trial of us to the mountain.

In 1961, we sent a party to the west side of the mountain, and found the "Dona khola" and the "Thulagi Glacier". (see J.J.A.C. "Sangakn" vol. 57, 1962)

In 1963, we sent a small party to the east side of Peak 29 to reconnoiter the East Face of it. They put 4 camps forward along the east ridge and obtained the expecting prospect. (see ibid. vol. 59, 1964)

This time, our party has been in the east side of the mountain in order to get the summit. The members of our expedition belong to the club as follows, Dr. Senya Sumiyoshi (42), leader, medical doctor of Osaka University Medical School; Yasuo Tamai, (30), deputy-leader, graduate, of science; Dr. Yasushi Daikuhara (31), educational officer of Osaka University; Reiko Saigusa (37), graduate of pharmacology; Daisuke Makino (28), graduate of science; Hideo Misawa (29), graduate of engineering; Takaaki Ishihama (27), graduate of engineering; Hiroshi Watanabe (25), graduate of science; Jiro Kuroda (24), medical doctor of Osaka University Hospital; Yoshihiko Koda (22), undergraduate of Osaka University; Yoshiki (22), undergraduate of Osaka University.

Our approach march started from Kathmandu on September 3 and made its way along the monsoon route of Buri Gandaki. On Sept. 18, we were through with 15 days' travel by reaching Rho Gaon. We did not meet any hindrance by inhibitants.

On Sept. 22, the Base Camp was settled on the right side of Pungen Glacier at the point of 4100 m in height.

After three days' reconnaisance to find the most probable and most safety route on the east side of the mountain, we made up our minds to take up the east ridge route, which was traced by our past expedition in 1963. We would dare to say that this route was the most possible but the longest one in the east side.

The advanced camps were built successively as follows,

September 27, Camp I, 5100 m, on the east ridge.

```
" 30, Camp II, 5700 m, "
October 5, Camp II, 5900 m, "
17, Camp IV, 6100 m, "
18, Camp V, 6350 m, "
```

" 24, Camp VI, 6850 m, under the east face of Peak 29.

From Oct. 25, we tried to climb the east face of Peak 29, but the icecovered slope from Camp VI to the summit was 45 degrees in average and very difficult one.

On November 1 two members reached the point of about 7400 m in height, where we were compelled to give up the ascent of the mountain.

On Nov. 9, we left the Bace Camp and made the return journey down a long Buri Gandaki. After 16 days' march we arrived at Kathmandu.

At Kathmandu, Foreign Ministry of His Majesty's Government of Nepal kindly granted us the permit to climb Peak 29 in postmonsoon season 1970 again.

#### Two Reconnaissance Rarties of the Japanese Everest Expedition '70 in 1969

#### By Hiromi Ohtsuka

The Japanese Alpine Club decided to ascend Mt. Everest via the route of South-West Face in 1970 pre-monsoon season and in 1969, two reconnaissance parties were sent one after another. Their first aim was to acquire the official permission of the Nepalese Government, and the second one was, of course, to reconnoitor the route up on the South West Face.

The First Reconnaissance Party consisted of the following 4 members (including one press-man).

Yoshihiro Fujita (leader, age 36), Naomi Uemura (age 27), Toyozo Sugasawa (age 24), Hirofumi Aizawa (Press-man, age 36).

They started Kathmandu for Lukhula on May 5 by a chartered plane. On May 7, they started from Lukhula with 50 porters for the mountain, and set up the Base Camp in the upper basin of Khumbu Glacier on May 14. They began to make the route in the Ice Fall on May 16, and after ten days of struggle, two members reached to 6500 m of the Western Cwm on May 25 and observed closely the untrodden Face, but the monsoon ended their activities.

The Second Reconnaissance Party: Members were as follows.

Hideki Miyashita (Leader, age 38), Hisashi Tanabe (Deputy leader, 38), Hiroshi Nakajima (31), Masatsugu Konishi (31), Naomi Uemura (28), Yukitoshi Satoh (27), Jiro Inoue (24), Shigeo Omori (Medical doctor, 36), Hisao Shirai (TV director, 36), Tokutaro Noguchi (TV cameraman, 38), Shigeru Satoh (Pressman, 31), Katsuhisa Kimura (Cameraman, 39).

After they obtained the official permission of the 1970 pre-monsoon attempt from the Nepalese Gorernment, they started from Kathmandu on Sept. 4 by chartered planes, and they estableshed the Base Camp (5400 m) on Sept. 16 at the same place with the precding parties.

Their aims were as follows: The first one was to climb up the South West Face as high as possible to get the expecting prospect for 1970's attempt. The second was to provide with acclimatization and experience for members.

The Summary of their activities was as follows;

- Sept. 20 Began to make routes in the Ice-Fall.
- Sept. 28 Established Camp 1 just above the Ice Fall (6050 m).
- Oct. 4 Established Temporary Camp 2 (6500 m) in the Western Cwn.
- Oct. 15 Established Camp 2 (6600 m) just below the South West Face.
- Oct. 18 Established Camp 3 (7000 m) in the South West Face.
- Oct. 29 Established Camp 4 (7500 m)
- Oct. 31 Konishi and Uemura reached to the point of 8000 m.
- Nov. 1 Nakajima and Y. Satoh reached to the same point.
- Nov. 3 Returned back to Base Camp.
- Nov. 13 Kathmandu.
  - \* Two members stayed at Khumbu villages during winter and waited for the main party of 1970, N. Uemura, at Kumjung (3800 m), to acquire the young, competent Sherpas and J. Inoue, at Perje (4300 m), to engage in the meteorological obsevation.

## The Reconnaissance Party of the Japanese Makalu Expedition, 1969.

#### By Masaji Matsuura.

The Tokai Section of the Japanese Alpine Club planned the ascent of Mt. Makalu (8,481 m) through the East-south Ridge in the pre-monsoon season of 1970. The reconnaissance party was sent out with the following purposes on Feb. 22, 1969, while the mountaineering by foreigners was still banned by the Nepalese Government.

#### (1) Purposes

- 1 Acquisition of the climb permit for the main party.
- ② Reconnaissance of caravan routes and the East-south Ridge of Mt. Makalu.
- 3 Employment of Sherpas.

#### (2) Results acquired.

- ① March 12, The Climb permit for the reconnaissance party granted, and the permit for the main expedition assured at the same time. June 3, The climb permit for the main party officially granted by the Nepalese government.
- ② Reconnaissances of caravan routes in the pre-monsoon period, the East-south Ridge (up to 6,600 m), and the Barun glacier, all successfully completed.
- (3) June 8, Contract made with the Himalayan Society for the employment of 2 Sirders and 34 Sherpas for the main expedition in 1970.
- (3) Members of the Reconnaissance Party

Members: M. Matsuura (Age, 29) Leader

Y. Ozaki ( " 29)

I. Yamada ( " 26)

T. Ogawa ( " 25)

H. Ikuta ( " 24)

Shelpas : L. Tenzing

N. Tenzing

#### Liaison Officer: Capt. Rama

- (4) Proceeding of the Reconnaissance Expedition
  - Feb. 24 Arrived in Kathmandu. Immediately started negotiation with the Nepalese Government to get climb permits.
  - Mar. 12 The first climb permits granted to the reconnissance party upon Nepal's opening of the Himalayan mountains. The permit for the main expedition in 1970 also assured by the government at the same time.
  - Mar. 19 Departed from Dharan Bazar along the Arun river in a caravan of 34 porters.
  - Mar. 29 Arrived at Sedoa Village.
  - Apr. 3 Crossed the Shipton Pass.
  - Apr. 6 Set up B.C. at the altitude of 4,700 m on the Barun glacier.
  - Apr. 7 Starterd the reconnaissance of the East-south Ridge, and found that it consisted of two parts; a glacier belt running up to a saddle called South Col and the ridge above it formed by rocky walls and glaciers.
  - Apr. 13 Established C1 at 5,000 m in the ice-fall.
  - Apr. 17 Pitched C 2 at 5,310 m where the ice-fall ended.
  - Apr. 20 set up C3 at 5,780 m.
  - Apr. 25 Placed C 4 at 6,300 m.
  - Apr. 27-28 Reconnaissance attempt up to 6,650 m made by Ozaki and Yamada in overnight bivouac.
  - Apr. 29-30 Another attempt of reconnaissance made up to 6,500 m<sup>∗</sup><sub>∗</sub>by Ikuta and Ogawa in bivouac.
  - May 5-7 Reconnoitered the Barun glacier up to 5,080 m.
  - May 9 Departed from B.C.
  - May 26 Got back to Kathmandu.
  - June 3 Acquired the official climb permit for the main expedition in 1970 from the Nepalese Government.
  - June 8 Reservation made with the Himalayan Society for the 36 Sherpas selected for the main party in the following year.
  - June 9 Left Kathmandu.

#### Climbing the West Face of Ushba South Peak in the Caucasus, 1968

#### By Keiichi Tsukamoto

R.C.C. II had ever sent the Caucasus Climbing Party led by T. Ueda in 1966.

This time, our party was sent to the Caucasus as one of the continued projects planned by the Central Asia Committee of our Club R.C.C. II.

The party consisted of eight membrs: K. Shimizu, K. Tsukamoto, N. Kobayashi, Y. Kuruma, N. Kimura, A. Fukuoka, N. Nakamichi and K. Kyogoku.

Our aim was to climb the west face of Mt. Ushba (4703 m.).

Starting from Yokohama on July 6 in 1968, we established the base camp on July 13 in the forest along Dhola River. From Ushba Glacier we attempted to climb up the west face, and after five days of struggle we finished the climb, making the record of the second climb of the west face by the concave route on the pillar-shaped cliff. (The first climb was accomplished in 1965.)

On our descent Kobayashi was injured in his knee, so we left Kyogoku with him and returned back to call the rescue party. Both of them were rescued five days after by the relief squad consisted of about thirty members.

We heartily appreciate the warm friendship of Soviet Alpinists for us.

#### Panjub Himalaya, 1969

#### By Masahiko Kaji

The Student Section of the Japanese Alpine Club sent the expedition to Panjub Himalaya in 1969.

members were as follows:

Isao Morimoto

(24) Leader

Yoshihiro Narita

(22)

Masahiko Kaji (22)

Kazuhisa Hoshino (22)

We originally planned to climb White Seil (6 446 m.) and two other peaks from East Tos Glacier. As the result of negotiation with Indian Government in New Delhi, we were admitted to enter East Tos Glacier and to our good fortune Indian Mountaineeing Foundation appointed Major Mul Raj as our liaison officer, who had ever joined the second and the third Indian Everest Expedition.

But we were compelled to change the destination from East Tos Glacier to Solang Nulla because of some troubles about our permission letter.

Four Japanese, the liaison officer and one high altitude porter started Manali to Solang Nulla on May 28.

- May 31 Established Base Camp at Beas Kund (3 700 m).
- June 2 Two members reached the ridge between Ladakhi Peak and Shiti Dhar.
- June 5 Established Camp 1 at Solang Pass.
- June 6 Established Camp 2 at the southern side of Hanuman Tibba.
- June 7 Four members reached to the summit of Hamuman Tibba (5960 m).
- June 8 Narita, Hoshino and Maj. Malk Raj came down to Base Camp. Morimoto and Kaji entered C 2.
- June 9 Morimoto and Kaji succeeded to ascend Hamuman Tibba through the new route of southern face.
- June 10 Morimoto, Kaji and a high altitude porter climbed Hanuman IV (ca. 5500 m).
- June 11 Returned back to Base Camp.

We took a few days rest at Buse Camp and Dondy, and reached to Manali on June 19 via Palchan.

### East Hindu-Kush, 1969

### By Shin-ichiro Fujii

On June 21 our caravan started Chitral for Noroghikum Glacier. On the way to Noroghikum, however, our party was attacked by a thief and we were to return back to chitral in order to take necessary disposal. As a result of this accident, we lost much precious time.

It was on July 12 when we again started Chitral. On July 17, we set up the Base Camp on Naroghikum Glacier.

After making routes on three Ice Falls, two of the members, the first assaulting party, climbed up on the top of Him Zom on July 27 and fortunately the other two members also succeeded to achieve the second ascent.

This mountain was showed p. 6441 on the map and the local name was also unknown. But we want to name it "Him Zom" which means the snow-capped mountain.

Members were as follows: S. Fujii (29, leader), Motohiro Funakoshi (29), Ken Hiroe (27), Toyoshige Inoue (27).

# The First Ascent of the West Ridge of Lucania, 1969

### By Ikuo Abe

The Tohoku University Lucania Expedition Party was sent to the northern area of the St. Elias Range, Yukon Territory, Canada, in 1969. They successfully climbed Mt. Lucania (5.226 m) through the west ridge which had never been traced, descending by the way of the north ridge after traversing east on the main ridge to Mt. Steele (5,071 m) with skis.

It was in the summer of 1937 when B. Washburn and R. Bates climbed Mt. Lucania from the south side for the first time and went down to the east beyond the top of Mt. Steele. The second assault was successfully achieved through the north ridge by the Yukon Centennial Expedition Party in 1967. The west ridge, which was considered one of the most fascinating route of the mountain, had been left virgin white because of its intricated configuration.

The expedition committee dispatched the reconnaissance party to the area to find a possible route on the west ridge in the summer of 1968, and came to an affirmative conclusion. The expedition project was ripe for execution. The expedition party consisted of nine members; they were Ryoichi Mitsuhashi, Kunio Sakan, Osamu Ujike, Kazuo Sugamura, Yasuo Yamashita, Fumihiko Nishio,

Yasuo Akiyama, Akira Kawamoto and Ikuo Abe.

The party left Japan by boat in three groups at the beginning of June, and gathered themselves at Burwash Landing, Yukon Territory, at the end of the month. Nine members and about 750 kg of food and equipement were flown by the helicopter to the base camp on July 3. The B.C. was established on one of branches of the Chitina Glacier at about 2,100 m at the southern foot of the west ridge.

From there above, one of the terminal branch of the glacier could be observed to rise up to the sky-line of the west ridge. Two ice-fall zones were noticeable.

The climbing was started on July 4. The lower ice-fall was filled with ice and snow, so they could walk up smoothly on its rough surface. The upper icefall, on the contrary, was cut to pieces. No route could be cleared through the ice-fall inspite of their strenuous effort. The detour route was made on the flank of the aréte on the right of the glacier. On the upper part of the glacier, they went up across a number of hidden crevasses with skis, willowing the route on the deep, soft snow.

On July 8, Camp 3 was pitched on the west ridge at 3,100 m in the milky fog. On the west ridge, they were confronted with the steep knife-edged ridge in the first place, then they crawled up the snow slope with several hidden crevasses to the peak at 3,700 m. Then severe snowfall lasted incessantly for three days.

On July 13, the higher camps were found above the ocean of cloud in the strong sunshine. Hundreds of bursts of avalanche raised roaring sounds all through the day. At midnight three of them got out of the advanced base camp (A.B.C., camp 4), which located on the peak at 3,700 m, and blazed the way through the serrated narrow ridge. There was a steep snow slope dropping off fiercely before the plateau at 4,200 m. The upper part of the slope was so steep that snow hardly remained on it and that several rock outcrops were bare.

All the members and equipments were assembled at the A.B.C. on July 15. The eight members except the leader were separated into two parties. One was the assault party, that was to traverse the main ridge from Mt. Lucania to Mt. Steele, then to descend the north ridge down to the Chitina glacier. The other was to support the assault party, and to assault the top of Mt. Lucania if feasible. The leader himself was to stay at the A.B.C. to give instructions to the both party by wire-less.

The next morning broke cold and fairly clear. The firmly fixed ropes led them safe up to the plateau at 4,200 m even the snow slope insisted them an exhaustive climbing. There on the plateau, they recognized that the hanging icewall disconnected the route with the upper-most snow field leading to the top of Lucania Mountain. The latter half of the day was spent to make the route on the ice-wall. They overcame the final barrier early in the next morning.

Just under the top of Lucania Mountain the supporting party parted from the assault party to meet again at the B.C. and got to the top of Mt. Lucania at  $3:30\,\mathrm{p.m.}$  on July 17. At the same time the assault party was eager to investigate the traverse route. The assault party also climbed the top of the mountain early in the next morning. The weather was gradually changing, that had been quite fair for several days. After that the assault party nearly followed the Washburn's route to Lucania-Steele col with skis. It snowed off and on during the traverse through the snow field. At  $2:50\,\mathrm{a.m.}$  on July 21, they got to the top of Mt. Steele.

They descended the north ridge down to the Chitina Glacier. Meanwhile, the supporting party on the west ridge retracted the steps back to the B.C. On August 3, all of them flew out of the mountains, saying good-bye to them.

### 海外登山年表 = 1969年=

(Japanese Overseas Expeditions in 1969)

玉井康雄・中島 寛編

本年度(1969)も昨年度と同じ形式で、1969年中に主として登山あるいは登山のための偵察を目的として日本から海外に出かけた隊の記録を年表にまとめた。方法としては従来と同じように、各隊の責任者に記入してもらった調査表を基礎としたが、①一部記入してもらえないものがあったこと、②観光ビザをとり自己資金だけででかける隊がふえたこと、③その中でも、当然のことながら日本山岳会員が関わらない隊も多く、日山協の窓口もまったく通っていないボランタリーな隊がふえたこと、などの理由から新聞、雑誌その他の資料により補足したが、不完全なものとならざるをえなかった。今日のように海外登山が一般化し、数がふえると、もはやこのような形で年表にまとめることは技術的に難かしくなると同時に、形式も変えていく必要があることを痛感する。また、以前から度々いわれることであるが、あらゆる情報を収集、蓄積していくインフォーメーション・センターがほしいと思う。

本年度の年表のなかから要点をまとめてみると、次のような特徴が指摘できる。

- (1) 本年度日本から海外に出た隊は、われわれの調査した限りで合計 87 隊、延人 数は 254 人に達する。このうち日本山岳会員は 86 人(除く台湾)であった。
- (2) 本年度は、5年ぶりにネパール・ヒマラヤが解禁され、せきをきったようにネパール・ヒマラヤを目指す隊がふえた。そのなかではグルジャ・ヒマール登頂が光っている。なお、エベレスト、マカルーへの偵察隊が出された。
- (3) 入山の難しいパミール,ワハン,カラコルムなどの入山が地道な準備活動の結果として実現してそれぞれ立派な成果をあげたことは、海外登山のあり方を考える上でも注目される。
- (4) バリエーション・ルートからの登攀および難ルートの開拓という方向も完全に 定着し、JECC のアイガー北壁新ルート開拓、山学同志会のアイガー北壁直登ルー ト冬季登攀をはじめとして、国際的に注目される諸成果をあげた。
  - (注) 年表の Nos に※のある隊は、記録あるいは紀行が本文に収録されていることを示す。 また隊長および隊員名の前に\*印を付したものは本会会員、†印を付したものは故人と なった人を示す。

### ネパール・ヒマラヤ

Nos	期間	目 的	12
1			
2	1968.11~ i969.11	ヒマラヤの撮影(ネ パール,バンジャブ, ヒンズー・クシュ, カラコルム)	白川義員ヒマラヤ撮影隊 隊長=*白川義員(34) 隊員=谷岡 坦(26) 木原 浩(23) 五味久明(28) 行動概要: 1968 年 11 月 30 日~1969 年 1 月 6 日 イムジャ氷河アイランド・ビーク周辺,カラパタール周辺,ゴジュンパ氷河周辺の撮影。2 月 4 日までポカラよりジョモソンパ往復。2 月 26 日までマルシャンディよりトンジェ往復。3 月 17 日までゴザインクンドー周。5 月 25 日までネパール・ヒマラヤ全域の航空撮影。2 の間 4 月 8 日より 4 月 16 日の間パンジャブ・ヒマラヤのクル,マナリ周辺。6 月 19 日より 7 月 8 日の間ヒンズー・クシュの撮影。Owir An (4342 m) 通過。7 月 9 日より 7 月 26 日の間ナンガパルバット周辺。10 月 11 日より 10 月 25 日スカルドゥ周辺の自由地域の撮影。10 月 27 日より 11 月 25 日の間 ヒンズー・クシュのアフガニスタン側の航空撮影。文献:「アサヒカメラ」(1969 年 4 月号、8 月号、12 月号)、「山と渓谷」(1970 年 5 月号)、「エスプリアイ」創刊号(1969 年 11 月号)、「白川義員作品集・ヒマラヤ」(小学館・1971 年)
<b>%</b> 3	1969.2~6	マカルー東南稜偵察 及び本隊の許可入手	日本山岳会東海支部マカルー調査隊 (The Reconnaissance Party of the Japanese Makalu Expedition)

			隊長=*松浦正司(29) 隊員=*尾崎祐一(29) *山田 勇(26) *生田 弘(24) *小川 務(25) リエゾン・オフィサー=Capt. Rana シェルパ=Lhakpa Tenzing (Namche) Nima Tenzing (Thame) 行動概要: 3月 19 日ダランバザールより出発。アルン河を遡り、29日最奥部落セドア着、4月 3 日シブトン峠(4200 m)を越え、6 日バルン氷河(4700 m)にBC設営。13日アイスフォール中に C1 建設(5000 m)、17日アイスフォールを突破し 5310 m に C2、20 日 5780 m に C3、25 日 6300 m に C4 を建設。27 日尾崎、山田はビバークをして 6650 m まで、29日には小川、生田もビバーク後 6500 m まで偵察。5月5日~7日バルン氷河を 5080 m まで偵察。9日BC撤収。26日カトマンズ帰着。 文献:日本山岳会東海支部編「海外登山研究会資料Ⅱ」(1970年1月)、「岳人」No. 266(1969 年8月)、「アサヒグラフ」(1969年7月号)、日本山岳会「山岳」65年(本文148ページ参照)
<b>**4</b>	1969.4~6	エベレスト偵察	日本山岳会第一次エベレスト 偵察隊 (The 1st Reconnaissance Party of the JMEE '70) 隊長=*藤田佳宏(37) *隊員=植村直已(28) *菅沢豊蔵(24) 報道=相沢裕文(38) サーダー=Chotare (Namche) シェルパ=Lhakpa Norbu (Thame), Pasang Norbu (Namche), コック=Ang Tsering 行動概要:5月5日飛行機でルクラへ。14日ベースキャンプ(5400 m) 着。16日よりアイスフォールの偵察とルート開拓。21日アイスフォールをこえた6050 メートル地点に C1 建設。25日,植村,相沢が6500 m 付近まで登り,エベレスト南壁を観察,26日 BC 帰着。文献:第一次,第二次エベレスト偵察隊報告書。日本山岳会「山岳」65年(本文130 ベージ参照)
5	1969.4~6	マハラングール・ヒ マール,ホングー・ コーラ周辺踏査。	隊員=緒方奎介(34) *久保田保雄(26) *小川武丸(27) *宮沢宏昌(26) 永島敬介(27) 奥寺韶子(25) シェルバニブルバキターレ アンテンバ3号 ニンプターレ。 行動概要:カトマンズ4月7日発。ルクラ4月23日着,メラ・ラ (5500 m) 4月28日着。4月29日メラ・ビーク (6430 m) に久保田,永島登頂。5月4日~13日ホングー・コーラのバンチポカリ周辺に滞在,その間小川,宮沢はウェストコル(6135 m) よりプラトー氷河へ。5月18日全員タンボチェに集合。5月22日ルクラ発5月29日カトマンズ着。宮沢はそのままネバールにとどまる。小川は中部ネバールを旅行後12月帰国。

6	1969.4~7	カンジロバ・ヒマー	岩友会ネパールヒマラヤ (カンジロバ・ヒマール)
		ルの登山とカンジロ	遠征隊 (Gan-yu kai Nepal Himalaya (Kanjirob
		バ山域の探査。	Himal) Expedition 1969)
			隊長=*船木 匡(33) 副隊長=*船木 享(35) 隊員
			=*樫本則明(22) *中村富雄(21) 沢田宗博(22) シェル
			パニパサンニマ、ミンマ、ギャルツェン、ソナ、アンナ
			ムギャル コック=ダクテンル
			行動概要: 4月 27 日ポカラ出発。5月4日ドルバタ
			ン着。5月16日ジャングラ・パス。5月21日リンコ
			村着。5月23日BC建設。5月25日C1建設。26日
			C2 建設。27 日 C3 建設,29 日 C4 建設,30 日船才
			(匡),沢田,パサンニマ3名カンジロバ・ヒマール南の
			一峰 (6445 m) 初登頂。6月1日 BC 着。7日カグマラ
			峠通過。ガルプン谷よりジヤグドーラを下り、6月28日
			タンセン着。6月30日カトマンズへ帰着。
			文献:「岳人」No. 269(1969 年 11 月号),「日歯広報
			(1969年 9, 10, 11月号),「日本歯科医師会雑誌」(197
			年1月号),「新歯潮」(1969年10月号),日本山岳会
			「山岳」66 年掲載予定。
<b>%</b> 7	1969.8~	エベレスト南西壁試	日本山岳会第二次エベレスト偵察隊 (The 2 nd
	11	登及び気象観測	Reconnaissance Party of the JMEE '70)
1			隊長=*宮下秀樹(38) 副隊長=*田辺 寿(38) *中島質
			(31) *小西政継(30) *植村直已(28) *佐藤之敏(27) *井
			上治郎(24) 隊医=*大森薫雄 報道=*木村勝久(39) 位
			藤茂(31)*白井久夫(36) 野口篤太郎(37) リエゾン・
			オフィサー=Arun Bikram Rana サーダー=Mingma
			Tsering (Thame) コック=Kirken (Thame) シェ
			ルパ=Ang Namgyal (T.), Dawa Tensing (Namche)
			Lhakpa Norbu (T.), Pasang Norbu (N.), Dawa
			Thundup (Kumjung), Ang Dorje (Khunde), Mingma
			(Kathmandu), Tensing Zambu (Kum), キッチンボー
			イ=Sona, Ang Tsering, ローカルボーター6名
			行動概要:9月1日より4日まで飛行機でルクラへ。
			5日ルクラ発。9月16日ベースキャンプ (5400 m) 着。
			20 日よりアイスフォールの工作開始。28 日 C1 (6050
			m) 建設。10 月 4 日仮 C 2 (6500 m) 建設。10 月 15日
			C3 (6700 m) 建設。10月18日 C4 を軍艦岩 (7000 m)
			下に建設。29 日 C 5 (7500 m) を建設。10 月 31 日小
			西, 植村, 11月1日中島, 佐藤(之) 南壁 8000 m ラ
			インに到達し試登を終る。11 月7日BC撤収。18日カ
			トマンズ帰着。その後 12 月より 1970 年 2 月末の本隊
			到着まで井上はペリジエ (4200 m), 植村は クムジュン
			(3900 m) にて越冬し、気象観測及びシェルバの雇傭に
1		J	あたった。

			山岳会「山岳」65年(本文138ページ参照)
8	1969.9~ 11	ロールワリン山群リクー氷河周辺及びウェスト・クーンブ氷河周辺の踏査	<ul> <li>浦和西岳友会ネパール・ヒマラヤ路査隊 (Uraw Nishi Alpine Club Nepal Himalaya Expedition 1969 隊長=山下康成(30) 隊員=豊島義明(26) 横田誠(24 シェルパ=アン・ギャルツェン (ナムチェ) ボーター5名。</li> <li>行動概要:6月17日カトマンズ発。ラムサング~日ーセ~チャングマ~ショーリマを経てリクー谷 5000 r 附近に BC 設営。ビグフェラゴシャール、パナイホトウバ等の氷河を踏査。約6300 m の小ピーク登攀。10月1日 BC 撤収。ジェンベシ~カリ・コーラ~ナムチェバナールを経てエベレスト BC。ナムチェ滞在後11月6日空路ルクラよりカトマンズ着。</li> <li>文献:浦和西岳友会編「ネパールヒマラヤ踏査隊報告書」(1970年11月)</li> </ul>
<b>**9</b>	1969.8~ 11	ビーク 29 (7835 m) の試登	大阪大学山岳会ヒマラヤ登山隊 (Himalayan Expedition of Osaka University Mountaineering Club 隊長=*住吉仙也(42) 副隊長=*玉井康雄(30) 医師 =黒田治朗(24) 隊員=大工原恭(31) *三枝礼子(37) 三沢日出夫(29) 牧野大輔(27) 石浜高明(27) †渡部 斉(25) 甲田吉彦(22) 田中喜樹(22) サーダー=チョタルイ コック=アンダワ シェルバ=ダワノルブ, ドルジェ, カルサン, サンゲ, †ラクバツェリン, ベンバノバブ, アンナムギャル 他ローカルシェルバ4名, リエンン・オフィサー=D.B. バスネット 行動概要:9月3日カトマンズ出発。トリスリバザールまでバス及びトラック。7日アルガトバザール, 13日ジャガート, 18日ロー到着。9月22日ブンゲン氷河石岸(4100 m) にベースキャンブ建設。氷河ルートを偵覚ののち、27日東尾根に C1(5100 m) 建設。以後東月根沿いに、30日 C2(5700 m), 10月5日 C3(590 m), 17日 C4(6100 m) をそれぞれ建設し, 18日東壁直下に第6キャンブ(6850 m)を作り、東壁のルート工作を開始。11月1日約7400 m 地点に達するも、これ以上ルートをのぼすことが困難となり撤退を決定。11月7日 C1 撤収。11月9日ベースキャンブを撤収。11月24日カトマンズ着。第4次隊の入山許可を受ける、文献:日本山岳会「山岳」第65年(本文114ペーシを照)
<b>※10</b>	1969.8~ 12	グルジャ・ヒマール (7193 m) 登頂	1969 年富山ヒマラヤ登山隊 (Japanese Expedition to Nepal Himalaya 1969)

			隊長=*薬師義美(33) 副隊長=*伊東信隆(33) 隊員 =温井正明(30) 金山清一(27) 佐伯友邦(26) 酒井宏征(26) 報道=*井上 晃(37)下田健一(38) リエゾン・オフィサー=Deva Bahadur Thapa サーダー=Tenzing Girmi (Namche) シェルバ=Ang Tharkey (N.), Lhakpa Tenzing (N.), Lhakpa Gelbu (N.), Phurba Kitar (Surke) コック=Nurbu (Khunde) キッチンボーイ=Ang Thering (N.) メールランナー 2 名。 行動概要: 9月 21 日ポカラ発, グルジャカーニ経由 10 月 4 日カベ・コーラに BC (4100) 建設。 9日 C1 (4750 m) 14 日仮 C2 (5300 m), 22 日グストゥン北尾根上に C3 (5750 m) を建設。 27 日 C4 (5900 m), 29 日 C5 (6500 m) を建設。 第一次隊 (金山, 酒井, サーダー)が 10 月 30 日にアタックするが 6800 m の肩まで到達。第 2 次隊 (伊東, 佐伯, ラクバ・テンジン)は 11 月 1 日にアタック。佐伯とラクバがグルジャ・ヒマールに登頂。10 月 30 日には C3 より温井とアンタルケイがグストゥン北峰 (6529 m) に登頂。 11 月8日 BC 撤収。のち 1970 年1 月まで井上, 温井, 酒井, 佐伯はクーンブとゴザインクンドを踏査。 文献:「グルジャ・ヒマール」(薬師義美編) (1970年8月発行)、「岳人」No. 275 (1970 年5 月号)、日本山岳会「山岳」65年 (本文 55 ベージ参照)、Alpine Journal (1970) Vol. 74, p. 17~24.
11	1969.8~ 12	バトラシ・ヒマール 試登及び西部ネバー ル,カルナリ地区経 済調査	神戸商科大学西部ネパール学術調査隊 (The West Nepal Scientific Expedition of the Kobe University of Commerce)  隊長=伊藤 稔(40) 副隊長=清水啓道(28) 隊員= 井上二郎(22) 西原幸二(20) 福井清久(21) リエゾン・オフィサー=ゴバール・ラジ・パント(42) シェルパ= †チリン・タルキー(49) アン・チョタレー(40) ダワ・オンジュ(28)  行動概要: 9月25日カトマンズより空路ジュムラ着。 27日ジュムラ発, ランプリー, ピエレ経由チュードビッシ・コーラを遡行して 10 月5日源流近くに BC (3800 m) 建設。22 日 C1 (5800 m) を建設。28 日第一次アタック隊 6300 m 迄到達。27 日第二次隊 6450 m でピバークし28日カンデ南峰 (6500 m) に達するも主峰に達せず。11 月5日 BC 撤収。ジェムラ, チルカ, ダインク経由 20 日スルケット着。空路カトマンズへ。文献:「岳人」No. 281(1970 年 11 月号),「淡水」1970年 3 月号。

12	1969.12~ 1970.2	ナムチェ周辺及びア ンナプルナ南面の旅 行	日本ヒマラヤ山岳協会第 3 回ヒマラヤの旅エベレスト,ナムチェ,アンナプルナ班 (Himalaya Alpine Association of Japan Himalaya Tour) 会員=勝山良三(39) 丸山信治(29) 谷野計夫(33) 植竹清孝(33) 山本方代(33) 横山功子(30) 上野テル子(27) 中沢瑛二(23) シェルバ=Ang Mingma, Ang Chotan, Tsering Namgyal, Lakpa Tsering, Penpa Dorje 行動概要: 12 月 29 日ヘリコブターでルクラ着。その後エベレスト BC, ロブジェの裏山(5365 m) 等を往復。ディンボチェよりタウェチェ支稜往復。1月6日カラバッタールに登る。ゾングラから5420 m のバスを往復。その後ボカラよりグレイシャー・ドーム BC に入りガンガブルナ登路を偵察。 文献:「エベレストの麓へ」沖允人編(1970年8月、非売品)
13	1969.3~4	ダウラギリ南面踏査	九州大学山岳会偵察隊 隊員=高山哲信 行動概要: 3月 21 日ポカラ発, 31 日ミヤンディ・ コーラ河岸に BC 建設, 4月1日~9日, ダウラギリ 南面の偵察を行なう。 文献:「山と渓谷」No. 275 (1969 年 12 月号)
14	1969.9~11	エベレスト偵察	日本エベレスト・スキー探検隊 (The Reconnaissance Party of the Japanese Skiing Exploration Expedition) 隊長=三浦雄一郎(37), 隊員=*加藤幸彦(36), 安久一成(32), 石黒 久(23), 大滝 勝, 桧山, 土田 勝, 佐々木卓, 佐伯富男(40), 山本栄一, 鯵坂青々, ドクター=山田 行動概要:10月7日クーンプ氷河 5400メートルに B C建設,10月 21日 BC 帰着。その間サウス・コルからのスキー滑降のための偵察を行なう。 文献:「エベレスト」(文芸春秋社), 三浦雄一郎「エベレスト滑降」

### パミール

Nos	活動期間	目。	的	55	事
<b>※15</b>	1969.7~8	レ,ーニン峰 m) 登頂他	(7134	日本労働者スポーツ協会パミ隊長=*上田哲農 隊員=*安) 雄 行動概要:7月5日横浜港, 行 (3600 m),14日~21日,佐ドリナヤ峰(6148 m) 登頂,8月2頃,8月4日 BC 帰着。 文献:安川茂雄「パミールの約1970 年),「山岳」65 年(本文	川茂雄, 佐内順, 松本竜 8日モスクワ, 12日アラ イ・キャンプに BC 建 内, 松本の両名ラズジェ 2日松本, レーニン峰登 短い夏」(朝日新聞社・

### パンジャブ・ヒマラヤ

Nos	活動期間	目 的	58	<b>4</b> F
16	1969.4~5	デオ・ティバ (60 m) の登頂及びス 一滑降	特 隊長=*奥山 章(43) 隊! (33) 矢野邦史(26) *白簇史 シェルバ=リンジン他2名 ジャー	員=高橋一郎(31) 川崎吉光 型朗(35) *川口洋之助(25) リエゾン・オフィサー=ラ 「リ着。5月6日チカ着。7 対営(4000 m)。17 日第1キ ・ティバ氷河上に第2キャ 設設。5月 24 日デオ・ティ ,川口の3名スキー滑降。
<b>※17</b>	1969.5~7	バンジャプ, ハヌ ンティバ (5928 m 登頂。	Student Section, the Japan 隊長=*森本勲夫(24) 隊! 彦(22) *星野和久(22) リコ Mulk Raj (33) ハイポータ	ese Alpine Club) <b>員</b> =†*成田義宏(22) *梶 正 <b>エゾン・オフィサ</b> ー=Major  ー=Bora Ram(20)  「除ニューデリー発。28日マ ビアスクンドに BC 建設。 か無名峰登頂。5日ソーラン 6日ハヌマンティバ南斜面 日成田, 星野, Mulk Raj, 登頂。9日森本, 梶同峰登

1.00		12	登頂。14 日 BC 撤収, 19 日マナリ着。 文献:「岳人」No. 269 (1969 年 11 月号), 日本山 岳会「山岳」65 年 (本文 173 ベージ参照)
18	1969.8~9	マカルベ (6069 m) 試登及びハヌマン・ ティバ (5928 m) の 登頂	パンジャブ・ヒマラヤ登山隊 隊長=佐藤 隆(25) 隊員=*山田和夫(23) ハイポーター=ボラ・ラム(20) 行動概要: 8月 14 日ニューデリー出発。8月 16 日 より 26 日までマナリ。8月 29 日ビアスクンド着 BC 建設 (3600 m)。はじめマカルベ登頂を試みる。9月 2 日第1キャンプ及び第2キャンプ (5000 m)を建設。マナリビーク手前のコルに ACを設け荷上げを開始する。 9月 6日 AC 荷上げを完了するが、連日の降雪と第2キャンプの食糧切れのために登頂断念。10 日 BC 帰着。ついでハヌマンティバに向う。17 日ソーランバス (4998 m) に第1,19 日第2キャンプを建設。9月 21 日ハヌマンティバ登頂。22 日ハヌマンティバ V 峰登頂。9月 30 日マナリ帰着。 文献:バンジャブ・ヒマラヤ登山隊報告書(1971年1月)

### カラコルム

Nos	活動期間	目	的	記	事
19	1969.5~7	マルビティモシュ周辺		京都カラコルム遠征隊 '69 (K Expedition) 隊長=*小山 貫(38) 隊員=森岡 (26) 清水久男(26) 四方晴男(26) Kharn 行動概要: 6月末 Sassli よりハ Katwall 湖を経て Mani Gl. に 12 Laila 尾根,ハラモシュ・ラ等に試 偵察する。7月ギルギットにてカラ 関する情勢を調査。	秀雄(28) 尾山政弘 ガイド=Lajarh ラモシュ谷に入り 3 日間滞在。この間 登。マルビティンを

### ヒンズー・クシュ

Nos	活動期間	目	的	55	事
	1969.5~8	ティリチ・: 峰東峰の試会		福岡県山岳連盟ヒマラヤ登 oka Himalaya Expedition 19 隊長=*末松大助(56) 副隊 康司(39) 隊員=鶴田清二(33 (32) 深田泰三(37) 上村登捷(利(26) 永井 直(38) 石崎史良	69) 長=*新貝 勲(40) 松本 ) 佐野昇三(37) 鶴久嗣郎 28) 岩本敬之(26) 池辺勝

		,	曹典(30) 野上国広(25) 学術=*松本福夫(40) 報道= 大坪義明(35) リエゾン・オフィサー=Major Malik Mohamed Ashraf ハイポーター=アミール・モハメッド他8名 行動概要:6月20日ラワルビンディー発チトラル着, 25日チトラル発マスツージ河を遡行し28日ドラワン着。 ザニ・アンを越えシャグラムを経て7月2日 BC (4080 m) 建設。4日 Lower Tirich 氷河に C1 (4300 m)を建設し 5000 m まで登るもアイス・フォールのためこのルートを断念。10日 Upper Tirich 氷河上に C1 (4580 m), 11日 C2 (4790 m), 16日 C3 (5220 m), 20日 C4 (5870 m), 22日 C5 (6230 m), 24日 C6 (6650 m)を建設。8月3日永井,上村,岩本,久間はウェスト・コル(7620 m)でビバークし、4日主峰を登攀中 7620 m の地点で永井落石により負傷。この為撤退中久間約600 m下の Lower Tirich 氷河側へスリップ。登頂を断念する。久間は自力でウェスト・コルで他3人と合流。5日全員無事に C6帰着。9日 BC 撤収。8月12日チトラル着。
21	1969.6~8	イストル・オ・ナー ル峰の登頂	関西学院大学(第 1 次)ヒンズー・クシュ踏査隊 (1969) (Kwansei Gakuin University Hindu Kush Expedition 1969) 隊長=*野村 晃(32) 隊員=小川仁彦(29) †森本 隆(25) 中井祥稚(25) 宮崎康治(23) リエゾン・オフィサー=Khalid Latif Bajwa 中佐 行動概要:6月24日カラチ発,7月1日チトラル着。7月6日キャラバン開始。14日ティリッチ氷河(3900m)にBCを建設。15日 C1(4430m),18日 C2(5200m),22日仮のC3(5800m)を建設。7月25日 C3(6250m)を建設。27日 C4(6500m)に入り,森本、宮崎頂上にアタック,3日間のビヴァークののち7月30日イストル・オ・ナール西峰(7200m)に登頂。帰路31日森本隊員が滑落遭難。捜索活動するも遺体発見されず。8月2日 BC 出発。11日チトラルに帰着。 文献:関西学院山岳会「会報」No.22(1969年12月),同"DAS EDELWEISS"16号(1970年12月)
*22	1969.6~8	ヒム・ゾム (p. 6441) の登頂	日本山岳会山陰支部ヒンズー・クシュ遠征隊 (Japanese Alpine Club Hindu Kush Expedition) 隊長=*藤井信一郎(29) 隊員=*船越元熙(29) *広江 研(27) *井上豊重(27) 行動概要: 6月 21 日チトラル発。ヤルフン河沿いに 遡行するも6月 29 日盗難事件のためチトラルへ引返す。 7月 12 日再度チトラルを出発。7月17日 BC (3900 m) を建設。19日 C1 (4700 m), 21日 C2 (5300 m) 建設。

			26 日 C 3 (5800 m) を建設し, 7月 27 日第一次隊が P. 6441 m を初登頂。28 日第 2 次隊が続いて登頂。8月 4 日チトラルに帰着。 (帰国後この山をヒム・ゾムと命名した。) 文献:「山と渓谷」No. 374 (1969 年 11 月号)。日本山岳会「山岳」65 年 (本文166 ページ参照)
23	1969.7~8	ヒンズー・クシュ, キンジャン山群周辺 の山の登頂及びシル クロードの学術調査	富山県教職員山岳研究会ヒンズークシ踏査隊 (Toyama Teachers Alpine Society Hindu Kush Expedition) 隊長=*橋本 広(47) 副隊長=川向栄一(46) 隊員=中薮淳一(36) 坪川賢三(32) 金田正樹 Said-Hashim, Teia M. Obiedi (Academy for teachers educator) 行動概要:8月8日チャーター車にてカーブル発,チャリカールを経てサラング・コタールへ。キンジャン周辺債察。キンジャンダリア上流 3800 m 地点に BC 設営8月4日コーイ・ランダイジャルダ試登。8月10日橋本,中薮,坪川コーイ・ダラン(4376 m)初登頂。8月11日~14日カーブル。8月15日へウズ谷出合(3600 m)に BC 設営。8月16日中薮,坪川,コーイ・ザック(4663 m)初登頂。17日中薮,金田コーイ・ランダイジャルダ(4462 m)初登頂。18日坪川,金田コーイ・ランダイジャルダ(4462 m)初登頂。8月19日BC 撤収カーブル着。20日~25日研究調査。 文献:「ヒンズークシ踏査隊報告書」(1969年)。北日本新聞(1969・10月21日~30日)「十日会会報 No.23」
24	1969.7~8	コー・イ・ファルザ ンド II (6196 m), ベ ギッシュ・ゾム IV (6096 m) の登頂	岐阜大学アフガニスタン学術調査隊 隊長=平林芳夫 隊員=梅原、徳永、鈴木、琴尾 行動概要:ワハン谷に入り、ペギッシュ谷 4020 m に ペース・キャンプ建設。7月22日 C1 (4580 m), 26日 C 2(4920)、8月8日、梅原、徳永がコー・イ・ファル ザンド II (Wala Map 308) に登頂、9日、鈴木、琴尾 がペギッシュ・ゾム IV に登頂した。 文献:「岳人」No. 281 (1970 年 11 月号)
*25	1969.6~8	ワハン・イスムルグ 谷 6392 m 峰の登頂	広島大学医学部山岳会小パミール遠征隊 隊長=*平位 剛(38) 副隊長=杉村 功(33) 隊員= 土石川勝司(22) 八幡 浩(22) 準隊員=サマード・サーダート 行動概要:7月14日カーブル発,17日ファイザバード着,21日同発。27日イスムルグ谷 4550mのモレーン上にBC 建設。31日 C1 建設,8月1日 C2 (5000m),2日 C3 (5280m),3日 C4(5800m),4

### 海外登山年表 =1969=

			日 6240 m の岩場でビバークの後, 5日 6392 m 峰(Wala Map 354) の第2登に成功。 文献:「山缶」65 年 (本文 76 ページ参照)「缶人」 No. 281 (1970 年 11 月号)
26	ル (6843 m) オ コー・イ・カロ	コー・イ・バンダコ ル (6843 m) および コー・イ・カロート (6044 m) の登頂	静岡ケルン山岳会 '69 中部ヒンズー・クシュ遠征隊   隊長=寺田 肇(55)   隊員=石橋 勲(30) 岩崎勝太郎(30) 土橋俊夫(28) 増田育男(21)   行動概要:7月 11 日カーブル発,21 日 BC 建設。29 日 5800 m 地点にAC建設,8月1日,石橋,増田が西稜からのコー・イ・バンダコルの登頂に成功。つづいて24日,カロート氷河上5300 m にC1 建設,7日 C2,8日,石橋,増田がコー・イ・カロート(Z峰)の初登頂に成功,9日 ABC を撤収,帰路についた。 文献:「岩と雪」No.18 (1970 年8月)

### ヒンズー・ラジ

Nos	活動期間	目	的	記	堆	
27	1968.12~ 1969.3	ヒンズー山系。 琴踏査研究	冬期登	兵庫県山岳連盟 1968 年上: 隊 (1968 Winter Hindu-Raj ) 隊長=*西村清一郎(32) 隊員治(26) ポーター=M.R. Gbulーン他延 38 名 行動概要: 1968 年 12 月 25 年 1 月 7 日 ロ ワライ 峠より チト 発ってマスツジ川を遡行しブニ・面ブニ・ゴル 偵察。 21 日 ブニ村 日より 27 日周辺踏査と気象調3月 2 日チトラル着。11 日ベシャ 文献:「岳庫山岳」(No. 26, 2 西村清一郎著「厳冬期のチトラ	Expedition H.M.A.)    = 松尾秀樹(26) 白倉勝   lam, ファザール・カリ   日ベシャワール着。1969   ラル着。11日チトラルを   村着。16日~18日ブニ北   を発ってマスツジへ。23   全。28 日マスツジ発。2   ワール帰着。   27, 28) (1969年7~9月)	
<b>※28</b>	3 1969.6~7 コーヨー・ゾム(6872 m) の第2登		東京岳人倶楽部ヒンズー・ラジ遠征隊 隊長=小笠原重篤(28) 隊員=柳下晴好(24) 竹っ(36) 佐藤泰雄(24) リエゾン・オフィサー=タール・アリ陸軍大尉(28) 行動概要: 6月 25 日チトラルを出発,ヤルフンジ 遡り,7月4日ペチェスに BC 建設。6日,ペチェ 米河上 3850 m 地点にC1 建設。9日C2(4625 m) 日C3(5470 m),17日 C4(5530 m) 建設,登頂体 できる。佐藤は椎間板ヘルニアで下山。19日,小笠 柳下,竹森の3名でアタックに出発,ビバークをく えし,21日登頂に成功,下降にあたっても懸垂下降 連続で22日ようやくC4 帰幕。24日BCに集結し 文献:「岳人」No.271 (1970 年1月号),「山岳」 年 (本文160ページ参照)			

### アラスカ

Nos	活動期間	目	的記	北
29	1969.5~8	フェアウェザ (4663 m) 及び 峰の登頂	周辺 Club Alaska Expedi 隊長=高坂 晋(27) 貫野邦雄(24) 深水修 =Ken Loken 行動概要: 6月3日 ップ兼偵察をしてリッ 6月11日サビーネ崎 設。13日 C1 建設。 スラブ上に C2 建設。 19日南西稜 3800 m で を通過するも悪天候の C2, 25日 C1 をそれ 発し 28 日サビーネ戸 撤収。7月5日リッヤ 文献: 「青い氷河」	副隊長=酒井美一(25) 隊員= 二(24) 西 賢二(22) パイロット ジュノー着。6月6日エアードロ ヤ湾着。8日フェアウェザー岬着 とハーザー峰中間の雪原に BC 廷 16日カーブリッジ 2000 m 地点の 18日酒井,貫野,深水 C2 出発。 ビバーク。20日南東峰(4300 m) 為 4300 m 地点で引返す。23 日 ぞれ撤収。27日西,深水 BC を出 5時(2970 m)初登頂。29 日 BC
30	1969.5~7	セントエライア 系ローガン峰( m) 北東稜より 登頂	(25) Expedition 1969) 「	- ガン登山隊 (Gifu Mt. Logar ) 副隊長=堀井啓介(34) 隊員= 彦(26) *加藤佳久(27) 鈴木嗣趙 日パンクーパー発。17 日ホワイト に機(3便) にてホワイトホース BC (2350 m) へ。26日まで P1 ト偵察。27日 P2 支稜ルートに向 m)。28 日より 800 m の氷雪壁と かり,6月4日これを突破し AC ナイフリッジを経て尾根上に C1 建設。8日 P1上にC2(4200 m)。 15日 4300 m に C4 (雪洞)を建 2名 5300 m の露岩に達しビパー ローガン東峰を経て中央峰(6050 木は東峰に登頂。26日全員 BC 帰 ターにて BC 撤収,クルアーネ湖 台により南下しカナディアン・ロ の調査を行なった。 270 (1969 年 12 月号),「岐阜県 遠征隊報告」(1970 年 8 月刊)

31	1969.5~8	セントエ ライ アス Wood 峰 (4820 m) その他の登頂及び調 査旅行	長野県山岳協会アラスカ登山隊 (St. Elias Mountains Expedition of Japan 1969)  隊長=島田 良(32) 副隊長=星野吉晴(29) マネージャー=手塚 翼(29) 隊員=河西和雄(28) 松見新衛(22) 中沢 貢(25) 内田 一(22) 小松正明(22) 日達悦生(22)  行動概要:6月7日ヘインズ着。8日ホワイトリバーロッジ集結、ヘリコブターにて入山開始。BC をウッド氷河(1900 m)に設営。10日ウッド北西稜 C1 (2400 m)設営。12日 C2 (3000 m), 13日 C3 (3350 m)を建設。14日中沢、松見、河西 Wood (4820 m)を北西稜(初登)より登頂。15日第2次隊登頂。19日 BC 集結。20日グレイグ峰その他へ出発。22日 C1 (2400 m)建設。27日ブラバゾーン氷河に C2 (3000 m)建設。29日河西、内田スノーフィールド・ビーク(4120 m)をへてアバランシェ・ビーク(4212 m)初登頂。同日中沢、松見クレイグ峰(4070 m)初登頂。7月5日 Wood 氷河徒歩下降開始。11日ホワイトリバーロッジ集結。以後調査旅行。文献:「海外登山情報」第1号 (1970年2月)
32	1969.6~7	マッキンレー (6191 m) 及びフォレイカ 一峰 (5303 m) 登頂	日本山岳会信濃支部アラスカ登山隊 (Alaska Mountaineering Expedition of the Japanese Alpine Club, Shinano Section)
33	1969.6~9	フォレイカー及びハ ンター登頂と学術調 査	徳島大学アラスカ学術調査隊 (Academic Research Team of Tokushima University)

営。28日アイス・フォール上に C1 (2400 m) を設営。7月3日 C2 (2700 m)をスノーリッジ上に設営。7月6日戸田,福永,永井,山下がフォレイカー(50302 m)に登頂。7月9日~13日ハンターの West ridge 試登。7月19日アンカレッジ帰着。

### カナディアンロッキー・カスケード

Nos	活動期間	目	的	5篇	非	
<b>**34</b>	1969.6~9	セントエラ・群ルケニア 学術調査	G THE STATE OF	Skrigs ( )		
35	1969.7~9	レーニア,は他	コプソン	個人山行 隊員=*松永敏郎, *降旗 孟 行動概要: 7月 31 日~8 月 (9677 ft), 8月5日 Ingalls Pk Mt. Adams (12307 ft), 9 日 (9038 ft), 12 日 Silvertip Mtr Mt. Robson (除く G. Way, F Raineer の Curtis 稜(中退), 22 Ingraham Gl. から登頂。31 日 (9415 ft) 各登頂。	1 日 Mt. St. Helens 1. (8000 ft), 7日~8日 1~10日 Mt. Shuksan 1. (中退), 17日~22日 中退), 23日~24日Mt. 8日~30日 Mt. Raineer	

### アンデス・パタゴニア

Nos	活動期間	目	的	品	事
36	1969.1~2	1 VA-S/A 2.75	760 m) 初	(23) 城倉和夫(22) 降旗 行動概要:1月5日グレー オルギンス氷河に入り,7 宮下,松沢,城倉(和)オ 登頂。主目標のバイネ・グ のアタックに失敗した後, 旗が1月29日C1を出発 30日午後6:30初登頂に 立,城倉(和)の両名は2 央峰の間のクーロアールを	隊長=宮下 昭(26) 隊員= 7) 松沢達人(25) 城倉禾- 義道(21) イ湖畔に BC 建設(200 m), 日 C1 (1500 m)建設, 19日 ナルギンス山 (2300 m) に初 ランデ・ノルテは1次, 2次 第3次アタック隊の松沢、降 き、途中第4雪田でビバーク、 に成功。31 日 BC 帰着。足 月2日、バリローチェ峰と中 つめ、稜線直下でビバーク、 登頂した。なお、その他に付 ィクソン氷河を採った。
37	1968.11~ 1969.3	resident analysis	<b>いアルゼ</b>	del Colegio de Jesuitas R 隊長=*阪上秀太郎(43) 雄(27) 岩田修二(22) 前川 行動概要: 1968 年 12 月 エルト・エデン集結, 1969 ス峡湾より上陸。26日氷床 側氷床横断終了。15日国境 着。16日松永,前川リソ・ 日~28日アルゼンチン側水	隊員=井川 勲(27) 松永公

着。7日クリスチナ牧場到着。3月22日サンチァゴ帰 着。 文献:「岳庫山岳」24号。日本山岳会「山岳」64年。 同「山」292 号。「岳人」268号 (1969年10月)「岩と 雪」17 号。 六甲学院山岳会報告「Hielo Patagonico Sur」阪上著「バタゴニア氷床横断」(芙蓉書房)「AAJ」 (1970年) 「Alpine Journal」(1970年) 38 セロ・ネグロ(6152) 防衛大学校山岳会アルゼンチン中部アンデス登 m) 及び周辺峰の登 山隊 頂。ツヌジャン河源 **隊長=\***朝井一男(61) **登攀隊長=\***川上 隆(42) **隊** 流地域の気象調査 員=\*大須賀 浩(31)\*村田光昭(30) 田尻一実(27) 木村 清順(25)\*安藤千年(25) 田村真一(23) 支援隊=(アル ゼンチン陸軍第 11 山岳兵連隊) 第一期 Corvalan A. Osvaldo 中尉等将校 3 名 F. Lucero 伍長以下約 40 名。 第二期 A.N. Marquez 上級中尉 Bazau 曹長以下 12 行動概要: 1968 年 12 月 16 日メンドサ市発, ツブン ガト村着。19日アルゼンチン峠 (4380 m)を越え,陸軍 の山小屋着。1969年1月2日村田、安藤、ルセロ3名セ ロ・ネグロ (6152 m) 初登頂。12日ツプンガト帰着。21 日ップンガト発,エナノス峰に向うも渡渉不可能で引返 す。28日ップンガト発ディアマンテ湖に向う。31日ボル カン・マイブ (5323 m) 大須賀, 田尻, 木村, 安藤, 田 村第13 登。2月4日セロ・アマリジョ(4650 m)木村, 安藤登頂。5日村田,田尻,木村,安藤セロ・エル・ゴ ロー西峰 ((4960 m) 初登頂。同日セロ・エル・ゴロー 東峰 (4944 m) を川上, 大須賀, 田村初登頂。9日セロ ・ラグーナ北峰(5100 m)川上,大須賀,田村初登頂。 同日セロ・ラグーナ南峰 (5034 m) 登頂。10日ツブンガ ト村帰着。2月16日メンドーサ市帰着。 文献:日本山岳会「山岳」64 年。 同「山」No. 293 号。防衛大学校々友会山岳部々報「踏跡」(第4号)

### ボルネオ

Nos	活動期間	目	的	58	1	事
39	1969.3	クロッカ・ 及びキナ	一山系縦走パル登山	宿隊 (The		ォーゲル部北ボルネオイ to North Borneo, Wand niv.)
		2		ドコーチ=== 弘純(22) 関	寺光克彦(23) 隊員=吉越昌治	副隊長=深谷 豪(25) へ コーチ=高野裕文(22) 吉! 台(21) 深井関雄(20) 剣持典: 乞三(20) 田原史人(20) 土屋

			猛(20) 萩原英次(18) 渡辺正美(19) 隊医=竹崎三立(26) 行動概要: 2月 20 日先発隊東京発。 2月 26 日~2月 28日クロッカー山系調査。 3月 1日本隊東京発。 3月 5 日ジーブにてコタキナバル発クロッカー山系に入山。 3 月 9 日スンゴイ山手前の鞍部。 3月 10 日沢を下り 3月 11 日キポーリン村。 3月 12 日ヘッドクォーター着。 3 月 15 日~3月 18 日キナバル登山。 3月 19 日コタキナバル帰着。 文献: 「北ボルネオ合宿報告書」,「山と渓谷」373 号 (1969 年 10 月).
40	1969.7~8	ローズ・ビーク (4101 m) 登頂	<b>盛岡山岳会キナバル登山隊</b> (Morioka Alpine Club Kinabalu Mountaineering Party '69) <b>隊長</b> =佐々木松一(42) <b>隊員</b> =*伊藤 寿(39) 工藤洋司(27) ポーター=シアン他 2名 行動概要: 8月3日サンダカン着,空路コタキナバルへ。8月6日パーク・ヘッド・クォーター着。7日パカルートを経てパナラパン小屋着。8日ローズ・ビーク,キナバル南峰登頂。8月12日コタキナバル発帰国。
41	1969.7~9	キナバルローズガリーの登攀	清水 RCC 静岡登攀クラブ合同隊 隊員=勝見幸雄(30) 井出忠雄(27) 古川正博(26) 興 津義則(25) ガイド=タクン 行動概要: 7月 24 日~25 日バカールートよりキナバル山ローズビーク (4101 m) 登頂。8月 10 日迄バークヘッド・クォーターよりサヤサヤ小屋 (3860 m) へ荷上げ。8月14日までローズガリーの偵察と荷上げ。約 400 m の岩壁にアタック。8月 23 日完登。9月 8日ボルトを使用して井出、古川、興津ローズガリーの「監視人」初登頂。9月 10 日同メンバーでマッシュルームビーク初登頂。9月 11 日アレキサンダービークとビクトリアビーク間のスラブを下降し、無名峰群 P1、P2 を同メンバーにより初登頂。9月 12 日同メンバーによりラーマンビーク直上ルート初登攀。9月 16 日無名峰 P3、P4、P5 を井出、古川初登頂。

### ニュージーランド

Nos	活動期間	目	的	5篇		事	
42	1969.1~2	ニュージー: 動車旅行と		*深田久弥(66) (73) 藤島紀子 *記 坂井啓亮 行動概要:1月 ンタルカー2台に	吉田俊二(64) 吉 16 日南島クラ	田富士子 身	-チ着。レ

ft) 25日ベン・ローモンド (5747 ft) 登頂。30日タヌマ ンサドル小屋泊。31日ホッホシテッテルドーム(9258 ft) マウント・アイルマー (8819 ft) 登頂。2月7日タウラ ンギ小屋泊。8日マウント・エグモント (8260 ft) 登頂。 2月 10 日北島オークランドを去る。 文献:日本山岳会報「山」(「新・爺蘭土雑記」291号

~296 号所載)

藤島敏男著「山に忘れたパイプ」(1970年5月刊 p. 284~311)

### アフリカ

Nos	活動期間	目 的	56	事
43	1968.10~ 1969.7 (登山活動は1969. 3~4)	ナイル河水源調査, カリシンビ(4507m) 登頂。	隊長=上 幸雄(24) 副隊長=伊藤幸司(24) 関 田辺兵昭(24) 矢野 潔(22) 小川 渉(21) ポータ 3名 行動概要: 3月 28 日カンパラ発。3月 29 日ル ダ国ルヘンゲリ着。3月 31 日トラックでギジョラ 山口) へ。4月2日ビルンガ火山群(別名ムフンビ 塊)のカリシンビ登頂。4月3日ルヘンゲリ帰着。 山活動は小川,伊藤のみ) 文献:報告書「The Nile」(1970 年),「山と窓 (1970 年4月号),「現代の探検」1970 年創刊号。	
44	1969.8	キリマンジャロ登山 と残留磁気の研究	日本海外山岳会 東アフリ 隊長=豊岡啓治(35) 隊員: (28) 堀 敏夫(22) チーフガ サブガイド=ウイリアム・デ 行動概要: 8月4日ナイロリスマルクハット着。6日ビー: ハット着。8日キボハットよ ウルフビーク登頂 8月9日: ビ着。以後8月下旬まで赤道 を行なう。	=*山岡健志(30) 高本信子 <b>バイド</b> =フランク・キサカ サムスロ ポーター 9名 ビ発キボホテル着。 5 日ビ ターズハット着 7 日キボ りビスマルクターンを経て キボホテル着 10日ナイロ

### ヨーロッパ

Nos	活動期間	目	的	5篇	4	r.
<b>※</b> 45	1969.5~8	アイガースト登攀ほど		J・E・C・C ヨーロッ pedition to Europe Club 1969)		
				隊長=加藤滝男(25)	隊員=今井通子(27)	天野博文

0.00			31 0 = 12-1 3 X	(27) 久保 進(24) 根岸 知(22) 加藤保男(20) 原 勇(22) 行動概要: 6月 10 日から 13 日にかけて,チマグランデ北壁(根岸,加藤保),チマオベスト北壁(加藤滝, 久保)に登攀の後,6月 25 日グリンデルワルトに全員 集合。7月 3 日からルート偵察を始め,15日よりルート 工作と荷上を開始,7月31日には最終アタックに出た。 8月 4日,第二雪田上の AC3に集結の後,6日上部岩 壁に取り付く。15日,登攀終了し,頂上付近でビバーク,16日西壁を下降した。 文献:加藤滝男編「ヨーロッパアルプス登山報告書・ 1969 年度」(1969 年 12 月 13 日発行),「山岳」65 年 (本文154 頁参照)
	46	1969.6~9	アイガー北壁ノーマ ルルート, グランド ジョラス・ウォーカ 一稜の登攀ほか	J・E・C・C 及び GHMJ 会員による個人山行 隊員=木村憲司(22) 友田政夫、岡部 勝、手島正俊 行動概要:上記 4人で7月14日モンタンベール出発、15 日グランドジョラス北壁に取付き、17 日登攀終了。8月1日にグリンデルワルトに入り、4日より、木村、友田はアイガー北壁ノーマル・ルートに取付く。三回のビヴァークの後、8月7日登攀終了。木村はその他、ミディ南壁、ドリュ北壁、エギユ・ド・レム北々東カンテ等を他の友人らと登攀した。  文献:加藤滝男綱「ヨーロッパアルブス登山報告書、1969 年度」(1969 年 12 月 13 日発行)「山と 渓谷」No. 374 (1969 年 11 月号)
	47	1969.6~9	アイガー北壁ノーマ ル・ルートの登攀ほ か	大阪あなほり会ヨーロッパアルプス登山隊 隊長=*中谷三次(32) 隊員=*辰野 勇(22) 行動概要:6月19日,グリンデルワルトに到着,7 月17日から北壁の偵察及び西壁からの登頂を行った後 22日北壁に取付く。第二雪田を越え,死のビヴアーク の所で仮泊の後,翌23日登攀終了,西壁経由下降した。 その後,8月5日から6日にかけ,マッターホルン北壁 を登攀,20日からはグランドジョラス北壁に取り付いた が悪天のため21日中間点で下降した。
	48	1969.6~7	アイガー北壁ノーマ ル・ルートの登攀ほ か	第二次 RCC・JKCC 隊 隊長=*大倉大八(37) 隊員=*富安 忠(26) 行動概要:7月 19 日グリンデルワルト到着し,21日 アイガー東山稜登攀,西壁を下降する。25日より北壁に 取り付き27日に登攀終了した。 文献: JKCC 編「JKCC 会報―ヨーロッパアルプス 報告」(1969 年刊)

49	1969.6~ 10	アイガー北壁ノーマル・ルート,マッターホルン北壁,グランドジョラスウォーカー稜の登攀ほか	碧稜山岳会員による個人山行 隊員=藤岡談次郎(28) 松井喜三雄(22) 行動概要:6月 18 日、コルチナダンペッツオに到着 し、それより、23 日チマグランデ北東カンテ、26 日チマオベスト北東カンテ、29 日から 30 日にかけてチマグランデ北壁コミチルート、7月 2 日チマピッコラ南カンテ、7日チベッタのトーレ・ディ・ベルグランデ北西フェースをそれぞれ登攀した。 その後、9 日にシャモニーに転身、13日ミディ南壁、15日エギュ・ド・レム北東カンテ、17日同左クジールートを登攀、20 日から 22 日にかけて、ドリュ・ボナッティ稜、26 日から 28 日にかけてグランドジョラス・ウオーカー稜を登攀した。 8月4日にはグリンデルワルトに到着、7日にアイガー東山稜、9 日から 11 日にかけてアイガー北壁ノーマル・ルートを登攀、さらに 13 日にツェルマットへ向い、20 日から 22 日にかけてマッターホルン北壁を登攀した。 文献:「岳人」No、271 (1970 年1 月号)
50	1969.5~9	グランドジョラスウ ォーカー稜,マッタ ーホルン北壁の登攀 ほか	ヨーロッパアルプス登攀グループ (別称足利グループ) 隊長=粕谷桂二(27) 柳 昌之(23) 斎藤雅己(22) 行動概要:5月24日,コルチナダンペッツオ到着後,27日にチマグランデ北壁スーパーディレッティシマルートを登攀した。6月2日,シャモニーに到着,6月15日ミディ南壁,22日プチ・シャルモ西壁,29日モンブラン・ド・タキュル・ボアント・ラショナル南西壁,などを登攀した。後,7月21日から22日にかけ,斎藤のみ単独で,グランドジョラスウオーカー稜を登攀する一方,他の二名は7月13日,岡山山岳会らの友人と共にピレネーに向った(本表次項参照)。再び8月3日ツェルマットに集結の後,他のメンバーを含め計9人で,6日から8日にかけ,マッターホルン北壁を登攀した。文献:「山と渓谷」1970年4月号
57	1969.5~5	ビレネー山塊の岩場 の登攀ほか	東京登稜会,岡山山岳会他の会員による合同山行 隊員=山田 勲(27)(どんぐり山の会)武井明鴨(27) 大里昭一(26)中森 覚(25)(以上東京登稜会)牛久保 恒夫(24)(本庄山の会)水地征夫(25)神野幸正(23) (以上岡山山岳会) 粕谷桂二(27)(羚羊山岳会)柳 昌之(23)(無所属) フイリップ・カマラ(24)(スペイン学生) 行動概要:7月14日ラルノス到着,15日ミティドッサオ山麓にキャンプしてから,16日ミティドッサオ東壁

=			(神野, 粕谷, 中森), 18 日ポアント・サンシャンテ南東壁 (水地, 山田, カマラ), 同東稜 (神野, 粕谷, 中森) をそれぞれ登攀した。後, ビニマルへ移動, 23日から 25 日かけビニマル北稜 (粕谷, 神野), ビニマル北壁ノーマル・ルート (武井, 水地, 柳)を登攀した。その後, 8月3日にはツェルマットへ向い, 6日から8日にかけて神野, 粕谷, 山田, 武井, 中森, 柳, 牛久保, 斎藤・カマラの9名でマッターホルン北壁を登攀した。 文献: 岡山山岳会編「BERG」58 号 (1970 年 6 月)
52	1969.6~8	チェコ, タトラ山塊 のゲルラホフカ (26 63 m) の登頂ほか	門司山岳会東西ヨーロッパ 親 善 登 山 隊 (Moji Kitakyushu/Europe Moutaineering Troop for Friendship)  隊長=藤城吉次郎(32) 隊員=西本光治(28) 富永 実(24) 緒尾次夫(27) 上田勝則(28) 野副 勇(27) 厚地 豊道(25) 行動概要:6月19日チェコ入国,21日ブラハ出発, ボブラードを経て22日,スタリー・スモコベツ到着,24日にはゲルラホフカ西南壁を3ルートから登攀した。つづく26日にピーク・ロミニッキーのホケイカ壁を登ろうとしたがはたさず,27日下山,28日にブラハへ戻った。後シャモニー,グリンデルワルドを訪れ,7月17日グランキャブサン東壁(上田,厚地)21日から22日,グランドジョラスウォーカー稜(厚地,富永,猪尾,野副)28日から30日ドリュ北壁(緒又,上田),8月5~7日マッターホルン北壁(富永,西本),5日マッターホルン・ツムット稜(厚地,野副)などの他,ミディ南壁,コスミク南壁,ダン・デ・ジェアン南壁,モンブラン・ド・タキュル北東壁などを登攀,ドリュ・ボナツティ稜・アイガー北壁などを試登した。 文献:門司山岳会綱「東西ヨーロッパ親善登山報告書」(1969年刊),「山と渓谷」275号 (1969年12月号)
53		グロス・グロックナ ー (3798 m) の登頂 及びアイガー北壁ノ ーマル・ルートの登 攀	頂会会員による個人山行 隊員=八木 功(28) 小西正史(22) 行動概要:7月7日から19日,オーストリア・アルベンフェラインの登山学校に入校,9日にはグロックナー尾根よりグロス・グロックナーに登頂した。後,21日にはグリンデルワルトに移動,8月1日よりアイガー北壁に取り付き,3日登攀終了した。 文献:頂会編「頂」第19号(1970年1月)
	1969.7~8	ドリュ・ボナッティ 稜,アイガー北壁ノ ーマル・ルートの登	個人山行 隊員=鈴木 勝(24)中野 融(23)手島正俊,岡部勝 行動概要:7月22日から24日,鈴木,中野,岡部

	1 .	攀	でドリュ・ボナッティ稜登攀。8月8日から9日,中野,手島,岡部でアイガー北壁ノーマル・ルート登攀。 尚鈴木,中野は他の友人とエギュ・ド・レム北々東カンテも登攀した。
<b>※55</b>	1969.12~ 1970.3	アイガー北壁直登ルートの冬期登攀	山学同志会アイガーダイレクト登攀隊 隊長=遠藤二郎(32) 副隊長=星野隆男(30) 隊員= 深田良一(27) 嶋村幸雄(27) 高久幸雄(27) 三羽 勝(27) 小川信之(25) 行動概要:11月19日チューリッヒ着。22日クライネ・シャィデックに入る。12月26日に北壁基部へ荷上げした後,1月3日に北壁下部を登攀すると共に西壁へ荷上げしたうとするも風雪激しく途中にデボー下山。7日西壁の肩まで荷上げする。2月7日本格的登攀を開始し、19日に AC2 を第一パンド頭に設営,23日に AC3を第二パンド頭に設営,28日に第2雪田を経てアイロン頭(死のビバーク)に AC4 を設営,3月11日「白いくも」に AC5を設営,13日「白いくも」から200m上に AC6を設営,18日北壁登攀を終了した。21日そのまま北壁を下降,下山した。 文献:「山街」第65号(本文84頁参照)、遠藤二郎著「北壁の43日」(1971年5月山と渓谷社)
56	1969.7~8	マッターホルン北壁 単独登攀	個人山行 隊員=福島博徳(単独) 行動概要:7月30日,マッターホルン北壁の単独登 攀に成功。
57	1969.7~8	モンブラン山塊での 登攀	日本登山学校隊 隊員=横尾康一他4名 行動概要:8月7日,モンプラン山塊ペーニュ針峰 (3192m)のシャモニー壁直登に成功,その他パピヨン 岩稜にも登った。
58	1969.7~8	国際アルビニスト集会への参加	日本山岳会代表

文献:日本山岳会「山」No. 296 (1970 年 2 月号)。

### 台 湾

Nos	活動期間	目	的	58	事	
58~87	1969.4~ 1970.3	台湾登山 山など)	(玉山,雪	同期間における台湾への登山隊は 218名であった。	29 隊であり,	総員

# 勝ちつづける〈ブルーインパルスR〉をはじめ、多彩な美津濃スキー 見谷昌禧プロと美津濃技術陣の「最高のもの」にかける執念がつくった傑作です。



♥ 美津濃スキー

グッドデザイン選定 (バンガード) 収





(独な登攀者の良きパート)

●スチュバイ製ピッケル ●8本爪アイゼン 東壁 ●登山ヘルメット 滝谷

●アイスハンマー 氷壁 ●ロックハンマー 初登

●クライマーベルト ●ザック付ショイゴ

●カラビナ・ザイル各種

●ハーケン・わかん●コッヘル各種

●食器・水筒・ハンゴー

●ポリタンク各種●クライマーゴーグル

●ランプ・ランタン

●ランブ・ランタン

●ツアーライト ●ナイフ・ナタ\*

●ナイフ・ナタ類●コンパス各種

●コンパス各種 ●ホエーブスNo.625

(高力アルミ合金シャフト使用

製品

0

中

5

お

選らび下さい

いか



IIIZZ-

ザックのトップメーカー

# Jockery





#626

#627

東京 ジョッキー スポーツ KK 蔵前

# 軽快でスマートな カッコレレンセミタイプの ハイキングシューズー



Onitsuka Tiger

競技用スポーツシューズの専門メーカー ≪オニツカ、タイガー≫の製品です。

淡いベージュ・ブルー・レッドの3色コットンデニム使用 ☆サイズ・21.5 レッドのみ21.5~25.5 ¥1,500

# ヒマラヤンツンかしら

**对二当力株式会社** 神戸・大阪・東京・札幌

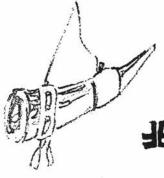


ハガスキーが 新しく変りました

山岳スキーBERGHEIL新発売

株式会社 **ハガスキー** 

札幌市北5条西19丁目



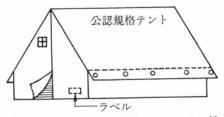
业治道。山9店

秀岳荘

札幌市北13条西4丁目 TEL (71) 2346 · 8739

### 登山用キャンプテント

キャンプ用テントは安心して御客様におすすめ出来る日本山岳協会 公認サイズ・ラベルの付いた品を御指定下さい。



登山用テント部会会員の製作したテントは総 て入口下部にラベルが縫付けてあります

### 日本帆布製品工業会連合会

登山用テント部 東京都中央区銀座4の6の1 三和銀行ビル 電話 (561) 0231・1820



### 40年の前進史

### マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊 全装備納入以来高所用天幕専門 製作・海外遠征隊には各方面より 御使用頂き御高評頂いて居ります

## 吉田テント 吉 田 喜 義 商 店

東京都杉並区桃井1丁目3番3号 電話東京(399)2548 (398)8469(夜間)



# 山友社 左かはし

登山・スキー靴

四谷本店 新宿区三栄町 3 中央区八重洲 2 の 5 サービスショップ TEL(351)1912,7432 TEL(271)1560,8575 TEL (352) 656

八重洲口

新宿ステーションビル4階 TEL (352) 6564



### 登山北人\*=の

日本最古。專門在

好日山莊

〒104 東京都中央区銀座西2の5 電話 (561) 3600 · 0966 スキー用品部 電話 (561)0966 振 替 東 京 113657

### 大 阪 店

日新ビル1階 電 話 (364) 0 9 3 3 (代表) 振 替 大 版 6 8 7 6 3

### 神 戸 店

〒530 大泉市北区営机時上1-47 本店 〒650 神戸市生田区北長狭道93-8-19 〒512 福岡市頂崎町1-4 電話 (39)4126・(33)9250 電話 (28)3440電鉄 佐 成 68 763 安店 市市生田区工芸町1-32-1電話 (33)5251 電話 (33)5251

### 福岡店

# 川とスキーの専門店

キスリング 門田ピッケル **″** アイゼン 夏冬用テント

東京都文京区湯島3-38-9 片桐盛之助 電話 東京 (831) { 1794番 6680番



さい。 ひ当研究所にお問い合せくだ

ぜ

たのは、 かえし、その努力がみのって、 重ね、 防寒服も、 隊員の方々から折紙をつけて たちがデザインし、 いただきました。米、英、ベ しました。テストにテストを 厳密な低温試験をくり わた 南ア、オーストラリ 防寒靴も、 したちです。 制作指導 わたし

日本南

極

東京都千代田区霞ケ関 3-4-2 (商工会館内) TEL 東京 581-1078

#### TOYO'S SPECIAL

ヒマラヤヘアルプスへ。

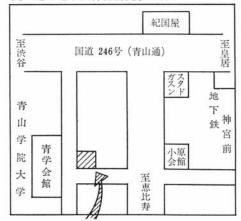
日本最大の専門工場から今日も又、素晴しい羽毛装備が 生れて居ます。

新しく青山にショールームを設けました。マナスル隊からエベレスト隊迄お供して来た東洋羽毛の羽毛装備が何でも揃って居ます。

交 通:地下鉄神宮前徒歩3分

#### 〈取扱品目〉

シュラフ、半シュラフ 羽毛服、ニッカ パンタロン、チョッキ 羽毛下着、ミトン テントシューズ ブリザードキャップ 羽毛スキーウェア各種 etc.



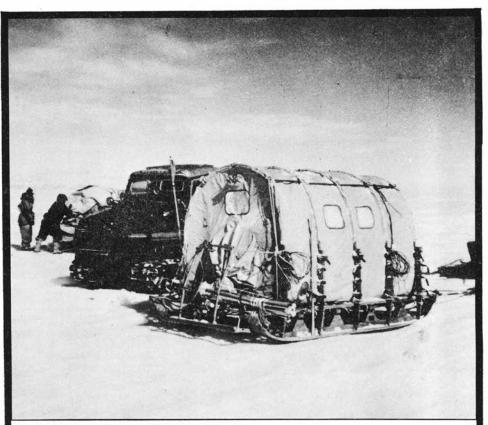


港区南青山5-10-11 TEL 409-7878



#### 東洋羽毛工業株式会社

東京都渋谷区南平台16-29 (石川ビル) TEL.03(462)1711~3



# 悪条件をみごと克服!頼むしい仲間

強い、扱いやすい、耐候性 抜群!クレモナのすぐれた 性能はヒマラヤで、南極で すでに実証ずみ。山男の信 頼にずばりこたえるクレモナ。 長年の実績と独自の技術を 生かして、さらに高品質の 製品づくりに励んでいます。



# 少りまし

## 登山用品

テント・シート・ルックザック・アノラックなど 株式会社 クラレ

大阪市北区梅田 8 東京都中央区日本橋通3の1

#### 山を愛する仲間のベストセラー!

《好評重版》

木村

殖

片岡

ト十相り上 年手、にアマー の各のでは、 とのでは、 とので 。紙ルや国 絶プカホ 5賛スモテ 6の暮シル

Oべしカを 円ス四を守

円菜味を漂

真ぶ間七北 料あ流わ懐 理ふ麗せか 多かと種海 性も付記。 も付記。 もれる筆で綴っただい はい土の香りた 6心り

9作をそ物 〇山滋味を 0 °興の五 円写味人十

加えて鋭利な筆致で現代の登山と登山者気質をえぐる爽快な論集。かし、混乱と退廃の現代を登山もまた反映してはいないだろうかり国内のみならず海外の山へも日本人の登山熱は狂的なまでにすさま だろうか? でにすさまじ

数くのの道収描か生の載くか態野 5 8 会わと性 8 新 商 動

円を

43

〇宴業之日本社 東京銀座1-3

振替東京326

## 岳界に輝く不滅の金字塔!

# 界山岳百科事典



山岳出版40年の歴史をもつ山と溪谷社が総 力を結集、満3カ年の歳月を費して完成 した本邦初の本格的百科事典! 登山 のあらゆる分野から拾い上げた8000 語を各分野の精通者が解説するほか 巻頭には理解を早めるために比較的 大きな項目についての適切な解説を 収め、また巻末には各種の便利な最 新資料を収録した完璧な内容の決定版

B 5 判・本文1200頁・カラー口絵64頁・4色 副世界山岳地図4葉・ケース入り上製愛蔵版

5月刊行予定 定価 3,800円

yamakei すばらしいカラー印刷で日本の美しさを紹 COLOR DELUXE 介する豪華シリーズ――定価各冊 2,800円

# 日本の山

北海道から九州まで、四季の名山 200余座と代表的な高原、湖、溪 谷と滝,動植物,山小屋等を400 枚の厳選されたカラーで紹介する

美しい日本の国土をもう一度見直 そうという願いをこめて、自然美 人工美を問わずあらゆる日本の美 しさを256頁のカラーで紹介する



波涛のように打ちつづく日本アル プスの山波、幾何学的な漁網群, ビルの林立する都市……目を奪う

#### 山と溪谷社

#### ーズ! あかね書房の好評 IJ シ





大ヒマラヤの名著古典を網羅 た豪華決定版

全12巻完結

ティルマン/深田久弥訳―第1回(最終)配本・6月末 6月子定)

既刊11冊好評発売中\*菊判箱入・カラー口絵・カラー地図付・各価一〇〇〇円~一九〇〇円 ルマンの果敢な遠征記録!(価未定)ネパール・ヒマラヤの秘峰をさぐるティ

日本登山史上不滅の光茫を放つ大島亮吉の全著作集! 全5巻完成

四六判各八五〇円(3巻のみ1二〇〇円)

ニストの意志と情熱の記録

最新登山技術を科学的に解明した待望編!

全岳人にお くる古典名著の決定版!

ワールス判各八五〇円(揃九二〇〇円) 新装全12巻完成/

あかね書房

全12巻別卷-全巻完成

フールス判各七八〇円

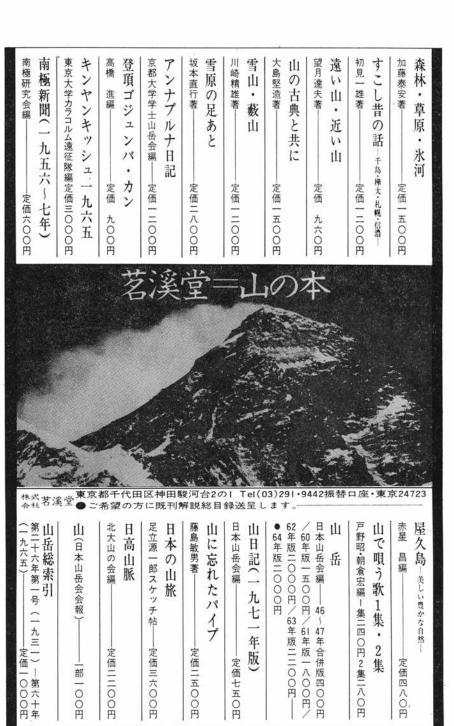
(揃10、

四〇円)

四六判各四八〇円(揃三三六〇円)

全6巻別卷一全巻完成!

山のPR誌「アルピニスト」刊行中(〒25・一年百円) 101東京都千代田区西神田3-2-1 TEL(263)0641〈代>



無機化学ハンドブック 無機化学ハンドブック 素価 5,500円 有機化学ハン ツ ク 定価 9,500円 分析ハン ツ ク 定価 5,000円 ツ ク 定価 8,500円 工学ハンド 石膏石灰ハ 石膏石灰研究会編 予価 5,000円 ツ ク 定価 5,500円 粘土 ハンド 市ガス 気象学ハンドブック編集委員会編 生物化学ハ ツ ク 定価 3.000円 微生物学ハンド ップ 対力中 栄養学ハンドアック編集委員会編 改訂 公衆衛生活動ハンドブック編集委員会編 ブック 定価 2.500円 騒音対策ルン ック 定価 4.000円 土木工学ハンドブック 土木学会編 上巻・下巻 (B5判) 土木工学ハンドブック 土木学会福 布-8,000円 土質工学ハンド 災 ハ ン ハンドブック編集委員会編 ツ ク 定価 5.500円 ドブ 建築音響工学ハンドブック 定価 4,000円 辞典 化 学 用 語 定価 900円 ブッ 化学実験ハンド 定価 辞典 土 木 用 語 土木学会監修 定価 5,500円 建築 用 語 機 械工学用 語 辞典 同編集委員会編 定価 1,200円 電 気 I. 学 語 用 定価 1.800円 ■ 図書目録送呈

技報堂 東京都港区赤坂1 3-6 〒107





いつでもどこでもすぐに役立つ

フィリップのポケット世界地図帳〈改訂新版〉

#### Philips'

#### **POCKET ATLAS**

of the World

小型世界地図帳の決定版として広くご好評をいただいているフィリップ・ポケットアトラスの1969年改訂新版です。

- ●小型ながら実に、12,000以上の地名が収められています。
- ●アルファベット式の検索法ですから、たいへん能率的で便利です。
- ●学習に、ビジネスに、海外旅行に便利にご使用いただけます。

1969.12×19 cm, 地図:96ページ/収録地名:12,000余 ¥ 780

(G. Philip & Son, London/日本総代理店 丸善)



[103] 東京・日本橋 電話 272-7211/振替東京 5 番 山岳人のためのハンドブック 〈好評発売中〉

#### **World Atlas of Mountaineering**

Edited by Wilfrid Noyce & Ian McMorrin

1969.  $22 \times 29$  cm., 276 p. 260 black and white Ilustrations. 16 p. color illustrations. 32 p. two-color mags, 18 line maps.

(Thomas Nelson & Sons, London) 定価 ¥ 4,900

# 古本の買入と販売

〒 101

有文文

電話 (三九二) Ott 1.10を 大堂書店 (田区神田神保町 1.21) 色紙・気

書館

全集・

護 漢 書 文

山岳書

相模書房は 30数年にわたり 建築関係図書を 刊行してまいり ました

相 模 書 房

東京都中央区入船 2 丁目 1 番 8 号 電話 (03)551-0017·振替東京130480 北欧の住宅対策

森 幹郎訳 B6判 定価 800円

実 用 建 築 積 算

井原伊三郎著 A5判 定価1,400円

住 居 学

吉阪隆正著 A5判 定価 950円

建築学入門

原沢東吾著 B6判 定価 460円

家相真法秘要 田中昌穂著 B 6 判 定価 780円

田中昌槵者 B6判 定価 780円

作 田村 剛著 A 5 判 定価1,800円

北方自然民族民話 集成

山本祐弘著 A 5 判 定価1,800円





#### アイガー北壁の初登攀 ハラー

氷と岩の魔の岩壁の登攀を通して人間の生き方を描く、珠玉の名篇!

エヴェレスト ノイス

世界最高峰への登項に賭ける不屈の人間劇を描いた感動の古典的名著ジャヌーへのたたかい フランコ,テレー

マカルーの名隊長フランコ、超人テレーの描く怪峰ジャヌーとの闘い

解説•深田久弥

筑摩書房東京神田 2

全24巻

監修 井上靖・今西錦司・桑原武夫・中野好夫・吉川幸次郎

# 現代世界ノンフィクション全集

## 山岳名著シリーズ

あの頃の私の山 風雪のビバーク

¥尾 ¥ 松涛 5 高 0 明

続刊多数

公山男の自画像 でえの山頂 #田孫一 でえの山頂 #田孫一 での足跡 ば田久吉 での上跡 ば田久吉 での山想 岡田喜秋 での山標文太郎 大いのと ない 第一次等 では、第一次等 では、第一次 では、第一次等 では、第一次等 では、第一次等 では、第一次等 では、第一次等 では、第一次等 では

二見書房

東京都千代田区三崎町2-18

¥500 0

#### ■《スキージャーナルの山岳小説シリーズ

(株)スキージャーナル

東京都千代田区九段南2-4-14 TEL (263) 3421 ₩102

の感傷」「知床の雪」など。 代表作「金精峠」をはじめ「雪山の暗い戦争のカゲリ、空虚。男性的な行動と、行動の背後

# 雄著

るジャ 日 ストをめぐる愛と死 べての情熱を捧げるアルピニるジャーナリストと、山にす若き日の山を限りなく思慕す 0 U 7

# 野村尚吾著

「屈折光」の短編を収録。
対象を描く。ほかに「小梨平」
が、次第に山にのめり込む 過程を描く。こ

ロ を与える清冽な小説。 み、断絶の世代に解決の糸口 ケ岳を舞台にくりひ ろげ

# いずれも予価六五〇円

本格的山岳小説。ほかに「G·S·L俱楽部」「雪山の償い」山男の奇妙な関係。"単独行《の加藤文太郎をモデルにした同じ雪の山に向かった四人のパーティーと一人の見知らぬ ある遭難」「夏山 岳小説。ほかに「G·S·L俱楽部」「雪山 八弥著 定価六五〇円 の記」など合計十二篇の山 好評発売中 岳小説を収 の償

Щ 説 集 食遺 作

### ガストンの山岳書店

主:L.C.ボーム 店

(英国山岳会員)

登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版ものの取次 ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山ガイド、特殊地図、 版画なども取扱っております。

型録、その他の御照会、お申込みをお待ちしております。

"Gaston's Alpine Books", 宛 134 Kenton Road, Harrow, Middlesex, HA3-8AL, England.

/尚, JAC, AC, AAC, ACCの会員のMr. Ichiro\ Yoshizawaは、私の親しい友人です。

• 坂倉登喜子 ※ ② 奥 多 摩・大 嶺・梶 玲樹・他 ※ ③ 奥秩父·金峰~甲武信~雲取·乾德·橫山厚夫·他 ④ 陣 馬 高 原・高 尾 山・秋 川 溪 谷・馬場渓二・他 ※ ⑤ 丹 塊·羽賀正太郎他 ※⑥富士と五湖・三ツ峠・渡辺正臣・他 海•渡 辺 正 臣 (8) 奥 B 光 • 据·川 崎 隆·意 ※ ⑨尾瀬と銀山湖・会津駒・白箍史朗 ⑩軽井沢·神津牧場·妙養·掛川昭一 ※ ① 伊 豆 ▲・渡辺正原 12三浦半島・江ノ島・鎌倉・本保 ⑬美ケ原・繋ケ峰・高ボッチ・坂合登喜子 19谷川岳と上越温泉郷・川崎隆章 ※ 13 八 ケ 岳 ・ 北 八 ツ ・ 蓼 科 山 ・ 山 口 縄 久 川·人見義男 (17) 58 様・芸・安 太 良・深 沢 達 治 08志 根・下 注也・他 ※ (19) 上 **鞍** · 早乙 女提 次 他 槍・川口 邦雄 (21) 房 ▲・水 保 22 浅間 原・應 沢・菅 平・掛川 昭 --23 蔵 Ŧ 峰·衣袋 賢二 20八幡平·岩手山·秋田駒·村井正衛 図霧 ケ 峰・白 樺 湖・夢 科・坂倉登喜子 26雲ノ平・黒部源流・槍穂高・伊藤正一 ② 妙高・戸隠・野尻湖・黒姫・ グループ・ド・モレース 物南アルプス・夜叉神峠・入笠山・白 龍 史朗 29中央アルプス・木曽駒・木曽御岳・塩 沢 一郎 の南アルプス南部・井川湖・白 笹 史朗 ③1 北 ア ル プ ス の 全 競・山下喜一郎他 62 加賀白山·白川鄉·医王山·出村健治他 豊·朝 日 連 峰·衣袋 賢二 30大 雪 山 · 層 雪 峡 · 然 別 湖 · 中条良作他 の 槍・ 穂 高・ アルプス 銀座・小林俊樹他 I · 編 集 部 · 編 (37) 車 38 東 11・福集部福 (39) 事 III·編集部編 未 40 苗 場 山 峡・ 秋山郷・高波吾策・他

未创入

# 登山ハイキングリース

#### 定評ある コースタイム入精密地図と案内書

動金剛・岩湧山・葛城山系・宮川良彦他 52 7 耶·中村 54) Et 18 連 山・京 都 北 山・角介太郎 56大 Ш 2 吉 野•御勢久右ヱ門 励大台ケ原・大杉谷・高見山:米田信雄 □ 奥高野・龍神温泉・湯の峰温泉・仲西政一郎 目·青山·室生付近·水町准他 翻鈴鹿連峰·御在所·伊吹·尼崎淵一他 62 大 ılı 蒜 山・佐野勇一・他 砂帝釈映・三瓶山・備北山群・加藤武三 の秋吉台・三段峡・芸北山群・加藤武三 65九 重・飯 田・久 住・万 年 山・

梅木薫平・加藤英彦他 移英彦山登山と耶馬溪探勝・仰木政次郎他 砂阿蘇登山と周遊・熊本県岳達 緑平尾台・福智山境・月原俊二 定価 200円~250円

楽はカラー版

地図専門の

U . FI FF P DI

ニッチ

#### 日 地 出 版

本社〒101 東京都千代田区西神田 2 - 2 - 15 振替 東京195917 T E L (261) 5126 ~ 8 支店〒542 大阪市南区安堂寺橋通 3 - 6 0 振替 大阪 28570 T E L (252) 7 4 2 1

# ゆたかな 明日への かけ橋

〈協和〉の220余の店舗は みなさまのゆたかな明日に 直結しています。







### 日本団体生命はわが国における グループ保険の開祖です。 個人保険も

登山保険も行なっております。

本店・東京都千代田区丸の内2-1 電話(281)3211(代表) 小伝馬町別館(役員室,総務部他) 電話(662)3311(代表) ・東京都中央区日本橋小伝馬町3-2 支店(大阪・名古屋・福岡・札幌) 支社(東京他25) 昭和生れのホープ

日本団体生命



行の

お世話をいたします。

体はもちろん、あらゆる旅通観光のサービス網は、団

海外一

流業者と提携し

、た団田

# ●お気軽な海外旅行を

まかせください。

(電) 五七一・八四八一東京都港区新橋一―五―二

支店へどうぞ。

光係または左記の日通東京航空お問合せはお近くの日通支店観

# 日本通運



ても

油くささのない純良ラードを使用 のにおいがなくなりました。 のにおいがなくなりました。 ので、あの油くさ りで、奥さまの腕が光ります。香りを逃がさず、シャープな味を香りを逃がさず、シャープな味をジャガイモを入れないのがコツ めしください。ゴールデンカレ作りになっていた奥さまも、いままでドロッとしたカレー て、だんぜんおいしくしました。カレーの辛味と酸味を整え健康の緑藻類・クロレラを入れま らではの味を、お楽しみい まろやかな味を加えるクロレラ入り 流レストランとおなじ あの油くさ ただけなた

# S&BGOLDEN -ルデンカレ

クロレラ入り………7皿分 ¥100円

アスピー食品株式会社

# Swiss Chalet

本格的な味とムードのスイス料理の店

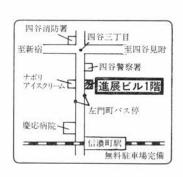
## スイス・シャレー・レストラン

新宿区四谷左門町電停前 TEL(341)4279

#### 営業時間

平 日 5 時~深夜 2 時 日曜祭日 5 時~12時

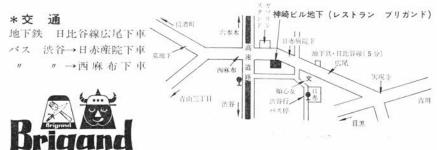
駐車場完備



### 本格的山賊料理

アルプスの香りと味をどうぞ ブリガンドの意味は山賊―自然を愛する勇者です

> 山岳部員の皆様一度お越し下さい。 お待ちしております。



港区西麻布4·5·2 TEL(407)3009·3006

## ヤッホー

交通公社の

周遊券

べんりでおとくです



ご出発の安心感 お帰りの満足感日本交通公社

## 痛みだしたら **ハイグレラン**錠

早めにどうぞ。のめば間もなく 痛みはおさまります。主力成分 セコピラビタールに活性ビタミン B<sub>i</sub>などを配合。ハイグレランは 鎮痛効力が高いのです。 なお ピリン系の薬剤に過敏な体質の 方は、薬局・薬店でご相談のうえ 非ピリン系のチプロン錠をどうぞ 頭痛・歯痛・生理痛・神経痛 製造 グレラン製薬 販売 武田薬品 武田販売





50錠 100錠 250錠 500錠



新 リ 川臓障害・神経痛・疲労回





のどのかわきが ピタリととまる!

<u>下痢・腹痛</u> 食あたり 水あたり

全国の薬局・デパートにあり

佐藤ライトの

梅肉エキス

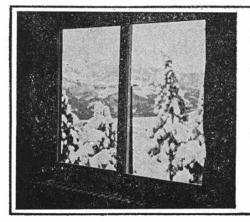


オートメーションの 完全体制を推進する 横河の電気計測器と 本山のコントロールバルブの御用は

横河電機製作所 代理店 本山製作所(仙台)

#### 有信計器株式会社へ

取締役社長 神 谷 恭 (JAC-744) 横浜市西区高島2丁目1番の50 TEL(045)441-2681代) 〒220



山小屋の窓もアルミでお化粧 木造建築用サッシの決定版

#### 不二のホームサッシDFK

防犯用電子ロック附

●お問合せはお気軽にどうぞ

#### ガラスとサッシ

#### 池田ガラス建材株式会社

代表取締役 池田光二(会員) 東京都練馬区氷川台4-35-9 (176) TEL. 03-934-3 2 0 1 (代)

# 《サンワ》で しっかり 貯めましょう





#### トロフィーならおまかせ下さい

■たえず外国のデザインを直輸入しそれを アレンジして製作

#### 《営業品目》

バッジ・メダル・バックル・名札・キーホルダー・トロフイー・ 優勝族・金属看板・ネームプレート・プラスチックマーク・カ ップ・七宝焼・マーク・ワッペン・ペナント・タイ止・其他記念 品・ステッカー・ワッペンマーク・総物ネーム

株式アジア

東京都千代田区飯田橋2丁目8番5号

〒 102 263−4 7 4 1 (代)

☎ 261-4095(夜)

石油 精製

# 東亞燃料工業

本社/東京都千代田区竹平町 I TEL 213 - 2211(大代表)

#### 穂高岳↔大台ヶ原274㎞の

### 通話に成功

穂高岳(長野)と大台ケ原(奈良)の陸上274km の長距離通話に成功。160cmのアンテナと FETの威力で微妙な電波でも超高感度 で安定した受信を実現しています。

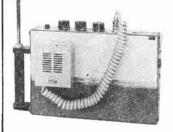
- ●中間周波回路にモノリシックIC を採用して、信頼性と高性能を 保っています。●雨・潮しぶき に強い全天候形防水構造。
- ●雑音をカットするスケ ルチ装置つき。●すぐ れた選択度特性。

IC+FET11石超高性能トランシーバ(100mW) RJ-28 ¥ 14,900 (1台)〈ケース・イヤホン・電池付〉

A - Washing 

#### ヒマラヤ ➡ 南 極 ➡ エベレスト ➡

エニートランシーバーの通信連絡なら 〈信頼されています〉



【FB−600 0.5W】 強力トランシーバー】



通信機専問メーカー

株式会社 工 二

本社工場 東京都世田谷区鳥山町1801 東京営業所 東京都世田谷区世田谷2-25-15 関西営業所 大阪府豊中市柴原町2-8 柴原ハイツ 205号

# 画期的機構による!不定形平面の

## 自動面積測定計器 AAM-5型



### 林電工株式会社

本社 東京都文京区本駒込6丁目5番5号 TEL (945) 3151(代表)~3155



### メカニズムとヒューマニズム。

ニコンのマニアはニコンを使いながら、内部の機構と自分の内部にわき上る創造心を同時に感じとる、といいます。 優れたメカニズムは、それが創る傑作の世界にも通じるということでしょうか。ニコンF、人を動かすメカニズムです。

(#ikan)日本光学工業株式会社 103東京都中央区日本橋通1-7(西川ビル) カタログ送星!●読名と品名を二明記。カメラセニコニト・�ンカネをニコニトロン

光の名機

Nikon []

ニッコールオート50ミリ F2付ー ¥58,700 ケース ¥2,500

# 山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要 はない。

、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。 原稿は返却しない。

研究並に紀行には、その概要を付けること。

、紀行にはなるべく概念図を添付すること。 地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊 写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。 な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。

一、校正は編集者に一任されたい。

\_

る。

編集者は原稿の一部を削除または訂正することがあ

ビル内 東京都千代田神田錦町三ノ二三(向井

日本山岳会「山岳」

編集部

送

ŋ 先

九七一年三月三十 一日発行

山岳 第六十五年

定価

1000円

(通巻一二四号)

東京都千代田区神田錦町三ノ二三(向井ビル内)

発 所

法社 人団 H

本 Щ

岳会

振替口座 東京 四八二九番電話東京二九三局七四四一

日 本 Щ 岳 会 内

印 発編 行集 者兼

望

月

達

株式会社 技 堂 夫

本 版

写 真

刷

光村原色版

株式会社 Ξ

舎

印刷所

東京都千代田区神田駿河台二ノ一 売 所

会株 社式 茗

渓

堂

電話東京二九一局二八八一番 東京二四七二三番

月 島 達 寬 夫

編集委員

望

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。



カーテンウォール アルミサッシ NKウォール クールサッシ

レディメードサッシ PA-60A (ア ル ミ) ・ PS-80A (スチール) ハッピーサッシ(住宅用)

グッピーオート



本 店 東京都千代田区大手町 2 - 6 - 2 TEL. 270 - 6 5 1 1 取締役会長 早川種三



登頂に観測に

このマークが お伴いたしました

27 (1) 34% (2) 2年 999 5 \* 5 3年 4 5 4年 5 9 5 4年 筑 部店 92 (6) 9 5 5年 9 564 \* 括 9 (8 5 7 4 文 部 省 学 被 議 (9) 9 5 84 神 大 oy: (10) 9 5 8.4 深 FIR 長 9 5 9 4 水 ti 全 44 育 9594 (12)每明 日治 (13) 9 6 0 年 9 604 社 (14) (15) 9 604 H 学学盟学学 #6R 9 1 54 (16)6 数交 9 (17)6 1 4 金 44 th (18)9 6 1 4 #III (19) 9 6 1年 (20) 9 6 24 1112 (21) 9 6 24 京 学 (22) 9 6 2 4 INI (23) 9 6 3 4 ST 14 963年 531 会学学学 (24) 本 425 9 (25) 6 3 年 都大 (26) 9 6 3 年 阪 (27) 9 6 4 5 北 施 道 学学学学 9 6 4 4 (28) 北 156 6 4 4 (29)#ill 9 (30) 6 5年 H (31) 9 6 5 4 193 9 6 5年 (32)物 6 5 年 铂 会 (33) 25 搭 4 (34) 9 9 9 6 5 4 垂 8EH 班 大ク 7 12 64 1 (35)6 友好登山協会 グル (36) 6 64 日本 (37) 9 9 6 64 R C (38) 6 64 文 999 6 74 4 大 学 (39)7.34 岳 連 (40) 6 学 (41) 6 7年 静 岡 大 9 DY: (42)6 7年 州 大 学 (43)9 6 7年 SE 術 (44) 9 6 8年 東 京 曲 料 学 6 8 4 171 24 ш ter 会 (45) 金学 9 流 68年 3/2 拉 (46)9 (47) 6 8年 (48) 9 6 84 340 推 大 学 (49) 9 94 本山區会 東海 部 6 9 694 花 (50) 9 学会 6 9 4 胺 114 (51) (52) 9 6 9年 H ter 业 (53) 9 6 9年 福 B63 9 7 0 4 (54) (55) 9 7 0年 the the 金 会 9 1321 東 征 (56) 7 0年 (57) 9 1年 松 777 1年 大 9 (58) 9 510 (59)

325 际 罗次 04 XP. EN 张 Sign 7 XF. 1.5.1 術 1200 de. THE 200 保护 141 ME 110 37. EAC 37 195 柳 松 榆 学 7 隊 遊 大陸 Til: 遠衛 影飲 读 征 情 1200 45 2 遊 37. XF. 在 JOM. 340 合同東部 学術調查 4架 滅花 遠 EN 遠征 BW. 福 破 23 走 390 ħΕ 遊 RE FR 张山 EM (10) 签 シア コン 32 ILI **《学術調査** 王国ワ 2 4 20 民族 文 Ш 签 111 th wit 37 111 110 125 4深 Eac EM 速 祖 Big 被 àE 1730 初行 Ste 踏金 XX. 聯 印象 祭 1040 37. 际处 班 ₹tE FIR 2 遠 隊 遠 征

ビニロン・ナイロン・テント製造元

千代田区神田須田町2-23 **装証 細 野 テン ト** Tel.(252)4426-7

The Journal of
The Japanese Alpine Club

## SANGAKU

Vol. LXV 1970